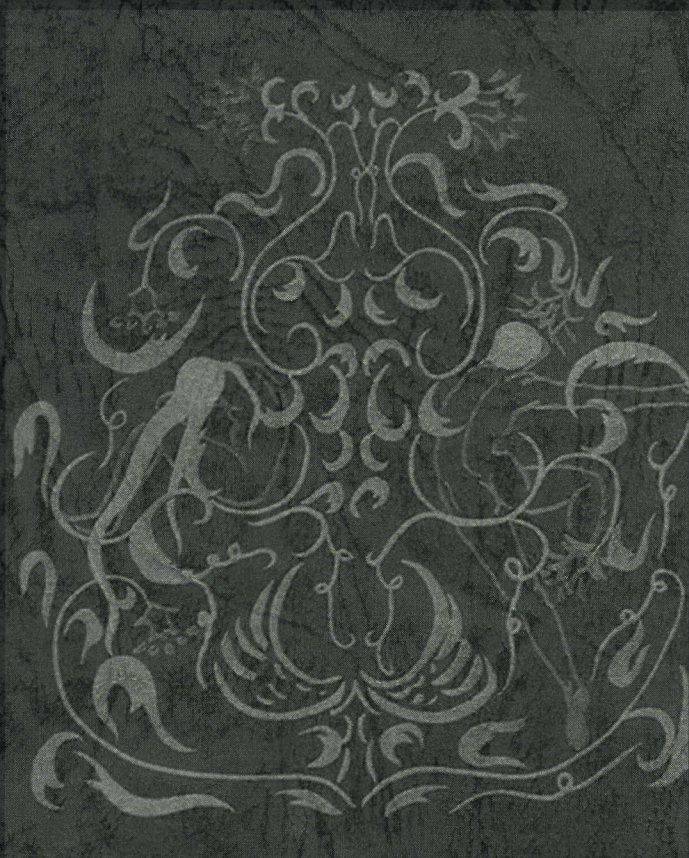


続・あつぎの女性

—民権家子孫の聞き書きと女性史年表—



さがみ女性史研究会「さねさし」

続・あつぎの女性

—民権家子孫の聞き書きと女性史年表—



さがみ女性史研究会「さねさし」

口 絵

『武相の若草』二三号（一九二六年六月一日
発行 江口秋彦氏の画）の表紙画です。
版元はすでに無く、江口氏の消息も不明です。
ご存知の方は、連絡いただければ幸甚です。

はじめに

「ざねさし」は、二〇〇四（平成一六）年四月に聞き書き集『あつぎの女性20人』を出版しました。二〇人の語り手は、明治・大正・昭和初期生まれで、もと愛甲郡（現、厚木市・愛川町・清川村）の女性たちでした。

本書の内容は二本柱で、聞き書きと女性史年表です。一三〇年前の自由民権運動のことが知りたくて、〇一年には「荻野の自由民権を歩く」、翌年「大磯の自由民権を歩く」と二回歴史散歩をしました。その後自由民権百二十周年建碑実行委員会に参加、〇四年一〇月三十一日、厚木市中荻野の戒善寺で行なわれた「自由民権の里」碑の除幕式にも出席しました。

この機会にわたしたちは、民権家のご子孫からの聞き書きをすることにしました。ご協力いただいたかたは、小宮富貴・荻田良子・井上徹子・小林淳子・大矢裕子・小野幸子・山口智子・浦田マサ江・飯塚澄子・千葉潤（敬称略）の一〇人です。

年表は一八六八（明治元）年から、厚木に女性議員が初めて誕生した一九四七（昭和二二）年まで約八〇年間です。右頁に郷土の女性の動き、左頁に関連資料を配しました。資料収集は会が発足した一九九九年から二〇〇九年までの一〇年間続けてきました。最初は、横浜の県立図書館神奈川資料室まで随時通い、『横浜貿易新報』（現、『神奈川新聞』）を中心に、厚木・愛甲の女性に関する記事を集め、カードへ書き写す作業をしました。江の島の県立かながわ女性センター図書館にも通いました。また、厚木市の市史編さん室より、朝、資料をお借りし、自

宅で該当記事をコピーし、その日の夕方までに返却するという作業も繰り返しました。

さらに『武相の若草』（県、連合青年団編）が津久井郡郷土資料館（現、相模原市津久井郷土資料室）に創刊号から一四八号までほとんど保存されていることが判り、すべてをコピー、約五〇〇〇枚になりました。これを原本と同じ和綴じの製本にして、大正時代に出版された『武相の若草』を平成の今に蘇らせることができました。その後も寒川文書館などで、『横浜貿易新報』も含め、国や県域の関係資料を収集する日々でした。これらから得た山ほどの記事について議論を重ね、項目を取捨選択し、ようやくここに年表がまとまりました。

わたしたちは、この一〇年間家庭との両立のなかで忍耐強く、精一杯の気力で頑張ってきました。自主的に始めた会ですが、『あつぎの女性20人』と『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』と二冊出版することになり感無量です。この地域の女性たちの足跡が、過去を見つめ将来へ向かって歩む糧になればと願っております。

お忙しい日々のなか聞き書きに協力してくださったかたに深くお礼申しあげます。また本をお手にされる前に亡くなられたかたのご冥福をお祈りいたします。

最初から長きにわたりご指導くださいました江刺昭子先生には、言葉では言い尽くせないほどお世話になりました。心より感謝申しあげます。

二〇〇九年六月

さがみ女性史研究会「さねさし」

発刊に寄せて

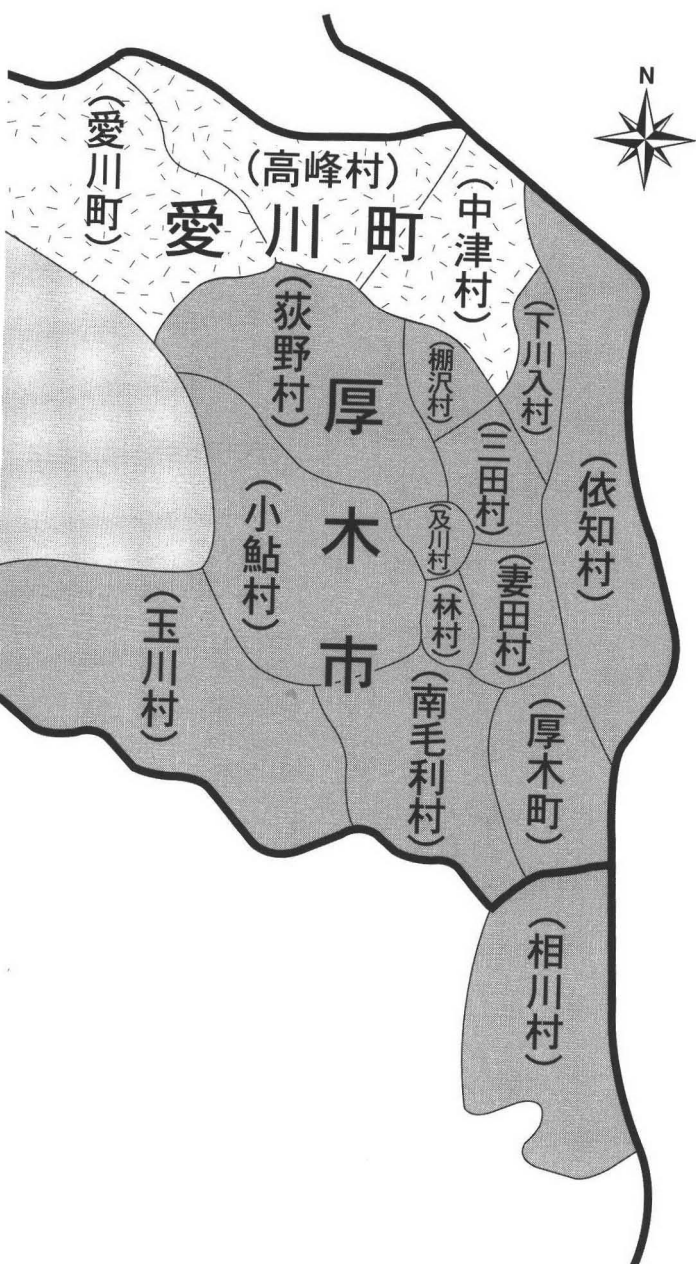
大畑 哲

さがみ女性史研究会「さねさし」が、今回、『あつぎの女性20人』（第一集）に続いて、『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』を発刊する。これは聞き書き集と女性史年表である。聞き書きは民権家子孫の女性たちから、家につたわる明治の自由民権時代の伝承を聞き書きしたというところにユニークな性格を帯びている。その中には、前回も出場された二人の方がおられるが、今回は全員を対象にしている。私も以前から、「さねさし」の皆さんとは交流を持ち、それなりのお手伝いをしてきたが、同グループがこの企画を思い至ったのは、二〇〇四年十月、厚木市中荻野の名刹・戒善寺に自由民権百二十周年の記念碑を建立したことが契機になったようである。「自由民権の里」と題したこの碑には、厚木・愛甲の民権家四四名の名が刻まれており、山川えんと天野八重という二人の女性の名もある。この記念事業は、当時県下の民権運動の拠点であった荻野の戒善寺で、現存する遺族をはじめ、同寺の住職、檀家代表、研究者からなる実行委員会をつくり、半年をかけて行われた。それだけに市内外から二〇〇名を超す賛同者があり、十月三十一日には一二〇名の参加者が集まって、この種の集会としては画期的な成功を収めた。

この時、「さねさし」グループも積極的に参加し、ここで知り得た民権家子孫の女性たちと

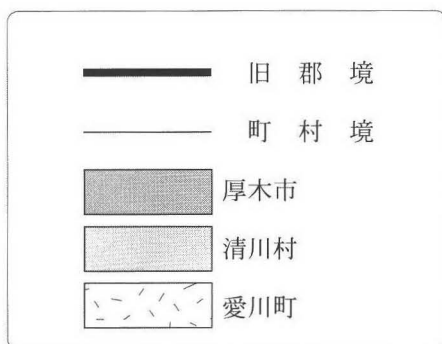
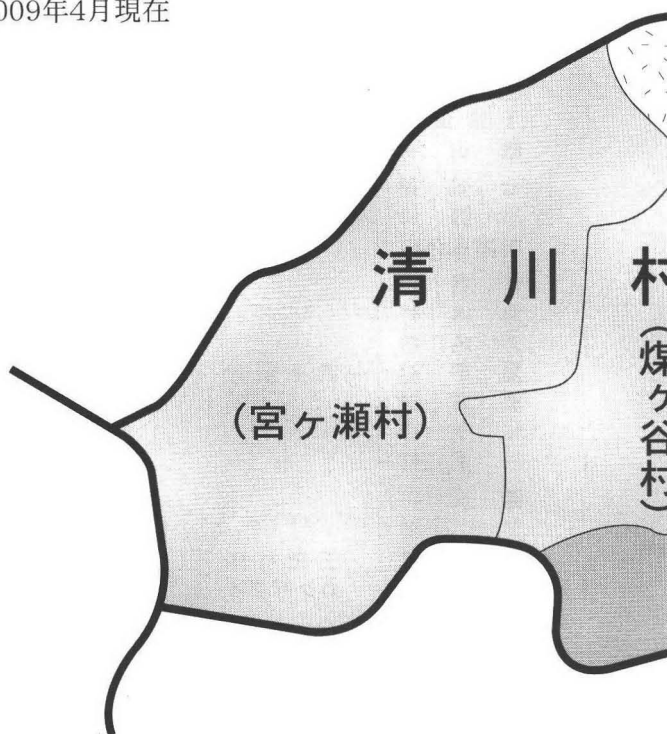
接触し、聞き書きを思い立ったのであろう。以来五年の歳月を経て、八人のメンバーたちの営々とした研鑽と努力が実つて、今回の成果を挙げたのであった。この快挙に際し私からも、心からの祝詞を贈りたい。またこの成果の背後には、前回に引き続いて、江刺昭子さんという、最良の女性史研究者の指導と励ましがあったことを忘れてはなるまい。明治の民権運動は、「男の民権」という通説があるが、厚木・愛甲のそれは愛甲婦女協会を中心とする、「女の民権」もあつたことを本書は物語っている。この女たちの心意気が今この地域にも生き続けていることを年表も物語っている。

折から隣の伊勢原市では、民権運動の指導者・山口左七郎の旧宅とその所蔵資料を公開、展示する「雨岳文庫」が設立され、見学者が増えている。民権期の地方結社として、伊勢原に本拠を置く湘南社と、厚木・愛甲の相愛社とは、結成当時から姉妹関係にあつたが、百年のときを超えて、その記念事業が前後して行われていることは、まことに奇しき縁とでも言えようか。「さねさし」第二集のご購読と合わせて、雨岳文庫の見学もお勧めしたい。

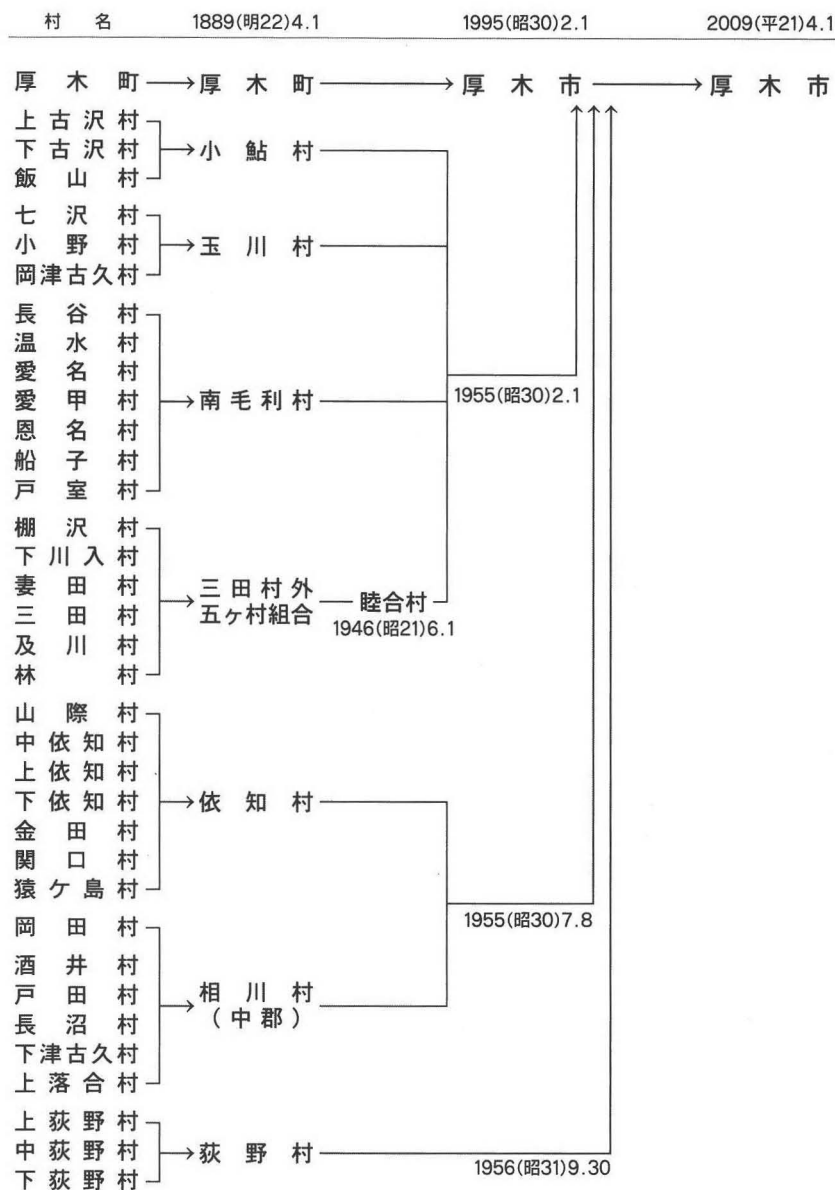


厚木市・愛甲郡行政区画図

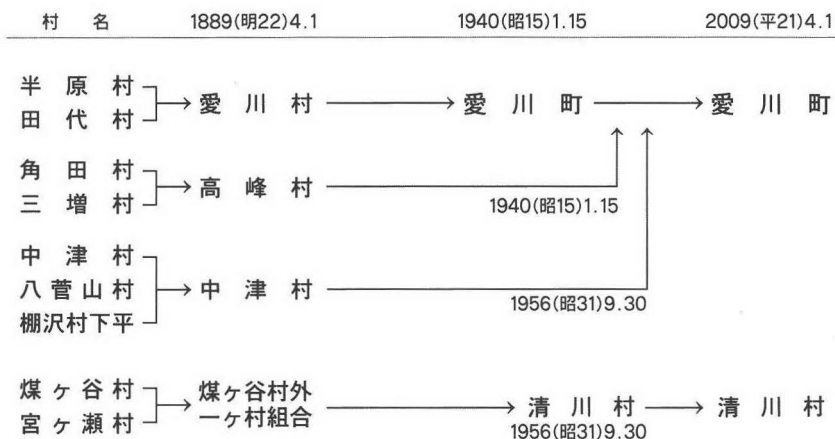
2009年4月現在



厚木市行政区 (1868年~2009年)



愛甲郡行政区 (1868年～2009年)



『厚木の地名考』・『愛川町郷土誌』・『清川村史』より作成

目次

はじめに.....	さがみ女性史研究会「さねさし」	1
発刊に寄せて.....	自由民権運動研究家 大畑 哲	3
厚木市・愛甲郡行政区画図.....		6
厚木市・愛甲郡行政区.....		8
民権家子孫10人の聞き書き		
凡 例（聞き書き）.....		16
自由と民権を求めて.....	女性史研究家 江刺 昭子	17
「さねさし」.....		20

聞いてけばよかった、小宮家のこと……………	小宮富貴	24
石井道三は、わたしの道三おじいさん……………	荻田良子	40
井上家を守るのがわたしの務め……………	井上徹子	55
惣平の孫だということを忘れんじやないよ……………	小林淳子	72
寛子もわたしも民権家が祖先……………	大矢裕子	81
わたしは山川市郎のひ孫です……………	小野幸子	91
山口深雪の生涯―孫嫁から見た山口左七郎の嫁―……………	山口智子	107
天野政立は、ひいじいさんの弟……………	浦田マサ江	118
若くして逝った金平さんを念う……………	飯塚澄子	132
樺太から父の故郷へ……………	千葉潤	145
〈資料〉「難波家・自由民権関係文書」より書簡一通……………		80

愛甲郡の女性史年表（一八六八—一九四七）

凡 例（年表）……………

（参考資料）

一八六八年—一九〇五年……………

一八七六年愛甲郡の公立小学校生徒数と教員数・愛甲郡公立小学校沿革(1)
 ・愛甲郡公立小学校沿革(2)・相州地区でのキリスト教布教・『相州伝道沿革史』・中津村永生教会・薺莪小学校・愛甲婦女協会創立主意書・愛甲婦女協会申合規則・大阪事件と愛甲郡グループ・杉山フクの産婆開業広告・愛甲郡産婆会・一九〇四年国定教科書・愛甲郡立女子実業補習学校第一回卒業生新井義談・愛甲郡立女子実業補習学校第一回卒業生・愛国婦人会・愛国婦人会のバッジ

一九〇六年—一九三一年……………

相模川鮎漁会寄贈品広告・相模川鮎漁会・節婦の表彰状・農業補習学校、実業補習学校から青年訓練所、青年学校へ・農業補習学校、実業補習学校、

青年訓練所の変遷・神奈川県立女子師範学校・女子師範学校出の先生・愛
 甲郡の社会教育団体種別人員数・小沼奈美・山口キンの表彰状と事跡大要
 ・ときわ会と「女の十訓」・横浜貿易新報・中津村養蚕農家の生活 中津
 村農協組合長談・足立原マサ・厚木尋常高等小学校の写生会・一九二〇年
 第一回国勢調査のチラシ・愛甲郡の処女会一覧・処女会・愛甲郡町村生活
 改善実行規約準則・高峰村女子青年団・田代の女子青年部・「歩いて糸と
 り女工へ」天利フミ談・関東大震災被害・愛甲郡災害取調表・節婦小島イ
 マの表彰状・小島イマ・郡内女子青年団幹部指導講習会・中津村処女会・
 厚木町女子青年団発会式・神奈川県男女青年団概況・「女教員の前途」中
 村スミ・県下女教員大会・「昭和初期の養蚕取締所」・神奈川県繭検定所
 の作業風景・一九二七年の『武相の若草』の購読者・『武相の若草』文芸
 欄掲載の短歌・「女子青年の自覚と修養」関山八重子・厚木町芸妓屋組合
 組合員之証・厚木町芸妓屋組合と料理屋組合・愛甲郡女子青年団概況

一九三二年—一九四七年……………

宮ヶ瀬小学校授業風景・『武相の若草』九〇号表紙・愛甲郡依知村女子青
 年会の慰問品調製の様子・厚木町女子青年団敬神奉公実行・「満州の勇士

を憶ひて」小林直枝・松川サク・羽衣号と厚木芸者・格納庫の前で・「この頃の厚木町女子青年団」関山千代子・「父に別れて」斉藤ユキ・厚木町厚盛館放火事件について・戦没者の村葬・寮生の砂利採運の様子・千人針・慰問袋の中味・玉川村の更生標語・高峰村の愛国婦人会・愛国開墾にふるう中津村女子青年団・厚木大手町の花柳街・乗合自動車の車掌・家庭防火群・防火訓練風景・白衣の勇士・臨時東京第三陸軍病院管理舎・入営時の幟と寄せ書き・県立厚木高等女学校第一二回卒業式と卒業生の進路・衣料切符・厚木町、興亜奉公日を祝う自肅事項・「お山の杉の子」・愛国婦人会会員女子人口百分比表・大日本国防婦人会・愛川町の大日本国防婦人会・女教員合宿訓練・学校系統図・「学童疎開」・横須賀市の国民学校児童の疎開状況・厚木市七沢の敵国人抑留所抑留者名簿・「七沢温泉における外国人収容」・浅葉スミ・愛川町実践女学校学則抜粋

主な参考文献

協力者・協力機関・「さねさし」の仲間たち

民権家子孫10人の聞き書き

凡 例 (聞き書き)

- 一、本書では郷土で活躍した民権家子孫の女性からの聞き取りをまとめた。
- 二、脚注は話者の話を補うため聞き手が加筆した。
- 一、配列は話者の生年月日順にし、話者の語る年月、年齢、学校名、地名などはそのまま記した。ただし脚注には西暦を用いた。
- 一、聞き書きをまとめるにあたっては、話者の語り口、雰囲気できるだけ生かすようにした。
- 一、記述は現代仮名づかい、常用漢字を用いた。固有名詞、書名などは話者の申し出の字体としたものもある。
- 一、余話は聞き手が記した。

自由と民権を求めて

— 神奈川県、愛甲郡、そして女 —

自由民権運動の三本柱

自由民権運動は大まかにいうと、一八七四（明治七）年から日清戦争が始まる九四年頃まで、政府に対して国民がさまざまな要求を突きつけ、実現を迫った動きをさします。反体制運動の装いをしていますが、体制側と反体制側がせめぎあいながら、国の有りようを探っていたともいえます。

民権派が求めた大きな要求は三つあります。一つは、五ヶ条の御誓文に「万機公論二決スル」とうたいながら民衆の声が政治に反映されず、天皇をいただいた薩長藩閥が政治を独占しているのに対し国会開設を求めたことです。

政府が推し進めた政策の中で最も反発が大きかったのが七三年の地租改正令。農地にかける税金を高率の金納にしたため、各地で一揆や米騒動が起こり、地租軽減を求める動きが活発になりました。これが二つめです。

その上、安政の不平等条約が壁となつて、輸出品の生糸・蚕種・茶などの農産加工品が買いたたかれ生産者である農民の生活は苦しくなる一方です。不平等条約の撤廃が悲願となりました。これが三つめです。

高知、福島、岡山などと並んで神奈川県は民権運動の激震地です。現在は東京都に属している三多摩地方が九三年までは神奈川県だったこともあり、地域指導層を中心に武相地域で多様な運動が展開されました。

国会開設請願から大阪事件まで

一八七四（明治七）年、前参議の板垣退助らが民権議員設立建白書を提出し、立志社を起こしたのに続いて各地に民権政社が結成されます。国会開設請願運動は全国に広がり、八〇年にはその署名者は全国で二〇数万人に及びました。政府は集会条例などの弾圧立法でおさえこみますが、八一年には一〇年後に国会を開設するという天皇の詔勅を出さざるを得ませんでした。

同年一〇月、民権派の最初の全国的な政党として自由党結成。一〇一人から出発し、八四年には党員数二二二四人になっています。神奈川県からは二八人が入党し、総理の板垣から「自由の砦」と評価されています。この頃には全国に四千以上もの結社が存在し、神奈川県でも多種多様な結社が生まれ、演説会や討論会を催してさまざまなテーマで学習を深めていきます。民衆みずから考えた五日市憲法などの私擬憲法が生まれるのもこのような結社からです。

一八八〇年代、松方デフレで養蚕地域が大打撃を受け、農村不況が全国に広がり零細農民が主役になって各地で一揆を起こします。神奈川県では相模原の上鶴間を発火点に農民騒擾が広がり、八四年には武相七郡にわたる困民党が結成されています。借金に苦しむ農民が返金の据え置きなどを求めて立ち上がったのです。

福島事件、群馬事件、加波山事件、秩父事件など自由党の急進派による激化事件も起こり、政府によつて弾圧されます。その結果、八四年一〇月、自由党が解党に追いこまれます。

こうして自由民権運動が閉塞状況に陥るなかで朝鮮で起きた甲申事変を機に朝鮮改革運動（大阪事件）が始まります。民権家の持つナショナリズムゆえに、海外侵略のお先棒をかついだ運動です。企ては八五年一月に発覚し、全国で一三九人が拘引され、神奈川県からは一四人の逮捕者が出ます。その後、自由民権運動は急速に衰え、伊藤博文内閣に対して言論の自由、地租軽減、外交の挽回を要求して三大事件建白運動などを展開しますが、やがて大日本帝国憲法体制に服従していくことになります。

女の民権運動

民権運動の担い手はほとんど男で、男自身の民権の獲得には熱心だけれども、女の民権には無関心な人がほとんどです。女を人間扱いしない民権家さえいます。一八八二（明治一五）年に岸田俊子が大阪の立憲演説会で初めて「婦女の道」を演説し、女の民権を主張。その影響で景山英子など男女同権を訴える人が現れます。なお、岸田俊子ほのちに中島信行と結婚して横浜に住み、神奈川県下の民権家宅に多くの足跡を残しています。

岡山的女子懇親会、仙台の女子自由党、浜松の遠陽婦女自由党など、女だけの民権結社もできます。神奈川県愛甲郡の愛甲婦女協会もその一つで、特筆すべき事例です。しかし、多くの女は、自身が運動の主体にはならず、身内の男たちの運動を支える役割にまわりました。父や夫に

従うのが「婦徳」とされた時代で、社会参加意識が育っていなかったのです。

八九年二月、大日本帝国憲法が發布され、翌年六月には第一回衆議院議員選挙が行なわれ、神奈川県では五区（高座・愛甲・津久井）選出の中島信行をはじめ民権家が議席を独占しました。しかし、この選挙と同時期に集会及政社法が制定され、女は参政権はもとより、政治演説をしたり聴いたりすること、政党に参加することも禁じられ、政治世界から締め出されてしまったのです。

（江刺昭子 記）

厚木・愛甲の自由民権運動

厚木・愛甲の自由民権運動は一八八〇（明治一三）年に国会開設建言書を元老院へ提出した頃からで、そのときの郡代表は霜島久円と小宮保次郎でした。八二年に民権結社相愛社が創立されましたが、これより前に万有社、共研社、晩成社、有理社、興眠社、革風社、共話会などの小結社が設立されていたようです。八三年には下荻野村で学習を目的とした講学会を開講、講師に細川瀏（きよし）を呼んでいます。同年自由党党首板垣退助が厚木の三田清源院で、八〇〇人の聴衆を前に演説会をしています。

八四年には愛甲自由党ができ、党助成のための相愛協会が設立され、この頃に愛甲婦女協会も創立されたようです。同年地租軽減嘆願書が大蔵卿へ提出、それが拒否されると、こんどは請願を建白にかえて、元老院へ一町二七か村、五八七人の署名を集めて提出しました。請願委員に難波惣平、天野政立、山川市郎、神崎正蔵、沼田初五郎、井上篤太郎の六人が選ばれてい

ます。

八五年四月、朝鮮改革計画（大阪事件）の資金集めのため景山英子と富井於菟^{おと}が下荻野村を訪問し山川市郎、難波春吉たちと会っています。一月に朝鮮改革計画は発覚し、愛甲郡では天野政立、難波春吉、佐伯十三郎、大矢正夫、山川市郎、黒田黙耳、霜島幸次郎たちが逮捕されました。黒田黙耳は予審免訴、八七年五月から始まった大阪重罪裁判所での第一審判決が九月に出て山川市郎と霜島幸次郎は無罪放免となります。他は有罪になり、八九年二月、大日本帝国憲法発布により天野政立は大赦で出獄し、二年後の九一年十二月に大矢正夫は特赦、九二年五月に佐伯十三郎も特赦、九三年に難波春吉も出獄しています。その後は自由民権運動も大きな転換期を迎え、活動も下火になっていきます。

愛甲婦女協会会員は民権家の身内

さて、男中心の活動のなかで、愛甲婦女協会主意書や申合規則がこの荻野の里に残されているのは驚きです。女たちは新しい時代を夫とともに作ろうと行動したのでしょうか。主意書の冒頭に「伝へ聞く。西洋諸国の婦人女子は。能く男子と交はりて。或は男子の朋友と成り。或は相談相手となりて。」また「丈夫たちの催されたる。演説会てふものに罷出て。」などと述べられています。学習会や演説会への参加についての資料が残されておらず、活動の実態とメンバーを特定することができません。ただ、関連する資料がいくつか発見されています。

一八八四（明治一七）年の『自由新聞』に「義捐金、故田母野秀顕氏埋葬費中へ神奈川県愛

甲郡愛甲村早川耕造氏令妻難波こう女より金二十銭同郡下荻野村難波惣平氏令妹難波せい女同中荻野村三浦政憲氏令妻内海くら女同柳田富三氏母堂柳田うめ女同郡及川村三角重太郎氏令娘三角ぎん女より各十銭を義捐せられたり」という記事があります。

『難波家・自由民権関係文書』には、鈴木舎定遺族恵与金として難波せい金十銭や大阪事件犠牲者義捐金として犬田菊江一円、武藤ます五拾銭、きの女四拾銭の記述があります（ただ、大阪事件に関しては高座郡のグループもいっしょに活動していたので愛甲郡の民権家関係の人ではないことも考えられます）。『大矢正夫自叙伝』にも朝鮮改革計画の資金調達のため山川市郎宅へ潜伏の折、「その妻おえん殿も、亦節婦の勇婦なり」の一文があります。

これらの資料から推測できるのは、愛甲婦女協会の会員は、愛甲自由党員の妻、姉妹、娘など、身内の女たちで、難波惣平の妹の八重とこう、山川市郎の妻えんらが中心だったと思われます。彼女たちは、学習会を重ねて政治に目を向けるとともに、男たちが開催する演説会を聴きにいったに違いありません。また、家を留守にして飛びまわっている夫や兄に代わって家を守り、同志の面倒をみたり、義捐金を送ったりという民権運動の支え手としての役割を果たしています。特に大阪事件で夫が囚われた山川えんと天野八重の苦労がしのべれます。

本書の話者は、民権家や彼らを支えた女たちの孫やひ孫の代の方たちです。曾祖母、祖母のことはほとんど分からないそうです。わずかな言い伝えや記憶をたどりながらの聞き書きとなりましたが、進めていくうちに分かってきたことがあります。それは民権家同士の姻戚関係です。小宮保次郎は高座郡海老名村の大島正義の姉村と、長男隆も大島家のタヲと、難波惣平の妹八重は

天野政立と、こうは早川耕造と、森甚太郎の妹キクは大矢正夫と、井上栄太郎の義妹えんは山川市郎と結婚しています。また、井上家と多摩郡相原村の民権家青木正太郎の子孫も婚姻でつながっています。「家」の存続のため養子、養女が多いことも系図からわかります。同志としての深い繋がりもあつたからなのでしょう。現在はその関係を語る人も少なくなっています。

（「さねさし」記）

聞いたとけばよかった、小宮家のこと

小宮^{こみや} 富貴^{ふき}

小宮家で保次郎^{やすじろう}じいさんのことを語れる孫は、わたし一人になってしまいました。お婆も三人いましたが、もうとつくに亡くなりました。父や母からも民権家だったという保次郎じいさんのこと、なんにも聞いていないんです。

海老名の中新田^{むら}（現、海老名市中新田）の大島家とは縁がありましてね。祖母の村は大島正義^{まさよし}の姉で、母のタヲと共に二代も続いて小宮家に嫁いできたんですよ。不思議でしょう。今になってみると『小宮保次郎日誌』のことや、小宮家の昔の暮らしなど、聞いておけばよかったとつくづく思っています。直系の孫で元気なのはわたし一人なのに、語ることもできず残念です。

現在はこの大きな家に一人で暮らしていますけど、「わたしの決めたこの人生」、けっして平坦な道ではありませんでした。でもこれでよかったと思っています。

一九一八（大正七）年
七月一日—二〇〇八（平成二〇）年二月二五日
愛甲郡下川入村生まれ
厚木市下川入在住

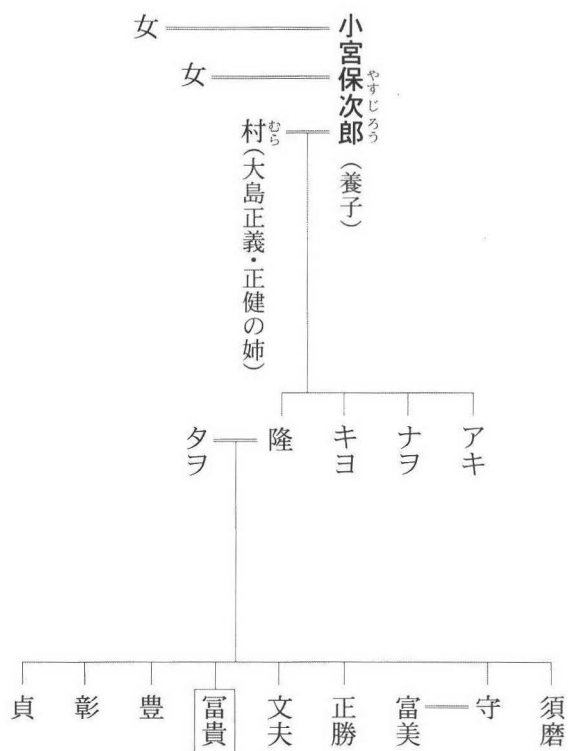
小宮保次郎

（一八三八—一九〇〇）

一八三八（天保九）年愛甲郡下川入村佐野市郎の次男として生まれ、のちに同村小宮家の養子となる。八〇（明治一三）年の国会開設請願運動では、郡の筆頭総代として署名を集め、元老院へ提出。八二年創立の民権結社相愛社で幹事となる。同年七月自由党に入党。八四年愛甲自由党の監督になるなど中心的に活躍した民権家。村会議員、戸長、県会議員を歴任。

八一年から九〇年まで記録されている日記は貴重な資料。

小宮家 系図



兄嫁は八八歳 わたしも八八歳

兄嫁の富美とは六か月しか違わないんです。ここ下川入がわたしの生家なので、兄夫婦とわたしの三人で長いこと暮らしてきました。

兄嫁は都会育ち、わたしは田舎育ちでね。よくひと様から「小宮さんは、ほんとうのきようだいみたい」って言われました。兄、守は平成一五年に九三歳で亡くなりました。長いこと病気で、最期は目も見えなくなつてね、三度の食事をするのも大変でした。

その頃から兄嫁のほうもちよつとおかしくなつて、わたしにつらくあたるようになり、「お稽古ごとなんかやめなさい」なんて平気で言いました。兄の看病で疲れが出たんでしょうね。兄が亡くなつた後、兄嫁も介護支援を受けてね、週二回ヘルパーさんが二人と看護師さんが二人来てくれたんですよ。当の本人は「うるさくて嫌だね」なんてわがままを言いましたが、「今日は誰が来るの」つて聞くこともありましたね。義理の姉ですから気を使いましたよ。認知症だけでなく失禁もありました。看護師さんが、下の世話は慣れているので、パツパツと手際よくやつてくれますが、そのあと始末はわたしです。

今年（平成一八）の五月頃から特にひどくなり大変でした。いよいよ老老介護になつてしまいました。やつとのことで入院させてもらい、その後コミュニティ

ーセンター北部にいられてもらえることになり、ほっと一息ついています。

兄嫁がさきに逝くかわたしがさきか分かりませんが、自分のことは、何でも自分でやらなくてはなりません。お葬式のことでもいいつさい用意してあります。お金のことも甥に分かるようにきちつとしてあるんですよ。

さいわい甥の保司が同じ屋敷内にいます。あの子は小さいときからわたしといっしょに暮らしてきたせいか、わたしを親のように思ってくれてくれましたね、「おばさん、俺たちが最期はちゃんと看るから心配はいらないよ」と言ってくれています。「いつでも何かあったら必ず知らせるんだよ」って、ブザーもつけてくれました。

『小宮保次郎日誌』と保次郎じいさん

大畑哲先生が厚木高校の教師でいられたときのこと、甥はたしか高校一年か二年でした。甥の名前は保司つていいですが、おじいさんにあやかるように保の字がついたんでしょうね。「お前は自由民権家の小宮保次郎と関係があるか」って聞かれたんで、「あります」と答えたら「やつぱりそうだったか」と言われたんです。それからまもなく大畑先生が家に見えました。

『小宮保次郎日誌』のもと、和紙を折りたたみ横綴じにした大福帳のような

大畑 哲

(一九二九)

静岡県に生まれる。元神奈川県立厚木高校教諭。相模原・大和・座間・綾瀬など神奈川県内の多くの自治体史編纂に携わる。特に神奈川県内の自由民権運動とその活動にかかわった人物の研究は五〇年に及ぶ。著書は『よみがえる群像』『続よみがえる群像』『相州自由民権運動の展開』『かながわ自由民権探索』など多数。

『小宮保次郎日誌』

一九八四(昭和五九)年一月発行。大畑哲編。小宮保次郎が一八八一(明治一四)年七月から八九年まで記録した日記をまとめたもの。日常生活や民権活動などが記されている。

大福帳

商家で売買の記録をした元帳

ものでしたね。昭和一二年にわたしたちが下川入にもどってきた頃、近所では養蚕が盛んでした。紙のない時代でしたので、紙は貴重でした。「目張りに和紙が欲しい」「お茶を作るときのホイロに欲しい」なんて言われてみんなあげてしまったんです。近所の人はとても喜んでくれました。ずいぶんたくさんありましたよ。おば（保次郎三女・キヨ）も兄嫁もいたのに「いいも悪いもないよ、みんなくれちゃいな」って。わたしもその話に乗っちゃってうかつでした。

そのなかにはきれいな筆文字で、しかも楷書できちつと書いてある大福帳がありました。ページをめくっていくと、お習字の手本になりそうなので、少しばかり残しておきました。それが、『小宮保次郎日誌』のもとだったんですね。そのたぐいは今でも蔵のなかにあります。このあたり（下川入）のことも書いてありました。全部人にくれてしまったら、この話は埋もれてしまったでしょうね。

祖父は、同じ下川入村（現、厚木市下川入）の佐野家から小さい頃、この小宮家に養子に來たんです。最初は中郡戸田村の女性と結婚しましたが亡くなって、津久井郡荒川の女性と再婚しましたが、この人も早く亡くなってね。三度目の結婚相手が、海老名村の大島家から來た村です。村の弟が養蚕家で民権家の大島正義です。その弟の正健は、札幌農学校（現、北海道大学）で「少年よ、大志を抱け」のクラーク博士に教わった人だということを聞いています。正義は養蚕のことで下川入の佐野家にはよく出いりしていたそうで、その関係で縁があったんで

ホイロ（焙炉）

製茶に用いる乾燥炉。かまちに紙などを張ったもの。

大島正義

（一八五七—一九二三）

大島家一七代目当主。愛甲郡中新田村生まれ。一八七八明治一二）年耕余塾に入り、小笠原東陽に学ぶ。八一年民権結社・武相懇親会に参加。八九年海老名村村会議員、その後県会議員。政界から引退したあとは養蚕事業に力を尽くす。『小宮保次郎日誌』の中にも正義の名前が出ており、下川入の佐野家とも養蚕関係で付き合いがあった。

大島正健

（一八五九—一九三八）

大島正義の弟。一八七六（明治九）年に新設の札幌農学校で学んだ。クラーク博士の教え子。

しょうか。

おじいさんのことは何も知らないんですよ。おばたちや父母からも聞いていませんしね。ただ、県会議員だったときにね、門のところへ人力車が着いて、作代が大きな声で「旦那さまのお帰り」というと、みんなが迎えに出てきたとか。また、議会が始まると人力車で平塚へ向かい、そこから汽車で横浜へ行き、そこに一日も二日も泊まったことなど聞いています。ここからはとても通えないからでしょうね。

当時、どうやって暮らしていたか、何が好きだったか、家のなかでのことなどわたしは聞いておりません。けど、おじいさんは、虎の木彫りの置物は好きだったようで、よく膝の上に置いていたそうです。

保次郎じいさんたちの住んでいた下川入の家は、昔の造りなのに台所や洗面、風呂場などは蛇口がついていましたね。農地改革で田畑が解放されたり、父の道楽で家が没落してしまい、料亭に売られていったようです。

兄が戦地からもどり、土地を売ったりし、いくらか生活がよくなったとき、今のこの家を建ててくれたんです。昭和四〇年だったと思います。

保次郎と村のあいだには四人子どもがいて、三女キヨは、横浜で日本郵船の事務長をしていた人と結婚したんです。女中を一人連れてね。ですけどからだを壊し離縁され、家にもどってきて、わたしたちといっしょに暮らし、最期はわたし

作代
農家の作男の中で、頭になるもの。

小宮保次郎肖像画



(岡田三郎助画)

が看取ったんです。このおばにももつと聞いておけばよかったですね。

父母と厚木での暮らし

保次郎じいさんの長男、隆とタヲがわたしの父母です。タヲも大島家の出です。昔は家の暮らしもよかったようで、子どもたち一人ひとりにお子守さんが付いていました。作代も何人かいました。きょうだいが多かったからでしょうかね。

昭和三年、一家で下川入から厚木の大手町に引つ越しました。父が一軒家を建ててくれたんですよ。今のロワジールホテル厚木のあたりです。

小学校は厚木町立尋常高等小学校で、歩いて三分のところですね、女学校は松枝町にあった県立厚木高等女学校。ここへも歩いて五分でした。そこは一戸建ての立派な家が多く、所長さんとか、配属将校さんとか、偉い人ばかり住んでいました。駅までは、田んぼ続きでよく見通せるし、兄が大学へ通っていたとき、「電車が愛甲石田を出たかどうか見てくれ」なんて言うほどでした。

厚木へ引つ越したとき、わたしは小学校四年生でした。まもなく母タヲが病気になるましてね、当時わが家はまだお金がだいぶあったようで、東京の病院へ入院させ、手術も受けましたがだめでした。病名は腸閉塞だったそうですよ。その翌年、年が明けた一月一六日に母は亡くなりました。一番下の弟なんかまだ乳離

れしていませんでしたから、可哀想でしたね。

母のことはあまり記憶に残っていないんです。出っ歯で顔は馬のようでしたが、家庭的なやさしい人でした。下川入の家では、上の女中と下の女中と仕事に分かれていましたね、お掃除は女中さんといっしょにしました。家のなかはきちっとしていましたね。裁縫も上手でね、家中の人の着るものは、全部縫っていました。羽織の衿などは、鉄砲付けをしていました。料理も上手でね、お客様が見えると全部手作りのものをだしましたね。アイスクリームなんかも作りましたよ。お客さんの出いりが多かったので、接待も大変だったと思いますよ。

母が亡くなってからは、キヨおばさんと女中と半々くらいで面倒をみてくれました。キヨおばさんは家庭的な人ではなかったですね。本を読んだり歌を作ったりするのは好きでしたが、料理や裁縫は嫌いでしたね、家族の面倒は、食べる物も着る物も女中さんがしてくれました。

その頃から父の隆は家に居つかなくなり道楽が始まって、お金もバタバタ使いました。おじいさんの残した大切な物も無くなっていたんです。「こんなことで大丈夫かしら」って子どものわたしでさえ思ったほどでしたよ。結局跡取りの一人息子だったので、大切に育てられ過ぎてしまったんでしょうね。「小宮銀行、小宮銀行」って言われるほど財産があったのに。

でもわたしなんかにはやさしくてね。小言を言われたこともないし、女中さん

鉄砲付け
折った襟で、身頃をくるんで、縫う方法。

が失敗しても「かあさん、あれを直しておけよ」なんて、そういう人でした。

女学校（県立厚木高等女学校）へ行っていた頃は、貧乏のどん底でした。でもいい友だちがたくさんいました。中倉千鶴子さん、甘利千代子さん、山本多満さん、今も元気なかたもありますが、もう亡くなつたかたも多いです。菊屋（和菓子屋・菊屋正房）の山本さんとは、家も近かつたので、とくに仲良しでお茶のお稽古など、いっしょにやりました。先生は、依知の宝泉寺の小山貫道という人で、お茶やお花の修行を京都でされたんですつて。厚木神社の近くに稽古場がありました。

当時としてはめずらしかったかもしれませんが、お友だちと三人で学校のピアノをかりて習いました。女学校の音楽の先生で、和田美津子先生。小説家の和田伝さんの奥さんです。バイエル、チェルニー、ソナチネ、ソナタくらいまでやりましたね。学校でピアノは使わせてくれましたので困りませんでした。家ではオルガンがありましたので、それで練習をしましたよ。その後教員になったとき、これがとても役に立ったんです。音楽のほうはまかされて音楽主任を務めました。姉の須磨も兄の守も祖母と母の実家海老名の中新田の大島家へ行つて暮らしました。大島家とは普通の家より縁が濃かつたんでしょう。昔はそんなこともできましたんですね。何故子ども二人を実家へ預けたのか、わたしには分かりませんがね。ただ、生活費は小宮家が出していたようですよ。

姉は学籍簿を見ると、菁莪小学校（愛甲郡下川入村尋常高等菁莪小学校）には、一年のときだけいたようです。その後大島家で暮らしたんですね。学校は東京にある女子大付属でした。贅沢三昧な生活をしていたらしくてね、お風呂へ入るにも、夏はうちわで扇ぐ人、からだを拭く人がいて着替えも手伝ってもらったんですって。着る物もモダンなものを着てましたし、靴は一足五円のもの、普段でも帽子をかぶっていたようですよ。たまにわたしにもくれましたから、学校へかぶっていくとみんなにじろじろ見られて嫌でしたね。ここは田舎だから、まったく似合わなかったですよ。姉妹なんていつても一一歳も離れているし、一年間ぐらいしかいっしょに暮らしませんでしたから、他人と同じでしたね。

兄は小学校五年生頃、大島家に行きました。その翌年、関東大震災があつて、大島家は焼けちゃってね。兄はその日偶然じょう橋を渡つて厚木の石村書店へ出かけて行つていたので、助かったそうですよ。それで、下川入の実家にもどつてきたんです。

あしかけ三五年の教員生活

女学校を卒業したのは昭和一〇年で、その二年後、下川入の家にもどりました。すでに保次郎じいさんたちが住んでいた家は、何もありませんでした。思い

じょう橋

相模橋の愛称。明治末期、常設橋が架かり、常にある橋、常に渡れる橋として自然に言い伝わった。今はあゆみ橋という。

出しますね、「荒城の月」の歌を。歌のとおりでした。昔の家はこの料亭になったか、今残っているかまったく分かりませんし、嫌でしたね。でもこの歌は今でも好きなんですよ。

父は、わたしたちが引越す数年前、下川入の土地へ一五坪くらいの掘っ立て小屋のような家を建て一人で住んでました。隠居所のつもりだったんですね。自由に何年かは暮らしていましたが、病気で亡くなりました。五七歳でした。菩提寺の源養寺さんはよくしてくださいましたよ。それからまもなく、兄夫婦とわたし、甥二人と弟と伯母の七人で暮らすことになりました。

当時は卒業と同時に結婚する人が多かったですね。わたしもお嫁にいくつもりでしたが、父の道楽ですっかり家が没落してしまい、自分のしたくは自分ですなくてはならなかったので、お勤めをすることにしました。結局は教員になったのです。もらった俸給は全部自分にかかけました。着る物も家で作ってもらったものは何ひとつありません。これがよかったのか悪かったのか、ずうっとこの調子できました。

教員になるには、免許状が必要ですね、ちょうど六か月講習というのが横浜の女子師範（現、横浜国立大学）で開設されていましたので、そこへ通いました。きびしい修行でしたね。炎天下の屋上で薙刀の訓練を受けました。ようやく正教員の免許状を取ることができました。

源養寺

厚木市下川入にある曹洞宗の寺院。愛川町田代勝楽寺末寺。開山は一六一五（元和元）年に没した吉山永祥。小宮保次郎の菩提寺。

昭和十三年四月、依知尋常高等小学校へ赴任しました。「三年の女子を受け持つように」と校長先生がおっしゃったので、そのつもりで勉強の下調べをしておきました。

ところが挨拶に行ったその日、急に「一年生の担任になれ」と言われたんです、それも北分校の。一年生の担任に決まっていた先生が代用教員だったからです。

依知小学校には、一五年まで二年間通いました。学校までは寺坂か、ときには中の坂を登って行きました。ひどい石ころ道でしたよ。おんぼろ校舎にいたので、急性肺炎になってしまい、もう少しで死ぬところでした。校長先生が気の毒に思ってたか、近くの菁莪小学校へ転勤させてくれました。暫くはここへ勤めたんです。

初めての俸給は三五円。師範出身の先生は三八円。校長先生は五、六〇円だったと思います。その頃の下宿代は、ご飯も風呂もついて一五円でしたから教員の給料は、たぶんよかったんじゃないかしら。

その頃は男と女の差別がはつきりしていましたね、職員会議のお茶菓子でさえ男の先生がさき、女の先生はその残り物を並べました。同じ会費を納めていてもね。

戦争が激しくなると空襲がよくありました。サイレンと同時に子どもたちは下校します。体操なんかはやりません、お腹が空くからです。運動場は芋畑になり

菁莪小学校

一八九二（明治二五）年、棚沢・下川入両小学校が合併し、二月五日創立。棚沢小学校校長内藤庄吉が菁莪小学校と命名。

一九六六（昭和四一）年廃校。

ました。弁当を持ってこられる先生は数人、じゃがいもの蒸したのを持ってこられた先生もいましたね。わたしなんか、貧乏でしたから、何も持って行きませんでした。先生方の午後は桑の実とりでね、バケツを持って行きたくさん採ってききましたね。ハート型の葉の実は、甘くておいしかったですね。たくさん採った桑の実でジャムを作りました。男の先生はそれに酒を少し入れ、発酵させて桑の実酒を作ったんです。それはそれはおいしかったですよ。

終戦後二年くらい教員を辞めていましたが、昭和二二年に菁莪小学校へ復職しました。それから菁莪小学校に長く勤めたあと、昭和四二年には、依知小学校に転任しました。依知小学校が新校舎になるため、起工式からかわりましたね。学級の担任はほとんどせず、給食のほうを担当しました。菁莪小学校では、すでに給食が始まっており、そちらの段取りをつけてその後、依知のほうも始まりましたのでね。

「勸奨退職を」って言われ肩をたたかれたの。一旦教師を辞めましたが、七沢のリハビリテーションで訪問講師としてやって欲しいとお声がかかり、三年ほど勤めました。その子どもたちの学籍は、玉川小学校にあります。身体も知能も普通の子と違います。勉強どころか何をやっても、大変でしたね。通勤は下川入からバスで本厚木へ、更に七沢行きのバスに乗り換えて行きました。

いろいろなことがあって、とにかくあしかけ三五年、教員として勤めあげまし

嫌なことは全部忘れました。この時代があつたからこそ今の自分があるんでしょね。

趣味で始めた木目込み人形

昭和の終わり頃「厚木万葉の会」といつて四五・一六首もある『万葉集』を終わりで読もうという会に入会しました。場所は婦人会館です。講師は沢柳友子先生。月一回でしたが毎回が楽しみでした。あと少しというところで、兄や兄嫁の病氣と重なり、勉強どころではなくなり、一四、五年続けたんですが、やむを得ず休講し卒業までは、こぎつけませんでした。

趣味で始めた木目込み人形は、昭和六一年から約二〇年間、先生のご指導を受けました。先生は東京から来られましたが、生徒はいろいろな地域から集まりましたね。厚木市の婦人会館は厚木市在住の者でなければ、会場が借りられませんで、いつもわたしが申し込みました。作品のでき上がったときの喜びはひとしおです。親しい友だちに差し上げるとみんな喜んでくれます。「今も大切にしています」なんて言われると嬉しいですね。

平成一三年、八三歳のときから睦合の老人ホームへ木目込み人形の指導に月二回行き始めました。主にデイサービスの人たちで、材料や型紙はわたしが用意す



「厚木万葉会」の頃の富美

るんですよ。田んぼのなかの道をせつせとでなく、てくてく歩きます。一〇分ほど、ホームに着きます。田舎の道を歩くのはとても気分のいいものです。生徒さんは八人、上手に仕上げてくれます。手の不自由な方もいますので、ぐるぐるまわっていつて、手伝いもします。ホームの人たちに感謝されましたが、平成一八年九月二五日で辞めました。自分が健康で人さまに教えることができたことは、嬉しいことでした。

今は趣味で本を読んでいます。白洲正子が好きで何冊も持っています。わたしあの人の随筆が大好きなんです。さっぱりした文章のなかに、やさしさがたつぷり入っているの。自分の目と足で確かめて書いてあるでしょう、日本の古代の女性の生きかたが表れているので、『万葉集』や古典にも通じるものがあるのよ。そんな彼女に魅かれていったのね。今は、ご主人の次郎さんに興味があつて。吉田茂さんに関係があるんですってね。そちらも読んでみたいと思つています。先祖あつてのわたしです。毎日仏壇に手を合わせてね、新しいご飯にお茶、めずらしいものがあれば、まず仏様にお供えます。上を向いてもきりがなし、下を向いてもきりがなし。まあまあ今の暮らしに満足していますよ。これから一日一日を大切に生きていこうと思つています。

白洲正子

(一九一〇—一九九八)

幼少期より能の舞台に立つ。能や骨董に造詣が深い。『かくれ里』『西行』など著書多数。一九四二(昭和一七)年、南多摩郡鶴川村に農家を買って住む。現在は「武相荘」として解放。

聞き取り

二〇〇六年九月五日

一二月六日

余 話

下川入の小宮家を訪問したのは、二〇〇六（平成一八）年九月のこと。「草むしりをしていたんですよ」と白髪の品のいい女性が門のところへ出迎えてくれました。富貴さんでした。一九八八（昭和六三）年頃、「厚木万葉の会」で一四、五年間机を並べて受講した仲間です。容姿端麗で姿勢もよく熱心な人でした。突然伺ったにもかかわらず、「同じ八八歳の兄嫁が施設に入り、時間ができましたからいいですよ」と気軽に話をしてくださいました。「保次郎のことは何も知らないですよ、よく聞いとけばよかったですね」と何度もおっしゃいました。ここ数年、ほとんど家から出ないという富貴さんと近くにある小宮家の寺、源養寺に行き墓参りもできました。お逢いするたび「祖父の偉大だったことが分かり嬉しい」と言われ、取材したわれわれもともに喜びました。

富貴さんは生涯独身を通され、「自分の道は自分で切り開く」の信念で生きてきた人です。もしものときは「箆笥のなかに白装束の一式、葬儀のいっさいを甥に分かるようにしてあります」とのお話には感銘を受けました。二〇〇七年九月に伺った折に「この冬は越せそうもないので、老人ホームに行きます」と淡々と話されたのが最後で、二〇〇八年二月、数えの九一歳で旅立たれました。「この本ができたら届けにきます」とお話したら「小宮家のことやわたしのこと、いろいろ記録していただきありがとう。わたしがいなくなっても本が残ります」と。この言葉が今でも耳に残っています。またとない出会いでした。

石井道三^{どしやん}は、わたしの道三おじいさん^{みちぞう}

荻田^{おぎた} 良子^{よしこ}

荻野（現、厚木市上荻野）に住んでいた道三おじいさんが荻野山中藩陣屋焼討事件に関係していたことは、父が誰かに話しているのを聞いて知っていました。しかし石井道三という民権家だったということは知らなかったんです。民権研究家のかたの話で知りました。わたしが六〇歳になってからのことです。もちろんそれを確かめることのできる家族はもういませんよね。

わたしの父はよく知ってたと思うんですけど、その父も昭和四三年九月六日に八〇歳で亡くなりましたしね。ただね、おじいさんの左手の人差し指だったか、ひと節無かったんですよ。それは戦いをやったときに相手の刀で切られたらしいんです。おじいさんの刀が少し長かったので指をひと節切り落とされただけで命は助かったようです。

民権家としての道三^{どしやん}は家族にとっては道三おじいさんでした。

一九二一（大正一〇）年

二月一五日

大阪市東成区生まれ

厚木市上荻野在住

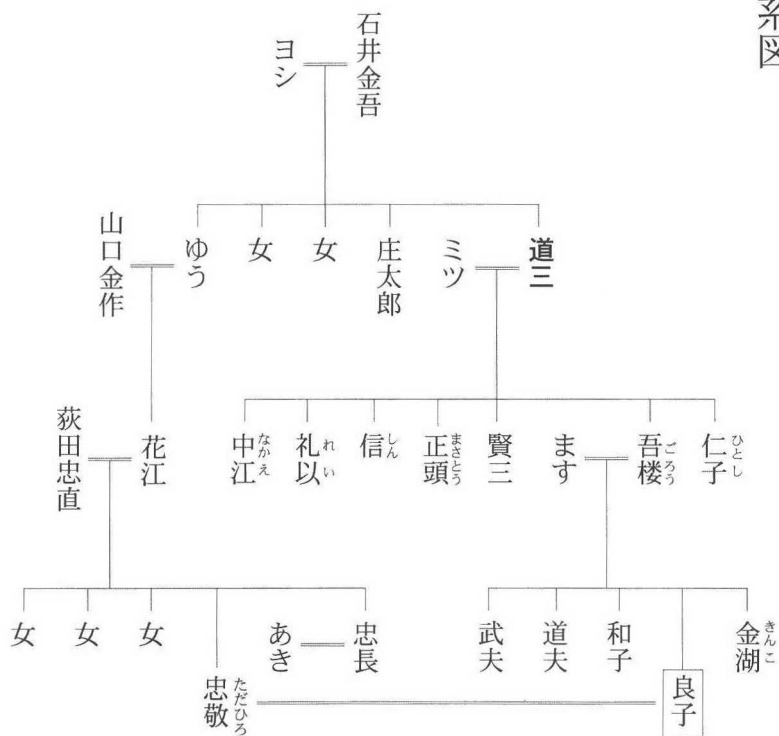
石井道三

（一八四六一—一九三七）

愛甲郡上荻野村に生まれる。

一八六七（慶応三年）年一二月の陣屋焼討事件に参加。このとき二一歳。剣術を結城四郎に学び、小笠原東陽の耕余塾にも少し通った。明治維新後は父の医業を継いで上荻野で開業。荻野の隔離病舎の医師としても活躍。九八（明治三二年）二月、郡内の医師で初めて、県会議員に選出される。

石井家 系図



道三おじいさんの結婚

おじいさんが結婚したのは四〇代になってからと聞いてますね。その頃はお医者さんでしたが、若いときは勤皇倒幕隊に入つて京都や鹿児島などぼうぼう歩いていましたでしょ。ですから結婚するのが遅かつたらしいですよ。

ミツおばあさんは及川（現、厚木市及川）の田所という家からお嫁にきたんです。実家はもと庄家だつたようです。おじいさんとは一八ぐらい年が違つたんですけど、わたしがおばあさんと会つた頃にはもう腰が曲がつてたんですよ。大変だつたらうと思うんですけど、まめによく働いていました。どこへ遊びに行くでもなく、おじいさんと二人で出かけることもなかつたですね。

おじいさんは気ままに一人でよく出かけていましたよ。信州の大町にいますよ。このところへ行つたときもあつたんです。帰つて来てもくわしい話はしないんですよ。家族は「おじいさんどこかへ行つちやつた」つて心配してたのに。わたしたちが大阪に住んでいるときも一人で来ましたよ。そのときの写真が残つてますけどね。おじいさんの写真はいつも怖い顔をした写真ばかりですよ。

おじいさん夫婦には吾楼・賢三・正頭という息子三人と仁子・信・禮以・中江という娘四人、合わせて七人の子どもがいたようですよ。お墓へ行つてみると、一九歳で亡くなつた末娘の中江の墓のほかに、仁子の娘の墓や八菅に嫁いでから

荻野山中藩陣屋焼討事件

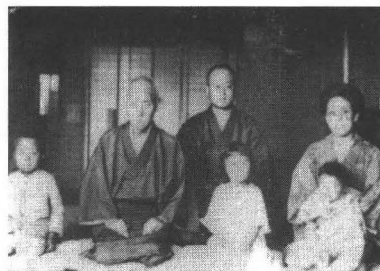
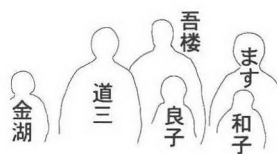
一八六七（慶応三）年二月一日、薩摩の浪士隊の一行が地元の同志の協力を得て荻野の山中藩陣屋を襲撃し、火を放つて武器食糧を強奪した事件。石井道三、山川市郎は下荻野村の博打の親分、鈴木佐吉の勧誘で仲間に加わつたようだ。道三は襲撃後、重傷を負つた鈴木佐吉に付き添つて薩摩藩邸に入り、同年二月二五日の薩摩藩邸焼討から逃れて藩の軍艦に乗り、京都の薩摩藩邸へ。その後鹿児島まで行き活躍した。

亡くなった禮以の、お骨も何も入っていない墓もあるんですよ。変ですよ。おじいさんは娘や孫が供養してもらえないと思って建てたんじゃないんですか。それでもそんなに信心深い人ではないんですよ。毎朝、仏壇に手を合わせるわけでもないし、ご飯をあげたり、お花を供えたりする姿は見たことがないんですもの。みんなおばあさんがやってましたよ。おじいさんはそういうことは女のすることと思っていたんでしょうかね。

道三おじいさんに付けてもらった名前

わたしのきょうだいは金湖^{きんこ}、良子、和子、道夫、武夫の五人です。名前はみんなおじいさんがつけてくれたようです。長男の名前はひいおじいさん（石井金吾）の一字と母の出身地が滋賀県の琵琶湖のほとりなので金湖とつけたらしいですよ。めずらしい名前ですよ。それで笑い話があるんですよ。厚木高校（現、県立厚木高等学校）の友だちが兄をたずねてきて、近所の人に「イシイキンコさんってこの辺にいませんか」と聞いたら「そんな娘さん知らない」って言われたってね。

きびしいおじいさんでしたが、母はおとなしい人で割り合いにお裁縫なんかもよくできたもんですから、気にいってたらしいです。東京にいたときなんか「お



一九二四年頃 大阪で

じいさんの具合が悪い」って電話があつてね、母がびつくりしてとんで来たら元気でいるんですって。年を取ってからはそんな面もあったんですよ。

次男には道三の道をとって道夫。三男は武夫です。おじいさんは男の子が好きでしたね。特に次男の道夫が気に入って、三歳くらいから、あの子だけ荻野に連れて来て離さなかったですよ。だもんですからね、本人は「なんで僕だけこっちに居るんだ」って言ったそうですよ。その後、兄も厚木高校へ入ったんで荻野へ来ていたんです。ですから東京にいた三男は私と妹と自分との三人きょうだいだと思っていたんですって。ある日、急に二人の兄が現れて「おまえのお兄さんだ」って言われて変な気持ちだったって言っていました。

道三おじいさんといっしょの生活

わたしは大正一〇年二月一日、おじいさんの長男吾楼とますの長女として大阪で生まれました。会社勤めの父の都合で三歳のとき荻野へ来たんです。環境が変わったでしょ、つまんなくてね、本玄関のところへちょこんと座って外を眺めてた自分を覚えてるんですよ。その頃、荻野の家にはおじいさんとおばあさんと父の弟の賢三おじ夫婦と娘一人の五人で住んでいたんです。そこへわたしたち家族五人で引っ越して来たんです。おじいさんはもう八〇歳近くで、おばあさんは



二〇〇七年一月
自宅玄関前の良子

六〇歳ぐらいだったと思うんですが、二人とも元気でしたよ。

おじいさんは医者でしたが、もうやめてブラブラしてましたね。でも調合場という薬を作るところがあつて薬が棚に並んでいたのを覚えていますよ。おばあさんはお勝手で一日中くるくるくるくる働いていた姿の記憶しかありませんね。

お米なんかは、この頃まだ田んぼを貸していましたからね。そこからあがつてくる分で一年食べるのに充分あつたらしいですね。玄関を入つてすぐのところに俵が積んでありました。

あのね、これは母のひとつ話だったんですけどね。兄がまだ小さい頃ですよ、食事のときに母が「金湖、冷たいご飯がいいの、暖かいご飯がいいの」つて聞いたら、「子供の機嫌を伺うことはない」とおじいさんにすごく怒られたそうですよ。母はきびしい人だなと思つたらしいですよ。

でも、わたしは叱られた覚えがないんですよ。こんなこともありましたよ。わたしが小学校一年生のときに山へ行つてね、竹を踏んで足の裏が化膿しちゃったんですよ。それでもおじいさんがきびしいから、足をひきずつて学校へ行つたんですよ。そしたら帰りは父の一番下の弟の正頭おじを迎えによこしたんですよ。おじいさんが「自転車を迎えに行つてこい」つて言つてくれたんですよ。嬉しかったですよ。母は心配しててもそんなこと言えませんかね。まあ、そんなやさしいところもあつたのかななんて思いましたけどね。そして二年生まで荻野小

石井家

一九七六(昭和五〇)年の厚木市の古民家調査記録によると、明治初期の建築と伝えられる。式台玄関構えで、馬小屋が付設されていて、一般民家とは異なつた格式を有する構造である。

一九九三(平成五)年まで厚木市上荻野五七四二番地に現存した。

学校に通いました。小さいときの荻野の生活を覚えているのはこのくらいですかね。

東京での生活

小学校の三年生のときに父の仕事の関係でこんどは東京の恵比寿へ引っ越したんです。結構にぎやかな大通りだったんですけど裏駅のほうでしたよ。

わたしの通っていた加計塚かけづか小学校（現、渋谷区立加計塚小学校）はエビスビールの会社が隣にあつたもんですから、グラウンドの上はずうっとビール瓶の置き場だったのを覚えてますよ。階段の多い面白いかたちの校舎で、割り合い新しくかつたんじゃなかったかしらね。そこへ六年生まで通いました。

でも、家は小学校五年生のときに中野へ越したんですよ。その頃、中野はまだ田舎だったんで、学校の程度が違うだろうっていうことでそのまま恵比寿の加計塚小学校へ電車通学したんですよ。家から京王電車の幡ヶ谷駅まで一五分くらい歩いて新宿へ出て、新宿駅から今はＪＲですが、昔は省線って言ってたんですけど、それに乗って恵比寿へ通っていました。妹は小学校一年生から通ったんですよ。

小学校を卒業したわたしは東京府立第六高等女学校（現、都立三田高等学校）へ五年間通いました。制服は白のブラウスに紺のジャンパースカートで、冬はそ

の上にブレザーでしたね。ジャンパースカートは前が広くあいていましたが背中もあいていたんです。そこが特徴だったんです。その頃厚木の女学校は四年制だったんです。でも東京はだいたい五年制でしたね。学区制なんかうるさくなかったですよ。好きなところへ受験できたんです。女学校までは一時間余りかかったかな。慶応幼稚舎の裏を通って蜂須賀さんのお屋敷やイタリヤ大使館のある坂を登ったところにあったんですよ。でも昔はみんなそのくらいかかりましたよ。大森方面から通ってくる人が多かったですね。

女学校を卒業してからはお稽古ごとですね。お料理は袴をつけて習いに行きました。洋裁、お花、お茶にも通っていました。あとは家の手伝いをしていました。わたしの普段着は着物でしたね。夏の暑いときは洋服も着ましたが、着物のときが多かったですね。タイプやピアノを習いたいなんて言ってたんですけど、自分の思い通りにはいきませんでした。

ミツおばあさんの死

おばあさんが七五歳のとき、昭和十二年一月九日おじいさんは数えの九二歳で亡くなりました。おばあさんはたまに東京の家に手伝いに来てくれたりしてましたがね、これからはおじいさんに気兼ねすることもなく出かけられるようになった



一九三八年二月
祖母ミツと

たと思うんですよ。でもね、寒い冬に父の弟で一番下の正頭おじの家にしかけたんです。二月頃だったんですよ。父が「風邪ひくといけないから行つてはいけない」って止めたんですけど行つたんですよ。おばあさんにとつて一番下の息子ですからかわいかったんじゃないですかね。行きたくて行っちゃったんですよ。そこで風邪をひいてしまつて肺炎になり、亡くなったんです。おじいさんが亡くなつて二年後の昭和十四年二月一二日です。どこも弱くはなかったんですよ。数えの七七歳でしたからもう少し長生きすれば、またいろんな楽しみもあっただろうと思うんですけどね。

義母は道三おじいさんの妹の娘

愛川町中津の医者、荻田忠敬ただひろと昭和一七年三月二七日に結婚しました。わたしは二一歳、主人は二七歳のときでした。義母花江は、おじいさんの妹で大島（現、相模原市大島）の山口金作に嫁いだ、ゆうの娘なんです。だから義母とわたしの父はいとこ同士なんです。義母は美人で大島小町と言われてたそうですよ。

荻田の家は愛川町中津で代々医者をしてましたが、義父忠直は主人がまだ学生のときに亡くなつたんです。それまでは東京に一軒家を借りて、ばあやを付けて、きょうだいはみんなそこから学校へ通つていたんですよ。それが、父が亡くなったあとは大変だったんでしょうね。主人なんか「退学してもらうかもしれない

い」って言われたそうですよ。でも義兄が手伝ってくれて、なんとか学校を続けられたらしいです。

荻田の家とは、主人の一番下の妹が中野のわたしの家から東京の学校へ通ったり、主人の兄、忠長の最初の奥さんを父がお世話したりという付き合いはありましたが、わたしと主人が顔を会わせたことはなかったんですよ。

それからしばらくして荻田の母の具合が悪くなつて、父が「中津の花江さんが危ないから見舞いに行つてきたほうがいい」って言うので母は見舞いに行つたんです。そのときわたしは飯田橋の病院へ母の道案内でいついたんですよ。そうしたら母が「もう危ないからいっしょに病室まで来れば」って言つたんです。わたし銘仙の普段着だったんですけど病室まで行つちやつたんです。そのとき主人が荻田の母に付いていたらいいですけど、親戚の見舞い客を送つていつていなかったので会つていないんです。それは結婚するなんて話のないときですからね。ですからわたしは主人の母には病院で一度会つたきりですし、父には会つたことはないんですよ。

短い結婚生活

荻田の家は先代から東京大学の総長をなさつた茅誠司さんの家でお仲人をしていただいているんです。わたしたちのときはお兄さんがお仲人をしてくださいま

茅誠司

(二八九八—一九八八)

愛甲郡中津村の農家の次男として生まれる。現、県立厚木高等学校卒業。物理学者。一九五七年—一九六三年まで東大総長在任。卒業式告辞で述べた「小さな親切運動」はその後社会現象となる。

した。帝國ホテルで結婚式をあげましたから出席者はお仲人の茅さんご夫妻と近い親戚の人だけでしたね。

衣装はあの頃白地がはやっていてね、わたしも白地に柄を描いてもらい振袖に仕立ててもらいました。信お婆の紹介で、新潟の呉服屋に頼んだのですが、何があったのか、間に合わないようだったんで、父が新潟まで取りに行ってきたくれましたよ。その着物は今でも持っています。

新婚旅行は四泊五日で伊豆ですね。熱海へ一泊、湯ヶ島の宿が気に入ってそこで二泊して、伊東へ一泊して五日目に中津の家に帰ってきたんです。主人はそこから田名の診療所へ通っていたんですが、一か月ぐらいで田名へ引越しました。二人で生活できたのはそれから半年ぐらいですかね。この年の昭和一七年一〇月に教育召集で一か月出たんですよ。医者ばかり集めて軍隊の教育をしたらしいですよ。それでいったん帰されて、翌年一八年一月二日にもう召集ですよ。

わたしは田名の家を片付けて、東京中野の実家へ行きました。主人が最初に行った部隊が赤坂だったんで面会に行きました。次は千葉県の^{こうのだい}国府台の陸軍病院でしたので、そこへも二度くらい行きました。それから直ぐに中国へ出征していったんです。手紙はよく来ました。筆不精なのによく書いてくれましたよ。

二月一八日に息子が生まれましたが主人は出たあとだったんで会ってはいないんです。写真を送りましたら喜んでましたよ。男の子だったし嬉しかったように

すよ。名前は出征する前に男の子だったら忠征^{ただよび}で女の子だったら敬子にしようと決めてくれてたんです。

今でも思い出せない日

一九年一月三日戦死です。それが終戦後に通知をもらうまで分からなかったんです。戦死していたなんて思ったことはなかったんですよ。いつ帰ってくるかと首を長くして待っていました。その日は息子を連れて津久井の父と母のところへ行っていました。そこへ「戦死通知が来た」と妹が荻野から自転車であつてくれたんです。わたしはわあわあ大泣きしたのを覚えていますが、それがいつだったのかまったく思い出せないんですよ。

二二年の何月だったか、当番兵だったというかたがカーキ色の軍服のままだずねてみえましてね、当時のことを話してくださったんです。有難かったです。主人は銃弾にあたつて死んだそうですが、小柄なその当番兵のかたが大きい主人を背負つて運んでくださったそうで、みんなに「おまえ、よく運んだな」と言われたそうですよ。戦地では死んだ人が多いので片腕だけとって焼いたそうです。

葬儀は村でやってくれましたがどこでやったかぜんぜん覚えていないんですよ。たしかに主人のお骨は軽かったんです。わたしが「開けて見たい」と言った

ら、兄に「やめとけ」と言われましたので見ませんでした。わたしがっかりするといけないと思ったんじゃないですかね。墓は戦死者の墓地を中津で分けてくれるついでに買つて、荻田家の墓とは別に建てました。大きさは一坪くらいかな。主人の墓だけそこに建てたんです。

二回目の荻野の生活

東京の空襲がひどくなったんで二〇年春にわたしと息子と妹の三人で荻野にもどってきました。同じ頃父の勤めていた軍需工場も津久井へ疎開したんで実家の家族も津久井へ越して来ました。父はときどき食料を持つて荻野へ来てくれました。その頃、食料は闇でないと手に入らなかったでしょ。お米なんかはつてを頼つて買つてきてくれました。有難かったですよね。妹は荻野にあった平塚の火薬工場へ勤めましたが、わたしは息子が小さかったので仕事はしてませんでした。父が生活をみてくれました。小遣いなんかは主人が働いていたときのお金が残っていましたからね。

父と母は終戦後しばらく津久井にいたんですが、工場が潰れて荻野へ帰つて来たんです。でも父は直ぐ仕事をみつけてまた東京へもどりました。そして土曜日になると荻野へ帰つて来てましたね。母は荻野でずうっとわたしたちといっ

しよに住んでいたんですよ。土曜日に父が帰ってくるとわたしと息子と妹と父と母でお百姓をやるんです。だから麦踏みも麦刈りもやりました。普段はね、母と二人で麦の脱穀なんか足踏みでダラコンダラコンやっていました。「今どき、こんな音させてる家はないでしょうね」なんて言いながら母と笑っていましたよ。思い出しますね。

母は胃癌になつて築地の癌研（現、国立がんセンター）に入院したんですが、「もう手術もできないから」って言われて家に帰つてきて三か月。三三年六月五日、六〇歳で亡くなりました。父も一〇年後に亡くなりました。

父が亡くなつた四三年からわたしは萩田の兄嫁あきが医者をしていた相州病院で勤め始めたんです。それまでも友人に頼まれて店のお手伝いなどをしましたが、職員として正式に勤めたのは初めてのことなんです。わたしって一度行き始めると変わるの嫌なんですよ。だから仕事も同じところで三三年勤めて、八〇歳で退職したんです。

今、わたしのきょうだいはみんな元気で兄は八九歳なんですよ。ですから八〇歳以上が四人です。こういうふうにお話してみると人の縁つて不思議で面白いですよ。

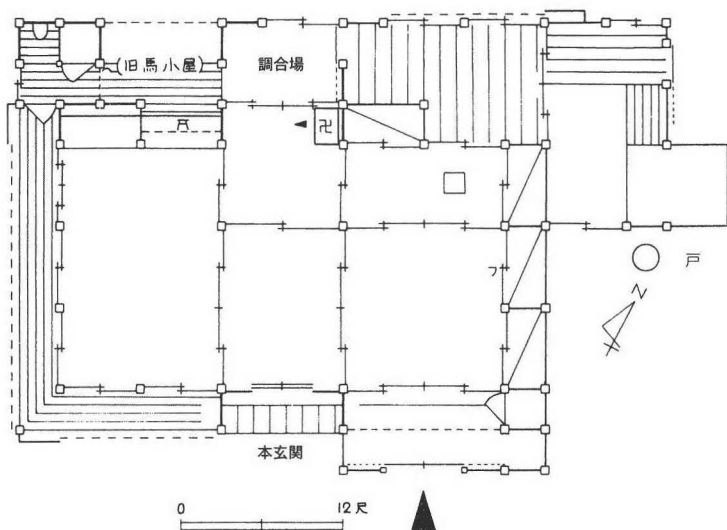
聞き取り

二〇〇五年七月一三日
二〇〇七年六月一八日
一〇月二日

余 話

荻田良子さんには二〇年ほど前にお目にかかったことがあります。そのとき「古い家ですが、どうぞ」とお誘いくださったのですが、伺うこともありませんでした。その家が石井道三の住まいだったのです。一九九三（平成五）年まで良子さんが住んでいらしたそうですが、今回伺ったときには建て替えられていました。とても残念なことでした。

道三は医師石井金吾の長男、みちぞう通造として生まれましたが、山中藩焼討事件の頃は津久井満哉と名のつたそうです。明治維新とともに荻野村に帰りその後石井道三と名のり医業を継いだようです。そして三男正頭さんの息子さんにより今でも引き継がれています。



旧石井家平面図

井上家を守るのがわたしの務め

井上いのうえ
徹子てつこ

とにかくうちは古くてね。先祖は今から四四〇年前、三増の合戦で戦った甲斐の武田軍の武士だったらしいのよ。それが、こっちで病みだしちゃって、そのままここへ落ち着いたらしいの。しゅうとめの梅子おかあさんが熱心で井上家の年代表を作ったりしてよく聞かされた。

井上栄太郎えいたろうは一三代目でね、自由党でばつぱつとやって、財産を結構使ったみたい。しゅうとめは栄さんの話はあまりしたがらなかったね。

半原の実家が戦後すぐ山津波にあつたりして大変なとき、わたしに結婚話があつてね、近所とも気まづくなつたんで、「いいよ」って酒屋をしていた井上の家に来たの。すぐおきやんで後生楽なのよ。ここは代々養子でね、こんどは跡継ぎができて安心よ。井上家を守るのがわたしの務めだと思つてる。

一九二三（大正一二）年
三月二五日

愛甲郡愛川村半原生まれ
厚木市下荻野在住

三増合戦

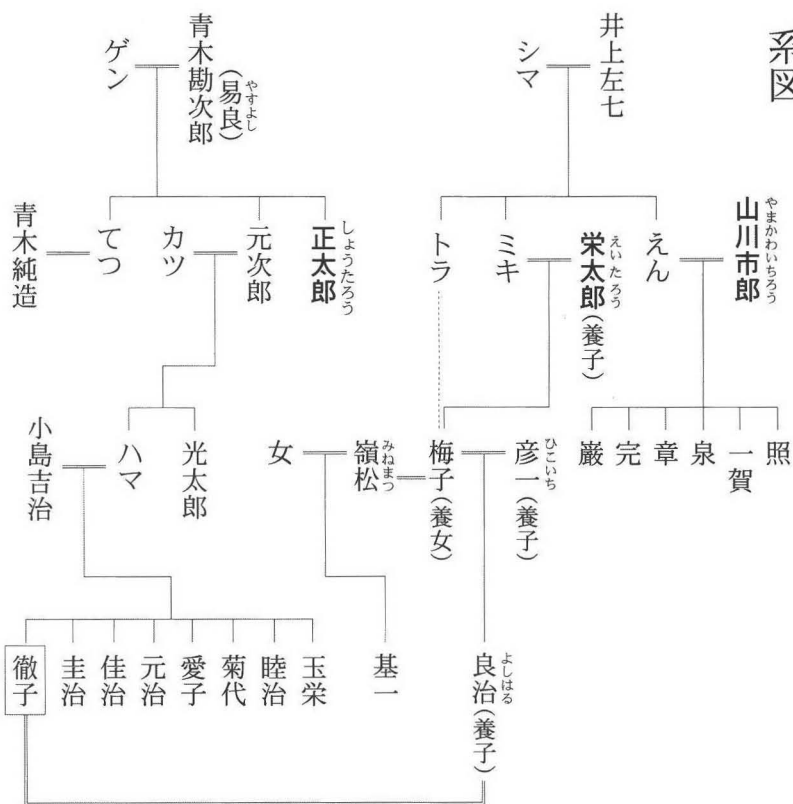
一五六九（永祿一二）年、小田原城を攻めて、甲斐へ戻る途中の武田信玄の軍が、津久井城を守る北条の軍と三増峠で戦った。

井上栄太郎

（一八五四—一九一八）

大住郡西富岡村生まれ。一八七八（明治一二）年、愛甲郡下荻野村井上ミキと結婚。井上家の婿養子となる。八三年自由党に入党。地租軽減運動にも参加。山川市郎の妻えんは、ミキの姉。

井上家 系図



釜屋のいわれ

永禄一二（一五六九）年の一〇月、三増の合戦があつてね、大戦場になつて見渡す限り焼け野つ原になつちやつたんだそうよ。この辺も（現、厚木市下荻野新宿^{しんしゆく}）合戦場の一部だつたらしくつて、たつた一軒たまやという家があつたらしいの。その家では、馬には川の水は飲ませられないからつて、井戸を掘りその水を飲ませることを商いにしていたんだつて。

そこへ負傷したり、病氣になつたりで甲斐（山梨）へもう帰れなくなつてしまつた武士の一族が来てね、一〇人くらいと聞いているけど。この人たちに「ここへ落ち着いて住んでくれれば、家の土地の半分やるから」と言つたんだつて。そのなかの長男がここに落ち着いて、その後鑄物師になつてずっと商売を続けてきたそうよ、釜屋という屋号でね。これが初代なの。そういうことで、たまやが本家になるわけ。残りの武士たちもここに落ち着いてね、ただそのまま武士では首をはねられちゃうので、ほかの人はみな坊さんになつたそうよ。この家に残っている仏具に、今はたつた一つになつちやつただけど「武田菱」の紋が入つた高台のお茶托があるの。お茶碗は三個あつただけどあたしがそそっかしいから割つちやつて、一個しか残つてないけど。井上家の紋は「八つ矢車」で陰紋は「武田菱」なのよ。



明治時代の釜屋

法界寺の住職第七世は弁譽上人で、この家から出た人。享保一八（一七三三）年に亡くなっている。普通の家からお坊さんが出ると七代栄えるんだってね。

その当時、法界寺は二五伽藍もある大きなお寺でね、お上人は浄土宗様式のお仏壇とご本尊様、黒位牌を釜屋のために造ってくれたんだって。今ある仏壇もお位牌もそのときのもの。お位牌には六人のお坊さんのほか、何人かの戒名が書いてあってね、裏には享保八（二七三三）年四月つて書いてあるから、そのとき造ったってことかな。

釜屋の前の代の人たちのお墓は山梨にあるそうで、梅子おかあさんはきちんとした人だったから、戒名も調べてあるのよ。

今から三〇年くらい前、釜屋の先祖のお墓を造りなおそうと小さな墓石がごろあつたのを一つにしようとしたら「ご先祖様の石塔だけはそのままそこへおいといってくださいよ」とご住職に言われて、頼杖をついている石塔だけは残しておいたのよ。これがご先祖さんと、寛文九（一六六九）年と彫ってあつた。

明暦（一六五五年頃）あたりから一般の人たちもお墓を造れるようになったっていうから、「大事なご先祖をうっかり片付けるもんじゃない」って思ってたわ。その頃はまだわたしもとろかったからさ。何にも知らないで、栄さんのお墓も片付けちゃって、墓誌にまとめちゃったの。今になったら悪いことしちゃったと思っているけど。



釜屋の名入りの酒樽



武田菱の紋入り茶碗

「左様しからば」のしゅうとめ梅子との日々

嶺松^{みねまつ}おとうさんがお百度踏まれて、是非にと望まれて嫁にきたのに、しゅうとめの梅子おかあさんとの毎日は針のむしろでしたよ。なんでも命令口調でね。気に入らないとお膳をひっくり返してしまいうし、怒れば怒るほど「左様しからば」になっちゃう人だったのよ。わたしのことは「テッコちゃん」て言つて、いつまでたつてもこの呼びかた。他人みたいで嫌だったね。良治^{よしはる}さんのことは「先生」って呼んでいたの、長年の下宿人だから。しゅうとめとはほんとに三年もいっしょに暮らさなかつたけど、わたしにとっては長かつた。

夕飯の片づけをして手を洗つて上がつてくるでしょう。それからですよ、毎晚しゅうとめさんのお説教が始まるの。夏は蚊に攻められ、冬は寒さに耐えて板の間に正座して聞くの。三六五日ですよ。夕方六時頃から深夜まで。話というのがね、お店のお客さんのこと。上荻野から下荻野まで一人ひとりね。うっかりしゃべっちゃいけないこと、お客さんの知り合いのことを褒めたり、けなしたりしないようにということ、商売のコツをこんこんと教えられた。わたしがそれを覚えないうちには怒るのよ。

そう、それから自由党の話もよくしてたよ。左七の時代は料理屋をやつていて、一番きれいな大きい声で呼び込みをしてたんだって。梅子おかあさんがここ

山川市郎

九一頁参照

山川えん

九一頁参照

景山英子

(一八六五—一九二七)

岡山県生まれ。一七歳のとき岸田俊子の演説を聞き、自由民権運動に参加。大井憲太郎らと大阪事件に連座。一八八五(明治一八)年四月、友人の富井於菟と資金調達のため荻野村難波惣平宅を訪問。佐伯十三郎、山川市郎と会う。山川は英子に二〇円の大金を手渡している。

の養女になる前は、民権家山川市郎の次女お章さんが養女になっていてね、その頃荻野に來た景山英子が店に寄ってお章さんに会って話も聞いた。でもお章さんと栄さんとはうまくいかず、そのあと梅子が養女になったわけ。梅子おかあさんは自分の生まれをけつしてわたしに話しましたよ。でもほかから聞いてわたしは知ってたけど。梅子の母トラ（えんの末妹）は、出産後梅子をトラのおじの木村勘次郎の次女として入籍しておいたんですって。勘次郎は古道具屋をしていたんですがね。

お章さんはその後、北海道へ行つたんだって。こんなつながりがあつて、山川市郎のことはよく話してましたよ。誉めてなんかないの。「だってそのお陰で全部食われちゃったんだから」って言つてね。

わたし自身は、実家の両親からこの家のことはまったく聞いてなかったの
で、初めて知つたことが多かったのよ。おかあさんは養父の栄太郎のことは「立派な人だったよ」って話してくれた。

主人が毎朝五時には出勤するのでわたしは三時には起きたの。一〇時頃しゅうとめが起きてくるんでそれまで何も食はず待つてるのよ。昼頃からこの家には四六時中いろんな人が来て、上がつてお茶を飲んで食事をしていくの。昼といい夜といい、いつも二、三人は来ていて、しゅうとめと世間話をしていくんだよ。わたしはそばに座つていて、足りない物が無いように気を配つて。今のよう

トがあるわけじゃないしね。お客さんの顔を見たら、すぐ火を炊きつけてね。お茶に小梅の漬けたものがお茶菓子って決まってたから。

夜は夜でもらい風呂にくる人がいてね。その頃はね、お風呂はあるけど薪の節約でお湯を沸かさない家もあったから。しゅうとめは早いとこ一杯お酒を飲んじやってね。嶺松おとうさんは何にも言わなかったのよ、婿ですもの。

わたしが嫁いできた頃は「帰れ」と言われないかぎり、実家に帰ることはできなかった。そういう時代でしたからね。

梅子の急逝

こんな毎日が三年くらい続いた頃、わたしが過労で十二指腸潰瘍になっちゃってね。ついにいたたまれなくなつて、「病院へ行つてくる」と言つて、着物一枚だけ持つて半原の実家へもどつてきちゃつたの。主人が迎えにきても帰らなかつた。

ところがね、一か月くらい経つてからしゅうとめが倒れたつていう電話があつたの、脳溢血だつて。それを聞いて母と一緒に急いで帰る途中、仲人の小林升のぼるさんのところに寄つたのよ。だつてまっすぐ釜屋へは帰れないもの。

そしたらそこで梅子おかあさんが亡くなつたつていう知らせを聞いてね、もう



小林 升

(一八七三—一九五四)

荻野村下荻野生まれ。

三郡共立学校(現、県立秦野高校)卒業後築地養蚕伝習校、蚕業伝習所・競進社で学ぶ。養蚕教師として千葉県・徳島県・神奈川県などで指導に当る。その後荻野村助役を経て、九代荻野村村長になる。墓所は法界寺。

釜屋へもどるのはやめようと思って「半原へ帰ろう」って言ったら、仲人さんが一言「釜屋へ帰るんだ」って。あっけなかったね。昭和二四年三月二八日で、五八歳でしたよ。

嶺松おとうさんは、わたしが家を出たことや、梅子おかあさんの急死でショックが重なったからか、翌年の一月四日、あとを追うように亡くなってしまいました。七十二歳でね。

自分が娘を持つ身になってみてね、わたしもずいぶん依怙地のところがあつたなっと思う。あのしゅうとめのお陰で今の自分があるとも思うのよ。ほかの家に嫁にいったらさ、きつと箸にも棒にもかからなかったんじゃないかなって。

民権家青木正太郎は太おじ

嶺松おとうさんがわたしを良治の嫁にしてお百度踏まれたのも、ほんとうはわたしの実家がお目当てだったのよ。わたし自身というよりわたしについている親戚いちはき一卷がお目当てだったので、やみくもわたしを欲しかったのね。あとで分かったんだけど母の生まれが青木家ということだね。町田から横浜線の相原（現、町田市相原）の駅で降りると母の実家があり、子どもの頃よく行ったものよ。

母の父は元次郎といって、青木正太郎の弟でね、正太郎の事務をやっていたら

青木正太郎

（一八五四—一九三二）

多摩郡相原村生まれ。父勘次郎と民権運動に参加。多摩の中心的指導者。村会議員・県会議員を経験。衆議院議員を二期つとめた後、財界に転身。事業家として活躍。江之島電気鉄道の初代社長。

しいの。母ハマは元次郎の長女。跡見学校（現、跡見学園）を出ていて都会暮らしをしていたせいか、半原へお嫁に来た当時から、近所の人とあまりなじまなかったらしいね。話し相手は子どもたちだったって自分で言ってたわ。

半原のわたしの実家は小島というんだけどね、当時あの辺ではかなりの財産家だったみたい。絹糸の商売と宝玉という造り酒屋と両方をやってたの。ところがしゅうとめのツル、この人がまた青木家から来てんのよ。小太刀の免許を持っていて、ツルのしゅうとめだった人が気にいつていたらしいのね。それが、わたしの父を産むとすぐ亡くなっちゃったでしょう、二九歳だったって話だよ。そのツルさんのお墓参りをする人がいないと可哀想だっていうことで、母がまた嫁いできたんだそうよ。だから母と父はまたいとこにあたるってわけ。

小島家の財産を継ぐ父も、母が嫁いできた頃は、表向きはまだちゃんとしていたけど、いろいろあつて倒産に追い込まれちゃったのよ。

母は九年半の間に八人も子どもを産んでね、わたしは八番目。三番目の姉が生まれたあと、母の父が相原でまだ達者だったので、一家はそちらへ出たんですよ。半原の家は倒産したままにしてね。その後、きょうだいたちは、戦死したり、病死したりして今、生きているのはわたし一人。

跡見学校

創立者は跡見花蹊（一八四〇—一九二六）。大阪生まれ。名は滝野、号を花蹊と称する。四歳で書を学び、一二歳で画を習う。一八七五明治八年神田猿樂町に跡見学校開校。日本人女性による女子教育の先駆けとなる。

末っ子の甘えん坊

わたしは八王子であの大震災の年に生まれたの。徹子っていう名前は、青木正太郎の妹、てつからもらったんだって。ただね、生まれたときから揉まれてんのよ。というのは震災もそうだけど、出生届を出すのを番頭さんの手違いで五月生まれが三月生まれとされて、一年早く小学校へ入学させられたの。こういう間違いのあった友だちが二、三人はいたよ。

学校は半原小学校なの。坂を登って行った上にあつたんで、五歳の子どもの足には遠いし、とても通えませんよ。いつも母に添い寝してもらっていたくらい。甘えん坊だったから。いじめもあつて大嫌いだったの。学芸会や運動会は出席するけど、早く学校を卒業したいとずっと思ってたのよ。それに三年生のとき黄痘になってね、当時はすぐ死を考えるような病気だったの。工場で働いている人が自転車にわたしを乗せて相原まで通ってくれてね、母のいとこの勉（正太郎の末弟秀三郎の次男）が医者をしてたんで、診てもらってやっと一命をとりとめたってわけ。その後は、勉強しろとは言わなくなつてね、宿題が出るとみんながやってくれたから、わたしは覚えやしないわよ。その後洋裁を少し習ったんだけどね、それくらいよ。



仏壇の前の徹子

鉄の製品は弾に化ける

実家は倒産後、別の工場を始めたんですよ。ところがあの大東亜戦争でしょう。何でもかんでも、供出、供出で。せっかく始めたというのにお国に取り上げられて工場のなかの機械はみんな弾に化けちゃったのよ。鉄の製品ばかりだから。娘たちも働かなくちゃいけないというのが、世間の雰囲気だったし、姉とお稽古に行っていたお茶の野尻先生の紹介で浅野重工に勤めたの。この先生は親戚の回春堂で代診をしていたお医者さんの奥さんでね。

浅野重工はのちに造幣廠と合併してね。挺身隊に引き込まれ、上溝高女（現、県立上溝高等学校）の人たちのなかへ入って仕事をやったんだけど、仕事は事務。書くのが嫌いなわたしが事務をやったんだから容易じゃない。鉄のパイプの寸法とか重さを測る仕事で数学も必要だった。男の人は、青年学校の生徒一人だけでね。なんとかここで押し切って手取り二三円の給料をもらってたの。

さっぱり分からなかった玉音放送

半原へ転勤になって一〇日目が八月一五日。終戦の日だなんて知らないで、淵野辺へ荷物を取りにいく途中、田名で軍人さんと一緒に玉音放送を聞いたのよ。

大東亜戦争

一九四一年一二月八日―四五年八月二五日。

真珠湾攻撃により米・英などを敵国として戦った太平洋戦争のことで、日本では大東亜戦争と称した。

回春堂

青木家一族の青木純造が一八八四（明治一七）年、東京医科大学を卒業後、相原（現、町田市相原）に帰郷。八七年に回春堂医院を開業した。妻は青木正太郎の妹でつ。

さっぱり聞き取れなくて「どうなったの」「俺にも分かんない」っていう具合でね。

暑い盛りで何がなんだか分からなくなつてね。淵野辺の造幣廠へ行つてみると広場でみんなぐたあつと座つちやつてね、今まで威張つていた軍人たちもよ。

その足ですぐ橋本の寮にいつて、自分の布団や荷物をトラックに積んで運んでもらったんだけど、あのあとではもう持つてこれなかったたでしょうね。

九月、退職金はかなりの額をもらつたの。ところが新円封鎖で全部取られちゃつた。お金をもらいにくのが恥ずかしくつてね。二、三センチもある札束を母が受け取りに行つて信用組合だかに持つていったら「よくこんな」つて言われたつて。でもそのあと、こんどは証紙を貼られちゃつてね。引き出すのは一人百円。わたしが嫁にくるとき、家族は三人だからつて三百円しか下ろせなかつたのよ。封鎖というわけだね。

終戦直後の結婚

昭和二年四月一四日、良治さんと結婚したの。お見合いでね。実はこの結婚にはきつかけがあつたのよ。終戦の年の十一月、南毛利（現、厚木市南毛利）に嫁いだ姉の子どもの七五三のお祝いを持つて行くとき、近所の人が横浜へ行くついでにトラックに乗せてくれてこの釜屋の前で降ろしてもらつたの。

預金封鎖と新円切り替え

太平洋戦争後の一九四六（昭和二一）年二月、進駐軍（G・H・Q）の金融緊急措置令で、インフレや食糧難に対処するため預金封鎖が行われた。預金はすべて封鎖され、おろすことができず、旧紙幣に印紙を貼つた新円のみが流通が許可された（新円切り替え）。世帯主は三〇〇円、ほかは一八・〇〇円に限り新円に交換し、払い出された。

前に父が病んでいたとき、ここでチャボの卵を一〇個分けてもらって、母はとも嬉しかったんだって。お礼が言いたかったんだね。ここは実家の杜氏をして、いた嶺松さんがお婿さんになっていた家だから。あの物の無いときなのに大変ご馳走になっちゃってね。南毛利の帰りにまた寄ってくださいって言われてまた寄ったの。「醤油が無かったら実費で分けるから取りにこさせなさいよ」って。

それを言った人があの梅子おかあさんよ。姉は病んでるし、わたしが取りに来たのよ。そのとき「うちでも養子は決まったけど、あんたお嫁にきてくれないか」って。

二〇年の一〇月四日、忘れもしない大変なことがあったの。すごい台風で、山津波が起きてね。父はその年亡くなり、兄も戦死。母と姉とわたしと三人で住んでいたんだけど、姉は病気で丈夫なのはわたしだけ。家を守る人がいないでしよう。夜中にすごい音がしたんで起きて出ようとしたら、向こうの方に建っていたお蔵が流されて、突然目の前まで来ちゃってんのよ。みんな気付かず平気で寝ちゃっているし、水もぼつぼつと来ているのに起きやしない。雨戸を開けて降りたら膝までぼしゃつと水に浸ってしまつて困っちゃってね。近所に東芝のゼラチンを作っていた工場があつて、そこに朝鮮の人が働いていたのよ。その人たちに助けてもらおうと行つたんだけど、聞こえなかったのか、起きてくれなくてね。近くの人に手伝ってもらつたりして、やっと水を止めることができたの。

そんな怖い目に遭った直後だったから心細い毎日だったのね。嶺松さんが足しげく通って来て、なんとしても嫁にきてくれと熱心に言われてね、母は逃げ口上のつもりで、「養女なら」と言ったのよ。そしたら二つ返事で「それでいい」ということになってね。でも結局は養女じゃなかったのよ。

主人は千葉県の出身でね。あちらで農学校の教員をしていたそうよ。昭和一年、愛甲農蚕学校が県立になって愛甲農業学校（現、県立中央農業高等学校）になったのを機会に翌年採用されてこっちへ来たんですって。現在の睦合中学校（現、厚木市立睦合中学校）のところ。県立になる前の校長先生は小林升さん。

最初は、新宿（現、厚木市下荻野）の四つ角近くにある辰巳屋さんに来て、こちらの紹介で釜屋へ来たそうで、そのまま下宿したって言ってました。三年くらい勤めたのち、厚木中学（現、県立厚木高等学校）へ転勤になって、三、四年後、召集令状が来たそうでね。軍に入れば幹部候補生になれるといって、厚木中学を辞め、乙幹（乙種幹部候補生）で軍曹になり、広島へ配属されたんだって。あの原爆が落ちたのを一〇キロ離れたところから見たって言ってました。その後終戦になって軍人がどっと復員してきたため、一時期勤めがなかったの。

わたしが嫁いだ頃は職探しをしてました。釜屋には子どもがいらないので養子になっていたのね。一歳も年上でしたけど、造幣廠に勤めていたとき、みんな周りはおじさんばかりだったせいか、別に違和感はなかったね。

辰巳屋

厚木市下荻野にある。
民権運動の盛んな頃は、料亭を営む。一八八四（明治一七）年八月植木枝盛・石阪昌孝来遊の折に、難波惣平等と辰巳屋に有志を集めて、演説会をした。当時使われていた岡持が現在も残されている。

オートバイで注文取り

戦後、お酒が売れるようになってね。昭和二四年の三月にしゅうとめが亡くなり、四月からのこと。さあそれからというもの、ねじり鉢巻でばんばん働いたんですよ。一二五ㄥのオートバイに乗って走りましたよ。この辺一一六戸くらい世帯があつたんで、午前中は御用聞きにまわって注文を取り、午後はその品物を一軒一軒配達したの。疎開している人もいたからね。店の修繕もできるほど儲かったわ。女一人頑張ったんですがね、男手もというお得意さんの忠告もあつて、主人も学校を辞めて、あの頃七万円のバイクを買って手伝いを始めてくれたのよ。学校の退職金として主人が得た一時金は、そのまま全部、千葉でひとり住まいをしていた母親に渡しちゃってね、親孝行ですけどね。

主人は、ラグビーをしていたくらいだったから大柄な男でしたよ。お店でお酒を飲んで絡まる人なんかいても騒ぎにならないように、お店へは口出しないと約束してもらってね、良い人でした。何でも聞けば教えてくれたし、外人さんのお客さんにも困らなかつた。

今、お店を継いでくれている夫婦は一六代目。わたしたちとは血のつながりはないけどね、こんどは二人の娘があり、いっしょに暮らしているのよ。まだ一五代目のわたしがいろいろなのは、決めていますけどね。

一 詠歌が楽しみ

昭和三〇年頃から法界寺で詠歌を始めたの。五一年に主人が亡くなったときは一時やめてたけどね。その後また始めたんだけど、こんどは先生が亡くなられて一時おしまいになったの。平成三年からは、妻田の西福寺の曾我先生に来ていただいて教えてもらって再開しました。今は二〇人くらいでやっているんだけど、檀家だけでは集まらないのでほかからも来てもらってるの。月に二回お稽古があつて、その後のお茶が楽しみでね。お寺さんでみんな用意してくれるのよ、珍しいお菓子が出てきてね。

一年に一回、五月には鎌倉の浄土宗光明寺で大会があるの。三〇〇人くらい集まって賑やかよ。ご詠歌のいいところは、やった人じゃなければ分かんないね。清々しい気持ちになるもの。ほかにはカラオケも一二、三人でやっているのよ。近くのいい家で。月二回ね。積み立てをして年に一回か二回のバス旅行が楽しみでね。女性は四人しかいないけど、わたしが始めたから続けているのよ。

お店を一生懸命やっていた頃のお客さんとか近所の人が、今でもおしゃべりに来てくれるのよ。人が来られるのは平気だよ。世間の話も聞けるし、人の生き様を聞かせてもらって参考になるし。梅子おかあさんが生きていたときと同じだね。今は梅干がお菓子じゃないけどね。

法界寺

厚木市下荻野にある浄土宗のお寺。京都知恩院の末寺。一五八五（天正一三）年、北条氏直が創立。僧宗公が開山。

聞き取り

二〇〇六年一月一七日

九月一四日

余 話

甲斐の武田信玄が駿河の今川氏真うしざねに攻め入る。小田原の北条氏康が今川に加勢。ついに武田は引き上げることになる。が何人かの兵がここに留まり住みついた。それがここ釜屋の初代であるという。四四〇年前の三増の合戦だった。

大きな仏壇が和室の中央に鎮座し、立派な先祖代々の位牌が並び、この家の歴史を語り見守り続けているかのよう。その当時の様子が偲ばれるように語ってくださった徹子さんご自身は、自由民権家の青木正太郎とご縁の深い子孫であり、こうして脈々と続く歴史をしつかり認識され、誇り高く次世代へ語り継ぐ強い意志を伝えてくださった。

ご自分の青春はあの太平洋戦争に翻弄され、戦後も健気に忍耐強く頑張り続けてこられ、一人の女性の歴史として感慨深く聞かせていただいた。

惣平そうへいの孫だということを忘れんじやないよ

小林こはやし 淳子じゅんこ

難波惣平はわたしの祖父です。惣平に三人の子どもがいました。長女ハナ、長男庸おつ、二女ミツ、ミツがわたしの母です。母はしまいつ子でね、わたしが六年生のとき亡くなりました。ですから祖父惣平や大おじ春吉のことについて何も聞いていないんです。

母は小林徳次郎と結婚しました。父の徳次郎は荻野村新宿しんしゆく（現、厚木市下荻野）の小林家の出で分家したんです。子どもは長女恵美、長男均、次女多美子、次男教一、三女とも子、四女がわたしで、わたしは大正一五年一月一八日に生まれました。わたしもしまいつ子なんです。均は戦後中国へ行つてましたが、帰ってきて亡くなりました。教一も一九歳で亡くなり、姉二人はそれぞれ嫁いでいたのでわたしが家を継ぐことになりました。夫正久は上荻野かみおぎの（現、厚木市上荻野）の出身で、子どもは二人、長男と長女です。今は長男夫婦と暮らしています。

一九二六（大正一五）年
一月一八日
愛甲郡荻野村生まれ
厚木市下荻野在住

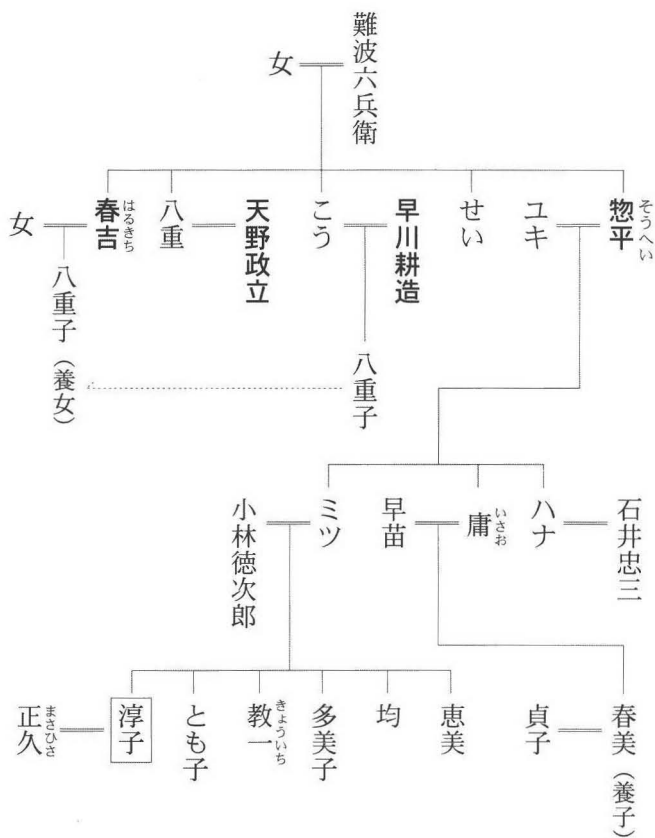


難波惣平

（一八四七—一九〇四）

愛甲郡下荻野村生まれ。地元民権運動の中心で活躍。一八八〇（明治一三）年国会開設請願運動で郡総代。八二年民権結社相愛社の幹事。同年七月自由党入党。翌年、民権家たちの学習会講学会の創立や愛甲郡自由党の結党にもかかわった。県会議員、愛甲郡郡会議長なども歴任。俳号永甫。墓所は厚木市下古沢本照寺。

難波家 系図



(せい・こう・八重は生年不詳のため順番は仮定)

惣平おじいさんのこと

惣平は下荻野村（現、厚木市下荻野）で農業と醬油屋をしていた難波六兵衛の長男で弘化四（一八四七）年生まれだそうです。妹が三人いましてね、せい、こ、う、八重です。次男春吉が生まれたのは元治元（一八六四）年です。

春吉のことは今でもときどき話題になりますが、惣平のことは立派な人であったという以外、具体的な話は聞くことができませんでした。ただ惣平は政治家とみなさんには言われていますが「学者肌の人だったんだよ」ということは聞いています。神奈川県会議員を務め、明治三七（一九〇四）年七月一八日に亡くなっています。数えの五八歳でした。俳句が好きで永甫えふと号したようです。

惣平の妻ユキは及川（現、厚木市及川）の土屋家からきた人ですが、惣平が立派すぎて、あまりユキのことは聞いたことがないです。外には出ないでお変人といわれるくらい家が好きな人だったようですね。ユキはほんとうに普通の人だったんだって。永甫の句にこんなのがあります。

捨てられぬ世や思われて夏やせる

留守守る妻子の秋や思わるる

（雑誌『進歩』二、四号）

亡くなった兄教一がね、わたしの小学生の頃かな「俺たちは難波惣平の孫だと

難波せい

（生没年不詳）

難波惣平の妹。『自由新聞』

一八八四（明治一七）年五月一日号に故田母野秀頭の埋葬費として一〇銭の義捐金を送った記事がある。難波家・自由民権関係文書にも鈴木舎定遺族恵与金として一〇銭を寄付した記録がある。

早川こう

（生没年不詳）

難波惣平の妹で早川耕造の妻。八重と同じ愛甲婦女協会の中心人物。難波せいとともに『自由新聞』に故田母野秀頭の埋葬費として早川耕造の妻難波こうの名前で二〇銭の義捐金を送ったとの記事がある。田母野秀頭は、福島自由党の指導者。

いうことを忘れんじゃあないよ」とよく言いましたね。今は懐かしく心に沁みる言葉として思い出しています。誇りかどうか、どういう人か知らないけど、偉い人だったのかなと子ども心に覚えています。

惣平の妹八重は天野政立と、こうは早川耕造といっしょになりました。民権家同士の結びつきがあり、夫たちを支えてきたんでしょうかね。母のおばにあたる人たちです。特に早川家とは付き合いが深かったのか、兄の均は耕造の弟、三郎の口利きで中国へ行っただけです。兵隊としてではなく戦争のあと、治安のために。均は三郎と結構お付き合いしていたようです。

母ミツのいと

母は明治三九年に愛甲郡立女子実業補習学校（現、県立厚木東高等学校）に入學し、第一回卒業生の一人になりました。卒業生名簿に難波ミツの名前が載っています。

母がいつしよになった父徳次郎は、同じ村の人で次男坊でした。父の兄は小林^{のぼる}升といつて荻野村の村長をずっとやっていた人です。当時は長男が家を継ぎ墓を守るのが当たり前でした。次男、三男などは養子縁組をするということがよくあつたんですね。次男の父にも平塚のほうの大きな家から養子のよい話があつた

天野八重

（生年不詳—一八九三）

愛甲郡下荻野村生まれ。難波惣平の妹で、天野政立の妻。

一八八四（明治一七）年四月頃創立された地元の民権学習結社愛甲婦女協会の中心人物グループの一人。『難波家・自由民権関係文書』に「愛甲婦女協会創立主意書・愛甲婦女協会申合規則」が残されている。

墓所は藤沢市片瀬の龍口寺。

母ミツ



小林 升

六一頁参照

そうですが「俺は何にもいらぬ」と荻野村新宿に分家したそうです。現在は厚木市下荻野一三四二番地と地名変更されました。

父は小学校の教員でね、荻野分校へ長く勤めていました。自分の住所を学校の住所一四七五番地なんて書いて平気でした。暢気な時代だったんですね。

ミツは近所の人たちにすぐ慕われていてね、「子どもがひきつけを起こしちゃったよう」と聞けばとんで行ったり、夫婦喧嘩をしている家から「おミツさん」って呼ばれておさめに行ったり。亡くなったのは五一歳なんです。しつかりしていて、近所の人には頼りにされていたようです。

惣平の長男、庸おじさんはしょっちゅう家に来られて泊まっていたね。橋本に住んでいましたから津久井へ行くときはこの新宿の家から通っていました。おじさんは家を留守にすることが多く、父が難波家に住んで財産を守っていたようです。暮になると年貢も来るし、昔の先生だから固かったんでしよう、だから任していたんでしようね。

春吉大おじのこと

はるきち

惣平の弟春吉は大阪事件後、大矢正夫、佐伯十三郎じゅうざさちろうといっしょに朝鮮に渡ったって聞いています。いとこの政子（惣平長女ハナの娘）から、春吉が立派な髭

大阪事件

一八八五（明治一八）年、自由党左派が企てた朝鮮改革運動。計画は事前に発覚。大阪で裁判が行われたので、こう呼ばれている。愛甲郡自由党員も資金カンパなど協力。天野政立、山川市郎、大矢正夫、難波春吉、黒田黙耳、佐伯十三郎、山本与七、霜島幸次郎などがかわり逮捕される。

難波春吉

（一八六四—一九三〇）

愛甲郡下荻野村生まれ。難波惣平の弟。一八八五（明治一八）年大阪事件に連座。九四年渡韓。翌年起きた関犯事件にかかわる。一九三〇（昭和五年）、朝鮮で病没。遺言で盟友大矢正夫と同じ中荻野戒善寺に眠る。

をはやしていられたことや朝鮮からのおみやげにきれいな団扇をもらったことなど聞いたことがあります。庸夫婦も、春吉を頼って朝鮮に行ったことがあるんです。それだけ盛んにやってきましたから。何しろ庸の奥さんの早苗さんを女中がわりに使っちゃって、「どうしてどうして大変な人ですよ」とよく聞かされてましたね。

春吉の奥さんから早苗さんが聞いた話ですが、朝鮮にね、日本に従わない人があつたようでね、お妃が住んでいる屋敷へ春吉と何人かが乗り込んだらしいの。そこにはお妃と同じ服装をした人が七人いたそうでね、同じ背格好だったんですって。春吉が何人で行ったか判らないけど、みんながそのなかの一人を守るようにしていたんだって。それで「誰がお妃か分かったんだ」って言ってました。怖かったでしょうねえ。早苗さんから聞いてわたしびっくりしちゃって身震いしました。春吉はわたしの大おじでしょう、嫌でしたそんなことをして。あとで聞いたところによるとこれは閔妃事件^{みんぴ}というんだそうですね。

春吉は朝鮮で中氣（脳卒中）っていうのが、出ちゃってね、昭和五年に亡くなっています。かぞえて六七歳でした。それで生前に「自由民権の同志大矢正夫といっしょの墓に埋めてくれ」って言い残したそうです。山ひとつ戒善寺にあげて、永代供養をお願いしていかれたんだそうですよ。

春吉の奥さんは器量よしで、戦後わたしは一度逢ったことがあるんです。その

大矢正夫

八一頁参照

佐伯十三郎

（一八五五～一八九五）

近江国掛川藩生まれ。高座郡羽鳥村耕余塾で学び、一八八一（明治一四）年、山中学校教師になる。翌年、自由党へ入党。八五年大阪事件に関わる。九四年大矢、難波とともに渡韓し翌年没す。四一歳。墓所、中荻野戒善寺。

閔妃事件

一八九五（明治二八）年一〇

月八日、朝鮮国王高宗の妃、閔妃を駐韓日本公使三浦梧村の扇動により日本人壮士らが殺害した事件。広島での軍法会議で関係者は何れも無罪か免訴。

ときわたしを見て「あらおミツさんの娘さんかよ」ってほろほろ泣かれました。あとで早苗さんに話したら「芝居が上手だからね、アハハハ。おばさんは一筋縄じゃあいきやしないよ」って。春吉には子供がなかったたので、姉こうが結婚した民権家の早川耕造の娘で姪の八重子を養女にもらったわけ。だけど八重子は早く亡くなって、連れ合いが再婚したんですよ、戦後にね。芸者だった春吉の奥さんが年を取っちゃってその養子が面倒を見きれなくなったからって、こっちへ連れてきたんですが調べてみたら、春吉の奥さんの籍も切れていました。

自由民権の里碑除幕式がご縁で

惣平の長男庸は愛知県から来た早苗さんと結婚したんですよ。夫婦には子どもが無くてね。春美さんが三歳のときに下荻野^{まきの}柞割（現、厚木市下荻野）から養子に来て難波家を継いでいます。春美さんの妻、貞子さんは生まれは伊勢原です。

二〇〇四年一〇月三十一日、戒善寺の自由民権の里碑除幕式にご招待いただいてありがたく思っていました、その日はほかに用があったので欠席してしまいました。感謝のつもりで、大畑哲先生にわたしも手紙を出したんです。先生もびっくりしたって手紙をくれました。「難波惣平の孫だというのを聞いて驚いた、まだお孫さんが生きていられるんですか」って。五〇数年前の夏の暑い日、麦刈り

自由民権の里碑

厚木市中荻野戒善寺において、二〇〇四年一〇月三十一日に民権の里碑除幕式が行われた。民権家子孫、戒善寺檀家、関係者の参加があった。碑の脇には副碑があり「当時、神奈川県政治の中心は愛甲郡にあり、愛甲郡政治の中心は荻野村であった」。(明治三二年、戒善寺における天野政立演説より)と記されている。



を手伝ってくださった大畑先生のお若いときの姿を思い出します。

このたび大畑先生はじめお骨折りくださったみなさまのお陰で、わたしの祖先の偉大さが蘇り、顔も知らなかった祖父の姿まで頭に浮かべることができました。ありがとうございます。

聞き取り

二〇〇五年九月一四日

余 話

大畑先生から「難波惣平さんの直系のお孫さん、小林淳子さんからしつかりした文字の手紙をもらいました。このかたのお話を聞いてみたら」と紹介され、二〇〇五年九月、荻野新宿のお宅をたずねました。葉鶏頭の真つ赤に燃えるようなお庭が迎えてくれましたけど、ご本人は病院から退院したばかりのときでした。末っ子のわたしは何も知らなくてと謙虚におっしゃいましたが、これだけは伺えました。

淳子さんの母ミツさんは、淳子さんのお話にあるように明治三九年愛甲郡立女子実業補習学校（現、厚木東高等学校）の第一期卒業生です。

愛甲婦女協会の中心人物として活躍した大おばたちのお話は小学校六年でおかあさんと死別した淳子さんからは伺うことはできませんでした。兄教一さんからの言葉が心に沁みていると話されました。惣平さんの妻ユキさんの名前は、本照寺にお墓参りして古い沢山の墓石と難波春美さんが建立された立派な先祖供養の碑、横長な墓碑銘により確かめました。

〈資料〉「難波家・自由民権関係文書」より書簡二通

天野政立より天野八重宛

「大阪府堀川監獄在監人書信紙」

大矢正夫より天野八重宛

「大阪府堀川監獄在監人書信紙」

明治二十年七月十三日

本月六日附之書狀披見いたし都て了承誠ニ叶ざりき好都合之事と存し則ち依頼すべき件左ニ

一 木綿竪縞タンゼン忝枚 一 木綿藍竪縞タンゼン忝枚 一 木綿茶ニ崩シ綿入忝枚 一 拾藍茶筋綿入忝枚 一 拾茶萬筋羽織忝枚 一 拾茶横縦縞羽織忝枚 一 拾藍横竪縞胴着忝枚 一 ネルシヤツ忝枚 一 拾ハンケチ忝枚 一 ネル腰巻忝枚 一 烟草入烟管付忝ツ 一 羽織紐 貳掛 合拾貳点

右依頼全く不用ニ属し取下ケ願済ニ付請取として此状持参当監獄へ御出頭有之度且ツ別段あかじみたる物にて無之ニ付係に申述置候又星御両君へよろしく御鳳声可被下候也

神奈川県相模国愛甲郡中荻野村

第百三拾貳番地士族

天野政立

大阪府東区小浜巷丁目十八番地

藤井伸三方止宿

天野八重殿

明治二十年七月十二日

拜啓江山過々ノ道ヲ御来坂最ト芳シキ慰問ヲ蒙ムリ忝ナク次ニ小生無事慎テ在監候へハ御休神是祈ル陳者小生在世ノ日ヨリ種々御配慮ヲ累ハシタル妻子ノ身上ハ昨今如何相成居ルヤ森家ヨリモ実家ヨリモ更ニ音信ナケレハ知ルニ由ナク尤モ小生今日ノ身ニ在レハ敢テ之ヲ多クノ必要ナキガ如クナレトモ聊カ他ニ慮ル所モ有之候へ者左ニ要件ヲ挙ケ御伺ヒ申候

一 荻野ト栗原トノ関係ハ今日ニ至リ或ハ紛議ヲ醸ス方ノ事ナキヤ否ヤ

一 昨年森菊ハ恙ナク分身シタルヤ生児ノ男女如何母子共ニ壯康ナリヤ否ヤ

一 小生ガ遺族ハ一同甚太郎殿ニ養ハレ居ルヤ右ハ御手数數ヲ煩ハシ恐縮ナカラ委細御回答願上候先ハ要点ノミ頓首

神奈川県相模国

高座郡栗原村

八十一番地平民

在監人 大矢正夫 拜

北浜一丁目十八番地

藤井伸三方

天野八重殿

寛子^{ひろこ}もわたしも民権家が祖先

おおや
大矢 裕子^{ひろこ}

しゅうとめ寛子^{ひろこ}の父大矢正夫は、明治の自由民権運動の盛んなとき、板垣退助やのちに群馬県知事になった町田の石阪昌孝との交流もあったそうです。この荻野（現、厚木市中荻野）が、民権運動に燃えていた頃でした。寛子おかあさんの母親きくの兄、森甚太郎とともにその中心的存在だったと聞いています。

正夫のお墓は戒善寺（厚木市中荻野）にあります。民権家のお墓は何基かありますが、うちのお墓の右隣には難波春吉、その左隣には佐伯十三郎と続いてあります。生前「仲間といっしょに居たい」と言われ三人並んで建てられたそうです。春吉は本照寺（厚木市古沢）が菩提寺なんですけどね。その後十三郎のお墓は、お寺の都合で少し移動しています。

一九二六（大正一五）年
七月一日
中郡高部屋村上粕屋生まれ
厚木市中荻野在住

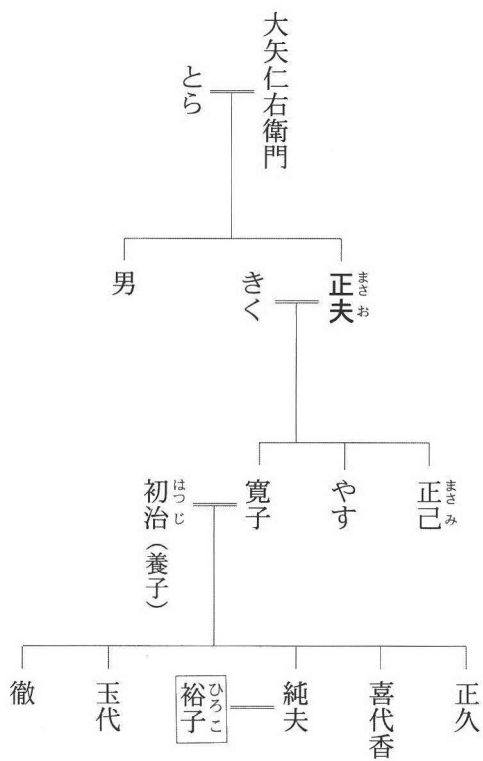
大矢正夫

（一八六三—一九二八）

高座郡栗原村生まれ。一八八一（明治一四）年、山中学校の教員に赴任、民権運動に加わる。森甚太郎の妹きくと結婚。八四年神田静修館で北村門太郎（透谷）と出会う。翌年大阪事件に連座。九四年渡韓。九六年帰国。その後、実業界へ転身。『大矢正夫自伝』を残す。墓所は中荻野戒善寺。



大矢家 系図



御題「あけぼの」に入選

新はりの畑起こさむとひと夜ねし小舎にさしくるあけぼのの色

難波春吉

七六頁参照

佐伯十三郎

七七頁参照

これがわたしのしゅうとめ、寛子おかあさんが昭和二三年、宮中の御題「あけぼの」に入選した短歌です。戦後第一回の「歌会始め」は、初めて民間からの募集だったそうです。寛子おかあさんが女性で入選したということで、全国から多くの短冊が送られ、それにこの短歌を書き、送り返すという大変な思いをされたそうです。戦後、時代が大きく変わって大反響だったんですね。小さいときから百人一首が大好きで、文字にとっても興味を持たれたかたでしたから。

戦時中は、荻野の国防婦人会会長などもやり、戦争にかかわる短歌もありましたね。

吾子の検査甲種合格と聞きし時我の心のその寂しさ

(長男の兵役・昭和一三年)

満支視察を命ぜられたる喜びに雨を冒して夫の出でたつ

(夫満州視察・昭和一五年)

「あけぼの」に入選したあとも

「戦いの余波永し」として



『相模人国記』より

荻野神社歌碑の前の寛子

東大の戦没学生の手記を読み流るる涙とどめかねつも

(昭和二五年)

と戦争に翻弄された当時の気持ちを、そのまま詠んでいられます。

次の短歌は戦後、父正夫の活動と北村透谷との友情などを知ってから寛子おかあさんが詠まれたものです。

若き日の亡父

父は国事に君は文学にと別れしが交わりは透谷の死まで続きぬ

(昭和二六年)

亡父のことにこだわる手紙書き続け鶉鳥の声に心ほぐるる

(昭和二六年)

埋もれ居し獄中の詩も幾星霜経りて世に出づと父の霊に告ぐ

(昭和二六年)

昭和四一年、歌集『あけぼの』を発行されました。昭和四年に新聞に投稿したのが始まりで、その後「ひこばえ」「相模野」に、昭和九年に「アララギ」に入会されたと聞いています。そのなかから選んだ短歌を集め、一冊にまとめたのが歌集『あけぼの』です。

北村透谷

(一八六八—一八九四)

小田原生まれ。詩人で評論家。自由民権運動の最高指導者石阪昌孝の知遇を得て、その娘石阪美那子と結婚。大矢正夫とは、民権運動で知り合い、親友となる。透谷は文学の道に進み、日本の近代文学の成立に大きな役割を果たす。自宅で自殺。

寛子のおいたち

寛子おかあさんは、自由民権運動に活躍した大矢正夫の次女ですが、生まれたところは同じく民権家だった南多摩郡野津田村（現、町田市野津田）の石阪昌孝の家でした。兄妹とは一〇歳くらい離れていたで、母子の生活が長かったようです。

父の正夫は高座郡座間村生まれで長男でしたが、弟に農家を継がせ、独学で勉強し山中藩の藩校だった山中学校の先生となり、荻野に移り住むようになったと聞いております。そのとき村長なども勤めた愛甲郡荻野村（現、厚木市中荻野）の森甚太郎と知り合ったのだそうです。正義感が強かったのでしょうか、民権運動も盛んだったこともあって、世の中を変えようというわけですね。

土地も広かったし、わたしの主人は子どもの頃のこの家をよく覚えているそうです。家の近くに清水があつて、その水を利用して水車を廻し、蚕の繭から糸を取る機械を動かしている女の人たちの姿を見ていたようです。

明治一五年九月、正夫は甚太郎の妹きくと結婚しました。正夫の留守中きくは、子どもたちと兄甚太郎のところで世話になっていたそうです。きくはまた、実家の近くで一時期駄菓子屋をしていたとも聞きました。そのせいか寛子おかあさんは、甘いものがとても好きでした。

石阪昌孝

（一八四一—一九〇七）

武蔵国野津田村生まれ。多摩地域を代表する民権家。石阪美那子の父であり、第一回議会の代議士となる。一八九二（明治二五）年二月、職の無い大矢正夫を石阪と村野常右衛門が野津田の凌霜館へ世話をする。この秋正夫は妻子とともに、石阪家へ寄寓。

森甚太郎

（一八五四—一九一六）

愛甲郡中荻野村生まれ。一八七九（明治一二）年、山中学校の学務委員、村会議員、助役、村長も四期歴任。民権運動の学習グループ講学会に参加。俳句も嗜む。辞世の句は「月も花もみな火宅なりさようなら」。墓所は中荻野成善寺。

寛子おかあさんは、荻野小学校（現、厚木市立荻野小学校）へ通われました。

頭がよくお姉さんが小学校へ行ってしまうとさびしくなり毎日付いていき、とうとう一年早く入学してしまったとのことです。

小学校を卒業した寛子おかあさんは、父親の同志であつた平野友輔ともすけの家に家事見習いに行ったんですね。「この家でよく勤まれば、上の学校へやつてあげる」と父親に言われ、それではというわけで頑張られたそうです。「自分は歌が好きで音楽学校へ行きたかった」、でも「女が歌なんてやつて」と言われて、錦秋実用女学校に行かせてもらい、そのあと続いて神田にあつた共立女子職業学校へも行きました。

寛子おかあさんの兄、正巳まさみは医者になつて呉（現、広島県呉市）の海軍工廠に派遣され、呉市の市長の娘さんと結婚し、そこで外科を開業されました。そのため荻野の家は寛子おかあさんが継ぐことになつたそうです。姉のやすは小学校の先生同士で結婚していられたから。

寛子おかあさんは、大正一五年に中村初治を養子に迎え五人の子どもを育てられました。

平野友輔

（一八五七—一九二八）

藤沢宿坂戸に生まれる。小笠原東陽の耕余塾に学び、東京大学医学部卒業後、八王子に医院を開業。多摩の民権グループに加わり、自由黨員として積極的に行動。石阪、透谷、大矢らと交流する。後に藤沢に戻り、再度開業。この頃、大矢きくと娘寛子は、平野家を訪れていたようだ。

錦秋実用女学校

創立者は秋間為子（一八六一—一九三三）。南多摩郡平山村生まれ。一九〇一（明治三四年）年、東京本郷に錦秋女塾を開塾した。錦秋の命名は石阪昌孝。〇九年には錦秋実用女学校とし、一二年に錦秋高等女学校に発展させた。

しゅうとめとの生活、二〇年

寛子おかあさんは、昭和五六年に八八歳で亡くなりました。わたしが寛子おかあさんの次男の純夫と結婚してこの家にきたのが昭和二六年ですから、三〇年の付き合いです。

若い頃は昼間小鮎小学校へ勤めて、帰ってからは近所のかたに裁縫を教えていられたそうです。

短歌は何首か作り、「アララギ」と「久木」^{ひさぎ}に投稿。そのなかから何首かが本に掲載され、送られて来ました。それがほんとうに楽しみなようでした。

戦時中は村の婦人会会長を勤め、出征兵士を送ったり、留守家族の慰問や、戦地への慰問文や慰問袋を作ったりなどに、朝から夕方まで村内を下駄ばきであるきまわられたそうです。その慰問文のやりとりが縁で、田沼さんという人が復員されてから挨拶に見えたそうです。そのとき、寛子おかあさんが丁寧にご挨拶なさったら「このおかあさんの娘ならきつと立派なかたでしょう」ということで、田沼さんと娘の玉代（わたしの女学校の同級生）さんが結婚するきっかけになったんですって。

その後田沼さん夫婦は、慶応大学の学生食堂を始められ、今では「グリーンハウス」という会社にまでなつて成功されたの。田沼さんが亡くなられたあとは、



聞き取りの頃の裕子

息子さんが社長で玉代さんは相談役です。

寛子おかあさんは真面目で几帳面でした。毎朝掃除は時間通り、箒で玄関周りの庭も掃き、そのあとテレビの前にきちんと座って、連続テレビ小説を八時一五分から見ながら、自分のことをされました。またテレビの出る前はラジオの番組「赤胴鈴之助」を聴かれ、古いラジオの音が途切れたりすると、ポンポン叩いてあきらめずに聴いていました。晩年は足を痛めたり骨折したりで、わたしもよく病院へ付き添いで通いました。歩けなくなつてからはベッドの上で大きな声で童謡や唱歌をよく歌っていました。

初治^{はつじ}おとうさんは近くの中村家の次男です。小学校の教師で三〇代から校長だったそうです。わたしが大矢家に來ましたときは退職されたあとで、荻野農協に勤めていました。そのあと「グリーンハウス」の手伝いで田沼家へ行ったりしていました。日常生活でもとくにお正月の來客のときなど、細かいことを寛子おかあさんよりも采配を振るつていられたのがわたしにはとても意外に思えました。

主人は子どもの頃、寛子おかあさんから石阪とか平野という言葉をよく聞いていたそうです。父正夫が政治活動で飛び歩いているあいだ、生活で苦労もあったのでしょうか、その苦労はむしろ母きくのほうで、寛子おかあさんは、「歌会始め」に入選したことで良い生涯だったろうと主人は言っていました。

父の実家、吉沢家のこと

わたしの父は玉川村小野（厚木市小野）の吉沢家の生まれで瑛次と言います。

父の兄は泰一で、二人とも医者を目指し、同じ小野の民権家三橋甫^{はしめむらお}、村雄親子宅で書生をしながら勉強していたようです。三橋家では、息子の村雄がさきに亡くなり、兄の泰一を養子にされたと聞いています。父は書生時代に、三橋家の娘が東京の学校へ上京する際、小野から伊勢原へ出て馬車で平塚へ、そして東海道線に乗り、寄宿舎まで送って行ったと聞いています。荷物持ちです。小田急線が開通したのはその後、昭和二年になってからですからね。

今から数年前、厚木医師会百年を記念して立派な本ができました。それに厚木医師会初代会長三橋泰一の写真を見ました。わたしの父によく似たかたでした。おじは県会議員をしたこともあり、女子教育の大切さを考えられていたようで、地元の女学校の発展にも力を尽くされたと聞いています。

主人は難波春美（民権家難波惣平の子孫）さんとは、厚木高校の教員同士の間柄で、だんだんお互いに民権関係の話になり先祖との繋がりが分かってきました。

あの明治の頃新しい国造りに燃えていた先祖たちの熱い思いを昭和になって、それも戦争が終わって何十年かたってようやく知るようになったんですね。研究や調査をされたかたがたのお陰ですね。

三橋甫

一四五頁参照

三橋泰一

一四八頁参照

聞き取り

二〇〇六年二月二三日

二月一八日

余 話

裕子さんは、しゅうとめ寛子さんが自由民権家の大矢正夫の娘であることも、裕子さんの父親の先妻が同じく民権家の小野村の医師三橋家からの出であることも、大矢家に嫁いだときは知らなかったそうです。この三橋家には当時民権家が集い、医者卯たちもここに溜まり、ここから伊勢原へ出て上京し通学していたそうです。

戦後、自由民権について調べていたかたたちが寛子さんを訪れ父親、正夫さんのことをいろいろ尋ねたことがきっかけで、寛子さんはご自分の記憶をたどり、小さい頃からの父母兄たちのことを「恥をさらして」とつけ加えながら詳細に書き綴り大畑哲先生に封書で送っています。八頁にも及ぶそのなかには、父正夫の「大阪獄中の作」という漢詩も書かれています。父のことを調べていただくと大畑先生へのお礼も記されています。寛子さんを彷彿とさせる筆跡の書状を読ませていただくことができました。

わたしは山いちょう川市郎のひ孫です

小お野 幸さちこ子

わたしは、横浜市保土ヶ谷で生まれました。一年後、同じ横浜の六浦へ引つ越したんです。母キクは長女洋子を一一か月で亡くしています。その後四女一男をもうけました。わたしはその次女です。

祖母の山しょう川章は、厚木の飯山に住んでいましたが、よく手伝いに来てくれました。わたしの父渡辺忠二ただじが飯山の人だったので遠慮なく話せたのでしうね。

祖母には金沢八景の称名寺へ連れて行ってもらったことがあります。そのとき、夏島を指して「あそこは憲法発布した場所」なんて言っていました。わたしは一〇歳くらいだったので何のことかちんぷんかんぷんで分かりませんでしたけどね。

山川市郎が亡くなったのが憲法発布の翌年でしたので、何か思いがあったんですね。遠い昔の話ですね。

一九三〇（昭和五）年
四月二六日
横浜市保土ヶ谷生まれ
愛川町半原在住

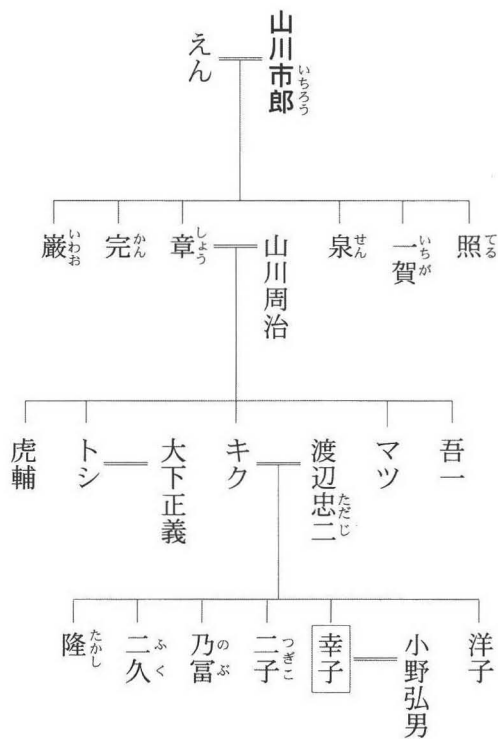
山川市郎

（一八四三—一八九〇）
一八四三（天保一四）年愛甲郡飯山村に生まれる。六七（慶応三）年荻野山中藩焼討ち事件に加担。その後自由民権運動で活躍。八二（明治一五）年自由党へ入党。八五年大阪事件に連座。森甚太郎とは俳句同人で、俳号は白水。『山川市郎追慕集』（森甚太郎編）がある。

山川えん

（一八四八—一八九八）
山川市郎の妻で井上栄太郎の義姉。夫の活動を支える。大阪事件では大矢正夫らに隠れ家を提供。八四（明治一七）年四月頃創立された民権学習結社愛甲婦女協会の中心となった一人と思われる。

山川家系図



祖母、山川章とわたし

祖母は自由民権運動に加わっていた山川市郎の娘（次女）です。いつも口癖のように「見ざる、言わざる、聞かざるで人間は生きていくんだ」と言っていました。

祖母は、昭和二年二月二十九日、八十一歳のとき老衰で亡くなりました。母が祖母を最後に見舞ったとき「わたしが幸子の病気を連れていく」と言ったそうです。この言葉はずっと忘れずにいます。ありがたいと思っていますよ。

生前は、母のお産のときなどよく手伝いに来てくれました。「わたしは、世話になる筈だった息子に死なれ、太下の家に面倒をみてもらっているのだから、早く帰らなければ」と言って、用事が済むとすぐ厚木の太下のお婆の家に帰っていました。母は、「わたしだって娘なんだから、もう少し居てくれてもいいのにな」なんてばやいていましたけど。

この祖母章が少女の頃、父親（山川市郎）がたびたび政治活動に駆り出され、大阪の牢にいれられ、いつ帰れるか分からない日々を送っていました。「一生涯、器用に生きることができなかった父だった」と、母には話したそうですよ。

祖母が一七歳の頃、父市郎は幼い子どもたちを残して病死してしまい、一家は悲惨な状態に転落し、市郎の同志の世話で仙台や東京で別れわかれに住むようになったそうです。

憲法発布と夏島

一八八九（明治二二）年二月一日、大日本帝国憲法が発布された。草案は伊藤博文が中心となり、井上毅、伊藤巳代治、金子堅太郎らの協力を得て夏島で起草した。このため夏島憲法と呼ばれる。

山川市郎の次女 章



祖母は母親えんの実家に養女として引き取られ、苦勞知らずに育ち、山中学校へも行かしてもらったそうです。今でも明治一七年の卒業証書が残っています。章は「せう」とひらがなで書かれているんですよ。

えんは子どもたちの成長した姿も見ず、明治三十一年に亡くなりました。実家は住む人もなく処分されたんです。この近くに住んで墓を守っていれば、兄たちも故郷へ帰って来てさびしくないだろうとの思いが強かったんでしようね。

祖母は近所に住むいとこの山川周治と結ばれたんだそうです。夫の籍にいれるために戸籍謄本をとったら、兄一賀の本籍は択捉島えとろふだったんですって。「政治などに無関心にならなければ、生きていけない」と言いながら、心の隅に若い日の体験が残っていたせいか「話には深みがあったよ」とわたしの母が言っていました。

昭和一八年八月、女学校一年生のときでした。祖母がまたお産の手伝いに来たときのこと、「厚木へ帰る前に一度金沢文庫へ行ってみたい」と言い、曲がった腰を伸ばしコトコト杖の音をさせながらわたしたち孫を連れていきました。ワイワイガヤガヤ騒ぎながらついて行ったことを覚えていますよ。祖母は瀬戸神社で手を合わせ、その前に見える夏島を眺めたかったんでしようかね。ところが戦争中のこと、海岸線にはトタンの塀が張り巡らされ、夏島を見ることはできませんでした。「島を見せないなんて嫌な時代だね、軍が使っているんだろう」と言っ

山中学校

幕末から明治初期にかけて荻野山中藩の藩校として興譲館があった。一八七二（明治五）年学制制定により七七年、山中学校となる。山中学校の教員には、後に自由民権家として活躍した大矢正夫、佐伯十三郎、松井日明、加藤政福らがいた。

瀬戸神社

横浜市金沢区にある神社。近くの狭い水路が平潟湾と繋がっていたことで、この水路に罪穢を流し去る神聖な場所として海神が祀られるようになった。一一八〇年創建。

たのを覚えています。

横須賀の猿島も見せないように囲いが作られ、電車も窓ガラスには白いテープを貼り軍に関係ある場所を通るときは、黒いカーテンが引かれたりしていました。

太平洋戦争始まる

当時、わたしたちは、太平洋戦争のことを大東亜戦争という名で、呼んでいましたね。あれは昭和一六年一二月八日に始まりました。霜がとつても深い朝だったことを覚えていますよ。日本とあの大きな国の米、英と戦争が始まるのかつて。でもわたしたちは呑気でした。五年生くらいだったから、何も分からなかったのかしら。

父は海軍の軍人でした。支那事変（日中戦争）の頃は上海へ行っていましたね。上海の租界ついでというところは優雅な暮らしだったようです。わたしたちが小さい頃は、港から港へ転々としていたと聞きました。

女学校は横須賀の市立高女へ行きました。一年のときは薙刀をやったね。あとはからむし採り、山へ入って。落下傘を作るためにね。勉強らしい勉強はしませんでした。野比の海岸まで行軍したこともありました。なにしろ二年生の二学期からは、学徒動員で行かされましたから。

猿島

横須賀市の沖に浮かぶ小島で東京湾内で唯一の自然島。幕末・明治・昭和と軍事要塞として機能していた。

日中戦争

一九三七（昭和一二）年七月七日の盧溝橋事件に端を発し、四五年まで八年間続いた日本と中国の全面戦争。

芋（からむし）

イラクサ科の多年草。茎は高さ一・五メートル。この茎の皮から繊維を採り布に織る。戦時中、学童が採集することを課せられた。

追浜の航空廠へ

あれから、毎日追浜の軍需工場へ通い、その仕事の手伝いですよ。投下する爆弾の下のを台を作らせられてね。飛行機から弾が滑り落ちるようにと、女子はただ言われるままにやすりで削っていました。なぜか会社の人によく叱られてね、「こんなじゃ日本は勝てないよ」って。空襲が始まるとまず学徒から防空壕へ入りました。楽しみだったのは、お昼のお弁当。工場から支給されるの。その頃としては、いいお弁当でしたよ、麦ご飯だったけど。海が近いせいか魚がよく出たの。野菜は好きだったけど魚は嫌いだった。味噌汁は毎日あったね。ぶっかけご飯にして食べました。

朝八時半から午後四時半頃まで働きましたよ。先生は監督だったね。前が海だったから、「さっちゃん、見てて」と言つて友だちは海岸に下り、ちよつとの間に、あさをたくさん採ってきました。「きつとかあちゃん喜ぶよ」なんて話しながら。

一九年に入ると、たびたび空襲はあったけど、あの辺はひどくありませんでした。敵機が編隊を組んで低空飛行して、偵察にきたときは、「鬼畜」の顔が見えましたよ。でも殺されるなんて思わなかった。死ぬのがあたりまえだと思つていたからかな。

学徒動員

太平洋戦争下における労働力不足を補うため、軍需工場などに学徒（学生・生徒）の勤労働員が強化されていた。一九四四（昭和一九）年五月には県下の工場労働者の約四分の一が、学徒動員であつたといわれている。

追浜の航空廠

一九一六（大正五）年三月、海軍航空隊令が發布され、四月に横須賀海軍航空隊が追浜に置かれた。

鬼畜

戦時中は敵である米国・英国を「鬼畜米英」と言つた。

軍港からは、砲台で撃ち返すことなんかなかったね。たまにボーンと一発くらいやったかな。学徒や挺身隊は、随分遠くからも来てましたね。甲府の方の人もいました。

女も男も戦闘帽をかぶり、髪は三つ編み、国防色の服で下駄ばき、みんな工場から貸与されました。「この戦争は長くは続かないよ、もう少ししたら、学校へもどれるよ」と言った男の人もありました。その人たちのことを共産党だという噂もありました。負けるのも知らずみんないつしうけんめい働きました。月給は、学校の通帳に入れられて、そのなかから月謝として引かれたらしいの。だから手元にはいっさいお金はこなかった。

電灯がついた日から

昭和二〇年八月一五日、その日はちょうど日曜日でした。ガーガー鳴るラジオの周りにみんな集まりましたが、何がなんだか分からなかった。「戦争が負けたりしいよ」ってみんなが言っていた。その晩電灯がパツとついたでしよう、わたし嬉しくってね、それまで灯火管制でしたから覆いを被せて夜は暗くしていたからね。ほんとうに嬉しかった。父は「まだ戦うんだ」と言ってゲートルなんか巻いていました。「こんなときだから学校は辞めさせる」と父が決めてね。「家に

砲台

野戦や海岸要塞での砲戦のため、火砲および関連施設を強固に防護した築造物。

挺身隊

危険な任務を遂行するため身を投げ打つ覚悟で組織された部隊。太平洋戦争下、女子労働員策の一つ。航空機および備品・機械などの分野に、多く配属された。

国民帽（戦闘帽形式）

一九四〇（昭和一五）年に国民服令が公布され、国民服を着て国民帽をかぶることが、定められた。

ゲートル

厚地の木綿・麻・ラシャ・皮製で、すねを包む服装品。外側を紐で編み上げるものと巻きつけるものとある。

はまだ教育する子どもがいるから」と、女学校へ連絡に行つたの。

「敵の軍艦がいつぱい港に来ているから、山へ逃げろ」と言われ、本家のある飯山へ行くことになりました。大船へ出て長後へ、それからバスの通る道を歩いて歩いて尼寺原（現、厚木市緑ヶ丘）を通つて、やっと飯山へたどりついたんですよ。

ここでは自給自足の生活でね、母が弱かつたせいもありいろいろやりました。

父は残務整理があるからつて、横浜へ行きつぱなし。八か月ここ飯山で暮らしました。そのうち、軍の官舎が空いているからつて世話をしてくれる人がいましたね、大和（現、大和市）の空き家へ泥棒みたいに入りました。ガタガタだったけど暫くは、ここで暮らすことになったんです。遊んでいちゃあしうがないから、家の近くに家内工業で帽子を作っている店があつたので、手伝わせてもらうことにしました。どんどん売れるのでミシンをいっしょうけんめい踏んで働いたんですけど、あまりにも賃金が安いので辞めちゃいました。

友だちに勧められて、職業安定所へ行きました。ちょうど藤沢の郵便局で電話の交換手を募集しているというので、そこへ面接に行つたんですよ。きたない字の履歴書を見ながら、「まだ若いんだから働いたほうがいいよ」つて採用してくれました。三か月の研修期間がありましたけど。

リヤカーで病院へ

二年ほど交換手として働きました。ある日曜日突然病名の分からない病気になるってしまったんです。近くの医者からは見放されてね、「高座渋谷の病院で診てもらえ」と帰されちゃったの。ちょうど、父も母も家にいたので大和からその病院までリヤカーに乗せていつてもらいましたが、医者はみんな留守でね、とりあえず入院しました。夜帰ってきた医者から「この状態では危ない、すぐ手術をしないと手遅れになる」と言われすぐ手術をしました。盲腸炎から腹膜炎を起していたらしいんです。

当時ペニシリンが一本千円でね。父は大勢の人に頭を下げて金策をしてくれましたが、いい返事はなく、両親はいつもわたしのことで口争いをしていました。わたしは申し訳ないと思うだけで、どうすることもできずつらい日々を過ごしていました。

昔、先祖の山川市郎に世話になったという人が、我が家のことを知り、「返すのはいつでもいいよ」といつてお金を貸してくれたんです。すぐにペニシリンを一万円ほど買って使ったら、からだの調子がどんどんよくなってきてね。ただ、父は「もう借金だけはごめんだ」と母に愚痴をこぼしていましたね。

局で一泊の旅行があるというので、わたしも人並みのおしゃれをしたいと思います

誕生祝い「天使の手」にて。
幸子七〇才の頃



い、生地を買ってきて自分でミシンを踏んでいました。そのとき、急に左の手先から激しい痛みがからだ中にはしり、わたし気を失っちゃったんです。病院では原因が分らず検査、検査の連続でした。脳腫瘍の疑いがあるということで、東京の病院に行きました。「あなたの場合は、少し脳に縮みがあるが、死ぬようなことはない」と言われ、ホッとして家に帰り、その後は静養していました。

局からは母が呼び出されて「退職願を出すように」と言われ、すぐ郵送したら、「廃疾者年金制度があるから申請してください」との連絡がきたんです。わたしは廃疾者ではない、いつか元気になるからと返事を出しました。その頃は、毎日死ぬことばかり考えていましたね。

愛も恋もない結婚

わたしの結婚なんて人様には語れません。大波小波のさびしい結婚ですよ。わけの分からない病気で家にいたとき、新興宗教にすがったんです。たまたま息子のことで相談に来た人がいて「渡辺さん、あんたいっしょうけんめいやる人だし、どうかね、うちの息子はレッドパージで東京でひとり暮らしをしているけど、助けてもらえないかね」と言われたんです。愛も恋もない、好きでもないけど、わたしも半分手はきかないんだからと思つてね、半泣きで結婚しました。

廃疾者年金制度
老齢・障害・母子・遺児など
の年金制度の総称だった。

そのとき、わたしは二九歳でした。その人は国鉄に勤めていましたが、生活費として義母が月に二万円送ってくれました。生活がきびしいこと分かっていました。でしょうかね。

子どもはつくらないと約束していたのに、妊娠してしまいました。医者に相談したら、「あなたのからだでは母子ともに危険だから産んではだめ」と言われたんです。夫に話すと「親に相談してくる」と言つてすぐ大和に行きました。わたしも里の母にウナ電を打ちました。母はすぐ夫の実家に駆けつけたそうです。夫の親たちは、まだ知っているのかいないのか酒を酌み交わしていたんです。

「娘がこんなに苦しんでいるのに、酒なんか飲んで」と母は腹を立て「娘は家に引き取ります」と言ったら、夫の母はすぐ三千円だして「これで墮ろして」と口争いになったんだそうです。

もつとわたしに知識があつたら避妊もしたんでしょうが、「かあちゃん、墮ろさなきゃだめか」と聞いたら「お金をもらつちやつたからね」と母に言われ、結局離婚しちゃったんです。すぐさま少しばかりの荷物といっしょに実家へ帰りました。今になると、あの子は産んだほうがよかったのかな、いくつになつたかなと思つたり、障害児を持つて大変な親たちを見ると、これでよかったのかなと思つてみたり考えるときがありますね。

実家では家族はみなよくしてくれましたが、妹乃富のぶの結婚や、弟隆たかしのことなど

あり、いつまでも出もどりであるのがつらくてね。

命がある限り生きている以上、働かなくちゃと思い、ある晩家族に無断で妹、二子つごのいる長野県諏訪へ行ったんです。

その近くの蕎麦屋さんで働かせてもらえることになりました。ご主人がいい人でね、食事も寝泊りもさせてくれました。毎日、上諏訪の駅前の店まで出前みたいに肩にのせて運ぶ仕事なんです。三年くらい働いたときでしたね、店のご主人が、実家の父親に「娘さんはよくやって来てますが、可哀想だから迎えに来てやってくださいませんか」って手紙を出してくれました。一徹な父が夢中になつて迎えに来て、涙をポロポロ流した姿を今でも思い出します。父といつしよにとぼとぼ大和へ帰りました。

その年のお彼岸に父は、飯山の飯盛山にある山川家と渡辺家の墓の草むしりをしていた倒れました。脳血栓でね、二年後に亡くなりました。六五歳のときです。

こんどは辛抱するからね

妹は結婚し、弟も働けるようになり、母とわたしは、内職をしながら五、六年いっしょに暮らしました。親戚の者から「弟が結婚できないのはお前のせいだ」と言われたりしてね。「ねえちゃん、世間の目を気にするんじゃないよ、僕が

しつかり働いてねえちゃん一人ぐらい見てやるから」と弟は言ってくれましたけど、わたしはわたしで、弟の世話になっちゃ悪いと思い、また家を出たの。海老名にいますおじの世話で、新宿（厚木市下荻野）へ行きました。法界寺のそばのアパートに住んでいた小野弘男という人を紹介してくれました。二回ほど話をしただけで結婚することにしたんです。わたしが四三歳、相手は五〇歳でした。妹たちは「ねえちゃんまた苦労するよ、泣くようだよ」と言っただけど「今度は辛抱するから」と言っけいしよになることにしたんですよ。

夫弘男は九州の人間でね、「子どもはみんな独立しているから、俺のところへくれば幸せになるよ」と言ったのでその言葉を信じました。母は小さく祝い金と書いた袋をくれました。父の死後恩給から少しづつ貯めたお金だったんでしよう。

結婚当初、「これで給料まで賄ってくれ」と一万円を渡されたのは、給料日の

一〇日前のことでした。近所のお店に行つて肉の細切れ三〇〇グラム一八〇円、

ねぎ三本三〇円、豆腐など合わせて二五〇円ほど買ったこと今でも覚えています。いっしょになつてから一か月たった頃、「俺の本家に便りを出してくれ、妹の住所を聞くように」というのです。すぐに返事がきて妹さんの住所と近況が書かれていました。妹さんたちもラジオの尋ね人で捜すつもりでいたと書かれてありました。それからやつと五年後、夫のふるさと宮崎県高千穂へ第一回の旅行が果せました。わたしは飛行機は大の苦手で新幹線で行きました。おみやげは厚木

の菊屋の鮎せんべいでね、夫は一五個を買い自分の鞆にいれて、これは誰と誰に渡すんだと喜んでいましたね。それでも二〇年の間に三度九州をたずねることができたんです。

荻野新宿には七年間住んでいましたが、そのあとはある人の世話で半原で売り出していた建売住宅を買いました。当時は、あまり建物もなく九州の田舎に似ていると、夫は喜んでいました。

自由民権のことが知りたくて

半原に移って二年後の昭和五七年三月、「荻野愛甲自由党と大阪事件を歩く会」があり、足腰が弱くなった厚木の太下のおばに代わって参加したんです。

夫が夜勤だったこともあり、昼間は時間があつたので、し尿の集金の仕事をして生活の足しにしました。集金先はおもに荻野と棚沢でした。山川市郎の子孫ということはいつさい名乗らずに、民権家の子孫のお宅に伺った折は、それとなく話を聞きましたね。

中荻野の戒善寺にも足を運びました。あそこには大阪事件にかかわった大矢正夫、難波春吉、佐伯十三郎さんたちのお墓がありますね。佐伯さんは大阪事件で市郎の罪をかぶり「市郎は無罪にしてもらったんだよ」とおばから聞いた覚えが

戒善寺

厚木市中荻野本郷にある日蓮宗の寺院。

民権家森甚太郎、大矢正夫、佐伯十三郎、難波春吉などの墓がある。二〇〇四（平成一六）年一〇月、本堂脇に自由民権の里碑が建立された。

あります。

下荻野の法界寺へ行つた折、山川えんの実家のお墓が荒れたままになっていたので母に話しましたらね、「お前さん、それが気になるなら、そおつと気の済むまでしておやり」という返事が返ってきました。山川市郎が民権運動のために家を留守にしたときや、お金に困つたときなど、おえんさんの実家とはいえ、援助してくれた恩のある人の墓ですからね。

山中藩焼き討ちのことも調べたことがあるんです。石井道三は船に乗つて厚木のほうへ逃げたそうですが、山川一族は、半原に来て、座利山荘の横、その脇を通つて津久井の「久保田」という、酒屋さんでよくしてもらつて、甲州へ行つたらしいですね。

そんなふうに移住してきましたが、夫も平成一五年に八〇歳で亡くなりました。医学の進歩のお陰ですね、つっぱつていたわたしの左手も少しずつよくなってきました。今は家で転んでしまい、荻野の妹のところまで世話になっています。千頭せんずにある米沢病院のデイサービスと伊勢原の小稲葉にある「天使の手」に週一度通っています。「天使の手」は、いとこの麻生美智子が施設長で頑張っているのですね、利用するのも協力のひとつでしょ。いとこも助け合つて生きています。貧しいことに耐え続けてきたことが、今の自分の源になっていると思つています。でも、世の中にはもっともつと苦しんでいる人がたくさんいることも知りましたよ。

荻野山中藩陣屋焼討事件

四二頁参照

天使の手

伊勢原市小稲葉にあるデイサービス・ホームヘルプサービスを行う施設。代表の麻生美智子は、山川市郎の孫、太下トシの三女。

聞き取り

二〇〇五年一月一日

二〇〇六年六月一日、九日

余 話

小さい頃からからだの弱かった幸子さんは、祖母が亡くなるとき「幸子の病気はわたしが連れていく」と母親に言われたとか。大変だったんだなと心を痛めました。

すばらしい記憶力で戦時中のことや、終戦後の家族のことなど手に取るように話されたので、当時の暮らし振りがよく分かりました。

幸子さんは聞き手と同じ世代なのに人生いろいろ、女もいろいろとはよく言ったものです。からだが不自由でいらしたゆえにご苦労が多かったのだとも思います。おたずねした当時は、半原でひとり暮らしでした。書くことが好きなようで、「文芸あつぎ」に何回かにわたり「わたしの足跡」と題してこれまで歩んでこられた証が載っています。自由民権家の血筋とあって、その関係のかたがたを深く追求されて話にも味わい深いものがありました。長生きされて曾祖父山川市郎や民権運動のこと、後世に伝えてほしいです。

幸子さんのおば、大下トシさんは『あつぎの女性20人』に語り手として登場しておられます。

山口深雪^{みゆき}の生涯

— 孫嫁^{さしちろう}から見た山口左七郎の嫁 —

山口^{やまぐち}
智子^{ともこ}

夫の祖母の深雪は、わたしの実家の祖母と一つ違いの妹で、明治一〇年に足柄上郡中井村鴨沢（現、足柄上郡中井町鴨沢）で生まれ、年子だったため子育てに大変とのことで、山向^{やまむかひ}この曾我別所（現、小田原市別所）に里子に出され、地元の千代^{ちよ}小学校に入学しました。明治の時代には小学校高学年では、英語を教えていてブックスリーまで習ったそうです。一八歳のとき、山口左七郎の長男で同志社大学を卒業した左一と結婚しました。朝三時起きて下大槻（現、秦野市下大槻）の知り合いの家を中宿^{なかつゆど}にして、駕籠にゆられて嫁入りました。結婚して二男六女に恵まれました。しゅうとの左七郎は養子だったので屋根裏部屋に暮らし、新婚時代の左一夫婦を二階の一番よい部屋に住ませたそうです。

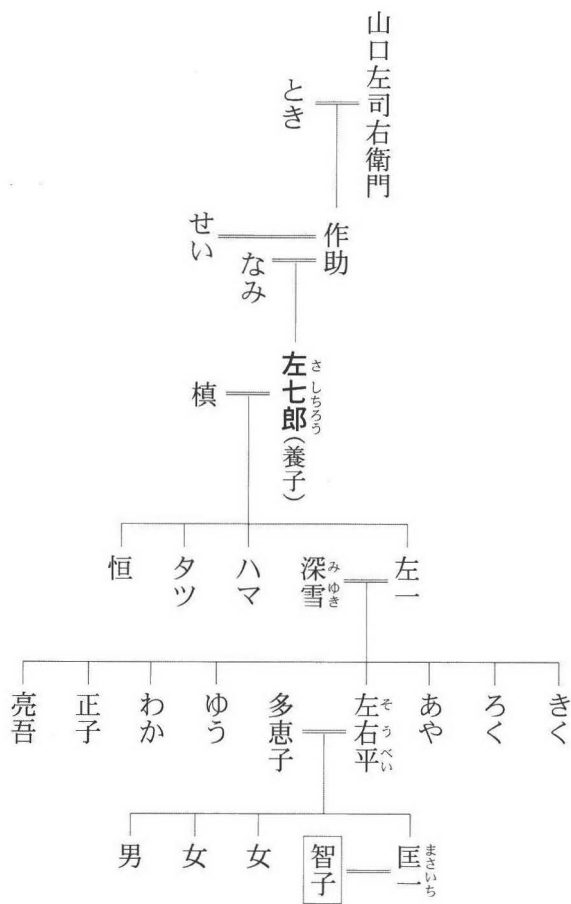
一九三三（昭和八）年
一月一九日
横浜市保土ヶ谷生まれ
伊勢原市上粕屋在住

山口左七郎

（一八四九—一九二二）
足柄上郡金子村に生まれる。
一八七一（明治一四）年、二一歳で山口家の養子に迎えられる。自由民権家として活躍。大住・淘綾両郡長、「湘南社」の社長を務める。話者の夫匡一の曾祖父。

千代小学校
一八七三年創立の小田原で最も古い学校。

山口家系図



家風は地味で勤儉儉約

しゅうと左七郎は、とてもまじめな人で、眠くなると手拭いを巻いた^{きり}膝で膝を突き眠気を覚ましながら夜遅くまで勉強にはげんだそうです。また、非常に質素儉約で、しかも他人には思いやりがあり、祖母はそのようなしゅうとをととても尊敬し頼りにしていました。左七郎に関するものは左七郎の死後もいつさい手をつけず、農政資料を農林省に売ったときもその一部を残して、自分の分身のように大切に保存し自分が死ぬまで持ちこたえました。そのため、自由民権資料のほとんどは家に残っていました。

深雪は尊敬する左七郎の気風を見習い、わたしが嫁いだときも、家風は地味で勤儉儉約、しかもどの人とも平らに付き合うという雰囲気でした。

祖母の結婚生活は発展と没落の歴史でした。明治維新の激動期が過ぎ、当家は地域発展のために、電気会社、電話会社（これは郵便局が引き受けることになりました）、バス会社、伊勢原銀行などを設立しました。バス会社のときは、人力車夫の人びとに殴りこまれたそうです。

夫左一は、大正三年に帝国農会評議員、大正一三年には衆議院議員になりました。しかし、昭和七年頃銀行で、ある幹部職員の債権の不正処理があり、廃行することとなりました。預金者の誰にも損害を与えないように、他の理事にはいつ



左七郎と妻楨

帝国農会

明治期に農事改良と農業技術指導を目的としてできた農業団体。農会組織は官僚と地主層の結合の拠点になる。

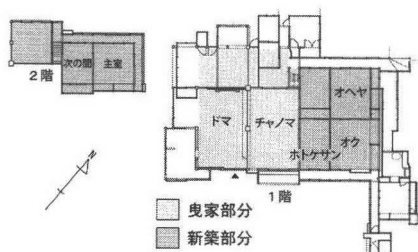
さい金を使わず、山林の大部分とかなりの田畑を売って損害を一人でまかない、七割近くの資産を失いました。我が家にとっては重大な事件でした。

わたしが嫁いだ当時も伊勢原大神宮の前の銀行の跡に横浜銀行がありました。が、やがて銀行は駅前に移り、今は建物はありません。昔の名残りといえば、わが家の天井裏や床下に碍子がいしの上に載っている電気配線が残っていたり、扇風機のコンセントがあつたりで、明治時代の工事がそのまま残っています。また電話番号も伊勢原の一番は郵便局にし、二番は当家でとつたのだそうで、今もそのようになっています。

話は前にもありますが、当家では福祉にも力をいれました。昔は健康保険などもなく、貧富の差の激しい時代で、衛生状態の悪い人たちも多く、そのような人たちのなかにはトラホームがはやっていたそうです。そこで、左七郎は同じ自由民権家の江口武寿氏たけひさと計り、西洋医学を修めた江口氏の甥の眼科医赤沢次郎じろう人を迎え、両家の頭文字をとり江山堂という名の眼科医院を街に設け、みなを救済にあたりました。そのときの金銭帳簿が現存しています。年を経ても、江口家の子孫のかたとはお付き合いを続けさせていただき、わたしどもの結婚式にもわざわざ北海道から出席してくださいました。

そのほかの話題といえば、差別のない穏やかな生活のためにと、祖母は困っている家庭の子女を積極的に家に迎えて、その子どもたちの着物の洗濯やつぎはぎ

山口家住宅と曳家



江口武寿

新潟県新発田市出身の自由民権家で、漢方医。

赤沢次郎人

(一八六一—一九二五)

山形県鶴岡市出身の眼科医。

などの世話をしました。お腹いっぱいになるように食べ物にも気をつけたと話しておりました。大正の初めに生まれ、今も元気な九〇過ぎのお年寄りの話では、ときどき「箸だけ持って家に来な」という声がかかり、お食事をさせてもらって嬉しかったと聞いております。終戦後、農地解放でわが家が困ったときには戦前出入りしていた人びとのなかには年貢米代わりに、お米を届けてくださったかたがたがあり、ありがたかったそうです。

敗戦の混乱の中で

やがて、戦後復興の時代に入り、栄養改善のため共同炊事などが行なわれることがよくありましたが、当七五三引部落^{しめひき}ではわが家の土間を解放したそうです。そういうときには、まだ各家ではしゅうとが出てきたのを、祖母は、これは食事の会ではなく家族の栄養の勉強会なので嫁を出すようにと、何度も言ったということです。

左一については、昭和の初め頃、付き合いのあったわたしの父の話では、細面の顔立ちで穏やかな性格で人の話を聞くのが上手な人だったと聞いております。しかし、祖母は女遊びの好きな外泊の多い夫の話は口にするのも嫌、という感じで、いつもしゅうとの左七郎がいてくれたのでやっていけたと話しております。

七五三引部落

大山の山開きの時に、しめ縄を張るので、七五三部落と言われた。現在はバス停名に「メ引」として残っている。

た。やがて、夫は銀行事件のあと、脳卒中から床に就くようになり、昭和一一年、六三歳で亡くなりました。

太平洋戦争勃発の昭和一六年の暮れ、帝大（現、東京大学）在学中に結核にかかり療養中の次男亮吾も開戦のショックで亡くなりました。

昭和一七年に衆議院議員になった長男左右平が、敗戦とともに公職追放となり、その後たちまち結核で、二四年三月に四六歳で死亡。その前二年には農地解放で家の周り二町歩を残してすべての田畑を失いました。

戦後、日本の敗戦の混乱と同時に、当家では家長の死、農地解放などで祖母深雪は嫁の多恵子とおさない四人の孫、無収入というどん底生活に落とされました。

昭和三三年春、わたしが嫁したときには、近所のかたがたの好意で田畑が耕され、農耕の牛と鶏、豚が飼われ、やっと農家の形をとっていました。わたしは非農家から嫁にきて雑草と野菜の芽の区別がつかない有様です。平塚の病院で栄養士の勤めを続けましたが、休日には畑に出て手伝いのかたがたから畑仕事を見習いました。夕方になると、祖母が杖を付いて畑に現れ「みなさん、とてもきれいになりました。ありがとうございます」と必ずねぎらいます。みなからあとで「いつもああして見てくださるので嬉しいです」という言葉をもらいました。

農地解放
第二次大戦後の農地改革で、
不在地主の小作地を小作農民
に解放した。

祖母深雪との出会い

わたしが夫^{まはいち}匡一の祖母深雪にめぐり逢ったのは、太平洋戦争末期、敗戦の色濃い頃、生まれ育った横浜から小田原の在に疎開してからです。

わたしの母の実家は二宮に移っていて、当主の母の長兄は深雪の三女あやといと結婚をしていましたし、そこから歩いて二分くらいのところには次女ろくの別荘も在ったので、山口の姉妹や母にあたる深雪もたえず出入りしていました。

わたしの母はいとこである山口の六人姉妹とともに東京にある立教女学院に入学し、寄宿舎生活でいっしょに学んだり遊んだりした仲でしたので、わたしもこの母のいとこたちとよく会うようになりました。子ども心に見た深雪おばあさんは小柄細身でいつもきちん髪を結い、洗濯物は固く絞ってパンパンと布をはたいて皺を取り干すというとても几帳面な性格と見受けました。それなのにマージャンや花札に興じるという面もありました。

やがて、大学留年中で月謝滞納中の二歳年下の匡一とわたしはお見合い結婚することになりました。はとこ結婚になります。昭和三年四月のことです。それと同時に、その頃伊勢原の家を出て、前述の二宮の次女の別荘にひとり暮らしをしていた八二歳の祖母深雪が家にもどりました。東京の大学に入学したきり、家に寄り付かなかった匡一が家に帰り、家から通学しながら一年後に卒業、就職す



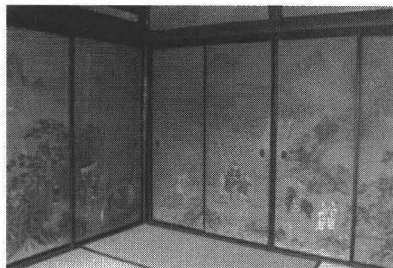
最近の智子と夫、匡一

ることができました。祖母、母、妹二人と弟、あずかつていつしよに暮らしている他人さまのおばあさん、それと、毎日のように田畑の仕事で出入りしてくださる近隣のかたがたという大勢のにぎやかな生活が始まりました。

家では、祖母は「ごしんぞさん」と出入りの人びとから呼ばれ、離れ二間で過ごし、食事は自分だけで決まった時間に食べる習慣があり、わたしが来てからもこのスタイルは変わりませんでした。暑いときも寒いときも、朝は洗面、髪結いのあと六時になると太陽に向かい礼拝し、次にお稲荷様に、次に玄関のほうにまわって大神宮とえびす様の神棚、続いて仏間の仏様に新しいお茶をあげお線香を立てて一日が始まります。朝食はトーストパンに雪印バターをぬるのが定番です。総入れ歯でしたので、我が家ではカレーはひき肉、金平ごぼうはやわらかく煮るのはあたりまえでした。

祖母の晩年は血圧も正常、これといって悪いところもなく、平穩無事に暮らしておりましたが、八九歳の五月、離れの廊下で転び腰部を骨折して寝たきりとなりました。昭和四〇年一月、昼食後眠るが如く安らかに亡くなりました。

祖母の一生は、はたして幸せだったのかしら、と今でも思っております。忙しい人の出入りと種々の仕事で留守がちだった夫なので、家政の切り盛りや衆議院議員であった左七郎ののち、左一、左右平と衆議院議員になって都合、三代にわたる議員生活を支え夫の浮気、頼りにしていた次男、長男の相次ぐ死、農地解放



障壁画

による困窮生活など坂道を転げ落ちるような変わりようです。

明治、大正、昭和と三つの時代に生きた祖母がわたしに言っていた言葉を二、三あげておきます。

「お前のおばあさんは大事に育てられたが、夫に早く先立たれ、自分も子育ての終わらないうちに亡くなった。それに引き換え、わたしは他人のなかで育ち、ここへ来てもいろいろあつたが、まだこうして長生きしている。人の一生は分らないものだ」。また、わたしが身ごもったとき、「男の子、女の子どちらがいいのかしら」と問うたら「どちらでもよいが、わたしは女の子を大勢授かったので、とてもよかった」。そして「結婚の相手は、家柄ではなく人物で選んだ（これは夫の左一も同じであつたようですが）、そのお陰で夫や子どもたちが亡くなったあとも、よい婿たちに支えられてやってこれた」という言葉を聞き、まだ男子優先の時代でしたので、とても印象に残っております。

夫婦間の盟約

最後になりますが、我が家には祖父左一と祖母深雪のあいだで交わした「夫婦間の盟約」という契約書形式の書面があります。祖母が亡くなりだいぶ経つてお蔵から出てきたそうです。わたしは見ておりませんが、浮気の詫び証文らしく、



現在の山口家

甲は乙に対して・・・という文体でそのなかに「夫は妻の尊厳を汚すことなく・・・、妻は夫の人格を尊重し・・・」というような文章もあります。立会人のサインは梅原修平、山口書輔などの自由民権家のメンバーと山口左七郎、それからもちろん山口左一、山口深雪の名もあつたそうです。これは、妻からというより周りの人びとの計らいだったかもしれないませんが、当時の民権家たちが判をついているのを見ると、公私にわたって同志の人びとが深くかわつており、固い結束と新しい気風をみなぎらせていたように感じとれます。現在、雨岳文庫資料館に飾られているいかめしい顔の民権家のかたがたのお姿に、女性としても親しみを感じております。

梅原修平

(一八三七—一九二〇)

大住郡尾尻村(現、秦野市)生まれの豪商で自由民権家。

八一(明治一四)年金貸会社「共伸社」創設。八四年農民騷擾の攻撃対象となる。九〇年高額納税の貴族院議員に選任。秦野の鹿鳴館と言われた洋館を建てる。

山口書輔

(一八四七—一八九四)

愛甲郡小野村生まれで自由民権家、地方農学の開拓者。神奈川県農会を創設した。

聞き取り

二〇〇七年一月三〇日

二〇〇八年一〇月二一日

余 話

山口家には、当時の民権運動を知る上で、貴重な歴史資料が多数残されています。現在の当主山口匡一さんは、一九九二（平成四）年に「雨岳文庫」を設立、二〇〇八（平成二〇）年、「雨岳文庫資料館」を開館し、観光のコースにもなっています。

山口家の建物は、江戸末期の総けやき造りで、入口の土間と広間がある空間は一般的な農家とはかけ離れた広さがあり、さらに奥の客間は武家風の書院造りで、二階が建て増しされています。二階に数寄屋造りの座敷があり、狩野派の絵師が一年ほど泊まりこんで描いたという襖絵も残されていて、建具や欄間の細工は、当時の贅を尽くしたものです。

匡一さんを支えてこられた智子さんに二〇〇七年の秋に初めてお会いしました。客間には明治期に活躍した中島俊子（湘煙）の書の襖があります。とても控え目ながらも笑顔でお話をしてくださり、聞いていて、その当時に引き込まれそうな感じでした。このような環境で生活をされているご夫妻は、いつも左七郎や深雪さんの声に耳を傾けて生きていらっしゃるようで、山口家のなかに左七郎の精神が今でも生き続けているように思いました。

天野政立は、ひいじいさんの弟

まさたつ

浦田 マサ江^え

「天野政立とわたしはどんな関係があるんだろう」、天野家の話が出てくる度に不思議だったし、まったく分からなかった。もう何代も前の話だからね。でも戸籍を調べたり過去帳を調べたりして少しずつ分かってきたの。

政立は安政元（一八五四）年相州山中藩荻野村の藩医俊長^{しゅんちやう}とミチの次男として生まれてね。長男が俊策でわたしのひいじいさん。政立は学問も武術も優れた人だったらしくて、天野家の跡を継いだんです。政立は政治にかかわっていたので全国あちこち飛びまわっていたらしいけど、長男の俊策は分家してね、妻チセとのあいだに六男二女をもうけて荻野で暮らしていたんです。その次女がヨシ、ヨシが持田家に嫁いで生まれたのがマツ、マツが浦田竹次郎と結婚して、わたしは五女になるの。

一九三六（昭和一一）年

六月一八日

厚木町旭町生まれ

厚木市田村町在住

天野政立

（一八五四—一九一七）

一八六七（慶応三）年一二

月、一四歳のとき荻野山中藩

陣屋焼討事件にあう。七七

（明治一〇）年荻野村、村用

掛、戸長を経て八〇（明治一

三）年愛甲郡書記となり民権

運動に参加。八二年自由党に

入党。八四年地租軽減運動で

は総代として奔走。

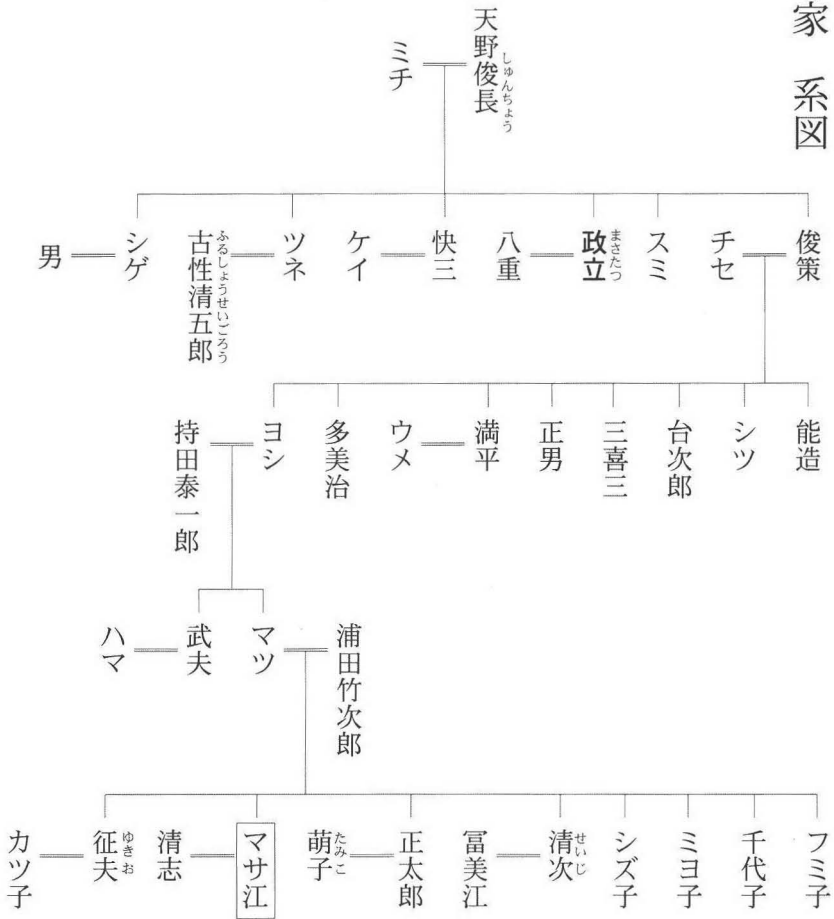
八五年大阪事件に連座。その

後大磯町長、平塚町長など歴

任。妻八重は難波惣平の妹。

墓所は藤沢市片瀬龍口寺。

天野家 系図



ヨシおばあちゃんは偉かった

ヨシおばあちゃんは明治一五年、荻野（現、厚木市中荻野）で生まれてね。八人きょうだいの末っ子なの。二〇歳そこで大住郡比々多村（現、伊勢原市比々多）の持田泰一郎と結婚してね。当時政立が事件を起こしたこともあって、身分は隠して比々多にお嫁にいったとかであまり荻野の家のことは、しゃべりたがらなかったみたい。

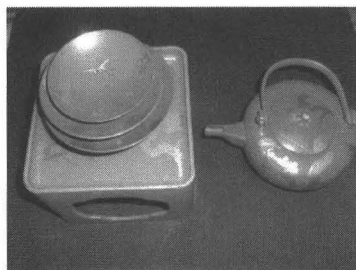
おばあちゃんがお嫁にいった頃は、比々多の家ではお店をやっていたね、瀬戸物や漬物を売っていた。その店番をしながら、刺繍の仕事をしてお金をもらっていたって聞いている。今でいえば内職だね。イギリスのアームストロングという会社が平塚にできて、その仕事なんだけど。政立が平塚の町長をやっていた頃なので、その繋がりがなあって思っているよ。頼もしい人だった。子どもは二人。長女のマツがわたしの母なの。母は「小学校へ上がるまでよく御殿に遊びに行ったもんだよ、狸の出るような細い道を通ってさ」と話してくれた。荻野の家のことを御殿と呼んでいたのね。

七歳の頃、やはり遊びに行ったときにね、「玩具にして使いなさい」って朱塗りの三々九度の盃一式あるでしょう。あれをもらったんだって。天野家で使っていたものでしょうね、立派なものだったので、母は結婚したあともずっと亡くなる

天野（持田）ヨシ



天野家の調度



まで大切に持っていた。家の宝ものなの、今もあるよ。

わたしが子どもの頃、おばあちゃんや母が御先祖の山中藩御殿医が亡くなったときのことを話してくれたことがある。「荻野で最初の小学校ができたその祝いの席で、脳溢血で倒れてそれつきりだったんだよ」って。明治三年一〇月、五四歳だったって。妻ミチの話も聞いたことがある。愛甲郡上依知村（現、厚木市依知）の古性家からお嫁にきた人でね、短歌が上手で人が来ると色紙にすらすら書いたんだって。鉢巻をして、薙刀が得意だったみたい。「自分の戒名を自分で書いて、日時だけいれるようにして亡くなった人だよ」ってこれはおばあちゃんが言っていた。ミチは明治一〇年九月に亡くなっている。上依知村の古性家とは縁があったね、ミチの娘ツネは政立の妹だけど、その人がまたお嫁にいつているの。昔は家同士行ったり来たりがあったみたいだね。

荻野の天野家ではきょうだいが大勢いたのに、当時は継ぐ人がいなかったように、おばあちゃんが遠くに行っている自分のきょうだいのお骨を分骨して、養徳寺（厚木市中荻野）の天野家の墓地にお墓を造ったの。そして代々のお墓も守ってね。ほんとうにおばあちゃんは偉かった。今だったら大変でしょう、そんなことできないよね。それを母が引き継いで、わたしも何回かお墓参りに行っただわ。墓地には五輪の塔とか、片瀬の龍口寺（藤沢市）にある板垣退助が揮毫した碑文と同じものがあつた。ずっと小さい石だったけど。今はないらしいね。でも天野

天野俊長

（不詳——一八七〇）

相州愛甲郡中荻野村山中、荻野山中藩藩医。妻ミチとの間に三男三女がある。次男が天野政立。墓所は厚木市中荻野の養徳寺。

養徳寺

厚木市中荻野にある臨済宗の寺。本山は鎌倉円覚寺。一三七六（永和二）年、舟庵が開創。二〇〇六年本堂再建。

板垣退助

（一八三七——一九一九）

土佐藩士、政治家。自由民権運動の主導者。一八一（明治一四）年、自由党を結成して党首となる。八三年七月、地方遊説で愛甲郡厚木町方面を訪れる。三田村清源院では八〇〇名の聴衆を前に、大演説会を開催。

家の子孫がきちんとしたお墓にして守ってくれているので安心よ。

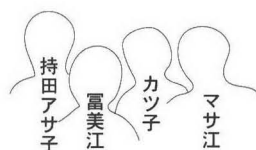
今あるのは持田家のおかげ

母マツの実家持田家には言葉に表わせないほど世話になったのよ。おばあちゃんだけでなく、母の弟武夫おじさんにもね。伊勢原へ足を向けては寝られないって今でも思っている。

わたしたちは男三人女五人の八人きょうだいだね。当時は厚木の旭町に住んでいたの。おばあちゃんはよく家に子守にきてくれた。父や母が仕事で出かけることが多かったからね。おばあちゃんが来るとわたしは、もらった小遣いを小さい箱に入れた。弟と二人で駅まで送って行くとそのときもくれたの。小遣いは積んで月謝にした。娘のマツが苦勞の多い生活をしているように思われるのが嫌だったんでしょね。「汚い格好をするのはだめだよ」って言われていたので、出かけるときは、綺麗な服を着るように気をつけていた。

孫が何かの資格を身に付けたいというとな、お金はみんなおばあちゃんが出してくれたの。姉のフミ子にも「フミちゃん、これからは英語が大事だよ。タイピストになるといい」と言って山手英学院に行かせてくれたの。姉はとても頭のいい人だった。洋服は文化服装学院で習うし、日本人形も作れるし、刺繍もやる。生

持田家玄関にて



花の免許も持っていて、何でもできる人だった。

昭和三〇年頃、姉はドル三六五円の時代にアメリカへ渡ってね。その一〇年後、弟夫婦がアメリカへ行ったとき、姉は市民権を取っていたの。ソニーのトランジスターラジオができた時分だった。給料は使わないで、株の配当金で生活していたようよ。質素な生活をしてみたい。何年かは手紙のやりとりだけだったけど、母が亡くなった半年後、病気になるっていた姉を無理に呼び寄せて、いしょに暮らしたの。病院に入るのは嫌だというので、自宅で家族と弟の妻のカツ子さんとで看取った。昭和六〇年に亡くなった。六〇歳で。姉には子どもがいなかったの、その後のことはわたしが全部やっているの、墓守もね。お墓は厚木霊園。姉がアメリカへ行けたのもおばあちゃんのお陰かもしれないね。

家族は、わたしが「上の学校へいきたい」と言ったら反対だったけど「大学へいくのもいいじゃない」っていうおばあちゃんの応援で、大学へも入学できた。わたしもおばあちゃんの真似をしていまだに孫たちにも小遣いをやっている。

武夫おじさんにも世話になったの。おじさんは県庁へ勤めていてその頃の知事内山岩太郎の秘書をしていた人だね。戦前も戦後もずうっと、お米や調味料を自転車に乗せて厚木へ運んでくれて親子でよくしてくれた。だから現在があるのは持田家のお陰と思っている。

おばあちゃんはとても言葉が丁寧な人だった。子どもでも孫でもけっして呼び

内山岩太郎

(一八九〇—一九七二)

群馬県前橋市出身。

明治から昭和中期にかけて、

活躍した外交官、政治家。元

神奈川県知事。

捨てにしない、さん付けだった。だからわたしもきょうだいにさん付けよ、いまだに。おばあちゃんの残した忘れない言葉があるの。「きょうだい喧嘩をしたら、三か月絶対口をきいてはいけない。喧嘩したら誰も遊んでくれないからね」。母も同じことを言っていた。きょうだい仲良くつていうことを言いたかったんでしょね。

母マツは世話好き、選挙好き

母マツは明治三三年生まれ。弟の武夫おじさんとは九つ違いなの。おじさんは短歌が好きでどちらかというと女性的、母は体型もがっちりして男勝りだった。

母は六年まで小学校に通って、その後は横浜へ和裁を習いに行きたかったんだって。でも父親が「女の子に教育はどうか、職業婦人は不和のもと」と反対され、近所に和裁の先生がいたので「その人のところへずっと通っていたんだよ」って言っていた。和裁のほかに着付けも習って、「柱に帯を結わえて練習したんだよ」っていう話もしてくれたことを覚えている。

母は大正一四年に中郡須馬村須賀（現、平塚市須賀）の浦田竹次郎と結婚してね。それからすぐ昭和三年頃、厚木のほうに知り合いがあったので、引っ越してきた。厚木の旭町で浦田鉄工所を始めて、圧力鍋や釜を造って売って生活してい

たの。母は真つ黒になつて働いた。工具一式を持つてね。娘時代は箸より重い物を持つたことがないという人だったから、子育てをしながら大変だったでしょうね、男並みに働いて。「ゴミが落ちていても人間は死なない。第一に働き、掃除は得の余り。全部やったあとでやればよい」って年中言っていた。だから掃除のことはうるさくなかったね。

母はとにかく面倒見のいい人だった。戦争中は菩提寺の最勝寺に泊まっている兵隊さんに、裕福でもないのに自分のものを持ち出してよく世話をしていたわ。

戦後になつてからも近所の人々が亡くなれば、家でお葬式を出してやり、その家族の面倒も見たりしていた。他人の結婚式を自分の家で何組かやったこともあるし、仲人は六〇組くらいしたね。子どもの頃萩野でもらった盃が大活躍だったの。終戦後何も無かった時代でしょう、三々九度の盃がある家なんか少なかったからね。母は花嫁の着付けもできたのよ。帯の結びかたで「ふくらすずめ」というのがあるでしょう、あれが結べたの。和裁ができたからね。お坊さんの衣も縫ったりして器用な人だった。

近所に揉め事があると、必ず家に相談に来てね、母が解決するの。泣いてきた人もあった。そういう風に面倒を見てきたので、近所では「お母さん」と呼ばれていたわ。それから政治運動が好きでね、昭和二十一年の厚木町長選で波多野元正さんが、立候補したときなんか、選挙カーに乗って応援をしたりしたの。若い人

最勝寺

厚木市旭町にある曹洞宗の寺。本寺は厚木市小野の龍鳳寺。一五六一（永禄四）年、小田原北条氏攻撃のため、相模に侵攻した上杉景虎（謙信）により焼き払われ本尊も大きく破損。その後檀家が本尊再興。

波多野元正

（一八九二—一九六二）
高座郡海老名村中新田生まれ。一九二三（大正一二）年から厚木町に居住。厚木町長、神奈川県会議員、厚木市長を歴任。

と話すのが大好きだった。

ダンプ一台から始めた浦田砂利店

昭和二八年、父はずっとやっていた浦田鉄工所をやめて、大きくなった三人の息子と浦田砂利店を始めたの。父が社長になってね。わたしが高校二年生のおきだったと思う。

最初はダンプ一台から始めてね、おもに砂利を運ぶ仕事だった。その後、だんだん車を増やして大きくしていった。東名高速道路や東名のインターから金田（現、厚木市金田）の陸橋あたりまで新しい道路に路盤材を敷く仕事もしたの。金田のまわりの人はとても親切だった。わたしも高校に通いながら、請求書を書いたりして手伝ったのよ。長兄の清次は外交、次兄の正太郎は工場の監督、弟の征夫は経理とそれぞれ任されてね。みんなで力を合わせて浦田砂利店を支えた。

昭和三二年一月五日のこと、家では屋根を修理中で、職人さんを頼んでいたのね。父は下から呼べばよかったものを、自分で屋根に登って「お茶だよ」って言って足を踏み外して落ちちゃったの。かかりつけの先生にすぐに来てもらった、脳溢血だった。それから五日間ぐう、ぐう寝通し。ほかに仲良しだった先生が手のひら療治を毎日してくれたんだけどだめだった。お酒が大好きだったからね。

一〇日に五六歳の若さで亡くなった。それから母が社長になったの。

昭和四五年、長くいつしよにやつていた浦田砂利店を閉めて、三人は独立したの。長兄は浦田機械土木、次兄はその手伝い、弟は不動産屋になつてね。

刀鍛冶 「相州厚木住 靖次」 やすつぐ

それぞれ独立したあと、しばらくしてから長兄は刀鍛冶の修業を始めたの。名前をもらうには系図がないとだめらしいのね。それで母方の祖先や父方の祖先を調べるために戸籍を取ったり、寺に行つて過去帳を調べてみたりしてね。民権家としての天野政立や天野家の祖先のことを初めて知つたみたい。だから父の浦田家のことを「浦田家は関東大震災の頃、平塚でも五本の指に入るくらいの家だつたらしいぞ」つて言っていたのに、調べているうちに「とんでもない、お袋の家系のほうがすごい」ということになつてね。この頃大畑哲先生ともお付き合いが始まつたみたいで、ときどき兄のところへ見えていたらしい。それでいろいろなことが分かつたんでしょね。

長兄は、政立のことを誇れる人と思つたみたいだね。民権百年にちなんで記念碑を建てたいと県央地区民権運動百年記念実行委員会（会長・大畑哲）に呼びかけたの。それで政立の座右の銘でもあつた「憂国慨世・先憂後樂」の八文字を刻

龍口寺

一三三七（延元二年）の創建。
藤沢市片瀬の日蓮宗の寺。
開基は日蓮の弟子日法。



んだ碑を龍口寺のお墓のところへ造つてね。

昭和五六年一月八日、除幕式には会社の大型バスを利用して家族や近所の人、民権家沼田初五郎、山川市郎のご子孫、研究者、勿論大畑先生も行かれたけど四〇人くらいだったかな、片瀬の龍口寺へ行つたのよ。政立のお墓と造つた記念碑の前にみんなで集まって、先生がたから政立が書いた『所世録』や『鉄窓日誌』の説明があつたり、子孫のかたが挨拶してくださつたりしたの。近くには、板垣退助が政立のために書いてくれた碑文もあつた、大きい石碑でね。いい供養ができたね。ただ政立のお墓はあるんだけど、お骨は誰かがほかへ持つていつてしまったとかで、お寺さんも困つていてね、「引き取ってください」と言われたらしいの。そしたら長兄が「それでは政立の墓は弟息子に守らせる」と言つてね、現在はそのようにしているの。長兄が刀鍛冶を始めなければ、わたしたちきょうだいは天野家の細かいことは、分からなかつたでしょうね。

五八年五月、長兄は一〇年修行したあと、「相州厚木住 靖次」の銘をもらった。刀の免許だね。平成元年四月一二日には、萬屋錦之介さんの芸能生活五〇周年記念に日本刀を寄贈してね。「市民かわら版」にも取り上げられたりして。それから刀鍛冶もしながら仕事をがんばっていた。その長兄も平成九年一二月九日に亡くなったの。今、浦田機械土木は妻の富美江さんが社長になって、息子たちと事業をいっしょけんめいしているのよ。

『所世録』

天野政立の自叙伝の草稿。一九〇九（明治四二）年、五五歳のとき書かれたもの。一四歳で遭遇した山中藩陣屋焼討事件などともいきいきとした文体で細かく書かれている。

『鉄窓日誌』

天野政立は、一八八五（明治一八）年の大阪事件に連座。翌年、荻野で拘引され大阪に護送。裁判の結果、外患罪で軽禁固一年六か月の判決を受ける。そのときの獄中記。

守り刀

悪霊が来ないよう、亡くなった人を寝かせている布団の上のお腹あたりに置く。棺の蓋の上に置くこともある。

母マツの最期

昭和五五年頃だったと思うけど母が病気になってね、癌だったの。田村町に土地があつたから、そこにわたしたち家族と弟の家族が家を建てたの。少し空き地があつたので離れを造つてね。わたしの子どもたちも母になつているし、娘がよかったのかしら、世話をするようになったの。ずうっと母の運転手をしていてくれたカツ子さんが、母が病気になってからも、毎日運転して病院に通ってくれた。だから母はわたしに「カツちゃん嫁ではないよ、お前のほんとうの妹だよ」と言つて感謝していた。よく面倒をみてくれたね。

母のためにいいと言われるものはあらゆることをしたよ。深海鮫のエキス、スポンのジュース、ゲルマニウムの注射、温灸、びわの葉の上にニンニクをスライスした物もね。食べ物にも気をつけた。「茄子、蒟、柿などはからだに悪いからだめだよ」と言つたら母は涙をこぼしたの。「あんたはすごく冷たいことを言いますね」つてお医者さんに言われたわ。母はお餅が食べられなかつたので、「正月の三が日だけ、お餅を食べよう。それを守らなければだめだよ」つて長男が言つてね、この子はおばあちゃん子だったから。三が日以外はすいとんにした。わたしはいまだにお餅は三が日以外は、食べたことがない。

昭和五八年の三月、春のお彼岸のとき、母がサクラを見たいと言つたので、お

医者さんの許可を得て、中荻野の養徳寺に行つたの。あそこの境内には何本かきれいなサクラの木があつたのよ。サクラを見たあと、住職の奥さんに「こんどはこの娘が来ますから」と挨拶していた。それが言いたかつたのかしら。

変わっているのよね、うちの母は。亡くなる前「お前、人の指は太いのも短いのもいろいろある。小さい指一本なくても不自由だろう、誰が貧しくてもいいのいのだ。みなが良くならなければだめなんだよ、指が五本あるように」って。そして孫まで養子にして財産を分けたの。変わっているっていえばこんなことも言っていた。「人間、見ざる言わざる聞かざるで生きていけば、最後の七年間は幸せに生きられる」って。

その年の五月、お医者さんから「入院を」と言われたのよ。だけど母は「入院は嫌だ、家に居たい。あとお金いくら残っている」と聞くので、「五〇万円くらいかね」って言ったら、「それが終わるまでに亡くならなければいいな」と言つたの。ほんとうにその通りになった。亡くなる直前、よそへ行つていた次兄が帰ってきて家族がそろつたところで「こんなによくしてくれてありがとう。この世の苦しみは、別れのひとときなので辛抱しておくれ」と言つて亡くなつたの。すごかつた。長兄が作つた刀を守り刀にして。五月二八日、八三歳でね。わたしは母が亡くなる三年前から、仏壇に朝晩線香をあげて拜んでいるのよ。

聞き取り

二〇〇六年七月二六日
二〇〇七年四月六日

余 話

最初はマサ江さんと兄嫁の富美江さん二人からお話を伺いましたが、富美江さんが社長さんでお忙しく、最後はマサ江さんだけの取材になりました。マサ江さんはがっしりした体格で、性格も男勝り。お母さんのマサさんもこんなかただったのではと思わせる人でした。天野家との関係については二、三回お会いしていても「なんだか良く分かんない、どうだったんだろう」の連発で、はたして解明できるかしらとこちらでも思ったほどでした。まったく分からないルーツを資料、仏様の戒名を頼りに系図を書き継ぎ謎解きをするような面白さでした。マサ江さんもお自分の記憶がつながっていく面白さを実感されたと思います。マツさんの伊勢原のご実家へもお邪魔し、マサ江さんのいとこアサ子さんともお会いして、天野家とつながる過去帳を見せていただいたり、お話を聞かせていただいたりすることもできました。みなさんがきょうだい以上に助けたり、助けられたり深い付き合いをされ、まとまっているのには驚きました。マサ江さんもひとりよがりにならないよう皆さんに気を使われている様子が良く分かりました。富美江さんもその後、夫の清次さんが集められた資料の多くを見せてくださいました。

若くして逝った金平^{きんぺい}さんを^{おも}う

飯塚^{いづか}
澄子^{すみこ}

わたしが飯塚金平の名前を知ったのは、夫の務^{つとむ}と結婚して何か月か過ぎてからです。夫は金平の長兄市兵衛のひ孫にあたります。その頃はわたしも仕事を持っていたので、くわしく深く聞いてはいませんでした。ほんとうにしつかり分かったのは、二〇〇四年に荻野の戒善寺に自由民権碑が建ちましたね、あのときです。

金平は飯塚市左衛門の五人きょうだいの四男として元治元（一八六四）年三月、飯山村（現、厚木市飯山）に生まれました。明治二〇年代、六年ほど民権活動をしたあと、台湾の澎湖島^{ほうことう}へ出征してそこでコレラに罹り戦病死したそうです。三一歳の若さでね。よく分からぬまま墓守や飯塚家の行事のなかで過ごしてきましたけど、家庭も持たず若くして逝った金平を百年以上経った今、いろいろなことが分かるにつれて生きて動いているように感じられ、気持ちを揺さぶられます。「俺のことを今でも覚えていてくれるのかよ」と言つて喜んでくれていると思いますね。

一九三七（昭和一二）年

一月二日

愛甲郡三田村外五ヶ村組

合林村生まれ

厚木市水引町在住

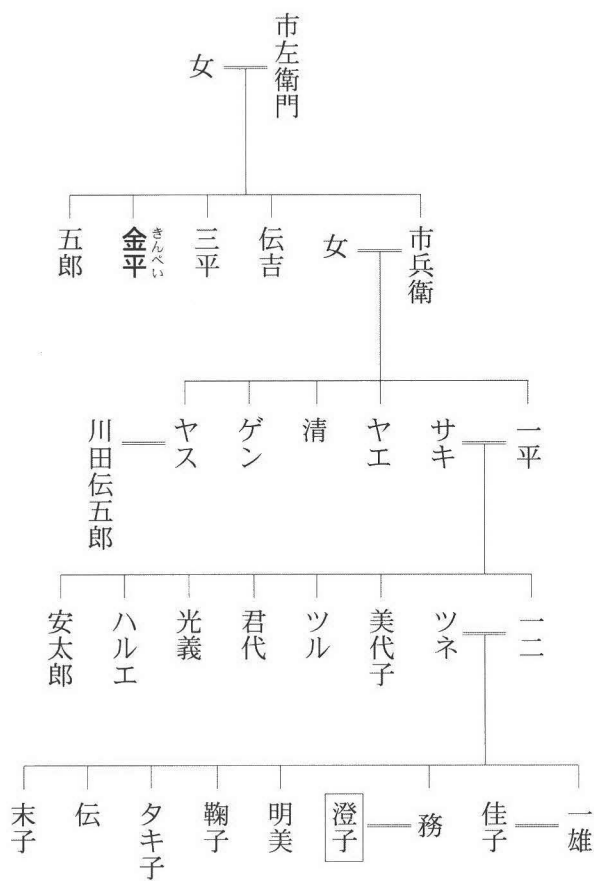
飯塚金平

（一八六四—一八九五）

愛甲郡飯山村生まれ。

一八八五（明治一八）年東京師団第一連隊から三年間軍務に服す。除隊後、六年間自由党員として活動。その中核である神奈川県青年会の幹部となる。胎中楠右衛門とも知遇を得、国会・県会の選挙戦で活躍。九五年、日清戦争で台湾澎湖島へ出征し、戦病死。生年の一八六四年は戸籍による。

飯塚家 系図



金平の活動

金平は短い生涯でしたが、どんなことをしていたかは夫を通して聞いてもらいではんと分かりません。夫は子どもの頃から父の「一二といっしょにいたから少しは聞いているようですけどね。前から『朱鳥』^{しゅちよう}という本に金平のことが書かれていることは聞いていましたが、今回横浜市立中央図書館にあったということで、下荻野事件のところのコピーを読みまして、あつというひらめきというかその時代の何かここにかかわってきた人たちの勢いというか熱意を強く感じました。百年も前のことがこんな風に生きているように感じられて。

もう一つ高山男也^{おなり}さんの回想録で『浪人一代』という本があるんですが、それは家にあります。そのなかに難波惣平さんが兄貴分になつて仕込んでもらったことが書いてありますが、そのことは夫から聞いています。金平の墓の近くには山川家の墓があるんです。金平と山川市郎はいとこで、飯塚はもと山川だったんだとしゅうとから聞いたことがあります。その関係で民権運動にかかわったんだでしょうか。夫も「その前の戸籍が取れないから分からない」と言っていましたね。

『朱鳥』

一九三四年一月発行。

田中貢太郎著。胎中楠右衛門を主人公にした小説。飯塚金平や難波惣平など民権家を実名で載せ一八九二（明治二五）年頃の自由党・改進黨の政治活動を誇張して書いてある。

『浪人一代』

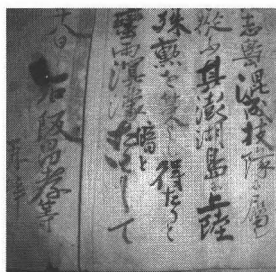
一九七一年発行。遠藤徳英著。高山男也の回想録。この本の一部に高山が胎中楠右衛門に直接聞いた話として飯塚金平、沼田林蔵などとの出会いと彼らの政治活動が書かれている。

盛大だった金平の葬儀

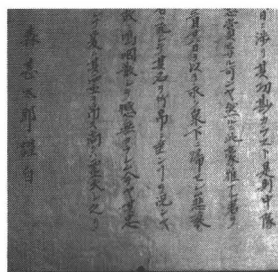
金平の葬儀については、大畑哲先生から「日清戦争と兵士・飯塚金平の死について」という二枚の印刷物をいただいて当時の様子を知りました。それによると葬儀の日は戦死した年の明治二八年八月一八日。小鮎村の宝泉寺（現、金剛寺）で盛大に行われ、会葬者はざっと五千人だったと聞いています。楽隊もでたとか、この辺では日清戦争で戦死した人は少なかつたので、そのせいもあるんでしょうかね。とにかくたくさんの方の弔辞が今でも家にあります。竹行李に入っているんですよ。四〇センチか五〇センチくらいの美濃判の半紙が入るくらいの大きさです。なかに入っている弔辞は穴が空いたり、虫食いになったりして読みにくいものもありますが、墨と紙は強いですね。有名な人では、衆議院議員の石阪昌孝、県会議員の中村得治、愛甲郡長、厚木町長、荻野村村長森甚太郎、三田村外五ヶ村の総代沼田初五郎など民権家の人たちのもありました。短冊も一〇枚くらい。とにかくいろいろなものが残っています。

金平のお墓はその年に建てられたようで、石塔の左右には、大島正義、橘川文次郎、有志として小宮保次郎など三八人の名前がありましてね、何人かの人はその右上に役職が書いてあったね。今は苔が生えて全部一度たわしで洗わないとね。お墓は二メートルくらいの高さで、手前には二本のヒノキがありました。

石阪昌孝の弔辞（部分）



森甚太郎の弔辞（部分）



百年以上前の木でしょう、ずいぶん大きくなっていますが右側の一本は枯れてなくなっちゃいました。

夫は高校生の頃から自転車でよくお墓掃除に行ったそうです。「最初は親に言われて行っていたが、そのうち自分の役目と思つて行くようになった」と言つてましたね。わたしも結婚してからは農家に育ったせいか行けるときはいっしょに墓参りをしました。今は姪たちがやつてくれています。

飯山から厚木の街へ

夫が「金平の父市左衛門は飯山の人で、何の仕事をしてたか分からないが、しっかりしていた人のようだ。飯山の龍藏神社には金太郎の絵馬があるし、菩提寺の金剛寺太子堂の底には孔雀ひばしの絵馬がある」と言うんで、わたしも見ましたがまだ色がはつきりしていて白だの赤だの分かります。両方とも寄贈飯塚市左衛門となつています。

金平の兄市兵衛のことも分かりません。市兵衛の長男一平夫婦については、妻はサキといつて高座郡有馬村上河内の出で、結婚前は藤沢の用田へ家事見習いに行っていた。一平は飯山の橋場に何人かで出資して繭を取る工場を開いた。かなり大きい工場だったようで、女工が五〇人くらいいたらしい。小鮎川から水を引

金剛寺

厚木市飯山にある曹洞宗の寺。大同年間（八〇八―一〇）に空海開基と伝えられる古刹で明治維新後、一時期宝泉寺と言つたようである。飯塚家と山川家の墓地は隣同士。

き水車二台をおいて動力源にしたという話も聞きました。サキは女工さんの食事やそのほかいろいろなことを面倒見ていたようですね。最近になって一枚の絵葉書が見つかりました。工場の名前は佐久社だったんですね。下に大正一二年四月二七日の日付で佐久社運動会となっています。人が大勢歩いて、花笠をかぶった女の人たちや提灯が飾ってあるのが見えますね。右手が工場じゃないかと夫は言っています。偶然ですがわたしの家の近くに引越してきた人が、その工場開きのとき「子どもの頃だったけどおにぎりをもらったよ」と言われびっくりしたことを覚えています。

一平は世の中の景気が悪くなり仕事も厳しくなってきた、最後は体調を崩し脳溢血のような病気でガアガアいびきをかいて眠ったまま何日も伏せていたと聞きました。田舎のことですから、カラスが飛んで来るのを気にして遠くに米を蒔いたりしていたようです。一平は昭和三年二月に五八歳で亡くなりました。サキは子ども二人と飯山に残りましたが、一二夫婦とその長男一雄はまもなく厚木へ引越してきました。夫務は次男で厚木で生まれたんです。

一二とツネ

厚木中央通り寿町一丁目が住まいになりました。一二は頑固でね、事業が好き



絵葉書「佐久社運動会」

でいつも何かしらしていないと気が済まない性分でした。厚木へ来てからはおもに繭の売買の仕事をしていましたが、一年中その仕事があるわけではないので、農家をまわって蚕の種紙の注文を取ったり、養蚕組合の関連会社のようなところに勤めたりしていました。蚕が繭になる時期には買い取りに行きます。買った繭を乾燥させて愛知県の製糸工場や八王子の片倉製糸とかいくつか取引先へ売りに行くんです。子どもの頃「繭をトラックに積んで親といっしょに片倉へ行つた」など夫によく聞きました。

しばらくしてサキは子ども二人を連れて厚木の一二のところへ来ました。気丈で働きもんだつたので、孫の子守をしたり近所へ手伝いに行ったりして暮らしていたようです。男手が無い時代でしたから。サキは実家に帰ると「家の嫁はいい嫁だ。逆らわなくて頭がよい」と言っていたそうです。サキは昭和二八年一月に亡くなりました。

しゅうとめのツネは荻野の杓割ますわりの出で、結婚前は海老名の蚕業試験場に通つて生糸製糸の指導者を養成するところで勉強していたそうです。それが縁で飯塚へ来られたみたいですね。

わたしが結婚したのが昭和三五年ですが、そのとき六一、二歳でしたね。ツネは夫が亭主関白だったので、あいだに立ってまとめ役で苦勞をしていたようです。そういう夫になんとも言わず従っていましたね。ツネはやさしくて何があつ

でも動じないで考えがさきにいくような人。口では言わないけどいろんなことを考えておられる人だなと思いました。ただ昔からからだが弱く、目も緑内障だったらしい。ですから一二の仕事の手伝いはあまりされなかったみたい。

一二の家には畑仕事や家畜の世話をしてくれる人がいましてね、わたしが相模原のほうに勤めていましたから、ツネはその人におかずを持たせてくれたり、小さな紙に何か書いて渡してくれたりね。わたしたちの家は歩いて一〇分かならないところにありましたから。長男が生まれたときにも四か月間、わたしの家に来て子どもの世話をしてくれました。大事な時期でしたのでありがたかった。いっしょにいても気を遣うことがなく過ごせました。

物の無かった少女時代

わたしは愛甲郡の林村（現、厚木市林）で昭和一二年に生まれました。きょうだいは五人で女はわたし一人です。祖父清十郎も元気でいました。物静かな人でしたね。たしかその頃村会議員をしていたと思います。小学校には昭和一八年に入学しましてね、三田村外五ヶ村組合立清水国民学校って長い名前の学校です。学校までは小鮎川を越えて行くんですが、子どもの足で二五分くらいでしょうか、近所の友だちとぞろぞろ下駄をはいてね。

家は農家でね、終戦に近い時代でしたからわたしはもう働き手でした。戦争で物が無かったですし、昭和一九年に母はお産が原因で亡くなりましたしね。しばらくして新しい母がきました。わたしが小学校三年になるときに終戦の前でした。四年生のときの記憶がまったく無くてね、一年間何かぼつとしていたんです。母のこともありましたね、戦争のことやら何やらでいっぱいでしたね。

学校でも勉強は頭に入らない、言われたことだけをする毎日でした。五年生になって先生が変わったときこれじゃだめだ、自分の中に浸っているだけだと思つて締め直しましたね。台所のことは祖父の妹たちが近くに住んでいましたので、教えてもらいました。今になつては感謝ですね。どの人もどの人もわたしには必要だったんだなつて思いますね。改めてありがたいと思つています。

中学校は睦合中学校、やはり下駄で三年間通いました。下駄がへつてね、自分で鼻緒を作るんですよ。麻を芯にして下駄の台だけ買つて。雪が降ると歯と歯のあいだに雪が入つて転んだりしましたね。着る物は、上着は今でいう作務衣みたいなもので下はもんぺでした。親戚からテーラー襟の服や、お古をもらつて着たり、靴も大きいのをもらつてはいたり、何にも無い時代でしたからね。

昭和二六年祖父が七十二歳で亡くなりました。どうなるかなと思つていましたが、東高（県立厚木東高等学校）に昭和二七年に入学し、三〇年に卒業しました。歩いて行けるところでしたので、通学は楽でしたね。家事や食事のしたくも

しながらの三年間でした。

勤めながら教員資格をとる

卒業後、相模原の教師試験を受けて合格しました。相模大野の相模女子大近くの谷口台小学校です。資格が無く臨時ですから玉川大学の通信教育を受けてね。あの頃は大勢そういう人がいました。夏休みはスクーリングの毎日で、仕事が忙しいときはレポートを書いて提出しました。最初の担任は遅進児^{ちしんじ}でした。勉強の遅れている子どもを昔はそう言っただけですよ。そこには三年いました。その後麻溝台小学校の分校に半年、国立相模原病院近くの相模台小学校と合併して両方で二年勤めました。

終戦後一〇年以上経っていましたが、駐留軍の座間キャンプや相模大野に米軍の病院があったので、日本人も多く家族で働いたりしてましたね。転校生も多くなったので、午前と午後の二部授業になりましたが、わたしのクラスは一三人くらいで午前だけでした。生徒が自分でやり方や仕方が分からないところを教えました。

玉川大学通信教育
一九五〇（昭和二五）年
「全人教育」を広く社会に
開放することを目的として
スタート。

子育てのあと産休補助教員に

結婚して一〇年は子育てをしました。子どもは二人、長男と長女です。その後近くの私立幼稚園に四年間勤めました。そんなとき出産で休暇を取る先生がいるので、代替教師が欲しいと厚木愛甲教育事務所から連絡があつてお引き受けすることになりました。とにかく頑張つてみようという気になつてね、昭和四九年九月から中津第二小学校に勤めました。

通うのは今思うと大変でした。洗濯は前の晩に干して、掃除は家族で役割分担。早朝に起きて子どものご飯のしたくをして一人は小学校、一人は中学校でした。からお弁当も作つてね。七時過ぎのバスに乗り二、三〇分で学校に行きました。職員室にいる先生と事務のかたは、新しい先生には特別よく目をかけてくださいました。この学校は二年半の勤めでしたが一番思い出に残っています。人間同士のふれ合い、はげまし合いがあり、子どもとともにいっしょうけんめい歩こうという感じでしたので、成績をつけるのも怖いくらいでした。次の南毛利小学校では一年間。この学校では忘れられない思い出があります。心臓が悪く体操のできない女の子がいました。その人の身にならなければわからないでしょう、つらかったですね。玉川小学校に一年間。昔の木造校舎でよかったですね。厚木には一つしかなかったんです。毛利台小学校や相川小学校にも行きました。あの頃

産休補助教員

産休教師のいる学校に、一定の期間、代わりをする教師のこと。いろいろな学校にいくことが多い。

は児童数が増えてプレハブ校舎で授業をしたこともありますね。

わたしは子どもと接するのが好きでしたので続けることができたと思います。誰かのために役に立てるならやらせていただくという思いでね、産休先生の仕事は平成三年までしました。楽しくやりがいのある仕事をさせていただきました。

金平がご縁で

金平のことはわたしたち血縁のなかでは、知るものは一人もいなくなっていました。研究して下さっているみなさんによって、つぶさに調べていただき日の目を見ることができて感謝しております。金平の魂が息を吹き返したように思います。碑が建立されて改めて一三〇年も過ぎたことなのかと驚きました。

早世で数々の憂いを残して逝ったことと思います。家庭を持ち子孫があつたならと想像しながら、花と線香を手向けました。金平の生き様、勇気ある行動を念い、あとに残るものはそのエネルギーを少しでも受け継ぎ、しっかり生きたいと願っています。

飯塚金平の墓前の澄子



聞き取り

二〇〇八年一月二八日

九月二一日

余 話

飯塚澄子さんに初めてお目にかかったとき、「何も金平のことは分からなくて」と小脇に本や資料を抱えて静かに話をされるのが印象的でした。「金平は家族がいまませんでしたから直系の子孫はいません。再び金平の名前がこの世に出るならばお話をしたい」というのが澄子さんのお気持ちで取材に応じてくださいました。ですから金平さんのことをなるべく多くし、聞き手と話者がともに一つ一つ探って確認しながら話を進めていきました。

金剛寺山門近くに金平さんのお墓があります。二〇〇八年八月、ヤマビルの予防に先日お墓の周りにお酢を撒いておきましたといいながらお線香やお花、一升瓶に入れたお水を用意してくださりお墓参りができました。しばし一三〇年前の自由民権の壮士の姿を思い浮かべました。その手前左側に山川（市郎）家の墓と石川家の墓がありました。金平さんの兄で石川家に養子にいかれた伝吉さんの墓で、クリスチャンの墓でした。この機会から金平さんへの思いがより深くなった気がします。

ご子孫の思いをここに聞き書きとして記せることはわたしたちにとってもありがたいことと思います。お目にかかった回数は八回くらいになったでしょう。そのたびに新しい情報と資料をいただきました。金平さんは明治二〇年以降に活動を始めた人でそれも自由党青年会の幹部としての活躍が目立っていました。厚木愛甲の民権家のなかでは異色の人でした。

樺太から父の故郷へ

千葉潤

昭和一八年樺太豊原生まれのわたくしは昭和三四年両親とともに父の出生地厚木の小野へもどりました。ここには三橋家代々の田畑、屋敷が残されていました。のちに聞き知りましたが、この地で曾祖父三橋甫、祖父村雄が自由民権運動最盛期の明治一五年に民権結社万有社を結成、活動しました。

近くの聞修寺での演説会には小村としては驚きの三〇〇人以上の人びとが集まったそうです。東京からの講師肥塚龍は「相州の自由は大山山麓の森林より生ず」と語ったそうです。甫とその父三橋玄又の記念碑が今も聞修寺にあります。もちろん会ったことのないご先祖ですが、母松代は一人っ子のわたくしに家系のことなど「よく聴いてよく覚えておきなさい」と折々話してくれました。

一九四三（昭和一八）年
一〇月一九日
樺太豊原生まれ
厚木市小野在住



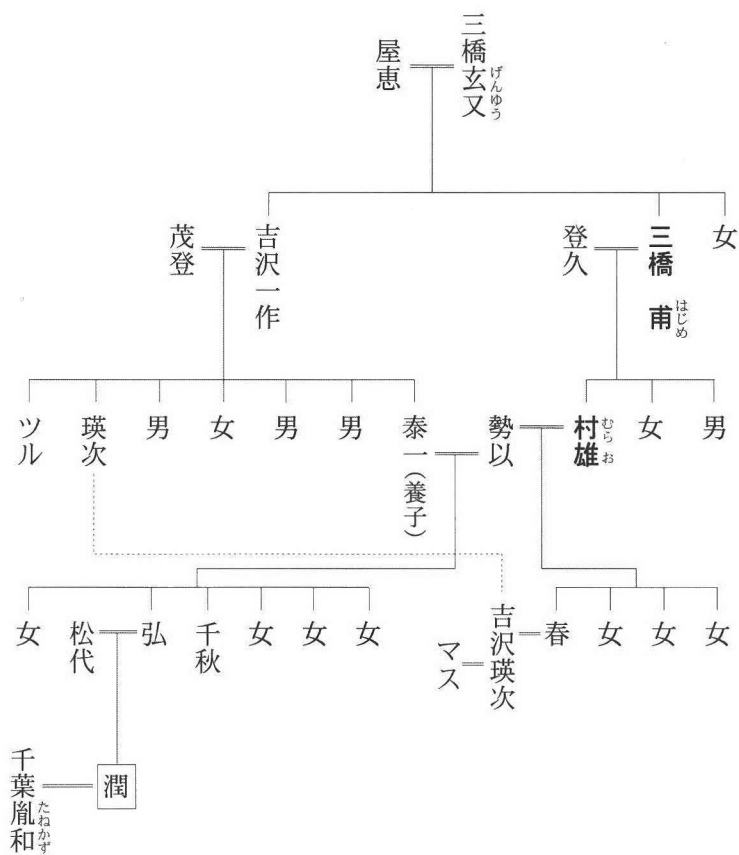
三橋甫

（一八三三—一八九〇）
小野村で三橋玄又の長男として生まれる。父から西洋医学を学び医者になる。一八八二（明治一五）年地元民権結社万有社を結成。

三橋村雄

（一八五九—一八八八）
甫の次男、大学東校で医学を学ぶ。大磯の湘南社と交流が深く民権家医師として活躍。東京横浜毎日新聞主筆の肥塚龍らを招いて、村内聞修寺で懇親会を盛大に行った。

三橋家系図



祖母勢^{せい}以は三橋家の柱

三橋家は代々医者だったようで甫は父玄又らから西洋医学を学んだそうです。

その息子村雄は明治六年から大学東校（現、東京大学医学部）で医学を学び、明治一年には小野村で開業しています。村雄と結婚したのが祖母勢^{せい}以です。勢^{せい}以は安政五（一八五八）年生まれで昭和一七年に八四歳で亡くなっています。一八年生まれのわたくしは一年違いでじかに会うことはできませんでした。祖母は煤ヶ谷村の村長をしたほどの家の出のようですが、何かいわくのある人らしかったですと母は話していました。

祖父村雄は民権家医師として万有社を中心に活動していましたが、明治二二年、二九歳の若さで父甫より二年早く病死しました。勢^{せい}以とのあいだに四人の娘が残されました。甫は三橋医院の書生吉沢泰一を養子とし、勢^{せい}以と夫婦にしました。泰一の父一作は甫の弟であり村雄と泰一はいとこの間柄でした。

勢^{せい}以は前夫村雄とは一歳違いでしたが、六歳年下の泰一との結婚を女としてどう受け止めたのでしょうか。知る術はありませんがその後泰一とのあいだに四女二男をもうけています。勢^{せい}以が女としても幸せであったと思いますね。祖母が生んだ一〇人の子の下の方二人が待望の男の子でした。末っ子のみちおばが「お母さんっておばあさんのね」と高齢で自分を産んだ母について話していま

肥塚龍

（一八四八—一九二〇）

東京横浜毎日新聞記者。一八七八（明治一二）年嚶鳴社結成に参加、各地で演説会開催。八二年立憲改進黨結成に参加し九二年、衆議院議員となる。

万有社

一八八二（明治一五）年三橋甫・村雄が結成した小野村の民権結社。会員約四〇人、厚木の相愛社、大磯の湘南社と交流。

大学東校

一八六九年（明治二年）、大学東校、次いで東校、第一大学医学学校、東京医学学校と変遷し、七七年、東京帝国大学医学部になる。

した。わたくしの父弘は次男です。村雄の時代は民権家医師として人の出入りも多く、次の泰一も医者であり初代愛甲郡医師会長、そして県会議員にもなり政治家としても外で忙しく活動した人です。三橋家の内は勢以が柱になり守り続けなければならなかったと思います。

勢以の周りの人々

勢以は村雄とのあいだの四女春を泰一の弟吉沢瑛次と結婚させました。義理のおじと姪ですけれど。瑛次はすでに医者で伊勢原の片町で開業していました。二人のあいだに一男二女が生まれましたが春は二五歳で産褥熱で亡くなりました。瑛次の後妻にマスが来ました。となりの七沢の市川木材の血筋と聞いています。子どもはさらに二男六女が生まれ、三女のテイ子さんが東京女子医専を出て吉沢医院の二代目を継ぎ、九〇歳半ばでご健在です。七女の裕子さんはあの民権家大矢正夫の孫大矢純夫さんの奥さんです。どういつながりがあつていつしよになられたかは知りません。勢以は私の父方の祖母、裕子さんには義理の祖母でしょう。ともかくお互いにいとこ関係にはなりますね。

泰一の妹ツルの息子吉沢三郎さん（九二歳）が晩年の勢以を覚えています。「並木（小野の家周辺の地名）のおばさんはいつも長火鉢の前でキセル煙草を

三橋泰一

（一八六四—一九二八）

小野村吉沢一作の次男で医師。三橋甫の養子となる。一九一一（明治四四）年、神奈川県川島議員。厚木医師会初代会長。

東京女子医専

一九〇〇（明治三三）年、吉岡弥生が創立した東京女医学校から始まり一二年には、東京女子医学専門学校となる。五二年に現在の東京女子医科大学として開設。

吸っていた。近寄りがたい威厳があり普通の人とは違うなと思った」と話しています。わたくしはこの三郎さんの奥さん寿子さんも存じていますが、民権家医師石井道三の息子賢三の奥さんの妹です。小学生の頃、大好きというイチジクを届けに行くと、道三おじさんからいつもお駄賃五〇銭をもらったそうです。思いがけずいろいろな人のつながりがありますね。

泰一、勢以の代にはここ神明^{しんめい}部落では元旦から七日まで毎晩近所の子どもから青年までが通称「お医者さん」の三橋家を宿にして集まったそうです。カルタをしたりみかんや甘酒を振舞われ楽しかったとご近所の三橋良雄さんが「昔の遊び」に書いています。晩年、酒豪の祖父泰一は診察が終わると、良雄さんのお父さんと縁台で一杯やるのがなにより楽しみだったそうです。ともかく人の出入りが多く祖母は家の維持が大変だったでしょう。母からちらっと聞いた話では甫と村雄が自由民権運動にかかわってだいぶお金を使い借金も残したようです。古文書扱いの借用書も出てきましたよ。

医者の子は医者に

父弘は明治三一年、三橋家の一〇人きょうだいの九番目として生まれました。絵を描いてるほうが好きなのに医者になるのが当然と決められたようです。すぐ

上の兄千秋が東京大学医学部の内科に進んだので、父はあえて慶応大学医学部の外科を選んだようです。大正一四年に卒業し昭和四、五年頃、日本領樺太に行きました。家の束縛のない広い外地へ飛び立ちたかったのでしょうか。昭和三年に父泰一が亡くなっていますが弘は樺太豊原で三橋医院を開業しましたし、兄千秋もすでに東京で勤務していたので小野の三橋医院は終わりました。

昭和六年頃、父と母は結婚したようです。二人は樺太で暮らしました。父は無口な人でしたから樺太でのこともあまり話しませんでした。三橋医院では日本人もロシア人も診たそうです。また母校の慶応大学からのインターン生を何十人も受け入れたと言っていました。当時、樺太の日本人の暮らしはずいぶんとよかったそうです。父も狩猟やテニスを楽しんだようです。

昭和二〇年八月一五日に終戦。樺太の日本人は日ソ不可侵条約を信じて、のんびりしていたようです。が、ソ連軍の進駐で大混乱。もちろん病院は没収されました。その頃のことを両親はほとんど話しませんし、戦後平和になってもけつしてサハリンを訪れようとはしませんでした。

終戦のとき難を恐れて写真をはとんど焼いたそうですが、なぜか今も手元に一枚だけ写真の切れはしが残っています。わたくしとロシア人の女の子エンマちゃんの写真が写っています。母が「エンマちゃんはカリエスだったからもう生きてないかも」とふと話していたのを思い出します。

樺太豊原

一九〇四（明治三七）年、日露戦争開始、翌年ポーツマス条約締結により、サハリン島の北緯五〇度以南を日本領として獲得。豊原には樺太庁が置かれた。現在のロシア連邦サハリン州ユジノサハリンスク。

樺太からの引き揚げ

昭和二年に母とわたくしは函館に引き揚げました。父は医者ということで帰してもらえず、二三年まで嘱託医としてサハリンに残りました。父は日本に帰るとき貨車二台を借りて荷物を積んだそうです。いっしょに帰国する人の分も載せてあげるうちに自分は娘の雛人形と津軽塗りのテーブルだけ持ち帰りました。今でもそれはこの家の倉に残っています。それを見ると母は「お父さんはこれだけしか持つて帰らなかった」と嘆いていました。でも雛人形は父親の娘への思いなのでしょいか。今の年齢になってやっとその心がわかってきました。

父は引き揚げ後、母のついで札幌に近い三笠の住友石炭鉱業の病院長になりました。ここは炭鉱町でそのころ石炭は黒いダイヤといわれ大変景気のよいときでした。わたくしもここで小学一年生になりとても恵まれた生活でした。スキー、スケートもここで覚えたのです。

昭和二九年に父が東京に戻ると言い出しました。とはいえ慶応大学との関係に期待ほどのものがなく、心ならずも奥多摩、次いで青梅の診療所に勤めました。その後鎌倉の長谷、鵜沼で開業しましたが外科医は体力と視力が勝負なのでやがて医院を閉め、伊勢原市成瀬の診療所に勤務しました。でもまだここ小野にもどる気にはなれなかったようです。

住友石炭鉱業

一九二七（昭和二）年設立。

現在の三笠市内に奔別に幾春別の炭鉱があった。七一年閉山。

昭和三四年、家族で一大決心をして父の生まれた土地に帰りました。当時父は県庁の国保審査会に勤務していました。五一年頃でしょうか、七沢の神奈川リハビリセンター脳血管病棟の嘱託医になり八〇歳くらいまで勤務しました。その後二、三年企業の検診車で医者として仕事をしていました。最後まで医術にたずさわっていましたが、絵描きとか、別の世界に生きる夢をどこかに持っていましたね。絵は外科医らしくとても正確に描いていました。ただ母は樺太で地位も財産も人間関係も失くし修羅場を経て、どこか喪失感がある父だったと言っていました。晩年は得意のじゃがいもとベーコンの料理をしたり、庭のバラの手入れをする静かな日々でした。

旅のような母の半生

わたくしの母松代はちよつと複雑なんです。出雲の世良田家せらたの出で、明治三十七年北海道函館で生まれました。父親は医者で開拓時代の道内各刑務所を馬で往診していたそうです。函館にいた子どものいない旧高遠藩の学者丸田喜生きせいの養女になりましたが、昭和九年、函館の大火で実父、養父とも亡くしました。母は函館を訪れた帰り、樺太への船中で知ったそうです。夫はいても二人の父を悲惨な大火で失った母の心は孤独だったようです。丸田家の墓は新宿内藤町の太宗寺たいそうじにあ

国保審査会

神奈川県国民健康保険審査会
は一九四八（昭和二三）年に
設置され国保に関する審査、
採決を行った。

函館大火

函館は火事之多発地帯だが、
一九三四（昭和九年）三月二
日の大火は戦前の日本四大火
災の一つ。罹災人口一〇万二
〇〇〇人、死者二〇〇人以
上。

ります。母が守っていました、亡くなってからはわたくしが一人でお墓参りに行っています。墓守がいます、これをどうしようか迷っています。

厚木の小野は父がいずれもどるべきところでした。それでわたくしが生まれるまで、戦前、母は度々内地に来ていました。船で稚内へ渡り、汽車と青函連絡船、また汽車と数日かけて京都の親戚や小野を何回か訪ねています。小野にはしゅうとめの勢以がおりました。息子の千秋と弘が生活の援助はしていました。子どものいない七女の寿々子夫婦が留守番をかねて勢以の世話をしていました。母は厚木に来ると勢以といっしょによく温泉に行つたと話していました。湯河原で二人並んだ写真も残っています。勢以が大きな狐の襟巻きをしているのも何枚かあります。母の樺太土産だったのでしよう。

母もまた支えた三橋家

昭和二十九年に北海道を離れ、家族三人で奥多摩の診療所に移りましたが、わたくしは小学校五年生でした。次の青梅では両親は教育を考えてわたくしを町田の玉川学園中等部に入れました。

学校には寮があつたので一年間は寄宿生でした。その後は転居先の自宅から通学しました。父が鎌倉の方で開業しているときは個人病院ですので母が入院患者



キツネの襟巻をした勢以

の食事の世話などとしても大変そうでした。当時は包帯を洗って干し、全部くるくる巻いて再使用しました。わたくしも帰宅すると包帯巻きを手伝いました。母は昭和三四年、夫にしたがつて小野への定住を決心しました。

まめに厚木に来ていた母はあそこの畑はどうなったとか、親戚やご近所との関係など、かなり知っていました。何かにつけその事情を一人っ子のわたくしに伝えようと思いました。もっともその頃はあまり興味もなくなりましたに聞いていましたね。

小野のこの家を父は医院として再開しませんでした。祖父泰一没後三〇年以上の空白があり、このあたりの人はほとんど伊勢原の吉沢医院へ行っていました。お産も伊勢原の産院に行くんです。父が今の玉川公民館近くの診療所に医者を紹介しましたが、患者が来ないので居着きませんでしたね。このあたりの人は何かにつけ伊勢原とのつながりが濃いようです。土地の人とは違った道を歩いてきた母は馴じむのに苦労したようです。でも複雑な人間関係で成長し、結婚後も北から南へ旅するように移動する夫についてきた母は強かったですね。積極的に夫、家族、旧家を支える道を歩いた人です。思えば祖母勢以も同様に複雑な旧家を支える一生でした。

わたくしは千葉潤です

わたくしは両親が結婚後一〇数年ぶりにやっと授かった一人娘です。父が四五歳、母が三九歳の時の子どもでした。樺太の豊原で幸せな子として歩み始めました。日本の敗戦後、昭和二十一年、母と二人函館へ引き揚げました。その後は両親とともに国内あちこち移り住みましたが、三十一年には玉川学園中等部に入學。なかなか学校に馴染めず苦しかったです。あちこち動いてきたわたくしは今でいう帰国子女のようでみんなと少し雰囲気違っていただけなのでしょうね。いじめに近い経験もしましたが先生や友人のお陰で卒業し、玉川大学教育学科に進学しました。もともとスキー、スケートなどスポーツが大好きだったので。デンマーク体操が盛んだった大学では体育を専攻しました。四一年に玉川学園小学部の体育教師になりましたが、翌年、結婚のため退職。

夫は千葉胤和^{たねかず}、会社員です。父は医者の家系を続けるために婿をとるなんてまったく考えない人でした。その上、母も三橋の姓にこだわりました。根が自由人なのでしょう。時代の先を行った先祖の血筋なのでしょう。それでわたくしは千葉潤です。おじ三橋千秋の息子も医者を辞め、二人の娘も他家に嫁ぎ代々の医者稼業も三橋姓も終わりました。

わが家では四三年に娘が生まれ、両親に孫の楽しみをプレゼントできました。

玉川学園

一九二九（昭和四）年、小原国芳が全人教育を信条に創立。現在は幼稚園部、小学部、中等部、高等部、大学、大学院まで設置。

やがて小野の家、土地の維持も大変になってきたので五七年、わたくしたち家族三人は両親の住む家に帰りました。六〇年に父を八六歳で、平成二年に母を八六歳で見送りました。最後の数年をいっしょに暮らせてほんとうによかったです。両親と先祖の甫・村雄の墓などは現在、富士霊園にあります。

帰郷後のわたくしたちは、つかず離れずつながっていた先祖の土地のためか、すんなり受け入れられました。わたくしも玉川公民館活動にも参加し、また民生児童委員として地域に積極的にかかわっています。

家の前に神明神社というほんとにささやかな祠があり、毎年七月三十一日、八月一日にここで地域のお祭りをします。ご馳走を持ち寄ってワイワイと楽しいですよ。なんとなく根っこに帰ってきたように思えます。

聞き取り

二〇〇七年二月一五日
二〇〇八年三月九日

六月一六日

余 話

厚木の小野には今も里の風景が残ります。この地の黒堀の旧家三橋家を訪ね、家を守っていらつしやる千葉潤さんにお会いしました。彼女の曾祖父三橋甫・祖父村雄はこの家で医師をし、また民権結社万有社を結成しました。一八八二（明治一五）年一月二七日、東京横浜毎日新聞の肥塚龍を講師に村内の聞修寺で三〇〇人あまりの僧俗老幼男女を集め、盛大に自由懇親会を行いました。

民権家医師の家にはいつも何人かの食客がいて借金をしてまで世話をしていたようです。書家・画家である喜多梅巖も滞在し、三橋（現、千葉）家には書画が何点か残されているそうです。壁に掛けられた梅巖の牡丹の画を拝見しました。

三橋家の柱として仕切っていたのが潤さんの祖母勢以さんです。父弘さんはしがらみの多い故郷を若くに離れ外地へ、母松代さんも一力所に留まらない道を歩んだスケールの大きいご両親です。樺太生まれの潤さんも一九八二（昭和五七）年、小野に定住するまで各地での生活体験をお持ちです。帰郷当初、ご近所さんから「なにごととも平（てえ）らかにやってくれよ」と言われ、大変困惑されたそうです。やはり旧い梓に収まらない三橋家の血をうけ継いでいらつしやるのでしょうか。

愛甲郡の女性史年表（一八六八～一九四七）

凡 例 (年表)

- 一、本年表は一八六八（明治元）年から一九四七（昭和二二）年までを扱った。
 - 一、上段に郷土（現、厚木市・愛川町・清川村）の女性の動き、下段に一般情勢を記した。左頁には年表補足資料を掲載、年表欄に★で示した。
 - 一、年次、月日の表示は西暦を使用。和暦をいれる場合は（ ）内に記入。
一八七三（明治六）年一月一日の太陽暦採用以前については旧暦を使用。
文中の西暦の記述は簡略にして用いた。（例、一九四五年↓四五年）
 - 月のうち、日付が不明・不確実のものは、―を用い、その月の最後に記した。
年が判明して、月日が不確定なものはその年の最後の欄に一括して記した。
 - 一、年月日、年齢は原則としてアラビア数字を用い、その他は漢数字を用いた。
 - 一、左頁資料は、史料からそのまま、あるいは省略して写した。
- そのため現在では使われない差別用語なども含まれている。原史料の旧漢字は新漢字に改めたが、仮名づかいは旧のままにした。

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一八六八(明治元)	11・― 下荻野村に藩学校興讓館設立。77年荻野山中学校となる	9・8 明治と改元
一八六九(明治2)	―	6・17 版籍奉還
一八七〇(明治3)	1・18 宮ヶ瀬村の川瀬十郎右衛門三女さと、横浜滞留米国人D G スミスのもとに家出し結婚。のちサンフランシスコに渡り 79年に一時帰国するが米国に永住	
	2・10 宮ヶ瀬村の川瀬さとの姉つな家出、横浜で中国人の菜と結 婚。のち香港に永住	
一八七二(明治4)	8・― 妻田村に郷学校静学館設立。教師は岡藩士。読書・習字・ 算術・漢学・皇学を教え、入学金五〇錢、謝礼一か年二 円。73年小学静学館、77年妻田学校、92年尋常高等清水小 学校となる	4・4 戸籍法制定
	9・21 山際村に郷学校淳風館設立。73年山際学校となる。 73年上依知村に上依知学校設立。77年に両校併合して山 際学校、92年に尋常北依知小学校となる	7・14 廃藩置県により荻野山中 県設置
	・― 小野村聞修寺に郷学校博文社を設立、73年3月に廃止。73 年6月に小野村に崇立館小野学校設立。生徒数女一八人男 四九人	
	10・― 厚木町長福寺に郷学校成思館設立。72年の生徒数、女五八 人男六九人。73年小学成思館、86年厚木学校、91年尋常高 等厚木小学校となる	11・14 山中藩が足柄県に統合

一八七六年愛甲郡の公立小学校生徒数と教員数

学校名と所在地	女教員 (人)	男教員 (人)	女生徒 (人)	男生徒 (人)
崇立館(長谷村)	0	2	16	59
小野学校(小野村)	0	2	15	56
古沢学校(下古沢村)	0	2	14	42
七沢学校(七沢村)	0	2	16	41
戸室学校(戸室村)	0	3	17	32
煤ヶ谷学校(煤ヶ谷村)	0	3	17	68
宮ヶ瀬学校(宮ヶ瀬村)	0	1	11	34
成思館(厚木町)	0	5	63	76
船子学校(下船子村)	0	2	16	58
淳風館(山際村)	0	3	20	70
金田学校(金田村)	0	4	15	63
上依知学校(上依知村)	0	2	16	42
静学館(妻田村)	1	3	36	49
三田学校(三田村)	0	3	27	55
興讓館(荻野山中)	0	2	52	71
飯山学校(飯山村)	0	3	23	56
千頭学校(飯山村)	0	3	22	57
上荻野学校(上荻野村)	0	4	17	79
知新館(下川入村)	0	4	29	55
作新館(中津村)	0	4	38	136
養成学校(田代村)	0	4	15	42
角田学校(角田村)	0	2	21	57
三増学校(三増村)	0	3	17	41
半原学校(半原村)	0	4	59	92
総数	1	70	592	1431

(『神奈川県教育史』より作成)

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一八七二(明治5) 一八七三(明治6)	2・1 半原村和平観音堂に半原学校設立。77年小学養成館半原学校、87年公立高等併置半原小学校となる。 3・1 飯山村に郷学校興讓館飯山学校設立、生徒数三〇人。同年千頭に興讓館千頭学校設立、生徒数一五人。7月古沢村に崇立館古沢学校を設立、生徒数約三〇人。89年に三校併合して尋常高等小鮎小学校となる。 5・19 妻田村に小学静学館三田学校設立。76年に小学三田学校、87年尋常三田小学校となる。 5・25 煤ヶ谷村に崇立館煤ヶ谷学校設立。77年に煤ヶ谷学校、93年尋常高等煤ヶ谷小学校となる。 ・1 長合村に郷学校崇立館設立。78年長合学校、92年南毛利小学校となる。93年生徒数二九一人。 6・21 中津村竜福寺に救幣館を設立。74年に作新館、77年に中津小学校、92年尋常高等中津小学校となる。 ・1 上萩野村に郷学校小学静学館設立。76年上萩野学校となる。86年萩野山中学校と合併し萩野学校、92年尋常高等萩野小学校となる。 7・10 田代村長福寺に田代養成学校設立。76年に田代学校、93年尋常高等田代小学校となる。 ・20 七沢村に崇立館七沢学校設立、74年の生徒数四二人。93年に崇立館小野学校と合併して玉川小学校、一九〇八年尋常玉川小学校となる。	8・3 学制頒布 1・1 太陽曆実施(72年12月3日を73年1月1日とする) ・10 徴兵令布告 2・24 キリシタン解禁 3・14 外国人との結婚禁止を解除 7・28 地租改正

愛甲郡公立小学校沿革 (1)

1868年(明治元年)	興讓館					
1871年(明治4年)			淳風館			
1873年(明治6年)	静学館	金田学校	上依知学校		興讓館飯山学校	成思館
1877年(明治10年)	山中学校	上荻野学校	依知学校	山際学校	興讓館千頭学校	及川校
					飯山学校	妻田学校
				知新館 下川入小学校	崇立館古沢学校	厚木学校
1887年(明治20年)				棚沢小学校		
1892年(明治25年)		南依知小学校	北依知小学校			
1926年(昭和元年)						
1941年(昭和16年) 国民学校となる						
1947年(昭和22年) 町・村立小学校となる	荻野小学校	依知小学校	菁莪小学校	小鮎小学校	清水小学校	厚木小学校

(各学校史などより作成)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一八七三(明治8)	8・― 宮ヶ瀬村に崇立館宮ヶ瀬学校設立。80年宮ヶ瀬学校、92年尋常宮ヶ瀬小学校となる	
	12・― 金田村に金田学校設立、77年依知学校、92年尋常南依知小学校となる。一九二二年に尋常北依知小学校と合併して尋常高等依知小学校となる	
一八七四(明治7)	この年 角田村福泉寺に角田小学校設立。三増村棟岩院に三増学校設立。94年に両校合併して高峰村尋常高等小学校となる	1・17 民撰議院設立建白書提出
一八七五(明治8)	10・11 私立厚木病院、厚木町に開院。院長青柳裕と医師二人	1・8 文部省、学齡を満六歳から一四歳と定める
一八七六(明治9)	11・― 女性宣教師クララ・A・サンスは、上溝・長後・厚木・原町田・小田原・川崎などで伝道開始	
一八七七(明治10)	この年 厚木町には三〇軒の茶店。寄留女性(子守・女中も含む)二〇〇人、女髪結六人、絃妓八人	4・18 足柄県を神奈川県に併合
	4・17 荻野村中荻野の農業某、節句の餅に色付けのため花緑青を入れ、家族八人が苦しむ	2・15 西南戦争(9・24)
	8・― イギリス聖公会のウイリアム・ライト、大山に避暑にきて玉川村小野の吉沢源三家を訪れ、源三と三人の息子に洗礼を授ける。以後、毎月伝道師を派遣★	5・1 博愛社(のちの日本赤十字社)創立
一八七八(明治11)	2・― W・ライトと伝道師飯田栄次郎・加藤、小野・下荻野に来る。飯田は小野に二週間滞在して聖書講義。以後、毎月ライト・飯田らが来て、6月には厚木町で一〇〇人の聴衆に説教	

愛甲郡公立小学校沿革（2）

1871年(明治4年)	博文社		静学館	救弊館		田代盛義		崇立館	崇立館
1873年(明治6年)	崇立館小野学校	崇立館七沢学校	三田学校	作新館	角田学校	三増学校	半原学校	煤ヶ谷学校	宮ヶ瀬学校
1877年(明治10年)		長谷学校	三田学校	中津学校			日向学校	煤ヶ谷学校	宮ヶ瀬学校
							養成館半原学校		
1887年(明治20年)									
1892年(明治25年)									
1926年(昭和元年)									
1941年(昭和16年)									
国民学校となる									
1947年(昭和22年)	玉川小学校	南毛利小学校	三田小学校	中津小学校	高峰小学校	田代小学校	半原小学校	煤ヶ谷小学校	宮ヶ瀬小学校
町・村立小学校となる									

(各学校史などより作成)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一八七八(明治11) 一八七九(明治12)	12・2 4・18 愛甲郡役所、厚木町に開所 W・ライト、神学生一人とともに、小野村・上荻野村・中津村・三増村・角田村・上溝村・下依知村をめぐって伝道(24日) 三田村の節婦猪又シゲ、表彰を受ける 伝道師飯田栄次郎、中津村・小野村・飯山村・下荻野村・厚木町などで説教 この年 半原で養蚕・生糸製造に従事する女子四一〇人、紡績水車を業とする者三四人	3・25 第一回県会(5・21)
一八八〇(明治13)	3・1 8・1 W・ライト、愛甲郡に出張 飯田栄次郎、中津村の定住伝道者となり、9月には内野文叟とともに厚木町の福原宅を説教所に伝道開始 厚木上町豊田屋の裏から出火、一三〇戸焼失 中津村の内野村三郎内に小会堂永生教会が完成して、この地の伝道の中心となる ★	4・5 6・8 集会条例制定 相州九郡の総代一四人、国会開設建白書を元老院に提出
一八八一(明治14)	12・9 3・1 4・28 この年 明治天皇、近衛歩兵の春季大演習監督のため妻田村永野家に滞在。戸毎に国旗とほおずき提灯をかける 郡内の人口、女一万四〇八八人・男一万四六九三人	6・13 10・2 10・12 厚木町に共話会設立 自由党結成大会 国会開設の詔勅
一八八二(明治15)	2・1 3・26 W・ライト、妻の病いのため英国に帰国 厚木町天王町で大火、四九戸焼失	2・1 厚木町に相愛社設立

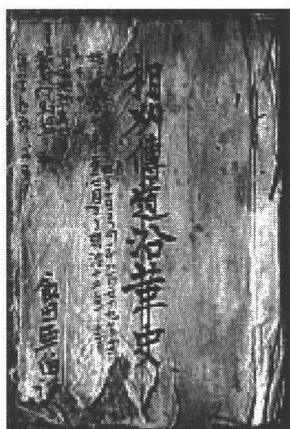
相州地区でのキリスト教布教

一八七三年のキリシタン解禁後、この地でキリスト教布教を始めたのはアイルランド生まれの英国教会（聖公会）系の司祭ウィリアム・ライトである。

W・ライトの伝道開始の時期、きつかけには三説がある。飯田栄次郎の『相州伝道沿革史』では、七五年W・ライトが東京四谷筆筒町に英語学校乙亥学舎を開設しここからの伝道を計画した。この年、英語学習のため入学した相州小野村の吉沢源三の二男・豊がクリスチャンになった。帰郷後の七七年、W・ライトを招き相州伝道が始まった。

『クリストファ直江吉沢自叙小伝』によると七五年、小野村の吉沢源三家に偶然一人の外国人が西洋野菜を求めて訪れたのがW・ライトであった。以後、毎月訪れて伝道をするようになった。東京の小学校教員時代メソジスト教徒から英語を学びキリスト教に関心を持っていた源三の三男・直江や弟妹が、七七年には父と長男・長春、ほか数人が受洗した。直江はW・ライトとともに来日していたA・C・ショウの導きで聖公会に入り、九二年に司祭になり、日本聖公会創世記の大長老と言われた。

前二説のほかに、吉沢源三の母天都の実家中村繁造家（中津村）の言い伝えに基づく説がある。吉沢長春が大山阿夫利神社でとても気さくな外人に会い、ウマが合つて小野村まで連れてきた。それがW・ライトだというのだ。ライトの大山行の記録から七五年の事と推測されている。



『相州伝道沿革史』

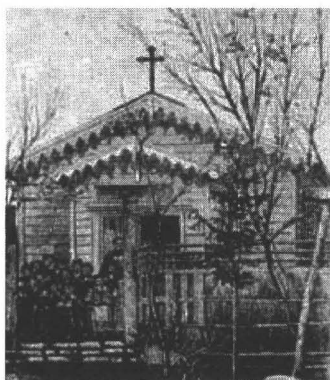
年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一八八二(明治15)	9・― 森甚太郎の妹きく、大矢正夫と結婚。天野政立を媒酌人に中荻野の戒善寺で挙式。 この年 クララ・A・サンズ・苗村かく・重本千代伝道師ら、厚木周辺で日曜学校を中心に講義所を開設し伝道 この年 厚木町の遊里には、芸妓九人、酌人(半玉)五人	4・16 大隈重信ら立憲改進黨結成 7・30 愛甲郡の難波惣平ら九人自由党に入党 この年 愛甲郡下各村に結社結成。万有社(小野村)、共研社(煤ヶ谷村)、晩成社(飯山村)、有理社(長谷村)、興眠社(上荻野村)、革風社(中津村)、共話会(厚木町) 荻野村に学術研究会愛甲講学会設立
一八八三(明治16)		1・16 荻野村に学術研究会愛甲講学会設立
一八八四(明治17)	1・30 厚木町仲町下町で大火、一〇二戸焼失 2・― 厚木町の町民約二〇〇人、秦野(秦野市今泉)白笹稲荷の狐石像一対を寄進。女性は、芸妓美奈登家メ吉・佐々木美佐吉・三代次メ太・向井てう・菊月志げら 5・― 四月から五月にかけて愛甲郡荻野村に愛甲婦女協会創立。	4・20 郡自由党员、厚木町に星亨ら迎え政談演説会 8・2 植木枝盛、荻野で政談会 10・29 自由党解党 秩父事件

中津村永生教会

一八八〇(明治一三)年頃、W・ライトの農村伝道は小野村から中津村に及んだ。吉沢源三の紹介で母親天都の実家中津村戸長中村繁造家を訪ねたことから始まる。中津小学校の元校長内野文叟・内野村三らが熱心に協力、やがて受洗。八一年には飯田栄次郎が中津村伝道師として常住。民家を教会堂にして毎日曜夜、聖書の講義をした。

W・ライトの福音宣教会会などの援助で八一年永生教会完成。しかし飯田が去りライトが帰国すると教会は急速に衰え、まもなく閉鎖された。

後談だが永生教会の建物は下川入村の小学校建設の一部に利用されたという。この学校が菁莪小学校である。



中津村永生教会

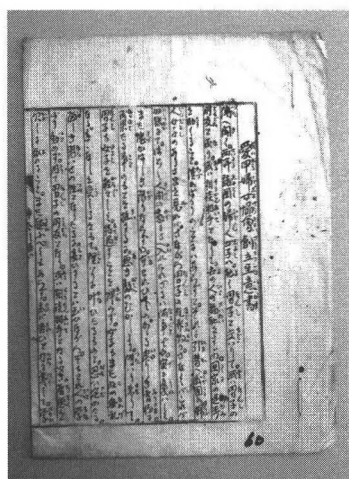


菁莪小学校

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一八八四(明治17)	会員は天野政立の妻八重・山川市郎の妻えんら、自由民権運動家の妻や妹たち。趣旨は、男性の相談相手になり、演説会や懇親会に参加し、知徳の修得に努めること ★	11・19 武相困民党結成
一八八五(明治18)	4・― 景山英子ら、下荻野村の難波惣平・天野政立を訪問、朝鮮改革運動(大阪事件)の資金集めをする。山川市郎は二〇円を拠出 ★	2・― 郡一町二七村五八七人の地租軽減嘆願を元老院へ建白
	この年 荻野村の神崎正蔵・難波富雄ら、養蚕改良を目的に飼育伝習所相愛社を設立	11・23 大矢正夫・景山英子ら朝鮮改革運動の渡韓グループ、長崎で逮捕
	この年 厚木町下町に生糸取引の市場開設。生糸市を互(五)市と呼んで、毎月五の日に糸市を開催、「二七の市」はじまる	12・22 内閣制度創設、第一次伊藤博文内閣成立
一八八六(明治19)	4・― 荻野村に伝染病隔離病舎設立	4・10 小学校令公布
一八八七(明治20)	4・― 三増村・角田村の二村を合併。高峰村となる	12・26 保安条例公布
一八八八(明治21)	この年 依知村山際に梅沢義三郎・梅沢忠一郎・中丸和三郎・林五郎次、蚕の飼育伝習所順気社を設立。下依知村に飼育伝習所勇盛社を設立	4・25 市制・町村制を公布。女子の選挙権・被選挙権を認めず
一八八九(明治22)	10・― 高峰村の大矢安五郎と養母せん、自然石の灯籠を摩利支天石祠境内に寄進	2・11 大日本帝国憲法発布 4・1 愛甲郡の一町三八か村が、一町一六か村に この年 凶作による米騰貴を契機に経済不況

愛甲婦女協會創立主意書

伝へ聞く。西洋諸国の婦人女子は。能く男子と交はりて。或は男子
 の朋友と成り。或は相談相手となりて。世の人の福祉をすゝめ。国家
 の進歩を助くること。僅かばかりのことにはあらずと。それに引替
 へ。我國の。婦人女子のありさまを見れば。さながら男子の玩弄物
 か。さなくばこれが奴隸にて。ほとく人間の數にさへ。入れられざ
 るは何事ぞや。実に憂はしく。また愧かはしき限りならずや。今われ
 ひとの。かゝる卑しき有様に。成果たる事のもとを推するに。悪き教
 のむかしより。伝はり來りて。男子も女子を輕くしく。待遇すこと
 を憚らず。女子もまた此の無礼なる。もてなしを受くるをもて。理
 はりに叶ひたるものと。思ひ定めたる。陋しき習はせの性となりたる
 に。基ひするとは云ひながら。そもわれ人の学はす勉めず。因て男子
 の朋友となり。或は相談相手となるべき。智徳を欠しに依れること。
 また疑ふべくもあらず。去ば吾ひと力を尽して。学の道に心を潜め。
 只管ら智徳を養ひなば。男子の朋友相談相手と。成は物かは西洋諸国
 の。婦女子たちにも。恥ざる程に成り行んこと。難からざるべし。な
 どて吾人此事に。力を尽さず。此頃吾曹うちつどひて。丈夫
 たちの催されたる。演説会てふものに罷出て。彼の人達のとときめさ
 れたる。憂れたき言葉を聞くにつけても。思ひ合はすること多く。終
 に同志をかたらひて。此会を開くことゝはなりぬ。あわれ我。皇御国
 の。人の母たる人々よ。慷慨き心を奮ひ起して。吾曹とゝもに。この
 くわいの。榮を謀り玉へかし。吾曹は婦女子の幸福の為に。また我國
 の進歩の為に。切にこれを祈るなり。切にこれを願ふなり。

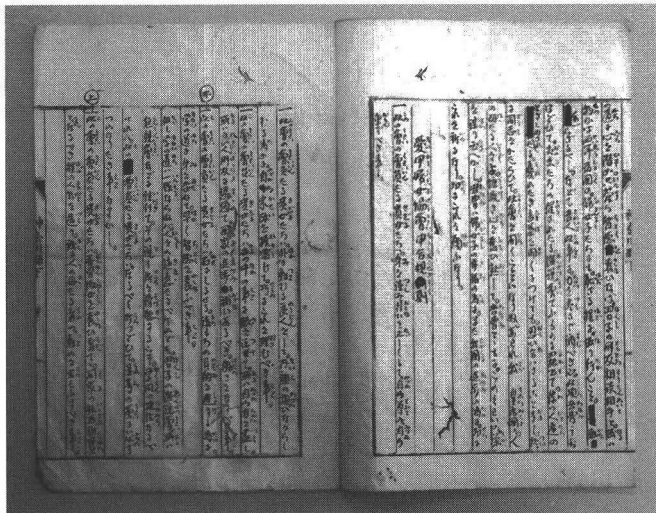


愛甲婦女協會創立主意書
 (難波春美家所蔵)

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一八九〇(明治23)	4・8 玉川村の住民二人、聖公会監督(主教)ピカステスより堅信礼を受ける。11日、伝道師今井寿道より男女七人洗礼を受ける 5・12 今井寿道・吉沢直江、玉川村で聖餐礼を実施 6・― 愛川村半原に甘利器械製糸所創立。この年の延べ職工数女九〇〇〇人、男六〇〇〇人 10・28 聖公会の伝道師田中則貞ら二人、小野村で説教会、約三〇人が聴く。29日荻野村の三橋幹雄宅で説教会と祈禱会。30日飯山村某宅で説教会。聴衆約一〇〇〇人	2・1 『横浜貿易新聞』創刊。04年7・1『横浜新報』に改題 7・1 第一回衆議院議員選挙集会及政社法公布、女子の政治活動を全面禁止 10・25 教育勅語発布 11・25 第一回帝国議会招集。初代衆議院議長中島信行
一八九一(明治24)	1・4 聖公会伝道師、小野村の三橋巳之吉宅で説教会。来会者少数。5日玉川村の石川伝吉宅で来会者男女四〇人以上。6日中津村矢後駒吉宅で来会者約二〇人、8日荻野村の松坂屋で三〇人以上、9日愛名村三〇人以上 この年 厚木町の湯銭は七厘、白米は一升八錢五厘。厚木警察署は、厚木・愛甲の賃金を調査。農業雇女の年給一〇円、男は二〇円。製糸女工の日給二〇銭	9・7 愛甲郡厚木町で、聴衆約一五〇〇人を集め立憲改進党演説会開催 この年 私塾、山際漢字研究所開設
一八九二(明治25)	4・― 中津小学校、高等科を設置して村立尋常高等中津小学校と改称。尋常小学校の教科目は修身・読書・作文・習字・算術・体操。高等小学校は修身・読書・作文・習字・算術・日本地理・日本歴史・理科・図画・体操・女兒のために裁縫を加える	

愛甲婦女協会申合規則

此の会の会員たる貴女たちは。身を謹み。行ひを正しくして。自ら尊み。自ら重すべき事。此の会の会員たる貴女たちは。外に勉むる良人をして。内顧の煩ひなからしむるために。自ら家政を担当して。巧にこれを理むべき事。此の会の会員たる貴女たちは。世の中の事に眼を注げて。或は自ら力を尽し。或は良人朋友に從つて。国家の進歩に補ひあるべき。働きをなすべき事。此の会の会員たる貴女たちは。善男淑女を養ひ育て。国家の柱石財宝とも。なるべき程の人物をつくり。誠に人の母たる者の。勉めを全たふすべき事。此の会の会員たる貴女たちは。右に示るせる。諸の目的を達する為に。学の道に身を委ねて。早く智徳を養ふべき事。但し学の道は。一様ならねば。人々の随意たるべけれども。男子の演説会。或は懇親会などに往行て。その説く所を傍聴するこそ。学問の捷徑なるべければ。此の会の会員たる貴女たちは。なるべく打つどひて。是等の会には必ずつらなりたき事なりかし。



愛甲婦女協会申合規則

(難波春美家所蔵)

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一八九二(明治25)	12・5 棚沢・下川入両小学校を合併して棚沢村に菁莪小学校設立。一九一三年尋常高等菁莪小学校となる。66年廃校	4・1 神奈川県南多摩・北多摩・西多摩三郡を東京府に移管
一八九三(明治26)	7・14 天野八重没	11・22 文部省、実業補習学校規程を公布
一八九四(明治27)	4・1 村立尋常高等中津小学校、知事の許可を得て5月20日〜6月20日の間に15日間の養蚕休業日限を定める。高等科の各学年に唱歌科を加える	8・1 日清戦争開始 各地に女性軍事援護団体設立
一八九五(明治28)	この年 日清戦争での厚木地域戦死者二人	1・29 文部省高等女学校規程制定
一八九六(明治29)	8・1 村立尋常高等中津小学校、知事の許可を得て8月1日〜9月15日の間の15日間を暑中休業日と定める	4・17 日清講和条約 10・8 閔妃暗殺事件
この年	厚木警察署は、厚木・愛甲の賃金調査。農業雇女年給一一円・男二五円。製糸女工二五円	
一八九七(明治30)	2・10 厚木町で大火。天王町松屋料亭より出火、二五三戸焼失。町役場・郡役所・警察署・小学校・登記所・厚木神社焼失。郡内赤痢患者、女四〇七人・男五〇五人、死亡女八六人・	12・17 文部省、男女別学に関して訓令

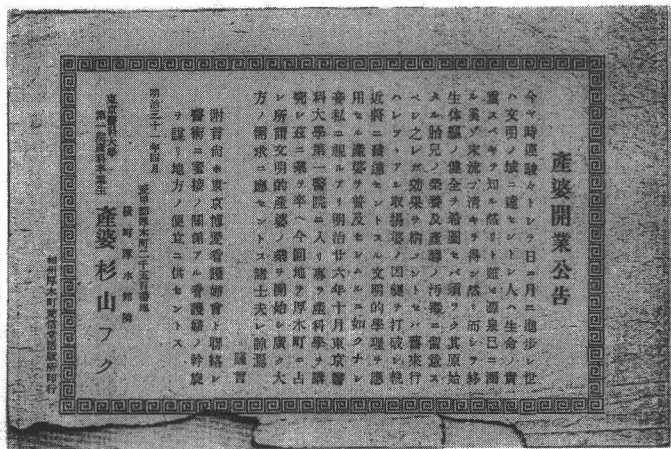
大阪事件と愛甲郡グループ

一八八五（明治一八）年、大阪事件は朝鮮改革計画として旧自由党左派の大井憲太郎、小林樟雄らによつて画策された。計画では旧自由党壯士を朝鮮に派遣し、事大党政権を打倒して金玉均らの独立党の政権を樹立する。これに清国軍が反撃して日・清・朝の紛争となり、その勢いで内政改革も実現可能となる、というのが筋書きであつた。この朝鮮改革計画に、神奈川県からは南多摩・愛甲・高座の旧自由黨員一六人が参加することになる。

愛甲郡の民権家の指導的立場にあつた天野政立は、八四年から八五年にかけてしばしば上京し、大井、景山英子らと会っている。八五年四月景山英子と富井於菟は下荻野村を訪れ旅舎松坂屋で難波春吉、佐伯十三郎、山川市郎と会い、この計画の渡韓資金調達を依頼、趣旨に賛同した愛甲郡グループはその後も資金を景山のもとに届ける。天野からも資金獲得がより必要と説得された愛甲・高座グループは八五年六月から一〇月まで五回、上荻野村岸十郎平宅や愛甲郡役所の公金輸送車を襲撃するなどして資金を得た。

この朝鮮改革計画は実行直前に発覚、八五年一月二三日大阪・長崎で大矢正夫、景山英子らが一斉に逮捕された。一二月二三日に霜島幸次郎、八六年一月に天野政立、山川市郎、黒田黙耳、難波春吉、佐伯十三郎とつぎつぎ逮捕された。裁判は大阪重罪裁判所で行われ、八七年九月二四日、判決がくだされた。

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一八九八(明治31)	男二〇人、腸チフス女四人・男九人、死亡女二人・男〇人、ジフテリア女一人・男一七人、死亡女四人・男九人 杉山フク、東京医科大学第一医院で産科学を学び、厚木町二五〇番地横町厚木館隣で開業。東京博愛看護婦会と連絡して看護婦を斡旋し地方の便宜を計る。この年の産婆数五人 ★ 高峰村に赤痢発生、三増に隔離病舎建設 厚木町に衛生組合設立 県、蚕種検査所を厚木町二七二七番地に設置 中津村に衛生組合設立、組合数九。99年、高峰村に衛生組合設立、組合数一九 愛甲婦女協会の山川えん没(50歳)。夫の市郎は大阪事件で、免訴出獄後の90年に没し、八人の子らとともに残された。えんの没後、子どもたちは親戚や他家に預けられ、次女の章は景山英子宅に預けられたこともある 中津村に伝染病隔離病舎建設	6・21 民法親族編・相続編公布
一八九九(明治32)	5・25 高峰村衛生組合認可、組合数一九 厚木町に厚木芸妓営業合資会社創立。資本金三〇〇〇円。 芸妓・置屋・見番を組織	2・8 高等女学校令公布 7・18 産婆規則公布
一九〇〇(明治33)	4・6 厚木町の町人ら、白笹稲荷の狐石像一対を寄進。厚木芸妓合資会社や津村セイほか三人の女性も含む 井出伊之助牧師、厚木町仲町の斎藤七三郎方で定住牧師と	2・23 大審院で娼妓の自由廃業を認める新判決 3・10 治安警察法公布、女子の



杉山フクの産婆開業広告

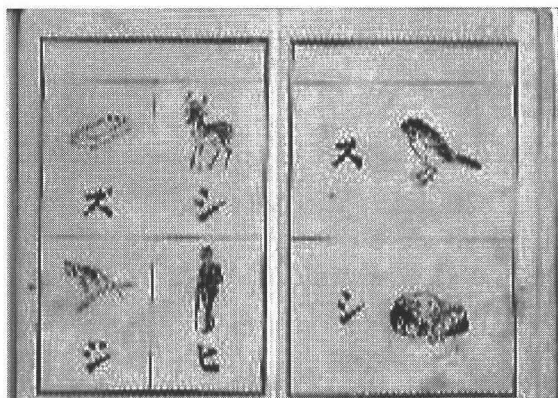


愛甲郡産婆会

前列 飛鳥井えい・杉本静江・杉山フク・神崎ツマ・金子マス
1932（昭和7）年7月

（『厚木医師会百周年記念誌』）

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九〇〇(明治33)	して伝道開始。齊藤家は、高座郡上溝の浸礼教会の伝道師水島与市の妻の実家 愛川村伝染病(赤痢) 予防事務所設置 甘利器械製糸場の職工数、女二〇二人・男三七人。相模興業株式会社、女三八人・男一一人 この年 村立尋常高等中津小学校、夏季休業は8月1日〜21日。冬季休業は12月25日から翌年1月7日と定める	8・20 政治活動を禁止 小学校令改正。義務教育年限を4年に統一 9・14 女子英学塾創立 10・ 神奈川県立高等女学校開校 12・5 東京女医学校創立
一九〇一(明治34)		2・24 愛国婦人会創立 4・20 日本女子大学校創立 5・25 中島(岸田) 俊子没 12・10 田中正造、足尾鉾毒事件を天皇に直訴
一九〇二(明治35)		1・30 日英同盟成立 4・ 日本女医会結成 4・3 『家庭之友(婦人之友)』創刊
一九〇三(明治36)	1・ 厚木町に蚕種同業組合創設。組合長大島正義 7・19 三田村清源院、私塾自証塾を開設。塾長は住職の和田寿静、講師鳥沢要哉。教育内容は国漢・物理・数学・英語・博物など。23年まで継続。二〇年間の塾生総数四〇五人、うち女子六人。長男無限が夜間部のみ継続したが41年、応召戦死で廃止 この年 下荻野法界寺住職曾我明随を中心とし女子教育の場として私塾技芸講習所を開所 ★	11・8 愛国婦人会神奈川支部結成 13 国定教科書令公布



1904 (明治 37) 年 国定教科書



愛甲郡立女子実業補習学校

第一回卒業生

1907 (明治 40) 年

(『夢はるか』)

愛甲郡立女子実業補習学校第一回卒業生

新井 義 (一八八九年一月一五日生) 談

わたくしは、小学校を卒業すると、荻野新宿の実科女学校へ寄宿生として入学した。この学校は、はじめ法界寺で開かれ、一年後、及川の農家へうつった。法界寺では奥の間が先生の部屋、中の間と座敷が教室であった。本科と別科があり教科は読方、算術、書方が主で、別科は裁縫が主であった。修業は三年で、わたくしも卒業証書をいただいた。先生は女の先生が多かった。

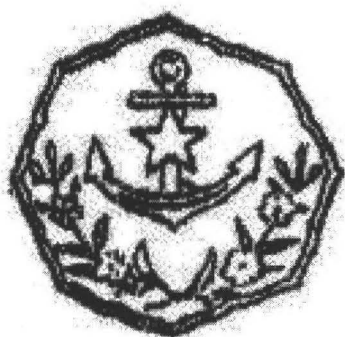
(『愛川町郷土誌』)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九〇四(明治37)	4・1 荻野村立尋常高等荻野小学校 国定教科書 修身・国語・歴史・地理・書き方を採用	2・10 ロシアに宣戦布告(日露戦争)
一九〇五(明治38)	この年 日露戦争の死者は、厚木地域五二人 この年 郡内の人口、女一万八八五三人・男一万八七二人 5・― 愛甲郡私立教育会 女子技芸講習所規程を定め、7月1日より厚木町で授業開始。目的は婦徳の涵養で、裁縫が主 11・23 井出伊之助牧師、厚木浸礼(バプテスト)教会を設立 この年 煤ヶ谷村立農業補習学校開校、21年、実業補習学校と改称 高峰村立農業補習学校を高峰小学校に付設開校。専科女子二人・本科男子一〇人、09年には裁縫と修身は吉田可祝が担任。21年、高峰村立実業補習学校となり、32年の生徒数は女子五〇人・男子一一〇人に発展。 郡内愛川村田代に農業補習学校開校。25年、愛川村立田代実業補習学校と改称。尋常高等荻野小学校付設農業補習学校開校。15年、女子部開設、20年実業補習学校と改称。私立の農業補習学校を中津村に設置 ★	この年 千人針の風習始まる。女の髪形二(三高地)流行 4・― 文部省、各女学校に社会主義思想の取締りを訓令 7・3 『婦人画報』創刊 9・5 日露講和条約調印 10・5 日比谷焼打ち事件 17 日本基督教女子青年会設立
一九〇六(明治39)	2・1 郡立女子実業補習学校、及川村一〇八六番地高崎宇三郎宅を臨時校舎として開校。初代校長は女性の鶴見貞。修学年限三年。定員は本科七〇人・選科二〇人・研究科一〇人。 ・26 郡立第一農業補習学校開校。続いて第二・第三・第四校まで設置したが、希望生徒少数のため11年、愛甲郡立実業補習学校に集約 23年、愛甲農蚕学校に、36年、県立愛甲農	この年 南満州鉄道(通称・満鉄)設立

愛国婦人会

一九〇一（明治三四）年二月、奥村五百子が中心となり戦死者の遺族や傷痍軍人の救護、慰問など社会事業への貢献を目的に創設された女性団体。神奈川県支部も〇三年一月に発会。公爵の妻岩倉久子が初代会長で皇族華族など上流夫人が多く会員となった。創立主意書は下田歌子を書いた。

奥村は全国の女性が半襟一つ節約すれば軍人援護が出来る」と全国遊説で訴えた。日露戦争を契機に大飛躍し日本一の女性団体となった。一九三七（昭和一二）年には会員数三八〇万人に増加。満州事変（一九三二年）、日中戦争（一九三七年）が始まる頃には白いかつぽう着に「愛国婦人会」と書いたタスキ姿で街頭に立ち「戦地の兵隊さんに千人針を送りましょう。どうか一針縫ってください」と協力をすすめた。戦時国債の宣伝、戦地の兵隊への慰問袋送付運動にも参加。



愛国婦人会のバッジ

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九〇六(明治39)	業学校となる 厚木町花柳界芸妓人気投票が行われる。当選者は、次 尋常高等南毛利小学校に農業補習学校付設 三田村外五ヶ村組合立尋常高等清水小学校付設農業補習学校・三田村外五ヶ村組合立尋常小学校付設農業補習学校開校。二校は25年に三田村立実業補習学校となる 郡立女子実業補習学校第一回卒業生は本科二一人選科三人 愛国婦人会県支部第二回総会、横浜で開催。県下の愛国婦人会員約一万六〇〇〇人中、愛甲郡は七四九人 ★	8・1 尋常高等南毛利小学校に農業補習学校付設 9・1 三田村外五ヶ村組合立尋常高等清水小学校付設農業補習学校・三田村外五ヶ村組合立尋常小学校付設農業補習学校開校。二校は25年に三田村立実業補習学校となる 11・1 郡立女子実業補習学校第一回卒業生は本科二一人選科三人 12・26 愛国婦人会県支部第二回総会、横浜で開催。県下の愛国婦人会員約一万六〇〇〇人中、愛甲郡は七四九人 ★
一九〇七(明治40)	2・11 郡宿屋営業組合が組織され、宮ヶ瀬村山本モト・煤ヶ谷村相模屋山口クマ・山田クジと男五人が加入 3・2 郡教育展覧会での優秀校は、愛川村平原小学校・荻野小学校・清水小学校・厚木小学校・煤ヶ谷小学校付属農業補習学校の生徒(ゝ6日) 9・1 郡教育会は通俗教育のため巡回文庫規定を設け、青年会・処女会に責任を委ねて各小学校で閲覧を行う 1・16 南毛利村尋常高等小学校訓導豊島フサ、中郡成瀬村尋常高等小学校へ転任 ・ 郡内各尋常高等小学校教員の昇級者、小鮎村小学校准訓導森久保モトほか男十二人 3・5 三田村組合会農会、屑簾整理実習会を開催。講師愛川村田島タキ・及川村浜谷ウタ。修了証書を九人に授与(ゝ11日)	1・11 神奈川県女子師範学校設置、4月開校 3・21 小学校令改正(義務教育年限を6年に延長)
一九〇八(明治41)	10・13 戊申詔書発布 この年 内務省、地方改良運動を展開	
一九〇九(明治42)		

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九〇九(明治42)	8・1 3月から厚木町・南毛利村・荻野村・中津村で麻疹が流行。患者は小児が主で8月までに約七〇人罹患、死者一人横浜貿易新報社主催の相模川鮎漁会、厚木町で開催。会費一人三円。参加者約一〇〇人。仕掛花火・打上花火・厚木総芸妓連の手踊りなど。この年芸妓二三人(5日)★ 9・4 県厚木町に蚕病予防事務所を設置。11年蚕業取締所となる 10・1 郡立女子実業補習学校生徒、小田原方面へ一泊の修学旅行を実施(2日) この年 郡内の蚕況良好で、養蚕人夫賃金は一日女約三〇銭・男四〇銭 この年 厚木町の衛生環境向上。各戸にごみ箱を設置し定期的に収集 2・11 郡内各尋常高等小学校、紀元節に戊申詔書奉読式挙行 6・ 依知村外一ヶ村組合立実業補習学校生徒、平塚まで川船利用で鎌倉方面に修学旅行。県立師範学校・名所旧跡見学。会費一人一元(7日) ・24 郡立女子実業補習学校の生徒四人、江ノ島・鎌倉に遠足。鎌倉の三橋旅館に宿泊翌日逗子・葉山を見学(25日) 10・1 中津村立実業補習学校開設。生徒定員女子三〇人・男子七〇人 11・4 玉川村実業補習学校、飯塚校長と植松訓導が全生徒を引率し箱根に遠足(5日) この年 県農会、蚕病予防事務所で稚蚕共同飼育を奨励。玉川村に稚蚕共同飼育所設置	10・26 伊藤博文、ハルビンで暗殺される この年 日本の生糸輸出が世界一位となる 5・25 大逆事件の検挙始まる 8・22 日韓併合条約調印 10・26 高等女学校令改正 実科高等女学校の制度を設ける この頃 全国各地の農村で、処女会・婦人会の結成が始まる
一九一〇(明治43)		

節婦の表彰状

愛甲郡煤ヶ谷村三千四百四十七番地戸主平民

落 合 サ ダ

資性温厚孝ニシテ貞曾テ夫ノ病魔ニ冒サル、ヤ専心其看護ニカムル四ヶ年
夫終ニ死亡セリ次テ養父亦病ニ襲ハレ全身自由ヲ失ヒ一挙一動皆他ヲ煩ハ
サル、可カラザルニ至ル是ニ於テ貧窶益々甚シク家計愈々困憊ヲ極ム然レ
トモ奮勵備作以テ医薬ノ料ヲ支ヘ懇篤看護ニ従フコト三年養父亦終ニ逝ク
今ヤ八十四歳ノ老姑ニ事ヘ家政ヲ整ヘ且能ク公共事業ニ尽ス等ソノ性行郷
閭ノ範トスルニ足ル仍テ茲ニ金五円ヲ授与シ以テ之ヲ表彰ス

明治四十四年十二月十日

神奈川県愛甲郡長從六位勲六等 新 山 政 清

(『愛甲郡制誌』)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九二一(明治44)	この年 1・20 高峰村に高峰村青年会・青年夜学会・処女会創立 横浜貿易新報社、半原で製糸女工と高齢者二四人を招待し 慰安会開催(21日) ・ 愛川村半原燃系同盟組合設立 2・2 国松汐子(愛甲郡長の妻)の葬儀に愛国婦人会会長参列、 弔辞多数。八王子からフランス人メーラン神父も参列 ・ 厚木芸妓組合から大沢屋・高島亭・勢勝亭・若松屋が脱 退。理由は芸妓間のもめごとで厚木署の調停も不調に終わ り、廃業者も出る 4・1 郡立女子実業補習学校を郡立実業女学校に改称。修業年限 三年、生徒定員本科七〇人、選科二〇人、研究科一〇人。 14年郡立実業女学校を郡立実科高等女学校と改称。本科一 七〇人・選科三〇人 ・ 13 小鮎村矯風会、同村小学校で発会式。同校長の指導で地域 の婚礼・葬儀などの悪風は正の会則を制定 ・ 26 小鮎村・下川入村・高峰村で地方改良講話会開催、講師は 留岡幸助 5・2 厚木小学校で第三九回創立記念式・軍人遺族慰安会・七七 歳以上三五人の高齢者慰安会・大運動会をあわせて開催 6・ 厚木町・荻野村・愛川村・煤ヶ谷村方面で嬰兒庄殺、墮胎 手術などを行った産婆を検挙。7月、引き続き依知方面で も検挙開始。検挙数は他の犯罪に比べて二倍以上 ・ 厚木芸妓義太夫大会を若松屋で開催。厚木芸妓一四人中か	3・29 工場法公布

農業補習学校・実業補習学校から青年訓練所・青年学校へ

一八八〇～一九〇〇（明治二〇年代）年は殖産興業、富国強兵を目指し経済と教育が大きく結びついた発展期であった。当時、初等教育は尋常科四年のみ義務教育でその後高等科四年へ進む者、さらにそれ以上の学校へ進学する者は極めて少数であった。この小学校卒業者に教育と実業を両立させる学校制度として、九三年実業補習学校規定が公布された。市町村の小学校に併設された勤労青少年対象の中等社会教育の場であった。農業地帯の愛甲郡では地域の人々が積極的に補習学校の設立に動き、一九〇五年には郡内に農業補習学校四校が開校している。煤ヶ谷村立・高峰村立・愛甲郡田代区立・尋常高等荻野小学校付設農業補習学校である。農業補習学校は地域の青年団と緊密に連絡を取って運営され、年限、授業日数教育内容は弾力的に運営された。〇六年、女子のみ対象に郡立女子実業補習学校が開校した。二三年学則改定で修業年限も尋常、高等小学校卒業によって一～三年と異なる。

女子は毎年一～三月の午前九時～午後四時の授業、特に裁縫を重視。男子は毎年一〇月～翌年三月午後七時～九時が授業時間。学科は修身、公民、農業、国語、算数、地理、歴史、理科。二六年には勤労青年に軍事訓練を行う施設として青年訓練所が設置された。実業補習学校と青年訓練所はほぼ同年齢（一六～二〇歳）の青少年が対象で教育内容も重複し、生徒の二重在籍も多かった。三五年には青年学校令により実業補習学校と青年訓練所が統合され青年学校が設立された。青年層の約八割を占める勤労青少年も尋常小学校卒業後さらに七年間教育を受けることになった。三九年、男子には青年学校は義務制、女子も将来義務とするとした。

青年学校は各町村立小学校に設置、教科指導は小学校教師が行い、教練は在郷軍人が当たった。カーキ色の服に巻脚絆の生徒の隊列が学校の運動場に展開し、号令、動作はすべて軍隊調であった。

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九二一(明治44)	7・― きた・一平・春子・子龍・千代子・久子出演 煤ヶ谷村の節婦落合サダ、郡長より表彰。11月には県知事より賞金五円を贈られる。12月10日、同村小学校で伝達式と表彰式 ★	7・8 公娼制度廃止を目的とする廓清会発会
一九二二(明治45・大正元)	11・15 依知村下依知部落の処女会発会式。会長岩崎リヨウ。女子の風習改善・蚕業の共同作業奨励が目的 愛国婦人会郡幹事部部長新山ツタ子は、郡内戦死者の遺族傷痍軍人に定期救護金贈与 蚕病予防事務所、蚕糸業法施行により県蚕業取締所と改称。目的は蚕病の予防駆除・蚕種製造の免許並びに蚕種に関する検査・蚕種生菌売買業者の免許取締・桑苗の生産及び行商取締・養蚕教師の取締・女子蚕種検査吏員の養成など 愛甲染色講習会、玉川村農会・郡立実業女学校・愛川村農会で開催。副業のために各三〇人受け入れ(2月14日) 玉川村七沢青年夜学会員四五人、七〇歳以上の高齢者五〇人を同村補習学校に招待し、敬老会開催 岩崎キヌ(県立女子師範学校卒、菁莪小学校へ新任)★ 産婆事件続出。愛川村半原で無免許産婆(37歳)検査、七(一〇)人の骸骨発見。荻野村下荻野の女性(24歳)、二四四五〇銭で非産婆(64歳)に堕胎を依頼し、死児を物置に埋めて検査。中津村のあんま業女性(65歳)、無免許で産婆業を営み、厚木署で取り調べ(11月) 厚木料理屋芸妓屋組合、宝来亭で総集会開催。12月に統一	9・1 『青鞥』創刊 イブセンの「人形の家」上演
一九二二(明治45・大正元)	1・29 玉川村七沢青年夜学会員四五人、七〇歳以上の高齢者五〇人を同村補習学校に招待し、敬老会開催 岩崎キヌ(県立女子師範学校卒、菁莪小学校へ新任)★ 産婆事件続出。愛川村半原で無免許産婆(37歳)検査、七(一〇)人の骸骨発見。荻野村下荻野の女性(24歳)、二四四五〇銭で非産婆(64歳)に堕胎を依頼し、死児を物置に埋めて検査。中津村のあんま業女性(65歳)、無免許で産婆業を営み、厚木署で取り調べ(11月) 厚木料理屋芸妓屋組合、宝来亭で総集会開催。12月に統一	7・30 明治天皇没。大正と改元

農業補習学校・実業補習学校・青年訓練所の変遷

設立年	農業補習学校	設立年	実業補習学校 青年訓練所	設置校舎
		1926	厚木町立実業補習学校 厚木町立青年訓練所	厚木尋常 高等小学校
		1925	依知村立実業補習学校 依知村立青年訓練所	依知尋常 高等小学校
		1910 1925	中津村立実業補習学校 中津村立青年訓練所	中津尋常 高等小学校
1905 1920	高峰村立農業補習学校 尋常高等小学校 付設実業補習学校	1921 1925	高峰村立実業補習学校と改称 高峰村立青年訓練所	高峰尋常 高等小学校
		1925	愛川村立実業補習学校 愛川村立半原青年訓練所	半原尋常 高等小学校
1905	愛甲郡田代区立 農業補習学校	1925	愛川村立田代実業補習学校 愛川村立田代青年訓練所	田代尋常 高等小学校
1905	尋常高等荻野小学校 付設農業補習学校	1920 1925	荻野村立実業補習学校と改称 荻野村立青年訓練所	荻野尋常 高等小学校
1906	三田村外5ヶ村組合立 尋常高等清水小学校 付設農業補習学校	1925	三田村立実業補習学校 三田村立青年訓練所	三田尋常 高等小学校
1906	三田村外5ヶ村組合立 三田尋常小学校 付設農業補習学校			
		1925	下川入村外1ヶ村学校 組合立実業補習学校 下川入村外1ヶ村学校 組合立青年訓練所	菁莪尋常 高等小学校
		1921 1926	妻田村外2ヶ村学校 組合立実業補習学校 妻田村外2ヶ村学校 組合立青年訓練所	清水尋常 高等小学校
		1925	小鮎村立実業補習学校 小鮎村立青年訓練所	小鮎尋常 高等小学校
1905	煤ヶ谷村立 農業補習学校	1925	煤ヶ谷村立実業補習学校 煤ヶ谷村立青年訓練所	煤ヶ谷尋常 高等小学校
		1926	宮ヶ瀬村立実業補習学校 宮ヶ瀬村立青年訓練所	宮ヶ瀬尋常 高等小学校
		1925	玉川村立実業補習学校 玉川村立青年訓練所	玉川尋常 高等小学校
		1925	南毛利村立実業補習学校 南毛利村立青年訓練所	南毛利尋常 高等小学校

(『神奈川県教育史 通史編』ほかより作成)

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九二二 (明治45・大正元)	見番を東町に移転。関東大震災で焼失するまで営業 郡役所主催染色講習会、高峰村で開催。講師は県技師小林 欽一。中津村、依知村、三田組合村で開く予定(9日) 高峰村にジフテリア発生、初めて血清を使用 芸者メ次(向後たま)は第一人者で「厚木音頭」第一号の 作曲者。芸者数は一八人 南毛利村小学校で裁縫講習会開催、講師笹子カテ。三六人 に終了証書授与(2月10日) 愛甲郡篤行者及び地方改良功績者の表彰式、厚木小学校で 行われる。教育勅語・戊申詔書奉読式のち小鮎村孝子小 島イマ・中津村節婦熊坂ツヤなどに表彰状及び賞金五円授 与。来会者五〇〇人 依知村青年会金田支部、田島美津江を講師に玉蘭製糸講習 会を開催。受講生四三人。(28日) 三田村の処女会、三田小学校校長阿部寅吉・訓導森久保敬 次・同花上ヒデの発起により発会式と少女談話会を開催。 茶話会福引など。名称はふたば会。来会者約七〇人 愛川村半原尋常高等小学校訓導中野シズエ、勤統一〇か年 に達したが病死、遺族に給与金を授与 厚木町の県蚕業取締所、事業の拡張とともに第一回助手四 〇人採用、第二回六〇人募集、第三回女助手三〇人募集 爱国婦人会支部総会、厚木町でも開催 爱国婦人会愛甲郡幹事部、日露戦役戦没者遺族に対し定期	8・16 東北帝大に女子三人入学
一九二三(大正2)	1・10 南毛利村小学校で裁縫講習会開催、講師笹子カテ。三六人 に終了証書授与(2月10日) 愛甲郡篤行者及び地方改良功績者の表彰式、厚木小学校で 行われる。教育勅語・戊申詔書奉読式のち小鮎村孝子小 島イマ・中津村節婦熊坂ツヤなどに表彰状及び賞金五円授 与。来会者五〇〇人 依知村青年会金田支部、田島美津江を講師に玉蘭製糸講習 会を開催。受講生四三人。(28日) 三田村の処女会、三田小学校校長阿部寅吉・訓導森久保敬 次・同花上ヒデの発起により発会式と少女談話会を開催。 茶話会福引など。名称はふたば会。来会者約七〇人 愛川村半原尋常高等小学校訓導中野シズエ、勤統一〇か年 に達したが病死、遺族に給与金を授与 厚木町の県蚕業取締所、事業の拡張とともに第一回助手四 〇人採用、第二回六〇人募集、第三回女助手三〇人募集 爱国婦人会支部総会、厚木町でも開催 爱国婦人会愛甲郡幹事部、日露戦役戦没者遺族に対し定期	
2・11		
3・10		
6・29		
7・14		
9・27		
10・27		

神奈川県立女子師範学校

一九〇七（明治四〇）年一月二日、神奈川県立女子師範学校は、横浜市岡野町の県立高等女学校（現、県立横浜平沼高等学校）に併置して創立。五月五日開校。学校長は高等女学校長が兼任。教員も当初、約半数が兼任。〇八年、本科第一部（四年）予備科（二年）とする。一二年の生徒数、本科一部一六〇人、予備科三六人。

一五年の学則では生徒には給費制があり学資、学用品、炊事用具、雑品、図書が貸与された。それにもなつて卒業後に服務義務があつた。卒業の日から四か年間県内の小学校に、しかも最初の二か年は知事の指定した小学校に勤務する義務がついた。

女子師範学校出の先生

一九〇五（明治三八）年生まれの市川平太郎さんは善哉小学校で一、五年生の間、女子師範出の先生が担任だったそうだ。

岩沢キヌという女先生は師範出でとてもやかましく、悪さをすると大きなソロバンを頭に載せられたり、水バケツをもたされた。それでも言うことを聞かないと三尺のものさしでぴしつとやられた。毎朝、机の上に手をひろげて指の爪の点検をされた。今はハワイにいるって聞いたけどと思ひ出を話している。

（『下川人を語る』）

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九二三(大正二)	救護金を贈呈 12・7 女子蚕業講習者試験、三七人が受験し二人及第。講習会は県蚕業取締所で16日から開始。修得生は蚕税検査吏員・検査助手監督などに採用。優等生は、小俣ルイ・中山ハトリ・大久保キミ(3月14日) この年 子殺し二件発生。厚木町の医院勤務の女中(20歳)、出身村の男との間にできた子を庄殺。妻田村の女性(24歳)、離婚ののち3歳の子を虐待死 愛川村の節婦山口キン、郡長より表彰される ★ 父兄母姉会、玉川村小学校で開催。守屋校長挨拶の後、児童学芸会に観衆約二〇〇人 3・3 玉川村青年会、同村小学校で第五回定期総会を開く。天野雄彦の講演、夕方の婦人会でも講演 ・15 依知村上依知の北依知小学校で、処女会設立。会長渋谷婦美子、副会長大野貴美子、幹事矢後ミ子ほか二人、委員森田シノほか五人。目的は女子の美德の涵養で、補習教育の奨励・補習講話や展覧会の開催・ほかの処女会との交流をめざす 4・― 郡立実科高等女学校長小沼奈美、奏任待遇六級俸に任命される ★ 6・― 内山セイ、郡立実科高等女学校教諭に任命される。群馬県出身、共立女子職業学校卒業 8・23 厚木小学校女子部同窓会、同校で開催。会長足立原マサ	12・― 石原修『衛生学上より見たる女工の現況』刊行 3・8 各国で国際婦人デー 4・1 『読売新聞』に婦人附録新設 ・― 日本女医会第一回総会 7・28 第一次世界大戦開始 8・23 ドイツに宣戦布告、日本参戦
一九一四(大正三)		

愛甲郡の社会教育団体種別人員数（愛甲郡役所発表）

種別	団体数	会員数（人）
教育会	一	四三二
青年会	四七	四四一〇
同窓会	一二	二〇九一
夜学会	四	一七〇
婦人会	六	二四一
報徳会	一	九三
その他	二二	九三

（『横浜貿易新報』一九一四年九月二〇日）

小沼奈美（生没年不詳）

永年教師として働き、ある宮家から家庭教師に請われたが、多数の女子の教育にたずさわりたいと、一九一二（明治四五）年愛甲郡立実業女学校長に赴任。一四（大正三）年四月校名改称により郡立実科高等女学校長となる。

良妻賢母の道を教え、みずからも奉仕団体に寄付し、女訓の書を表装するなど生徒の徳育に貢献する。一五年卒業の城所シズエ（旧姓加川）は聞き取りに「小沼校長先生はわたくしが習字をしたいと申しますと、お手本を書いて下さいましたね。厳格ではあったが良い先生でした」と語る。生徒に尊敬され、人望が篤かったが、一六年に依願退職した。

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九二四(大正三)	8・28 高峰村小学校で衛生講話会、二〇〇人参加 9・18 煤ヶ谷村農会、第三回製糸実習修了証書授与式を行なう。修了者一四人 ・ 郡役所、社会教育団体種別人員を調査発表 ★ 10・2 郡教育会、高峰村で通俗教育会開催、聴衆約一〇〇〇人 ・ 3 郡立実科高等女学校長小沼奈美、愛国婦人会に給料の一部を寄付し、三等有功章を授与される。さらに同会基金にも五〇円寄付 ・ 16 衛生展覧会、郡立厚木実科高等女学校で開催。各小學校生徒ならびに一般も参観(18日) ・ 23 郡愛国婦人会幹事会、婦人会員・青年会員・軍人分会員・同窓会員・個人などから慰問袋を取りまとめる。厚木町二七七個、依知村二〇個、中津村七個、愛川村七九個、荻野村五三個、小鮎村一〇個、南毛利村七八個、計六二四個郡教育会主催の通俗講演会、郡内一か所で開催。2日高峰村で約一〇〇〇人、5日南依知小学校で聴衆約六〇〇人、6日愛川村半原公会堂で約三〇〇人、田代小学校で約六〇〇人、7日小鮎小学校で約一三〇〇人、女性の参加多数。佐川郡長の講話「国民の覚悟及び二天義務の根源」など郡立実科高等女学校開校式・地方改良会愛甲支部総会・郡農産物品評会褒賞授与式、同校で挙行。地方改良会功績表彰状・賞金五円の授与者山口キン・柳川クメ・関本ヨウなど★ ・ 3 厚木小学校女子部同窓会長足立原マサほか一一人、町内の	9・2 日本赤十字社看護婦、戦地へ派遣される ・ 愛国婦人会神奈川支部、慰問袋募集。県内各地の婦人会や女子部同窓会でも慰問袋集めを始める

山口キン女の事跡大要

表彰状

愛川町田代千百十一番地
戸主平氏才次郎妻

山 口 キ ン

資性篤實兄ク病夫二仕へ専心療養ヲ竭クス

コト茲二十有余年堅忍以テ家事ヲ統ヘ

且能ク隣保ノ交誼ニ努ムル等其行為奇特ナリ

仍テ為其實金五圓ヲ授與ス

大正三年十一月三日

神奈川縣愛甲郡長從六位勲五等

佐 川 福 太 郎

(編集部作成)

キン女は天保十四年四月十日半原の関原久右工門の長女に生れ、二十二才の時同村田代の山口才次郎に嫁し一男二女を挙げた。当時山口氏の村治に袂掌した敏腕は普く村人の知る所である。然るに或る時病に罹り日を追つて病勢つより、眼病と脚患とを併発して遂に不具（盲目と膝行）の身となった。時に三十二の齡であつた。

キン女は三人の子女を養育しながら健氣にも服薬食事は勿論、何事にも心を尽くして介抱したから、姑は其の親切を喜び涙を流して感謝した。近隣の人々も歎賞しない者はなかつた。キン女はかゝる境遇にあること三十有余年、其の間一日の如く病夫に仕へ家事一切を引受けて毫も労苦を厭はなかつた。かく夫に仕へては貞節を守り、子女を養育しては母たる道を尽し、よく家政を整へ、又近隣に争議あれば進んで和解の労を採り、其の徳は四隣に及んだ。

かゝる行は遂に上司に達して大正三年二月十一日時の郡長佐川福太郎氏から表彰を受け、更に同四年一月四日本県知事石原健三氏から其の徳行を表彰された。

然るに大正九年六月十日病を得て卒した時に齡七十八。近隣の人其の徳を慕ひ同女の死を悼み、会葬する者が頗る多かつた。実にキン女の如きは稀に見る節婦と云ふべきである。

(『愛甲郡制誌』)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九一四(大正三)	愛国婦人会員以外の家を訪問して慰問袋一六七個を集め、郡役所に発送を寄託 11・3 郡立実科高等女学校、生徒の手芸品成績展覧会を開催。時局に対する国民奉公の一端として廢物を利用して袋を作り販売。純益五〇円三〇銭五厘を愛甲郡役所に寄付(5日) ・4 郡立実業女学校出身者の同窓会「ときわ会」、母校で創立発会式を挙行 ★ 12・1 県蚕業取締所、女子蚕種検査吏員養成のため講習会を開催、受講者は公募で選ばれた二〇人(15年2月末) ・6 第二七回郡教育会総会、厚木小学校で開催。功労表彰者、一年皆勤者―厚木小木村タキ、高峰小吉川コハナ、荻野小古宮クニ・代用教員小林キク、玉川小佐藤マス ・20 厚木の宿屋・飲食店・芸妓屋、宝来亭で三業の臨時総会を開催。厚木警察署長より諭された風紀問題を話し合うため郡内の伝染病患者は、赤痢一三人、腸チフス三九人、ジフテリア一三人、疑似患者一〇人。総計八五人、トラホーム総計二四一人 この年 荻野村の夫婦、知的障害者の妹(29歳)が産んだ嬰兒を圧殺し懲役刑 この年 厚木町でも軍需景気で金属が高騰。河川の水中の土砂から砂・釘・針金・鉄板片を拾い売ると女子でも一日一円五〇銭の収入となる	12・18 嘉悦孝子ら、花の日会設立。戦死者遺族救恤のため 12・20 東京駅開業

横浜貿易新報

ときわ会と「女の十訓」

愛甲郡立実科高等学校では、かねてより計画中の同校の前身の実業女学校出身者の同窓会ときわ会の創立発会式を挙行。その折、心得として「女の十訓」を発表。

「女の十訓」

- 一 母校を愛する事。
- 二 婦人は男子青年と同様地方の中心たれ。
- 三 道徳の実践躬行に努め。
- 四 婦人として土氣養成を計れ。
- 五 単に都会生活を望む勿れ。
- 六 社会の事情を知れ。
- 七 国産品の使用を忘るゝな。
- 八 眞の妻女となり台所も見よ。
- 九 副業に精励せよ。
- 十 時局に対する英国婦人の心行を参考とせよ。

（『横浜貿易新報』一九一四年二月三日）



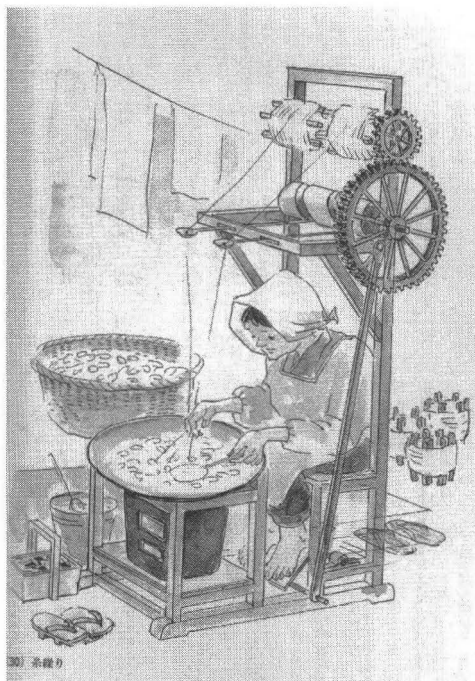
（『横浜貿易新報』1914年11月3日）

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九一四(大正3)	この年 厚木町の鮎漁遊船会は、好況で数千人の客で賑わう。夜は屋形船で鮎漁を楽しみ芸妓を呼んで宴会を催す。以後毎年開催	
一九一五(大正4)	1・17 愛川村田代小学校同窓会、女子教育のため通俗講演会を二か所で開催。講師齊藤村三郎「女の道、忍耐の必要」 ・19 愛川村節婦山口キン、県知事よりの表彰伝達式、田代小学校で挙行 ・20 佐川郡長、荻野村で産業組合に関する講演ののち、節婦柳川クメを訪問 ・24 小鮎村原旗谷青年会は、女子のための裁縫実習会を開催。佐川郡長の講話、講師飯原オト、助手吉沢カク。生徒は二人(3月31日) ・ 荻野小学校付設女子部、開校 5・5 厚木町商工会、同町長福寺でバテンレース講習会を開催。女性の榎原講師、三〇人参加(15日) ・ 13 郡医師会主催で赤十字社県支部主事による肺結核予防講話会、小鮎小学校で開催。約一〇〇人参加 7・ 郡立実科高女校長小沼奈美、枢密顧問細川潤次郎揮毫の女訓の書を丸帯を使って表装、翌年病氣のため依願退職 8・ 厚木小学校女子部同窓会、二週間シンガミシンの講習会を開催。二〇人受講。御大典奉祝記念章四〇〇〇個を売った収益でミシン(一台六〇円)を購入し同校へ寄付 9・23 女相撲国見山・玄海灘一行、厚木町で昼夜興業、大入り	6・30 内務省、看護婦規則を制定。看護婦の資格が公認される 9・ 11月10日の御大典を祝うため、国内および県内各地で活動。横浜では婦人会が旗の日運動

中津村養蚕農家の生活 中津村農協組合長 熊坂欣一談

各養蚕農家の主婦、娘（製糸技術保持者）が、午前二時工場の汽笛と共に一日の製糸可能な量の繭を背負籠に入れ、夜道、提灯をたよりに工場に集合し、夕方絹糸にして各家庭に持ち帰った。製糸に必要な湯は蒸気を使用していた。

（『愛川町郷土誌』）



（『画・文で描く祖父母が若かった頃』）

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九一五(大正4)	10・29 「御真影」奉戴式、郡立実科高女と厚木・中津・荻野・煤ヶ谷・玉川・南毛利各小学校で行われる 11・11 郡立実科高女、御大典記念行事として一日一善会の発会式。生徒約一七〇人 ・19 愛川村半原尋常高等小学校、各地区で母姉会を開催。校長及び同校職員出席(23日) ・21 厚木小学校女子部同窓会、総会・御大典記念事業報告会開催。会長に足立原マサ再選 ★ 12・20 県蚕業取締所、女子蚕業講習会開催。受講者は公募で選ばれた飯島ツル、宮崎マツほか二二人。蚕種母蛾の検査に従事(3月末) 一九一六(大正5) 1・17 小鮎村青年会、女子の救済事業として裁縫補習会を開催。講師飯原ヲト・小野間テル・吉沢カク。講習生約四〇人(二か年継続) 3・12 県教育会主催通俗教育講演会、荻野小学校で開催。聴衆約七〇〇人 ・27 県蚕業取締所、女子蚕業講習会(講習生24人)修了証書授与式挙行。試験科目は蚕体病理学・理化学・蚕体解剖生理学・数学・養蚕法 4・12 赤十字社愛甲郡委員部及び愛国婦人会愛甲郡幹事部総会など、同郡役所で開催。中丸勝子(依知村)・黄金井朝子(玉川村)は各五〇円を寄付。二人に有功章と賞品	11・― 大戦ブームで生糸相場高騰 1・1 『婦人公論』創刊 2・11 愛甲郡及川村に、民力涵養・生活改善を目的に戸主及び世帯主を会員とする及川実行会結成

足立原マサ（一八九三—一九七二）

一八九三（明治二六）年一〇月足立原^{すてだう}寿天造、トクの長女として生まれる。父は厚木町（現、厚木市東町）で質屋を営み、厚木町町会議員で、たえず人が集まり、食事などを振舞う家庭であった。

弟は早世、妹は他家の養女となり、マサは一人娘として育つ。

私立横浜高等女学校（現、横浜学園）に進み、寄宿舎生活を送る。

四八年民生委員を受け、全国にさががけて自宅を開放し「心配事相談室」を開く。保護司、家裁調停委員なども歴任。

愛甲郡婦人団体連絡協議会・更生保護婦人会（現、女性会）・母子寡婦福祉連絡協議会・国際ソロプチミスト厚木などの創立にも中心的役割を果たす。

戦前、戦中、戦後と、常に地域の先頭に立ち、女性の活動を推進する。六六年県民功労賞を受ける。七一年、現役のまま七七歳の生涯を閉じる。



足立原マサ

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九二六(大正五)	4・― 築地サツ子、東京女子高等師範学校を卒業し、郡立実科高女訓導に任命される。 6・17 高峰村農会、製糸講話会を開催。講師は宗像県技手。参加者女子約二五〇人 7・1 煤ヶ谷村養蚕組合、製糸講習会を開催。講師は漸進合資会社より女性一人、監督宗像県技手。二〇人受講(10日) 21 玉繭製糸・真綿調製講習会、厚木乾燥株式会社で開催。郡立実科高女三、四年生七〇人受講。8月4日郡役所で修了証書授与式(8月4日) 25 小鮎村で衛生講習会開催、伝染病及び一般衛生について。8月8日には荻野村でも開催、聴衆は百数十人 8・20 厚木小学校女子部同窓会、第五回総会、同校で開催。陸軍工兵中尉古島寅雄は飛行機の構造及び操縦について、矢沢県医は健康と妊娠について講話 9・28 三田小学校代用教員浅葉スミ、同校訓導に昇進 10・28 愛甲郡実科高女、皇后の「御真影」奉戴式挙行 この年 郡内の看護婦数は、二人 1・16 愛国婦人会南毛利村第一回総会・日本赤十字社南毛利村分区第十一回総会・農産物品評会報賞授賞式を同村小学校で開催。高齢者、戦死者遺族などを招待 2・13 郡教育会主催通俗講習会、厚木町で開催。14日高峰村、15日依知村、16日中津村、21日田代村で開催	6・― 友愛会婦人部設置 11・9 葉山日蔭茶屋事件 2・14 『主婦之友』創刊
一九二七(大正六)		



厚木尋常高等小学校の写生会 1917（大正6）年頃
（『目で見える厚木・愛甲の100年』）

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九一七(大正6)	2・23 衛生展覧会、小鮎村小学校で開催(24日) ・26 蚕種製造に関する講習会 県蚕業取締所で開催(3月1日) 3・1 第一次世界大戦の恤兵用金寄付に対して女性の褒賞受賞者は煤ヶ谷村の五人、宮ヶ瀬村の三人 4・15 愛川村川北青年会、半原工女の慰安大会を撫糸鍊糸工場で開催。講話会や東京歌舞伎一座の余興(17日) 5・2 厚木小学校創立記念式・高齢者並びに軍人遺族慰安会、同校で開催。功労者表彰ののち、弁当茶菓の接待、女生徒の唱歌や旗体操の余興 7・31 県主催衛生展覧会、中津小学校で開催。参観者約一五〇〇人(8月1日)	3・15 ロシア二月革命
一九一八(大正7)	1・13 高峰村三増の節婦平本ハル、郡役所で県知事より表彰状及び賞金五円を授与される 2・3 厚木町主催衛生展覧会、厚木元倉庫会社で開催。参観者約二六〇〇人(4日) ・26 高峰村処女会、同村小学校で家庭料理講習会を開催。出席者約六〇人(3月2日) 5・5 依知村立実業補習学校出身者で組織する農友会は、女子部発会式及び総会を開催。女子部員は中丸キマ・中丸照代・藤代ミヨ・萩原シズカ・星野ヤエなど 12・1 愛川村半原惣系業者、第一次世界大戦休戦祝賀会と工女・家族の慰安会を開催。来会者約一〇〇〇人	4・13 全国処女会中央部設立、上野精養軒で発会式 8・2 政府、シベリア出兵宣言 ・1 富山県魚津の米騒動が全国に波及 11・11 第一次世界大戦終結 12・1 臨時教育令で、「通俗教育に関する件」答申 この年 翌年にかけてスペイン風邪大流行

國家の爲めにこれだけは御讀み下さい
今年第十回は國勢調査

本調査の目的は、我が國の國勢を明らかにし、國策の立案に資することにある。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。

日本では初めての事業
 本調査は、我が國では初めての事業である。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。

どんな人でも此の調査を免れる事は出来ない
 本調査は、我が國では初めての事業である。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。

調査の事項は、次の通り
 本調査は、我が國では初めての事業である。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。

調査の方法
 本調査は、我が國では初めての事業である。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。

調査の結果と罰金
 本調査は、我が國では初めての事業である。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。

調査の結果と罰金
 本調査は、我が國では初めての事業である。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。

調査の結果と罰金
 本調査は、我が國では初めての事業である。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。

調査の結果と罰金
 本調査は、我が國では初めての事業である。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。調査の結果は、國家の発展に資するものである。

神奈川縣

1920年第1回 国勢調査のチラシ

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九一八(大正7)	この年 中津村・愛川村・小鮎村の三か所に五〇人繰共同製糸場を設立	3・― 内務省、民力涵養計画の訓話
一九一九(大正8)	8・24 郡教育会、夏季講習会を開催。裁縫講師は、郡立実科高女教諭吉村コウ。受講者三五人(27日) 10・9 郡立実科高女見学旅行実施。四年生は関西方面。10日、三年生は東京と日光方面。14日、一、二年生は横浜方面 ・ 24 厚木商工会、興業倉庫会社で家庭副業のために厚木真綿講習会を開催。講師は塩田テル、受講生二六人	6・28 ベルサイユ講和条約調印
一九二〇(大正9)	11・15 この年 下川入村と棚沢村処女会、よもぎ会を創立。会員数七五人★ 世界大戦終結の余波で生糸、紡績絹糸、綿糸、麻糸の産額が戦前の二、三倍になる 2・― 郡立実科高女で生徒の一部同盟休校 3・10 郡、第一回民力涵養講演会を厚木小学校で開催。郡教育会・郡青年団・県神職会郡支部・地方改良会・郡地主会の総会・功績者表彰式・米麦品評会褒章授与式を行う。表彰者は小鮎村中村シズほか四人と二団体。参加者三六〇人 6・― 愛甲・高座・津久井など各地の燃糸業、財界不況による打撃で閉鎖続出。解雇された女工約一五〇〇人。8月までの給料を支給。一部は夏蚕に従事する 8・4 小鮎小学校訓導霜島タマリ・加藤クラコほか三人、県師範学校で開催の講習会に出席(22日)	1・10 国際連盟発足 ・ 25 生活改善同盟会設立 3・15 戦後経済恐慌始まる。生糸相場高騰ののち大暴落 ・ 28 新婦人協会結成式 7・14 富士瓦斯紡績押上工場女工二〇〇〇人の争議

愛甲郡の処女会一覧

町村名	団体名	統一有無	会員数	創立年月日
厚木町	厚木小学校同窓会女子部	処女会無	八〇	
依知	依知村処女会	統一	一〇〇	大正十一年四月一日
中津	中津村処女会	統一	一七六	
高峰	高峰村処女会	統一	二一〇	大正十一年乃至
愛川	半原女子会 田代女子会	統一の形 に至らず	九六 一二五	大正十二年
荻野	荻野村処女会	統一	二〇五	
三田	ふたば会	統一	六一	
下川入 棚沢	よもぎ会	統一	七五	大正八年十一月十五日
妻田 林 及川	清水処女会	統一	八〇	大正四年
小鮎	小鮎村処女会	統一	二三二	大正十二年五月五日
煤ヶ谷	煤ヶ谷村処女会	統一	一一三	
宮ヶ瀬	宮ヶ瀬村処女会	統一	一七五	
玉川		なし	一	
南毛利		なし	一	

(『愛甲郡制誌』より作成)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九二〇(大正9)	8・17 厚木町商工会、真綿製造講習会を厚木小学校で開催。萩原ヤス子の指導で屑繭から真綿を製造。家庭の副業として奨励し厚木の特産品にするのが目的。講習生は同小学校高等科一・二年生・町内希望者・女教員など(30日) 小鮎小学校の恩師慰霊祭は同校同窓会と小鮎村女子会合同で挙行。志村ナミ、小島マサ、浅葉ヨシほか一〇人。参列者約一〇〇〇人。続いて第二四回小鮎小学校同窓会、第八回同村女子会総会挙行	8・24 内務省に社会局設置 第一回国勢調査 県の人口、女六三万三六三九人・男六八万九七五一
9・27	この年 荻野小学校生徒・青年会・同校同窓会・在郷軍人分会、同校で連合の大運動会を開催。村内の高齢者約一〇〇人を招待、女子同窓会員が茶・菓子・弁当で接待 厚木町にキネマ館開館。木戸銭は大人一〇銭・子ども五銭 小鮎村女子会、農産物利用講習会を郡農会に依頼し小鮎小学校で開催。同小学校訓導中村スミ・加藤クラコ・霜島タマリが助手を務める。定員四〇〇人に希望者八五人。(31日) 郡立実科高女約五〇〇人の卒業生で同窓会を組織し、第一回総会を同校講堂で開催。余興のち会則を作り役員を選出 県蚕業取締所、女子蚕種検査吏員養成講習者の修了証書授与式を行う。修了者二九人	この年 全国の処女会数六一八五団体、会員数五三万二九人。 全国の婦人会数五五七〇団体、会員数八七万四〇七人
10・23	この年 厚木町にキネマ館開館。木戸銭は大人一〇銭・子ども五銭 小鮎村女子会、農産物利用講習会を郡農会に依頼し小鮎小学校で開催。同小学校訓導中村スミ・加藤クラコ・霜島タマリが助手を務める。定員四〇〇人に希望者八五人。(31日) 郡立実科高女約五〇〇人の卒業生で同窓会を組織し、第一回総会を同校講堂で開催。余興のち会則を作り役員を選出 県蚕業取締所、女子蚕種検査吏員養成講習者の修了証書授与式を行う。修了者二九人	1・29 新婦人協会、治警法五条改正と花柳病男子の結婚制限などの請願を両院へ提出 全国小学校女教員大会、産前産後休暇要求(31日) 赤瀾会結成
1・20	この年 厚木町にキネマ館開館。木戸銭は大人一〇銭・子ども五銭 小鮎村女子会、農産物利用講習会を郡農会に依頼し小鮎小学校で開催。同小学校訓導中村スミ・加藤クラコ・霜島タマリが助手を務める。定員四〇〇人に希望者八五人。(31日) 郡立実科高女約五〇〇人の卒業生で同窓会を組織し、第一回総会を同校講堂で開催。余興のち会則を作り役員を選出 県蚕業取締所、女子蚕種検査吏員養成講習者の修了証書授与式を行う。修了者二九人	4・24 赤瀾会結成
2・11	郡立実科高女約五〇〇人の卒業生で同窓会を組織し、第一回総会を同校講堂で開催。余興のち会則を作り役員を選出 県蚕業取締所、女子蚕種検査吏員養成講習者の修了証書授与式を行う。修了者二九人	3・28 全国小学校女教員大会、産前産後休暇要求(31日) 赤瀾会結成
3・26	郡立実科高女約五〇〇人の卒業生で同窓会を組織し、第一回総会を同校講堂で開催。余興のち会則を作り役員を選出 県蚕業取締所、女子蚕種検査吏員養成講習者の修了証書授与式を行う。修了者二九人	
・27	郡、民力涵養大会を厚木小学校で開催。教育功労者を表彰。一五年勤続は吉川コハル(高峰小)、一〇年勤続は森山ナオ(厚木小)・中村スミ(小鮎小)ほか三二人	
一九二二(大正10)		

処女会

当郡内に於ける処女の修養機関としての処女会は未だ充分に普及して居ると称ふ事が出来ぬ。全然組織の出来て居ない町村があり各部落には組織されて相当成績を挙げて居るものでも一村統一の機運に到達してないものがあり同窓会女子部が処女会同様の仕事はして居るが、同窓会なるが故に、高等科卒業者以外の者を除いて居たり、未婚の女子と已婚の女子と一緒にであったり、其の種類も多く組織も各様である。従て郡下全部の合同の出来ていないのは遺憾である。

然し之等は組織上統一上からの見方で、其の内容に至つては夫々よく活動し成績の見るべき者も少くない就中小鮎村の女子会の如きは、会員数も多く村内一人として入会しない処女もなく、よく和衷協同各種の事業に成績を挙げて居て裏に県からも選奨された位である。

(『愛甲郡制誌』)

愛甲郡町村生活改善実行規約準則(大正十年六月二十二日 於町村長会)

一、一般二関スル改善事項 (略)

二、婚姻二関スル改善事項

イ、結婚ノ総費用ハ其家ノ年収ノ三割以内ニ止メ虚飾又ハ形式ニ亘ルカ如キ出費ヲ避ケルコト

ロ、持参スル衣装、器具ハ必要ノモノ、ミニ止メ其他ハ事情之レヲ許サハ現金公債ヲ以テシ殊ニ晴衣ヲ新調スルコトヲ廃止スルコト

ハ、結婚式及披露ノ会ハ之レカ壮重ナルヲ必要トスルモ可成開始ノ時刻ヲ早メ終リヲ早クシテ徹宵ニ到ラサル事

ニ、披露ノ席上ニ於ケル新婦ノ色直シ(着換)ヲ廃止スルコト

ホ、招待客ハ近親者ニ限り且ツ家内呼ヲ廃止スルコト

ヘ、挙式後近隣ノ者ヲ招キ部屋見ト称シ新婦ノ衣装其他ノ展覧ヲ廃止スルコト

三、出産並ニ其子女ニ関スル改善事項

イ、産見舞孫抱キハ訪問ノミニ止メ贈答品ハ之ヲ廃止スルコト

ロ、初孫祝ノ贈答ハ親元ノミニ止ムルコト

ハ、菖蒲刀羽子板ノ贈答ヲ廃止スルコト

ニ、初節句祝ハ長男長女ニ限ルコト、シ幟、五月人形雖ハ親元ノミ贈ルニ止メ招待ノ場合ハ近親者ニ限ルコト

ホ、贈リ舂ト称シ初節句ノ家ニ対シ部落等ニテ舂ヲ調製シテ寄贈スルコトヲ廃止スルコト

ヘ、七五三ノ祝ヲ全廃スルコト

(『愛甲郡制誌』より)

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九二二(大正11)	愛川村半原燃糸同業組合、同所松葉沢公会堂で男女工慰安会を開催。余興は東京衛生劇団の活動連鎖劇(5日) 郡内町村会、生活改善のため実行規約を定め実行を促す★ 郡立実科高女、同校で地久節を祝い講演会を開催。講演は拓殖大学水野教授「米国婦人と日本婦人」。生徒の合唱・合奏。出席者は生徒・母・姉・同窓会員ほか 県女子師範学校、小学校教科研究会・県下女教員大会を同校で開催。愛甲郡の参加者一二八(10日) 皇太子、陸軍特別大演習視察で中郡小金塚へ行く途中、県道厚木・南毛利を通り、高齢者にお菓子料を渡す。九〇歳以上の女性五人 伝染病患者急増。赤痢女一七二人・男一八〇人、死亡女六七人・男六五人。腸チフス女二〇八〇人・男二一五九人、死亡女二二四人・男二七五人。ジフテリア女二九五・男二〇七人、死亡女五〇人・男六〇人。トラホーム女九三人・男六〇人 この年 下川入村の節婦小宮ケイ、郡長より表彰状と金一封を受ける 高峰村女子青年団創立。団員一〇五人 ★ 中津村校友会女子部、同小学校で料理講習会を開催。講師は厚木実科高女教諭鈴木一枝。受講生四七人(7日) 県内小学校女教員の家事講習会を県立女子師範学校で開催。愛甲郡から田代小学校教員甲賀モトが出席(18日) 郡農会、清水小学校で農産物利用の料理講習会を行う。講師は武原数代。受講者は清水処女会員・主婦ら約五〇人(26日)	6・23 文部省「通俗教育」を「社会教育」と改称。府県に社会教育主事を置く ・ 内務省社会局、「全国処女会・婦人会の概況」発表 10・3 第一回全国処女会指導者講習会開催 11・4 原敬首相、東京駅で暗殺 1・ 婦人生活改善整容会、県下を巡回講演(8月)
一九二三(大正12)	1・15 下川入村の節婦小宮ケイ、郡長より表彰状と金一封を受ける 2・30 高峰村女子青年団創立。団員一〇五人 ★ 2・3 中津村校友会女子部、同小学校で料理講習会を開催。講師は厚木実科高女教諭鈴木一枝。受講生四七人(7日) ・ 13 県内小学校女教員の家事講習会を県立女子師範学校で開催。愛甲郡から田代小学校教員甲賀モトが出席(18日) ・ 16 郡農会、清水小学校で農産物利用の料理講習会を行う。講師は武原数代。受講者は清水処女会員・主婦ら約五〇人(26日)	1・ 婦人生活改善整容会、県下を巡回講演(8月)

高峰村女子青年団

創立 大正十一年一月三十日

支部を置かず部落毎に幹事を置き事務を処理す。事務所は高峰小学校内に置く。

団員 正団員 一〇五

本団の特色 質素 勤勉 活発 堅実をモットーとす。

施設

○知能啓発 一 武相の若草、青年カートの講読

二 県及郡主催其の他にかかる講習に団員の派遣

三 名士の招聘講演会の開催

○体育施設 一 小学校と関連して運動会をなす

○社会的施設 一 道路愛護作業に従事す

二 敬老会、軍人遺族慰問

○訓練上施設 一 教化総動員実行要目制定

○産業経済施設 一 各種講習会の開催（真綿製造、料理仕出し、染物、家事、裁縫）

二 各種産業施設の見学視察

○社交娯楽施設 一 映画会の開催

○団員の主な読物 一 青年カード、武相の若草、女青年新聞、雑誌

○其の他施設 一 神社参拝、清掃

以上は昭和七年九月三十日 高峰小学校郷土調査地理（人文）研究部編「郷土の人文」による。

（『愛川町郷土誌』）

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九三二(大正11)	2・1 県、無試験検定で小学校教員免許状を与える。小学校裁縫科・小学校准教員に佐藤歌子(玉川小)・葉山スエ(林小)・平本ツル(南毛利小)ほか二人 3・3 荻野村処女会、同小学校で創立総会を開催。会則の制定・役員の選挙・講演など 3 北依知処女会、同小学校で発会式を開催。会則の認定・役員の選挙など。会長は高橋北依知小学校長、副会長は大塚道子。実項要目として時間励行と清潔で質素な服装を制定 6・7 郡主催・県教務課後援の整容法講習会を郡立実科高女で開催。講師は藤井県社会教育主事と東京婦人生活改善整容会指導員。衛生的で時間を節約できる結髪、着衣化粧法を指導。受講生は同校職員・生徒・小学校女教員・婦人会・処女会ほか 11 依知村大正社養蚕組合、養蚕に従事している女性の慰安目的で平和博覧・明治神宮と宮城参拝のち名所旧跡を見学(13日) 郡役所、21年の出産数調査結果を発表。出生児数は男女合計一六八八人。嫡出子一六〇一人。庶子二六人。私生児六一人。優良処女会の小鮎村が私生児出産数第一位 荻野小学校、生活改善で女生徒の服装を改良。四年生以上は各自が裁縫し一着の実費は一円。時代に適応した試みと好評 愛国婦人会郡委員部、息子の入隊後、生活が困窮している愛川村の一家の救恤を県に要請。毎月三円支給が決まる	3・3 全国水平社結成 10 マーガレット・サンガー来日 4・20 治警法五条改正法律公布、女子も政談演説を聴いたり、発起人になれる 5・1 厚木町に(株)厚木繭糸取締所設置 日本産児調節の研究会設立 7・15 日本共産党結成 9・18 文部省、「女教員産前産後休養二関スル件」訓令

田代の女子青年部

(前列中央は指導者 既婚の丸髷の者もいる)



(『愛川町文化財調査報告書第二〇集 故影拾遺』)

「歩いて糸とり女工へ」 天利フミ談

あたしは明治三六(一九〇三)年生まれで、まだ結婚する前には糸とりに行きました。当時は賃収入がなくて娘のある家は、ずいぶん製糸に行かせたもんです。あたしは中津出身で最初は青梅線に乗って立川にある西川製糸に行ったんです。中津からは一〇人くらいが行って、みんないっしょに寄宿舎へ入ってね。まず一年間契約してね、あとは成績しだいでも余計にお金をもらったの。朝の六時から夜の八時頃まで明かりをつけて働いたね。糸とりは暑いし大変だけど若い娘が大勢だし案外おんきにやってたね。あたしの行ってた製糸場じゃあ病人や胸を患った人はいなかったけど、そういう人もいたようだね。

あの頃はもう汽車があつて、盆・正月に少し暇が出ると帰ってきて、また二月頃行くようになったね。汽車は橋本までだったの、中津まで三里くらい歩いたね。あの鉄道は八王子から横浜へ生糸を運んでいたんだね。

信州の岡谷つて、ここからも女工の募集人が来て頼まれて糸とりに行ったこともあった。製糸から戻って二〇歳近くで、あたしは結婚したんです。

(『明治・大正・昭和のふるさと荻野』より)

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九三二(大正11)	依知村南北両処女会、同小学校で総会を開催し、合同依知処女会を設立。会長は依知小学校校長横溝正鼎、副会長は村長の妻大塚ミチ子と南依知小学校長の妻渋谷ユキ子。郡立実科高女教諭石川かずえの講演	12・8 新婦人協会解散
一九三三(大正12)	1・― 県、女子蚕業講習会を厚木町で開催。一六人修了。田所タツ・織田ハナ・木内タカ、優等生として受賞(3月31日) 3・― 小鮎村処女会、県推奨の九団体に指定される。見識を広めるため農閑期を利用して県外の模範青年団と交換視察を行う 4・1 郡立実科高等女学校は県立厚木実科高等女学校と改称し、27年県立厚木高等女学校と改称 ・8 依知村の明星共学会、釈尊降誕会は青年会と連合して体育大会を開催。明星共学会は星梅山妙伝寺住職が農村子弟の教化を目的に創設 ・9 郡農会、荻野小学校で農産物利用料理講習会修了式を開催。修了生は小林知恵ほか四六人 6・― 愛国婦人会郡支部、依知村上依知村の現役二等兵卒の母親の生活が困窮しているのを、三〇円贈呈 8・16 愛川村半原処女会、同村青年会会場で臨時総会を開催。井上郡視学の講話 9・1 県立厚木実科高女は関東大震災のため校舎焼失、犠牲者二人。仮校舎で授業(9月1日の震災と9月15・16日の豪雨による) この年 郡内の産婆数は、厚木町四人・依知村一人・愛川村二人・荻野村二人・玉川村一人・南毛利村一人、計十二人	2・2 婦人参政同盟発表会 3・8 第一回国際婦人デー ・31 郡制廃止
		9・1 関東大震災、被災人口三四〇万人、死者約九万人 11・10 国民精神作興に関する詔書発布 12・― 日本婦人記者倶楽部設立

関東大震災被害



被災した相模橋



相模川土手の大亀裂



屋根の崩落した厚木蚕業取締所



焼け落ちた厚木高女の校舎



被災した厚木繭取引所

(『関東大震災記念写真帳』より)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九二四(大正13)	5・16 県衛生課、厚木芸妓三〇人の花柳病検査結果を厚木署に通知。梅毒患者は厚木花柳界の一流どころ三人 6・― 郡役所、前年9月1日の大地震で破壊した住宅の復興状況を発表 7・6 厚木実科高女、震災復興記念に声楽家外国彦を招き大音楽会開催。広田龍太郎作曲「離れ小島」・中山晋平作曲「月夜の畑」など数曲を独唱 ― 郡役所、農会実行組合・養豚組合・女子会などの団体が副業の講習会などを開催時に奨励金を交付すると発表。講習内容は、家庭作品(織物加工・ミシン裁縫・刺繍など)、屑繭整理・製炭改良・山菜栽培・木竹加工・農産製造・わら細工・養豚・養鶏など 8・7 厚木小学校同窓会、相模川に約五〇〇個の灯籠を流し震災ですさんだ町民の心を和げる。見物人約六〇〇人 9・1 震災記念日にあたり、厚木町全町民休業。厚木神社で黙禱ののち、厚木小生徒の君が代斉唱・町長の詔書奉読・告辞で閉式。午後町民有志、相模川河畔で追悼会。隣接町民約三〇〇〇人、僧侶約三〇人参加。愛甲郡役所でも一周年記念式を挙行「あゝ九月一日」の記念碑を厚木神社境内に建立 10・9 厚木町キネマ館で昼夜二回、メートル法宣伝講演会開催	5・28 全国小学校連合女教員会結成(30日) 7・1 メートル法実施 9・1 『武相の若草』創刊

愛甲郡災害取調表（大正二年九月一日の災害及び九月一五・一六日の豪雨）

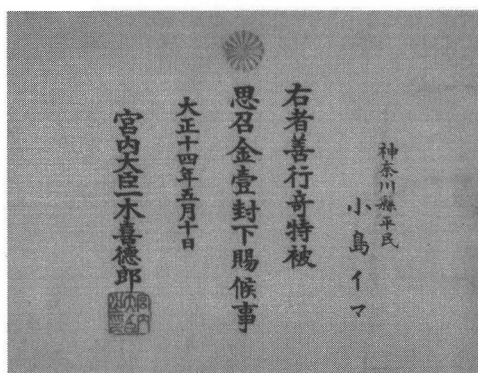
計	南毛利村	玉川村	宮ヶ瀬村	煤ヶ谷村	小鮎村	林川村	及川村	妻田村	下川入村	棚沢村	三田村	荻野村	愛川村	高峰村	中津村	依知村	厚木町	町村名			
六一	六	一	二	一	一	三	一	三	一	一	一	一	一	一	一	一	二	死	死傷者数		
一〇四	八	一	三	七	七	一	一	一	一	一	三	五	一	一	一	四	六	傷			
一六五	一四	二	三	九	八	一	一	三	一	一	四	二	二	二	一	五	九	計			
一三〇六	一八八	一九	一六	六五	二一	三八	一	一	一	八	四	八	五	九	二四	九一八	全潰焼	罹災戸数			
六三七	二三三	四六	三七	一二七	二二	三八	六	一	五	一〇	二三	一〇	九	三七	六六	半潰焼					
二〇	一	一	一	二〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	流失				
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	半流出				
一九六四	四二一	六六	七	七三	一八二	四	三	七六	七	一	一三	一四	三〇	一五	一八	六一	九八四	計			

官公署の被害程度 1 全焼 実科高等女学校、厚木税務署、厚木郵便局、厚木町役場
 2 全潰 厚木小学校、土木派出所、厚木登記所、蚕業取締所
 3 半潰 愛甲郡役所、厚木警察署、厚木中学校、半原小学校
 小鮎小学校
 神社 1 全焼 郷社厚木神社

（『愛甲郡制誌』より作成）

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九二四(大正13)	11・13 厚木町、復興第一回秋季大掃除を町別に実施。保健衛生の観点から床下まではがして清掃(〜16日) ・30 県蚕業試験場、屑繭整理講習会の女性教師を養成。郡内から及川村の田所タツ(18歳)、三田村の橘ミヨ(18歳)を選抜県養蚕取締所、女子蚕業講習会入所式を行う。講習生は試験合格の六九人。毎日五時間の授業を受ける(〜14年2月) 12・― この年 郡内の人口、女二万六二八・男二万八八三人 1・― 依知方面で幼児のはしか・百日咳が流行。一歳から七、八歳まで約四〇人が死亡 2・1 愛川村田代小学校女子部は、同小学校で料理講習会を開催(〜7日) ・25 依知村処女会、同小学校で家庭料理講習会を開催。講師は県派遣の武原技師と森囑託。講習生三〇人(〜3月3日) 4・28 天皇、妻田村へ。妻田学校の生徒は揃いの羽織を着て、旗をふつて迎える 5・3 宮ヶ瀬村主婦会・女子会開会。講師は橋本農産学校教員 ・10 郡教育会・衛生協会、清水小学校で連日総集会を開催。功労者表彰を行う。一五年勤続は小鮎小学校訓導中村スミ・小宮クニ。一〇年勤続は田代小学校代用教員甲賀モトほか一四人 ・10 郡、節婦として小島イマ・平本ハルほか一人を同役所で表彰、伝達式を挙行 ★ 11・3 小鮎小学校、生徒・青年団・処女会連合の大運動会を開催	10・30 大日本連合青年団結成 11・1 県、勤儉奨励神奈川県委員会設立 12・13 婦人参政権獲得期成同盟会創立、市川房枝ら

節婦小島イマの表彰状



(小島校次家所蔵)

小島イマ（一八八九—一九四二）

一九一三（大正二）年、病弱な両親に一〇年余も孝養を尽くした孝子として郡長より表彰状と賞金五円を授与された。二五年には宮内大臣より節婦として表彰された。

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九二五(大正14)	11・8 宮ヶ瀬村女子会・主婦会の連合総会を開催。郡視学の講演 12・1 依知村立実業補習学校女子部、同校講堂で始業式を行う 16 厚木町商会、佐古繁太郎を講師に簡易即席料理と菓子製造 講習会を厚木公会堂で開催。17日高峰村処女会、18日中津 村処女会、20日愛川村処女会でも行う この年 厚木浸礼教会、米国からの震災同情金五〇〇〇円で牧師館 と教会堂を厚木町七・二九番地に移転、現教会の基礎となる 1・16 三田村の三田組合は、同村清源院で染色機織講習会を開講。 各村より約二人が選ばれ受講(〜17日) 18 日本赤十字社神奈川県支部主催簡易看護講習会、高峰小学 校で開催。四三人が受講(〜24日) 18 煤ヶ谷女子青年会は、編物講習会を、煤ヶ谷小学校で開 講。講習員七〇人(〜20日) 19 来春卒業予定の県立厚木実科高女生五三人、校長と教師に 引率されて厚木小学校の授業を参観。2月10日には清水小 学校でも参観。毎年、卒業生の多くが教師になるので 22 県主催郡内女子青年団幹部指導講習会、厚木小学校で開 催。県内務部長代理・県視学・井上常子社会教育主事補ら が出席。各村から六五人が参加。女子青年会の普及と提 携、修養機関について協議ののち、意見発表(〜24日)★ ・ 赤十字社県支部主催家庭看護法講習会、煤ヶ谷小学校で開 催。講師は倉田よしの・鳥海みさを	11・19 富士瓦斯紡績川崎工場の 男女工六〇〇〇人争議 (〜29日)

郡内女子青年団幹部指導講習会

△ 諮問事項

郡内女子青年会の普及並びに提携の方法如何、当郡内各町村の実情に鑑み女子の修養機関を如何にするか

△ 協議事項

文化的農村の創造如何（小鮎村女子会）

女子青年会員の服装を制限する必要なきか

（南毛利村女子会）

農村女子に適當なる修養方法如何（依知村女子青年会）

郡内女子会の相互視察（愛川村女子会）

郡女子会の事業として一月より四月までくらいのあいだに於いて各村巡回の短期（一村三日以内）講習会二

回くらい開催しては如何（荻野女子青年会会長）

（荻野女子青年会会長）

意見発表

わたくしの敬愛する女性（霜島邦子）

時代に順応すべき わたくしたちの立場（外山文子）

わたくしの小さき希望（二葉会員）

真人は真人を生む（梅沢素子）

（『横浜貿易新報』一九二六年一月二二日）



中津村処女会

（『目で見る厚木・愛甲の100年』）

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九二六 (大正15・昭和元)	2・11 愛川村の青年団川北支部、川北同友会倶楽部で図書館開館式。男女青年団員参加、川北女子支部会員の手料理、活動写真 依知村処女会、機織染色講習会を同村小学校で開催。約七〇人が参加(14日) 玉川村処女会、同村小学校で発会式。井上視学、村民有志出席 小鮎村・中津村処女会、各小学校で春季総会開催 厚木町女子青年団、厚木小学校講堂で発会式。会員一三〇人 郡女子青年幹部研究会、郡役所で開催(23日) 宮ヶ瀬村女子幹部会、川島技手の養蚕講話を受講 郡連合女子青年団発団式、荻野小学校で開催。出席者約六〇〇人、県内務部長・井上視学など出席。一〇数人が意見発表。のち塚本常子の講演。6月19日に役員選挙、団長は厚木実科高女校長永沢泰治・副団長は厚木小学校校長仙波兼正 依知村小学校・補習学校、同小学校で卒業証書授与式挙行。生徒の図画・書き方、女子補習生成績品を展示 田島ヤス、愛川村半原に立像の聖観音と子育て観音を建立 三田村立青年訓練所設置。在村青年の教練指導を開始 宮ヶ瀬村青年会・女子会の運動会を開催 県、裁縫専科正教員・小学校准教員の免許状を与える。山口チヨ(棚沢村)・相馬久子(小鮎村)・白井むめ子(依知村)・川島利江(妻田村)・飯田田鶴子(厚木町) 愛甲衛生協会、荻野小学校で学校衛生講習会を開催。講師は県学校衛生主事と郡学校医会役員数人、受講資格は学校衛生主任と女教員	4・1 日本女子スポーツ連盟創立 4・20 青年訓練所令公布

厚木町女子青年団発会式

厚木町女子青年団の発会式は二一日午後一時より厚木小学校講堂に開会一三〇名の会員無欠席来賓に宮原県社会教育主事補、古沢郡長、三森厚木中学校長、高井前校長、林本社記者等二〇余名後藤町長の開会の辞に始まり会則の議定役員選挙を行い、来賓総代で古沢郡長、高井鉄三氏祝辞、宮原主事補の講話大野雉彦氏の講演二時間余に亘つて後、後藤町長閉会を宣し茶菓の饗応あつて六時散会尚団長、副団長等は近く評議委員会を開き決定すると

(『横浜貿易新報』一九二六年二月三日)

神奈川県男女青年団概況(一九二五年の調査)

愛甲郡女子青年団 一二団
正団員数 一七〇〇人

愛甲郡男子青年団 一六団
正団員数 三三〇一人

(『武相の若草』一八号・一九二六年二月)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九二六 (大正15・昭和元)	6・9 第一回県下小学校女教員大会、湘南中学校で開催。愛甲郡からの出席者は鈴木セイほか一六人(10日)★ ・25 年に一度の半原神社祭典挙行。休みをとった擦糸工女ら、夜ふけまで芝居、花火などを楽しむ ・ 厚木芸者の健康診断、受検者三二人中梅毒患者一人・妊娠一人 7・1 勤労青年に軍事訓練を行う青年訓練所を全国に開設。従来の実業補習学校と並立したため教育内容、在籍生も重複 8・15 厚木町厚盛館で二代目市川柿之助襲名、妻の市川芳子(二代目柿之助娘)、夫と共に古典歌舞伎の伝統を伝える 9・ 郡内産婆営業者、産婆組合を設置決定。代表者杉山フクは設立認可の申請を提出。会員総数九人 10・5 南毛利村農会主催屑爾整理講習会、同村小学校で開催。女性講師二人、講習生約五〇人 ・22 第五回全国処女会指導者講習会、東京市四谷区の青年会館で開催。愛甲郡から井上智恵子(荻野村)出席(28日) ・26 内鮮融和事業に活躍の黄人社、厚木警察署と厚木町後援で講演会開催。会場は厚木実科高女、厚木小など。講師は李東華・金秀洪(27日) ・27 愛川村の女子青年会、家庭衛生講習会を開催。七五人出席。終了後活動写真を一般公開(11月1日)	7・1 郡役所廃止 11・11 女子青年団の組織化振興に関する内務・文部両省の共同訓令

「女教員の前途」

愛甲郡小鮎小学校 中村 スミ

婦人と職業といふ事の研究は近年になつて余程進んでまゐりました様に思ひます。十年以前の頃は家族中の女子が其家業以外の職業に従事するといふことは世間一般から一種の冷笑を受けなければならないといふ状態でありました。(中略)然し現今では生を此の世に享けた一個の人として為すところなきは理に非らずとの考から性の別なく意義ある日を送らうとする思想が一般に押しひろまつたかの様でございます。(中略)

さて此職業婦人の活動する範囲は研究が進むにつれて廣くなつてまゐりますが現在私共の従事して居ります此の育英事業は婦人に最も適當なものと私は考へます。女性には子女の教養といふことが双肩にかゝつて居ります。いえ子女の教養は殆ど全般を母親が負ふべく天理が之を明示して居ると思ひます。此の点から考へまして育英事業に携はることに殊に初等教育に従事することは適任だと考へます。現在の女教員ではまだ遺憾ながら種々なる点に足らぬ所がございますが将来は小学校教育は女教員の手に一任されると思ひます。(中略)女教員は研究心に乏しく責任觀念が薄いと看取されて居りますがこれは非常に迷惑なことであります。従来私共は女徳の一要素として温順といふことを嚴格に躡られてきましたそのため美しい謙遜の態度から引込み思案他人次第といふ活氣のない女性が出来上がった様に思ひます。(中略)

然しもう古い型から脱出して職業に適應した女性とならうとしていらつしやる方はたくさんございますがまだ全般がさうなるまでには相當の日月がかゝると思ひます。これは勿論女教員自身に責任があるのではあります。尚一部は同職たる男教員の方にも其責がある様に思ひます如何に為された事が事理になつた正しいことであつてもそれが女教員であると極めて不自然なもので有るかの様な態度をおとりになることであります。これは女教員にとつて誠に不愉快なことでございます。そうした些細な事柄によつて開發されかゝつた私共の自覚の芽は多くしばんでしまうのであります。次は責任と地位と高下についてでございます。上席の方が何人お出ででも又同僚の方が幾人ありまして自己の責任は自己が果さないで誰が果すのでせう。如何に自分が末席の女教員であつても負ふべき責任が有るはでございます。それをよく女などがとか申されたり又女らしくと言ふ様なお考のもとに責任遂行に就いて躊躇される方があながち無いともいへぬ現在ではないかと思ひます。これは女教員の前途を明とも暗とも致す大切な扉だと思ひます。責任觀が確立いたしませば研究心も当然起つてまゐりますし其他一般女教員の短所とされて居ります諸点は一掃されるものと信じて居ります。

県下女教員大会 (愛甲郡の出席者)

(『神奈川県教育会雑誌』一二二二号・一九二五年七月)

鈴木セイ・萩原ケイ・三橋里・奈良八重子・佐藤マサエ・小島ミチエ・井上智恵・落合ハツエ・長谷川ヤス・桐生ハル・中村スミ・中村菊代・川口イネ・杉山迪江・山口房子・小瀬村タマ子・霜島邦子

(『横浜貿易新報』一九二六年六月九日)

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九二六 (大正15・昭和元)	12・1 女子蚕業講習会、県蚕業取締所で開始。終末試験を3月3日に実施。講習生一九人(27年3月8日) 産婆業飛鳥井えい、厚木看護婦会を厚木天王町に開業。派出看護婦を置き、看護婦も養成 この年	11・29 神奈川県婦人連合会成立 12・25 大正天皇没。昭和と改元 ・ 処女会・青年団・教化団 体が文部省所管になる 1・15 厚木座で、社会民衆党演説会。吉野作造ら
一九二七(昭和2)	1・16 中津女子青年団春季大会開催(モダンガールについてほか) ・ 郡農会と各町村会、労賃の安い山形方面より労働者を受け入れ、女三二人、男一六人 2・18 厚木芸妓、石多屋で修養講演受講。講師石田圭秀、参加者約八〇人 3・4 小鮎村処女会・清和会小鮎支部、同小学校で合同総会。修養講話のち処女会員の手作り弁当を会食 ・13 郡女子青年会、荻野小学校で総会開催。講師は県社会教育主事補井上常子・日本青年館熊谷辰治 ・30 煤ヶ谷村女子会、同村小学校で簡易染色講習会。講師はみやこ染本舗の水越技師。会員約四〇人参加(4月1日) ・ 高峰小学校女子補習生、茶話会費金八円四五銭を奥丹後震災地へ義捐 4・18 荻野村青年団文芸部主催、活動写真応用講演会開催。約一三〇人出席 ・23 愛川村処女会、家庭料理講習会開催。講師は県立厚木高女弓野教諭、約六〇人出席(24日) 6・16 第二回県下女教員大会、県立女子師範学校で開催。出席者五〇〇人	3・15 金融恐慌、銀行取付騒動 4・1 小田急線全通「相模厚木(現、本厚木)」駅・「愛甲石田」駅設置 5・5 花柳病予防法公布 5・2 福田(景山)英子没 5・12 大日本産婆会設立

「昭和初期の養蚕取締所」

中荻野の女性（一九一六年生まれ）談

わたしの家は小作で収穫の二分の一を年貢に出していた。現金収入が必要で父から勤めてくれと言われ、県の養蚕取締所の試験を受けた。取締所は現在のNTT厚木支社のところにあった。昔はバスも一日一本しかなかったので厚木町の親戚に泊まって受験した。問題はたまたま前夜開いた理科の本にあったレンズの屈折が出て、幸い合格。応募者一〇〇人、合格は二人だった。

はじめ三か月は講習を受け、その間でも三〇円の月給をもらえた。当時（昭和七、八年）、県職員の月給が四〇〜四五円だったし、米一俵が五円で買ったので一七〜一八歳の小娘の月給にしては破格の報酬で父が喜んだ。月給は袋ごと仏壇に上げた。取締所では顕微鏡で、蚕種の微粒子病など病毒の検査をした。わたしは高等小学校しか出てないので取締所の教科書の読めない字やわからないことは荻野小学校の女先生が夜教えてくれた。ふだんは役所で蚕種の検査をしていたが六月はじめからは近在はもとより、遠くは静岡・山梨まで袴を着けて蚕の雌雄鑑別に歩いた。また取締所では養蚕試験所から教えにきて真綿の取り方の講習があった。わたしたちは他所へ教えに歩くことはなかったが、家では上繭は売り、玉繭を真綿にした。

（『谷戸田のムラ』）



神奈川県繭検定所の作業風景

（『目で見る厚木・愛甲の100年』）

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九二七(昭和2)	7・1 厚木神社再建で氏子が寄進。総額二万九四八二円。女性 は、清水カク(金物店)・内山テル(酒店)・佐藤トク (髪結)・小沢ひさ(芸妓)・長谷川マサ・横田サク(料 理屋)・岩井ツネ 厚木の美容師第一号萩原千代子、厚木浸礼(バプテスト) 教会で受浸し、教会の主要信徒として活動 『武相の若草』の購読者 ★	6・26 大日本婦人美容協会、東 京会館で発会 7・7 県、連合女子青年会発会 10・2 全国婦人同盟結成 10・10 日本連合女子青年団、 日本青年会館で発団式 11・4 県、看護婦会取締規則公 布
一九二八(昭和3)	2・25 県連合女子青年会、音楽体育講習会を厚木小学校で開催。 音楽は外山国彦講師、体操は厚木体育主事。一三七人出席 依知小学校同窓会・依知村女子青年団、春季総会を同小学 校で開催。約二六〇人出席。山下みよ子、女子青年団宣言 綱領を朗読、日本青年会館囑託の通俗講話「金になる木」 荻野村女子青年団、屑簾整理講習会を開催(22日)第二 回は、9月20日開催(21日) 7・1 厚木酒商組合・愛川物品販売組合、メートル法宣伝のた め、この日に限りメートル法で買う客に福引券を出す 7・7 第二回県連合女子青年団、平塚小学校で総会開催。愛甲郡 から出席の青木静江と関山八重は箏曲演奏、井上スエは談 話。出席者約二六〇〇人 10・7 暴風雨のため妻田村木売場と小鮎川堤防約九一メートル決 壊。木売場三三家方面床上三三戸・床下三九戸浸水。厚木青 年団は非常救援隊を組織して、数百人を町へ避難させる。 農作物の被害甚大(8日)	2・20 普通選挙法による初の総 選挙 6・24 第一回県下女学校団体競 技大会二二校、四〇〇〇 人参加 7・29 治安維持法改正公布 7・28 人見絹枝アムステルダム オリンピックで銀メダル ・1 内務省、思想取締強化

一九二七（昭和二）年の『武相の若草』の購読者

厚木実科高等女学校・池田きく子（高峰村）・愛川村女子会川北支部・小島まき子（愛川村）
・八木貞子（愛川村）・大野静子（中津村）・平川安美（中津村）・小鮎村女子会・よもぎ会・
荻野小学校など

（『武相の若草』四〇号・一九二七年二月）

『武相の若草』文芸欄掲載の短歌

はたけ路を春笛ふきて行きし人にませり兄に肩のあたりが	池田きく子	高峰村	（創刊号）
麦の穂をゆすりて渡るそよ風にゆられてましろき除虫菊の花	小野沢しげ	愛甲郡	（二〇号）
十月の朝肌寒むに着更へする紅絹の裏地の香りうれしも	高峰きく子	愛甲郡	（二七号）
蛙の子鳴くこえはやもきかれたり春たちし宵茶をくみをれば	佐藤千秋	愛甲郡	（二三号）
雨あしの冷たき光を窓に見つゝ今日一日を部屋にこもらふ	足立原ふじ	愛甲郡	（二八号）
あきらめの身の安けさはしみぐとこほろぎのねを一人聞きたり	井上せき子	厚木町	（三九号）
静かなる校舎の中にたゞ一人オルガンひける先生さみし	小林すえ子	愛甲郡	（三九号）
白菊の匂ながれくる庭先に大根切りをれば心すがしも	小林喜代子	愛甲郡	（四一号）

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九二八(昭和3)	10・17 荻野村女子青年団、バザーを開催。20日、荻野村青年団文芸部、基金捻出策として役員全員三増志田峠で栗拾い。21日、同文芸部・在郷軍人分会、入宮者慰安映画会を新宿公会堂・荻野小学校・上組クラブで開催 ・26 県連合女子青年団、大山町阿夫利神社で幹部研究会を開催。出席者綱島ミツ(荻野村) (28日) 11・2 県蚕業取締所女子検査吏員三〇人、横浜見物。県庁新築庁舎の県勢展覧会・生系検査所など ・5 県連合女子青年団、大船横須賀方面に見学旅行。愛甲郡からの参加は中村松枝(荻野村) ・10 天皇即位式を厚木町で祝う。厚木小・県立厚木高女・県立厚木中の生徒約一〇〇〇人が旗行列、行進歌にあわせ万歳連呼 ・21 大日本連合女子青年団第二回大会、京都府立第二高等女学校で開催。愛甲郡から関山八重子が出席し「女子青年の自覚と修養」を発表 (23日) ★ ・26 愛川村半原女子青年会、時間励行のため村役場に時計を贈呈し「時は金なり」を宣伝 この年 厚木の芸妓は、藤丸・音若など五一人 この年 郡内の女子青年団員数は、一四団・正団員一四二七人 1・1 県連合女子青年会会歌の当選者は三等和喜田薫(依知村)・関山千代子(厚木町天王町)	10・2 県会議場で「御真影」伝達式、県下一六五校へ
一九二九(昭和4)		

大日本連合女子青年団大会意見発表

「女子青年の自覚と修養」

関山八重子

私達女性は、女性自身としての価値と理由とを、もつとはつきりと自分で見出し、そして之に最もふさわしく生きなければならないと思ひます。

現代の社会が自覚し進歩しつゝあることは事実でありますが私達女性によつて企てられております色々の運動には、まだ邪氣や衝氣や阿諛があるかもしれません、私達はもつと自分で苦しんで、其の歩む道を開かなくつてはならないと思ひます。

より多くを、男性にたよつてはいけません。それ故に女子教養を進むることを何ものにも増して、なしとげなければなりません、それは教養のみが人間を真に救ふものであるからであります、教養ある女子の持つしとやかさは世の何よりも美しいものと存じます、私達は之を身に修めるために真に覚めなければならないと思ひます、騒がず、あわてずグズグズせず、うちに深い愛を持つて、それがしとやかなる自然の形をなすときそこになんとも云へぬ女子の氣品があるものであると信じます、言語の及ばぬ力、心の力があります。

なんとなく頭を下げないでいられないような婦人には、このしとやかさが満ちているからだと思ひます、優しさと濃な情愛とが豊富でも、たゞそれだけでは、氣品がありませんそこにこのしとやかさが、加はると荒れくれ男でも遠慮いたします。

『優しい方です、親切な方です、涙の出る程、行届いた方です、けれども、なんだか遠慮のある方ですそれでも好きでゝいつまでも側に置いてもらいたいような方です』

現代に目覚めた女性とはこう云ふ様な婦人を云ふのでは、ないでしょうか。

私はこの光榮ある、大日本連合女子青年団大会に、しかも全国一般国民がこぞつてお祝ひ申して、居りますよき秋にあたつてふつゝかな私は少しでも皆様と一緒によき日本女性となるよう、一日より一日へと、実行して行く覚悟でございます。(終)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九二九(昭和4)	2・8 郡連合女子青年団幹部講習会を開催。荻野女子青年団より一五人出席(〜9日) ・10 荻野村で大火。損害約一〇万円、全焼七三棟・三五戸、原因は風呂焚きの火 3・9 三田村外五ヶ村組合(組合長桐生織次郎)、柳川ふみ子(一八歳)を役場書記に任命、吏員の能率向上 ・25 県女子青年団、伊勢・奈良・京都・大阪へ見学旅行、参加者二人中に綱島ミツ(荻野村)(〜30日) 6・3 県立厚木高女は農繁期に農家の子女だけに農繁休業を認める(〜10日) 7・7 第三回県連合女子青年会総会、平塚小学校で開催。愛甲郡から名和武子が朗読「山のあなたに」、田所タツが談話「小さな感想」。約二〇〇〇人出席 10・21 郡村長会、経済の緊縮・教化総動員などを協議し、実行要目を作成し、各町村委員に配布。内容は、冠婚葬祭費の節約・誕生や七五三の祝着の節約・集会時間の励行など 2・8 県連合女子青年会主催の女子青年修養講座を県立厚木高女で開催。講演は日仏整容学校講師「時代にふさわしい整容法」、東京女高師教授西野みよし「夫人と消費経済」、婦人矯風会の講師「家庭婦人と社会奉仕」、帆足みゆき「幸福への道」(〜10日) 4・21 県立厚木高女の制服がセーラー服となる	3・― 日本看護婦協会設立 4・2 救護法公布 7・1 改正工場法施行、女子と少年の深夜業禁止 9・10 中央強化団体連合会設立 17日強化総動員神奈川県委員会設置 10・24 世界大恐慌始まる

厚木町芸妓屋組合組合員之証



『市民かわら版』 No.33号
(飯田孝所蔵)

厚木町芸妓屋組合と料理屋組合

一九二九（昭和四）年二月、厚木町芸妓屋組合と厚木料理屋組合は、双方全員が「取替書」に捺印して、五か条からなる契約書を締結した（『料理屋組合・芸妓屋組合協定二関スル書類』）。

第一条では、鮎漁遊船会などで、多数の芸妓が必要となる時を除き、通常は厚木町芸妓屋組合員の抱芸妓以外を料理屋に招くことを禁じ、第二条では、芸妓が厚木料理屋組合加入料理屋以外のお座敷へ出ることを禁じている。第三条は他のお客から別のお座敷がかかった時のことであり、第四条ではお客と厚木町（市制施行以前の旧愛甲郡厚木町）以外へ遠出する時の承諾協議内容を定めている。また、第五条では「玉飾・祝儀ハ現在履行通りニシテ」、「時勢」の変化によつて双方が協議することとしている。

厚木町芸妓屋組合・厚木料理屋組合がこのような契約書を改めて結んだのは、逆にいえば、右の五か条の内容に関するいざこざが生じていたからであろう。昭和四年二月の「取替書」に捺印したのは、三七名（内一名は休業）であった。

（以下略）

飯田孝「今昔あつぎの花街」『市民かわら版』 No.33号

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三〇(昭和5)	7・14 愛甲女教員会、厚木小学校講堂で発会式挙行。副会長萩原ケイ開式の辞、会長挨拶中村スミ、経過報告副会長菊池ます。出席会員約五〇人	4・27 第一回全日本婦選大会開催
	10・31 荻野村農会、同小学校で玉糸製糸講習会開催。講師は鎌田ハナ。出席者は土屋美子ほか一五人(11月7日)	5・27 県小学校女教員大会開催
	11・6 県立厚木高女は前年尋常科女生徒用、本年高等科女生徒用優勝旗を新調。毎年若尾乾燥場グラウンドで開催される運動会で近隣小学校生徒間優勝旗争奪戦	11・29 県女教員会発会 この年 世界恐慌の影響、米価・糸価大暴落。農村の危機深刻。労働爭議続出
	12・6 彫刻家関野聖雲、郷土女子教育のために「真多満像」を県立厚木高女講堂に寄贈	1・17 日本産児調節連盟結成
	1・30 県連合女子青年団、第三回女子青年幹部指導講習会を金沢町の昭和塾で開催。受講者二七人中、愛甲郡から小島静枝・田島政子参加(9日)	
一九三二(昭和6)	2・14 郡連合女子青年団、県立厚木高女で青年団幹部指導講習会を開催(2月1日)	
	3・14 郡連合女子青年団修養部主催成人教育講座、厚木小学校で開催。講師は県農会南部技師。農業・青年指導・音楽など(15日)	
	3・14 厚木町青年団主催、女子青年団・河原口青年団・横浜貿易新報社後援で川上楽劇団(団長川上貞奴)、相模座で公演。小学生・女学生他総観客数約二〇〇〇人(15日)	3・6 大日本連合婦人会(連婦)発会式
	27 県連合女子青年会、第四回総会開催。愛甲の八木トミほか二人「芒の路」踊りを披露。評議員に愛甲郡から菊地マス	

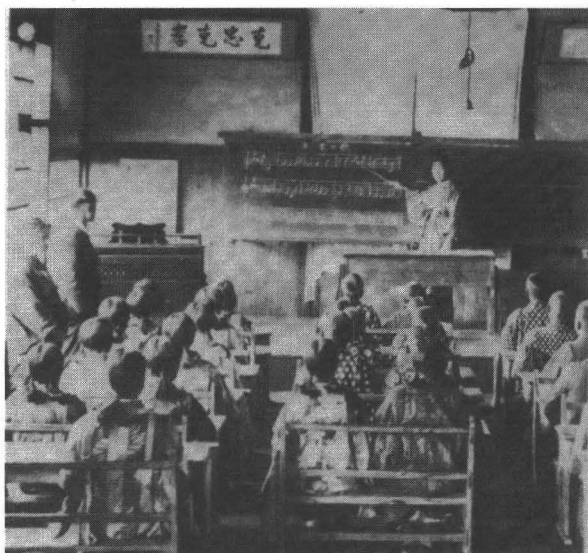
愛甲郡女子青年団概況

愛甲郡女子青年団	正団員(人)
厚木町女子青年団	六四
依知村女子青年団	一九〇
中津村女子青年団	一七二
高峰村女子青年団	一二〇
愛川村女子青年団	一五〇
荻野村女子青年団	一一五
三田村二葉会	五四
よ も ぎ 会	三五
清水女子青年会	七四
小 鮎 村 女 子 会	一三四
煤ヶ谷村女子青年団	八二
宮ヶ瀬村女子会	四七
玉川村処女会	五〇
南毛利村女子青年会	九九

正会員数 (1386人)	中等学校卒業	(146人)
	高等小学校卒業	(620人)
	尋常小学校卒業	(471人)
	其 他	(149人)

(『武相の若草』76号・1930年12月)より

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九三二(昭和6)	3・28 小鮎村男女青年団、連合春季総会を開催。男女青年団員の意見発表。参加者約六〇〇人 5・1 厚木町青年団、厚木小学校で高齢者と軍人遺族の慰安会春季総会開催。町内有志と町からの慰問袋と記念品を贈呈 ・28 郡産婆会、厚木町旧郡役所で定期総会。医師会からも出席 7・4 三〇年度事業報告、会計報告神崎つま、出席者約一〇〇人 ・22 県立厚木高女主催、県下小学校連合女子排球大会を同校校庭で開催。参加校は高座郡・中郡・愛甲郡三郡の一校 ・22 県立厚木高女、暑中休暇を利用し三、四年生約二〇〇人富士登山(23日)、茅ヶ崎海岸で水泳講習会も開催。有志約一〇〇人参加 8・17 県女子師範同窓会・教科研究会主催、家事手芸科講習会、県立厚木高女で開催。受講者は県下各小学校から約八〇人(19日) 11・22 厚木男女青年団、在満兵士のために街頭で慰問金募集。「北満の戦友にご同情下さい」のポスターと日の丸を掲げ、寄付袋を配布 ・22 依知村男女青年団・青年訓練所合同で令旨奉戴青年記念式挙行 12・7 郡産婆会、満洲派遣軍への慰問金一一円を、厚木町天王町菓子商菊屋正房方も一〇円を横浜貿易新報社に送付委託	3・― 小林多喜二、七沢温泉に滞在し『オルグ』執筆 5・1 第一二回メーデーに農村女性も参加 8・2 第一回全国中等学校女教員大会開催 9・18 満州事変起こる ・26 愛国婦人会、満洲派遣軍慰問始める 10・― 東北・北海道大飢饉



宮ヶ瀬小学校授業風景 1937年頃
(『ふるさと宮ヶ瀬』)

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九三二(昭和6)	この年 愛川村青年団、機関誌『愛川』を四季に発行	1・1 愛甲郡青年団『愛青』創刊
一九三二(昭和7)	1・14 依知村金田養蚕組合、繭品評会を開催。出品点数一七〇。郡内の養蚕組合中、成績優秀で女性たちを慰労	28 上海事変起こる
	2・15 厚木料理屋組合と芸妓組合間の紛争、和解。話し合いで揚屋手数料は料理組合の要求通り二割三分で決定	
	3・10 郡依知村女子青年会、慰問袋調製 ★	3・1 満州国建国宣言
	5・2 厚木町男女青年団、敬老会と春季総会を厚木小学校で開催。フィリピン在留日本人青年団理事中村軍治、米国での排日の真相について語る。	5・15 大阪で国防婦人会発足
	3 厚木町女子青年団長の寺田ふく子(40歳)没。満州事変突発後、慰問品送りに率先奔走した	5・15 五・一五事件
	10 荻野村青年団文芸部、同小学校で満州上海事変出征者慰安活動写真大会を開催。上映映画「霧の夜」「鞍馬天狗」など	7・27 文部省、農漁村の欠食児童二〇万人と発表
	14 郡女教員会、厚木小学校で役員会を開催。会長関池ます(厚木町)・副会長秋原けい(依知村)・浅沼せい(厚木町)	8・1 県学務課、教員給料不払い・欠食児童対策決定
	15 厚木町女子青年団、三浦三崎を自動車旅行。神社で参拝し女子青年団歌を高唱、万歳を三唱して出発。六四人参加	
9・29	厚木町女子青年団、厚木小学校割烹室で家庭経済化講習会を開催。野菜菓子の製法について	9・5 内務省、国民自力更生運動を指示

『武相の若草』 九〇号（一九三三年二月）表紙

武相の若草

在支軍慰問號

在支の我等の勇士へ

在支の我等の勇士よ、
この小誌は、在支軍士の特筆を贈贈しやうとする諸君の勇士魂の
青年の熱心である。
我等の闘ひは、世の深い文筆の中に、故郷の地の山嶺の中に、終日
闘士の身を奮起してある我等の姿を、す時も忘れず勇士の奮闘を念
願してある故郷の人々の愛を贈りて、無さしい故郷の慰問として送さ
たいもの一冊だ。
在支の我等の勇士よ、
唯、一紙で許し、この小誌を手に、在支の我等の愛を贈りて故郷の
夢を想はれたい。



愛甲郡依知村女子青年会の慰問品調製の様子

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九三二(昭和7)	10・1 厚木町女子青年団、団長足立原マサ考案の団服(白い襟に帯はメリンス)を決める。会合には必ず着用し団員増加 11・1 厚木町女子青年団、敬神奉仕。毎日曜日に団員五人ずつ厚木神社及び忠魂碑の掃除 ★ この年 自殺及び未遂が相次ぐ。3月19日、中津村の女性が離婚話で劇薬を飲み未遂。同29日、依知村の女性が相模川に投身自殺。同30日、元町の女性(40歳)が病苦で縊死。7月13日、及川村の男性(27歳)と内縁の妻(22歳)がカルモチンと猫いらずを飲んで心中 この年 高峰村立実業補習学校、女子部約五〇人・男子部約一〇〇人の就学となり、実習地を経営 2・4 荻野村女子青年団、同村小学校で廃物利用の家庭染色講習会を開催。会費二〇銭。講師は東京手芸染色協会所属みやこ染本舗の技師(5日) 一九三三(昭和8) ・1 県蚕業試験場、蚕業講習生三〇人を募集 3・3 愛川村青年団宮本支部女子部、衛生講演会・節句定例親睦会を開催 ・6 厚木町女子青年団、三陸地方災害にあたり一五〇個の慰問袋を岩手県連合女子青年団長あてに送付 ・21 郡連合男女青年団、厚木小学校で春季総会開催。令旨奉読、事業報告のち意見発表。愛川村の女子青年団員田島まさ「非常時代における女性の覚悟」など	10・24 大日本国防婦人会創立大会。11月10日、県下初川崎支部発会 11・27 県男女青年連合会、昭和塾で非常時対策を協議

武相の若草

月 一
號 三 十 百 第



《青年女子大町市原部甲斐》 佐和協賛社

團 年 青 合 聯 縣 川 奈 神
會 年 青 子 女 合 聯 縣 川 奈 神

厚木町女子青年団敬神奉公実行

掃除の順序

- 一、厚木神社の周囲を掃く事
- 二、拝殿の廊下及び階段をふく事
- 三、手洗水を替へは手拭きを洗ふ事
- 四、打水する事
- 五、忠魂碑の周囲をはき打ち水をなす事
- 六、水をささぐる事
- 七、清掃当番者は必らず日誌に署名する事

（『武相の若草』一〇〇号・一九三二年二月）

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九三三(昭和8)	3・21 愛川青年団川北支部、男女合同親睦会を開催、愛川青年団田代支部、愛川劇場で慰問金のため映画会を開催。入場者約八〇〇人 ・26 愛川村女子青年団、半原小学校で女性の衛生・小児の発育について講習会を開催。講師は厚木町の寺田医師。出席者約三〇人 ・27 県男女青年団連合、創作副業品展覧会を横浜市興産館で開催。入選者は、萩原澄子(依知村)・荻野村女子青年会(29日) ・27 愛川村女子青年団、半原小学校で衛生(瘰癧・湿布・花柳病・結核)講習会を開催。講師は及川村の森久保医師 ・29 県連合女子青年会、第六回総会を横浜開港記念会館で開催 田島まさ(愛川村)が意見発表 4・15 愛川村両向支部、女子部と合同で青年カード輪読会を開催 5・29 愛甲郡旅館組合、厚木水明楼で役員会開催。組合長金子まつ・副組合長岩隈やす・会計新倉ひさ 6・1 厚木バプテスト(浸礼)教会、教会堂を拡張し厚木で初めての厚木幼稚園開園 ・10 県の繭検定所を県庁より厚木町天王大縄手六〇四(現厚木市役所所在地)に移し、7月14日繭検定事業を開始 7・24 半原神社夏祭。夜宮に神楽、翌日御輿の村内五部落渡御。半原燃系工場男女工員約三〇〇〇人の慰安(25日)	3・27 国際連盟脱退 5・1 第一四回メーデーに女性一四〇〇人参加 7・8 文部省、『非常時と国民の覚悟』配布、国民精神作興を呼びかける 11・15 県下各市町村婦人会長ら、非常時打開女性運動協議会開催

「満州の勇士を憶ひて」

南毛利村女子青年会員

小林直枝

私達は農村の女子であります。鋤執る畑に針持つ燈火の下に一寸時も忘るゝ事の出来ぬのは遠い満州の広野に立つ吾が勇士の事であります。

彼の万宝山事件、中村大尉事件、鉄道破壊事件等女ながらも憤然とせずには居られません。毎日の新聞或は号外に『今日』『支那は』『連盟は』と吾先にと争うて読む記事に日毎に変わり行く状況血湧き肉踊るの思ひが致します。

氷雪とざす満州の野に身を鴻毛の軽きに比し敵弾縦横し雨霰の如く降る中をもとのとせす寡を以てよく衆に当り、路もなき荒漠たる原野を昨日は東、今日は西と、悪戦苦闘を続けながら連戦連勝せらるゝ将士の方々に満腔の感謝を捧げずには居られません。

暴慢無礼常人為し得べからざる残虐を以て同胞の生命財産を奪ひ我が国権を侵し日貨排斥を敢てし多年の陰謀を以て小学校児童にまで排日思想を養ひ徒に欧米と組し、同じ東洋に同人種として共存共栄して東亜の平和を計るべきでありますのに彼の自乱自衰せる支那は実に悲しむべく憐むべき国で、非理非道なる彼等に対するには武力を以てするも止むを得ません。むしろ一步進んで徹底的にこらしめ覚醒を促し彼等を幸福へ導く外ありません。

又日本より考ふれば満州は経済上我が宝庫であり軍事上よりすれば日本内地を安全にするは朝鮮、その朝鮮を安全ならしむるは満州であります。殊に日露戦争に於て同胞数万の犠牲を出して獲得したる權益を如何なる事があつても抛棄する事は出来ません。

私達は氣候に恵まれた内地に飽食暖衣して居りながら隙間漏る風に首をすくめるなど、酷寒零下三十度の満州の広野に血を流し骨を碎きて奮戦する勇士を思へば吾ながら恥しく申訳ない心地が致します。この時局に際し吾等女子は出来得る限りの労役を為し陣頭に立つ勇士の万分の一に報いねばならぬと思ひます。

（『武相の若草』九〇号・一九三二年二月）

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三三(昭和8)	10・11 依知村女子青年団員、同村小学校の運動会に同村の高齢者を招待。手作りの食事を接待し座布団を贈る 11・5 厚木町女子青年団、非常時女性の訓練精神作興講習会を開催。団員約五〇人と父兄参加 ・11 県立厚木高女生四〇〇人、時局を反映し「精神作興」のため伊勢原駅から大山へ強行遠足 ・20 厚木町女子青年団 団旗を新調し披露式。出席者約三〇〇人	12・23 金子しげり、『横浜貿易新報』記者として女性で初めて議会への立入り自由を得る この年 愛国婦人会・連合婦人会・国防婦人会・女子青年団などの女性団体の統後協力活動が活発化
一九三四(昭和9)	2・16 文部省・神奈川県・厚木町主催の国民非常時更生運動の講演会を同小学校で開催。厚木町女子青年団幹事代表が出席 ・ 相模ゴム工業株式会社、松川サクにより創業 ★ 3・6 県蚕業取締所、第一七回女子蚕業講習修得証書の授与式を行う。修得生は一八人、四月から蚕種検査吏として働く ・21 郡男女連合青年団、厚木小学校で総会開催。功労者に感謝状贈呈。研究発表は中津村女子青年団の「私の願い」など 6・30 「厚木音頭」「鮎まつり」の作曲発表。花柳界・男女青年団にも好評 8・ 杉山フク没(80歳) 10・13 厚木町女子青年団、森永製菓・震災記念館・県庁・金沢文庫・七里ヶ浜に秋季旅行。参加者四〇人 ・ 小鮎村方面に大腸力タルや疑似赤痢などの伝染病発生。女二人・男二人・幼児一人が相次いで死亡	4・1 神奈川県連合婦人会発表。五三団体約三万人が参加 4・2 県産婆会総会 9・21 室戸台風。関西で死者多数 11・ 大日本連合婦人会県支部、各地で花嫁学校開校(10日間)

松川サク（二八九二—一九八六）

小鮎村打腰（現、厚木市小鮎）出身。一九〇九（明治四二）年郡立女子実業補習学校を卒業。松川儀良と結婚し、横浜長者町で医療用酸素の卸商を経営。震災後東海薬局を再起するが夫と死別。東京の目黒にアサヒラテックス研究所を設立。軍需工場の指定も受け事業を拡大する。

三四（昭和九）年相模ゴム工業株式会社を厚木町（現、厚木市東町）に創業。四四年一二月同町元町に会社を改組設立する。

戦後は女性実業家の団体、日本ソロプチミストクラブ会長（現、国際ソロプチミスト日本五リジョン）・全国商工会議所婦人連合会長を歴任。

地域商工業の振興を図り、その功績により八五年、厚木市名誉市民となる。サクの遺言により、小中高生の自由研究、短大や大学生の卒業論文を対象に「松川サク工業賞」を設け、現在も青少年育成に寄与している。



松川 サク

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三四(昭和9)	10・― 厚木飛行場、厚木町三川合流地点の相模川で開場式。このとき日本髪を結った芸妓力弥、飛行機羽衣号に乗る ★ この年 沢野正幸が厚木浸礼教会の第五代牧師に着任。以後約三年間、英語学校、女性のための料理講習などを行う この年 厚木町の芸妓置屋・料理屋・カフェなど約一八軒、芸妓と女給は六〇人	この年 東北地方冷害大凶作。女子の身売り続出 この年 国産パーマネント機械第一号発売
一九三五(昭和10)	この年 郡内の実業補習学校は、一四校・四一学級 1・12 大日本連合婦人会、中津小学校で花嫁講習会。講師は日本女子大井上秀子ほか ・27 郡国防協会発会式、県立厚木中学校で開催。「国防協会」と染めたマークを胸につける。参加約一〇〇〇人 ・27 厚木町旭町で大火。二戸、一八棟焼失、損害額約三万円。 ・27 同女子青年会、羅災者に米一俵、炊き出し援助 3・25 県男女青年会、創作副業品展示を、横浜伊勢佐木町の野沢屋で開催。五〇〇点出品の中、入選者は入倉君子・関キク(南毛利村)・井上三千代(高峰村)・上原もと子(厚木町)(27日)	3・5 大日本連合婦人会・女子青年団、第一回合同全国大会
	・26 依知村出身の北満勇士(28歳)と愛川村出身で厚木高女卒業の女性(23歳)の結婚を村中で祝う。夫と共に民族の犠牲になろうと挙式後ただちに北満洲へ出発	・27 県連合女子青年大会開催(横浜開港記念会館)
	4・1 青年学校令発布により郡内の青年訓練所、実業補習学校を廃止	
	5・1 厚木高女生四〇〇人、飛行場地ならしの勤労奉仕	

羽衣号と厚木芸者 1934年頃



(写真集『厚木市の昭和史』)



格納庫の前で（小学生義勇号と厚木高女の女学生たち）1934年頃
銀紙飛行場格納庫は、相模川・中津川・小鮎川の三川合流点に建てられた
（『日で見える厚木・愛甲の100年』）

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三五(昭和10)	5・2 厚木町男女青年団、同小学校で高齢者の敬老会・軍人遺族慰労会を開催。小学生の演芸会、高等科生や女子青年団幹部による料理の接待 ・25 厚木町料理屋・芸妓屋組合二業組合主催、花柳病予防講習会を厚木キネマ館で開催。講師は県衛生課防疫医。実際の予防として予防薬、器具など奨励 10・1 青年学校を勤労青少年の統一的教育機関として開校。普通科は尋常小学校卒業後二年、本科は普通科修了者と高等小学校卒業者で男子五年、女子三年の教育期間。39年に男子義務制が実施され軍事教育重視となる ・27 学校衛生訓練週間を郡内一五小学校で実施。回虫駆除のため海人草を全児童に服用させる(11月2日) 11・12 高峰村女子青年団、国防献金のため梳き毛を集め郡連合女子青年団へ送付 12・22 厚木町女子青年団、県の優良青年団として表彰される 12・23 厚木町女子青年団、梳き毛を集めて国防献金 この年 厚木署、郡内の欠食児童増加につき学校別欠食児童数を発表 この年 厚木町の生繭出荷はピークとなる。農村よりの糸繭の荷車・牛車で混雑。中津村は県の繭生産量三位、約一三万九〇〇〇kg。六位、依知村で約一三万三〇〇〇kg。一〇位、南毛利村 この年 妻田村真平田に満蒙開拓のため、拓務訓練所ができる この年 伝染病患者数は、女一七二人・男一八〇人 死亡女六七人・男六五人	4・1 青年学校令公布 ・10 文部省、各学校に国体明徴を訓令 10・1 愛国婦人会県支部、農繁期託児保母講習会開催(5日、金沢町昭和塾で)

「この頃の厚木町女子青年団」

関山 千代子

九月二十九日

「お祖母ちゃん今日の講習会の御料理よ」丁度夕飯時に帰宅した私は、それをお膳の上に並べた。「まあ立派なこと」「とてもお美味さうね」うち中が集まつてニコニコしながら褒めて呉れた。そしてお隣りへもおすそ分けをした。突然に開かれた午後一時より五時迄の講習会ではあつたけれど会する者四十二名そして野菜物のお菓子ではあつたけれど色とりどりで、とても綺麗に出来上がった。割烹着をまとひキリツとしてかひひしく働く私達の団体はこうして楽しく愉快な一日をくらしした。

十月一日

今度団服が出来た。綿服である。白襟にこの団服をキチンと着、帯はメリンスを締めて何処へでも堂々と出席する事に極つた。全部揃つた時の見事さを想ひ浮かべて早く着てみたい様な気がする。九月一日より毎月、一日十五日は四時半迄に小学校々庭に集まり萩原、溝呂木、両副団長及び村治ふみさんに民謡を教へて頂いてゐる。すがすがしい朝の空気を力一ぱい呼吸して、ピチ／＼はねる若鮎の様な私達は、東の空がほの／＼さし初める頃家路につくのである。

十月四日

今日は朝から雨であつたが、昨日と同じ様に、女生徒の髪の手入れをして差上げた。けれ共今日は酔でなく、百母根といふ物を煎じた湯で洗つてあげた。十八日には私達がお仕事をしておゐるところを県庁の方が御覧になるさうである。今年ももう運動会の日が近づく、この日は例年のことながら老人を優しく親切に接待してさし上げるのが私達の務で、可愛ゆい孫が馳けたり遊戯をしたりするのを見晴らしのよい教室の中からニコ／＼眺めてゐらつしやるのを見ると私達迄嬉しくなる。昨年私は出席しなかつたが祖母が歸つて来ての話を『女子青年の人達は随分親切だね』私が便所に立たうとすると「おばあさんお危なう御座いますよ」と手を引いて一所について来て下さつた、そして「おばあさん今度はお宅の哲雄ちゃん達が馳けつこをなさいますよ。ホラー一番外側から二番目に立つてゐらつしやるのがさうですよ、哲雄ちゃんは大きくつて早いからきつと一番ですよ」といろいろ教へて下さつた」と耳の遠い祖母はその親切が身に泌みて嬉しいらした。今年は更に団服を着て優美な踊も見せて上げるのである。団員の数も日に日に増し有意義な仕事をし、心を一にして修養にいそしむ私達のこの頃をふりかへつてみるにつけても地下の前団長寺田ふく子女史の与つて力のあつたことが思ひ出されるのである。

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三六(昭和11)	1・18 三田村ふたば会料理講習会開催。講師は厚木高女教師大村よし江、四八人出席 ・25 郡連合女子青年団幹部講習会、厚木高女で開催。作法講師北川恒子・割烹講師大村よし江。二八人出席(26日) 2・3 県立厚木高女創立三〇周年記念式挙行。校歌・校旗作成 ・11 宮ヶ瀬村男女青年連合、同村小学校での紀元節祝賀式・建国祭に参加 3・10 中津村女子青年団、在満兵士の慰問資金を得るため同村小学校で映画会開催 ・15 煤ヶ谷村女子青年団、同村小学校で作法講習会開催。講師北川恒子 ・16 大日本国防婦人会愛川村分会の創立発会式、半原小学校で挙行 ・20 愛川村女子青年団員三六人、半原小学校で行われた故陸軍歩兵上等兵鈴木福蔵の村葬を手伝う ・21 郡男女連合青年団、厚木小学校で総会開催。令旨奉読・表彰式(村治ふみ・溝呂木嘉根子へ)・意見発表。中津村女子青年団斉藤ユキ「父に別れて」ほか ★ ・30 県連合女子青年団総会、平塚第一小学校で開催。煤ヶ谷村女子青年団団長、愛川村女子青年団四人、中津村女子青年団五人、三田村ふたば会二人出席	2・26 二・二六事件 3・24 内務省、メーデー禁止

「父に別れて」

中津 齊藤 ユキ

『乳呑児のうちに父に死別れ、一人の兄に逝かれて、貧しい家庭は粟を食べ、教科書、学用品に不自由し、学校は休み勝ち―、やつと六年を卒業した。益々細りゆく家計、乙女心に感ずる不安と焦燥、明るい生活を求むる心―十五の春を迎へた私を苦闘の生活から救つてくれたものは、処女会であつた。私は向上に燃ゆる精神さへ持つてゐるなら、自分の様に学問のないものでも必ず為になると思つて入会させて頂いた。そして時折開かれる講演会、講習会は自分のためには骨となり肉となつた。』

『私の体を育てゝ下すつたのは母である。』『心を育てゝ下すつたのは女子青年会である。』自分の生活に安住して強く生きる心さへあるならば、人はなんと笑はふとも決して恥しい事はない。私は、この心を抱いて茨の道を強く進みたい。』―その一言々々には、尊い血と汗が滲んでゐる。一千の会員は感動した。そしてその感動はついに嗚咽にかはつてしまつた。

(『武相の若草』一四一号・一九三六年五月)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三六(昭和11)	3・30 玉川村青年団、同村小学校新築落成祝賀式にあたり郷土史料展覧会と郷土史講演会および娯楽大会開催。千数百人参観(4月1日) 4・19 厚木町女子青年団、衣服保存加工講習会を開催。講師は衣服保存研究会峰尾倫子 ・21 愛川村女子青年団員四二人、田代製糸工場で三和共同織物組合工場の布団四二枚縫製。縫い賃二四円。(22日) 5・7 厚木町女子青年団、衣服染色講習会開催。24日料理講習会を開催、講師は大和学園西野福吉 ・ 厚木町厚盛館放火事件で某女(36歳)放火犯として栃木女囚刑務所服役。二年後、真犯人の自供により出所 ★ 6・1 中津村女子青年団、農繁期託児所を開始。愛甲・津久井・高座から四〇人が視察に来所(20日) ・7 厚木町女子青年団活花講習会発会式。六月五回、七月七回、八月八回。九月八日に活花修了式 ・25 厚木町女子青年団、町内各戸から梳き毛を集め、売却金を陸軍省へ国防費として献金。12月12日も実施 7・7 大日本連合女子会館落成式に厚木町女子青年団長足立原マサ出席 8・4 愛川村女子青年団、半原小学校で洗い張り講習会開催。五人参加 9・1 荻野村女子青年団、同村産業組合と共同主催で洗濯講習会開催。三〇人出席	7・ 県連合婦人会・女子青年団、県下各地の家庭寮講座で花嫁教育(37年3月) 8・11 オリンピックベルリン大会、女子二〇メートル平泳ぎに前畑秀子優勝

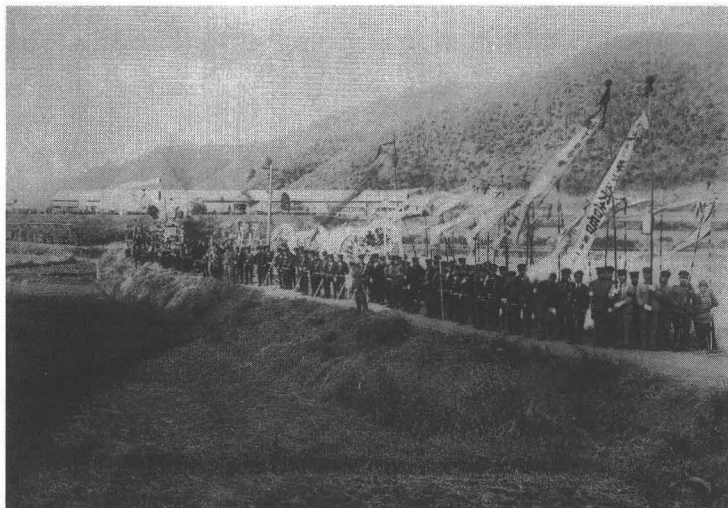
厚木町厚盛館放火事件について

昭和一一年頃、看守長から「遠藤さん、神奈川の人が入所したよ」と告げられた。わたしは早速新入りの房舎に急いだ。三〇くらいの小作りのおとなしげな女性がうつむいて正座していた。数日後、扉越しに声をかけた。所内では名前は番号で呼ばれる。「どうして放火したの」「いいえ、わたし放火しないんです」「えっ、放火しないでどうしてこへ来たの、おかしいじゃない」「ほんとうなんです、ほんとうに火をつけていないんです。警察はやっていないと言っても聞いてくれないんです」「それで」「やったと言えは家に返してやると言われたので、やったと言ったらこんなことになったのです」数日後、彼女は独房から工場に出て働けるようになった。模範囚であつた。無口な彼女の表情も少しは明るく感じられた。

足掛け三年目のある日、天から降つて湧いたような大問題が捲き起こつた。厚木厚盛館放火の真犯人の出現であつた。こんな馬鹿げたことが昭和の今日にあつたのだ。新入り当時の彼女の言葉が痛く悲しい。憤りを覚えたがどうすることもできない。彼女は無事帰宅。喜びは察するに余りある。温順な彼女は世話する人があつて、再婚、先妻の二児を立派に育てよく働きよき母よき妻であつたと聞く。(三〇年も昔の事故記憶も薄れているので間違つたところはお許しを請う)

遠藤キン「無実の女囚―厚木厚盛館放火犯―についての手記」『神奈川県史公論』第一四号より抜粋
当時遠藤キンは栃木女囚刑務所看守をしていたが、のち厚木の私立ちぐさ幼稚園長

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三六(昭和11)	10・9・10 三田村ふたば会、全員国防婦人会に入会 愛川村女子青年団、田代の勝榮寺で作法の一夜講習会開催(7日)。24日厚木町女子青年団、同小学校で一夜講習会開催。講師は大日本連合女子青年団と県より井上常子(25日) 12 荻野村女子青年団員斉藤喜久・大村コト、金沢昭和塾での県主催保母講習会に出席(16日) 14 中津村女子青年団、同小学校の秋季運動会に参加し、同時開催の敬老会で七五歳以上の高齢者に赤い羽織下用胴着を贈る 17 国防婦人会県支部厚木分会、厚木小学校で発会式を挙行。会員二〇〇人、会長後藤なほ子(町長の妻)・副会長足立原マサ(女子青年団長)・北川恒子(厚木高女校長の妻)・青木みよ子(在郷軍人会会長の妻)ほか理事(七人)。班長(七人)。組長(二五人)。評議員(二二人) 11・22 厚木町女子青年団、同町小学校で総会と青年記念式挙行。神社清掃者・団員出席優良者表彰と家族慰安会開催 22 煤ヶ谷村女子青年団、同村小学校でマッサージ講習会開催。講師平塚盲啞学校教諭。三八人参加(23日) 22 宮ヶ瀬村男女青年連合、同村小学校で令旨奉戴記念式開催 29 愛川村女子青年団員、高峰小学校での青年学校の軍事教練を見学	11・25 日独防共協定成立 26 全国高女校長会、紀元二六〇〇年記念運動として女子高等教育促進運動開始



戦没者の村葬 玉川村 1938年
(写真集 『厚木市の昭和史』)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三七(昭和12)	1・30 荻野村女子青年団員、県立厚木高女で開催の郡畜産会主催乳肉卵料理講習会に四人出席(31日) 2・11 県立厚木高女、建国記念日に際し生徒に日本精神・国史に関する作文を朗読させる。紀元節の歌の解説も配布し、建国精神の徹底をはかる 11 南毛利村女子青年団など、同村小学校で国防婦人会創立式。会員四五〇人 14 依知村女子青年団猿ヶ島支部、労働の効率を図るため、実用的な作業服を作り、同青年団の小麦栽培園の手伝い。七人参加 3・1 郡女子連合会青年団主催美容講座、県立厚木高女で開催。講師は女子整容大学美粧倶楽部の佐藤浪と作法は大妻高女の大塚時峰(2日) 5 郡各町村役場・国防婦人会、小学校児童の図画・作文二一五〇点を収集。慰問袋に入れ、在満日本軍に発送 29 県連合青年団、創作副業品展覧会を横浜野沢屋で開催、(31日)。郡の女性が五点出品、男四点。鈴木綾子(下川入村・棚沢村よもぎ会)・田川喜代子(厚木町)・小林初代(南毛利村)・山田いち(厚木町)・平井直江(妻田村) 31 県連合女子青年団、総会を横浜市開港記念会館で開催。表彰者は斉藤ユキ(中津村)。女子青年団代表約六〇〇人出席。役員評議員に愛甲郡の中村スミ	2・18 県連合看護婦会創立 3・31 母子保護法・軍事扶助法公布 4・5 防空法・保健所法公布(初めて保健婦の名称使用)



寮生（女子青年）の砂利採運の様子
（絵葉書「丹沢報国寮」）

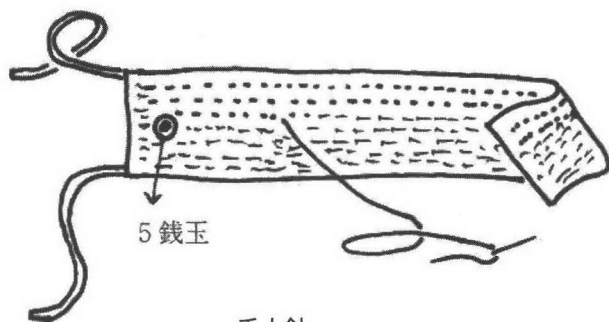
年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九三七(昭和12)	5・1 厚木町、相模川鮎漁遊船組合と相模川船夫漁師組合を結成。遊船組合長岩崎コウ(若松屋)、副組合長石井庄吉(石多家)、理事金子マツ(水明楼)・新倉清(新倉)、会計篠崎由起枝(大島屋) 7・9 厚木町女子青年団、銃後の活動。9日、相模厚木駅で、除隊兵歓迎。10日、街頭で公德強調週間の標語を団員に配布。15日、タスキをかけて街頭で千人針の依頼(16日)。 21日、神社に持参して武運長久を祈願。23日、厚木町出身の在満、在支の兵士二〇人に慰問袋郵送。31日、厚木神社に参集。出征兵士の見送り 17 厚木町青年学校生徒、厚木神社大祭で北支派遣将士慰問金を募集して得た六六円二銭を国分大佐に委託送金。18日は小鮎村の同小生五〇人が日用品を売った一円八〇銭を献金 8・1 宮ヶ瀬女子会、国防費として三円二〇銭を献金 29 宮ヶ瀬村国防婦人会、同村小学校で発会式。八〇人出席 10 煤ヶ谷村国防婦人会、同村小学校で発会式 9・15 厚木署が受け付けた献金は、厚木女子青年団一〇円・厚木町芸妓三円五〇銭・荻野小学校六年生八〇銭。さらに厚木町芸妓組合・芸妓・料理屋組合・カフェ女給らも献金 9・15 県立厚木高女生徒、国民精神総動員週間に際し、昼食(愛国弁当)の余剰金・愛国廃物アールに集ったメリンス代に生徒の寄付を加え、慰問袋に入れ発送。二回目は10月19日	4・15 ヘレン・ケラー来日 6・1 家庭防火群編成 7・7 盧溝橋事件(日中戦争開始) 9・21 大日本連合婦人会・同女子青年団、女子義勇隊結成運動開始

千人針

戦場に赴く兵士の武運長久・安泰を願って、千人の女性が晒し布に赤い糸で一人一針ずつ縫って糸を結んだ。「千人針」には千人の女性の思いが縫い付けられているので敵弾も避けてとおるとされた。中でも、トラは千里の道を往って千里の道を選ぶ“との言”い伝えから寅年の女性は自分の歳の数だけ縫うことができた。



慰問袋の中味



千人針

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三七(昭和12)	9・25 厚木女子青年団、厚木小学校で幹事会開催。足袋コハゼ・国旗の売り上げ純益で、皇軍慰問の千人針作製用の布の買い入れを決定 10・1 応召教員補充のため尋常小学校本科正教員・学校衛生婦養成講習会開催。期間6か月。応募者一八〇人中、小宮富貴を含む女性四二人合格 ・4 荻野村、同村各団体代表有志で更生委員会を結成するとともに勤労奉仕部を中心に銃後後援会を組織。男女五〇人参加、女性は大矢寛子ほか一人 ・6 厚木町の芸妓・女給・飲食店の女中、厚木署長を顧問に迎え県蚕業取締所で報国婦人会を結成。会員は約一三〇人 ・24 高峰村国防婦人会、同村小学校で発会式。会長は前村長の妻菊地原イマ。会員四〇〇人 ・ 厚木町飲食店組合の従業員、報国婦人会から分離、厚木赤心婦人会を結成。会長近藤コウ 11・3 厚木小学校同窓会、同小学校講堂で出征家族慰安演芸大会を開催。漫才、浪曲など ・13 厚木町男女青年団・戦友会・老若会・消防組・国防婦人会・各学校生徒・団体有志ら約一〇〇〇人、上海陥落、日独伊三国防共協定を祝い提灯行列 ・21 経済更生村の玉川村、村内から標語を募集。一等は吉沢貞子の「かざるな、おごるな、怠るな」★	9・22 厚木町に家庭防火群指導部結成 10・12 国民精神総動員中央連盟結成。愛国婦人会・国防婦人会など女性四団体含む七四団体加盟 11・6 日独伊防共協定調印 11・ 赤十字県支部、看護婦臨時募集(高女卒同等学力、16歳〜23歳) ・ 和田伝『沃土』刊行

玉川村の更生標語

- △一等 かざるな、おごるな、怠るな、
心ゆるすな記帳と時間、
- △二等 経済更生は記帳より、
- △三等 経済更生は一に団結二に実行、
お互いの自覚に生きる理想郷、
皆でくゝれ模範村、
- △ 計れ増収惜しむな労力、
消せよ赤字と自分の腕に、
- △ 守れつゝしめ時と賄、
- △四等 積んだ貯金に輝く勝利、
更生で道を逆ふな義理と強慾、
更生は一に勤儉二に貯蓄、

吉沢 貞子
中山 助一
越智 忠義
小瀬村久仁子
伊東 綱吉
小瀬村豊作
越智 貞蔵
同人
中村 勘一
黄金井盛造
三橋 新司
足立 泰一

(『横浜貿易新報』一九三七年一月二日)

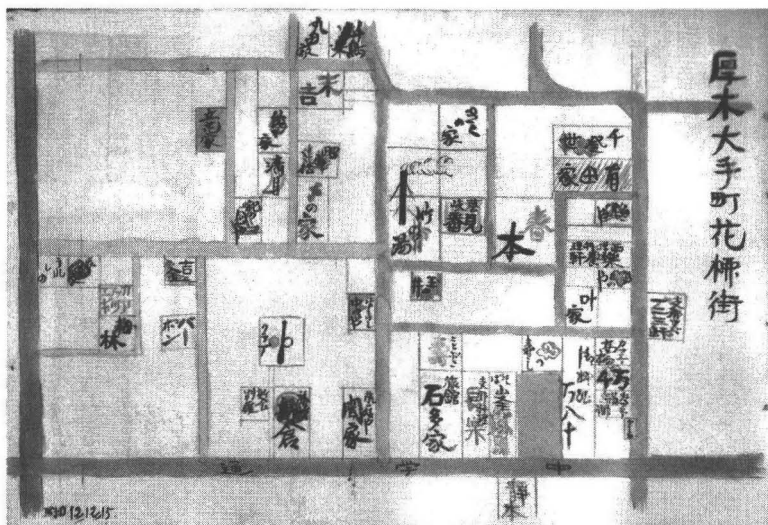


高峰村の愛国婦人会 1937年頃
(『目で見る厚木・愛甲の100年』)

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九三七(昭和12)	11・22 厚木町男女青年団・青年学校、合同の厚木町青年記念式を町役場で挙行。終了後秋季総会開催、時局ニュースを上映 12・14 厚木のカフェ飲食店女給らの赤心婦人会、軍事扶助を受けている町内出征兵士留守家族を金一封とのし餅で慰問 14 煤ヶ谷村、時局にかんがみ申し合わせ。年賀回礼の廃止・年賀状廃止・年末年始贈答廃止・応召の際の入営旗は三本以内・廃物は集めて後援代にあてる 18 宮ヶ瀬村青年団・在郷軍人分会・国防婦人会、国分晋也大佐の講演会を開催 23 県立厚木高女生徒、恒例の餅つきの際の厚木神社へ奉納。貧困者と松枝町の戦死者宅を訪問、霊前に供える ・ 中津村女子青年団長中村サト、出征兵士慰問にと一〇〇円を役場に寄付	12・13 日本軍、南京占領
一九三八(昭和13)	2・5 この年 郡内の人口、女二万二四六七人・男二万二四三六八人 2・5 この年 郡内の絹織物職工数、女二四八八人・男八八八人 11 県主催成人教育講座、厚木小学校で開催。人生と宗教・経済と時事問題・時局と商店経営・支那事変・日本精神について。対象は成人男女(9日) 11 中津女子青年団長斉藤ユキ、県より表彰を受ける。中津組合製糸模範女工として四年間、厚木蚕業取締所検査吏員として二年間勤務。女子青年団創設以来の会員 25 中津村青年学校・男女青年団共同経営で同村南下谷と二井坂の荒廃地開墾し「愛国開墾」で5月5日竣工式 ★	1・1 母子保護法施行 1・11 厚生省設置 2・ 県、応召小学校教員の補充のため高女卒業生四〇人を三か月で代用教員に



愛国開墾にふるう中津村女子青年団
 (『横浜貿易新報』1938年5月12日)

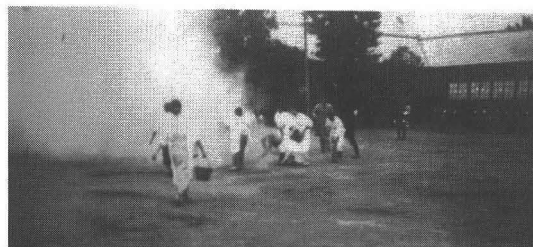


厚木大手町（現、寿町1丁目）の花柳街（1937年）
 (写真集『厚木市の昭和史』)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三八(昭和13)	4・1 厚木町の料理屋勢喜屋の養女関屋若江(伊勢原高女卒)、日本舞踊とダンスが得意で松竹少女歌劇学校に合格 ・29 三田村女子青年団、高座郡大野村東京第三陸軍病院に傷病兵を慰問。天長節にトラック一台の植木を移植奉仕 ・29 阿部祐四郎牧師、笹倉義枝と結婚。以後約五〇年間、夫妻で厚木教会を支える 5・7 県立厚木高女四年生、第一回東京第三陸軍病院の傷病兵慰問。草花の鉢植えを持参し病室清掃、二〇人参加。15日二回目も同様に巡回慰問を行う。厚木町報国婦人会も訪問 ・25 高峰村、同村小学校に農繁期託児所を開設。保母椎名フジ子と同村女子青年団役員三人が交代で世話。村長や同村産業組合も茶菓子や夕食で同事業を援助。収容人員約一〇〇人(6月中旬)中津村も同様に活動する 6・23 厚木町女子青年団、東京第三陸軍病院の「白衣の勇士」に裁縫の奉仕。使用の糸は全町の古新聞・古雑誌の売上げ金で調達 7・2 厚木青年学校第四回記念式、同校講堂で行う。皇居遥拝・国歌斉唱のあと来賓祝辞、同校後援会岡部会長、非常戦時に対する生徒の覚悟を述べる。生徒数一二〇人 ・10 厚木町報国婦人会幹部、厚木町長の妻石川キヌ子と第三陸軍病院で「白衣の勇士」を慰問、大鏡を寄付。九人参加 ・12 横浜貿易新報社主催の出征軍人遺家族慰安の映画会を厚木キネマ館で実施。後援は郡有志・厚木町商工社・花柳界(13日)。14日小鮎村飯山倶楽部、15・16日愛川村田代愛川劇場 17日煤ヶ谷村八幡館で上映	3・1 綿糸配給統制規則公布(初の切符制) 4・1 国家総動員法公布 ・4 灯火管制規則公布 6・9 勤労動員始まる ・30 国民精神総動員連盟国民生活様式改善委員会設置(二五人中女性委員一人)



乗合自動車の車掌（昭和10年代）
（写真集『厚木市の昭和史』）



防火訓練風景（厚木尋常高等小学校校庭）
（『目で見る厚木・愛甲100年』）

家庭防火群

一九三七（昭和一二）年五月の家庭防火群組織要綱による。各家庭に常時在宅する一人を防火担当者とし、隣近所協力して焼夷弾の落下、火災の現場に急行して消火を行う組織。三九年には警防団の補助組織となる。四一年以降は防空頭巾にモンベ姿で警戒、空襲警報下、警報の伝達、灯火管制、家庭応急消防などを行った。

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三八(昭和13)	7・28 厚木小学校男女職員、東京第三陸軍病院に「白衣の勇士」★を訪問。女教員七人は裁縫洗濯奉仕、男教員は草むしり。二十八人参加 8・13 厚木小学校尋常科六年生一五〇人、教師に引率されて大山登山。阿夫利神社で国威宣揚・武運長久を祈願(15日)暴風雨が厚木地方を襲う。電信電話交通が途絶、河川堤防が決壊し、濁水が人家耕地を貫流。半原でも織物工場機械類の浸水で被害甚大。被害額二百万円 9・15 県立厚木高女、職員・全校生徒を集め校長指揮で防空訓練を行う 10・― 厚木町女子青年団、年中行事として毎土曜日生花・茶の湯・染色・珠算・マッサージなどの部会を開催 11・20 郡小学校女教員、東京第三陸軍病院を慰問、奉仕作業を行う。五〇人参加 20 中津村青年団の文芸・農芸・体育三部研究会は、同村小学校で大会を開催。小学生、女子青年団など参観。終了後青年団主催従軍記者講演会。聴衆一四〇〇人 21 第二回郡下各小学校健康優良児審査会、厚木小学校で開催。女子一等今福きぬ子、男子一等内田健 21 厚木防護団主催防火訓練、厚木小学校で実施。模擬火災を起こし、家庭防火群防火班、消防組はバケツ・砂・手押しポンプ持参。自転車で急行し消火。22日は厚木全町で灯火管制実施(22日) ★	10・― 満蒙開拓青少年義勇軍女子指導員(寮母)第一回募集 11・19 厚木職業紹介所開所 30 日本海外婦人協会、都筑郡中里村に大陸花嫁道場開所

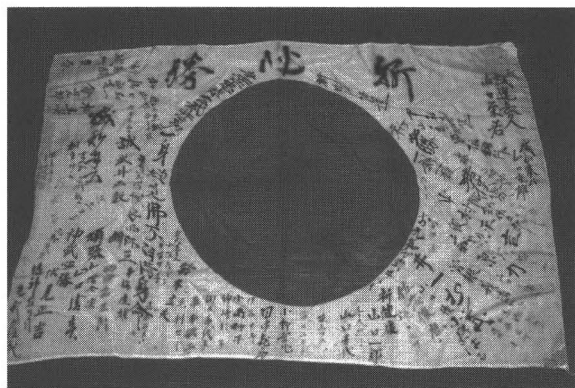
びやくい ゆうし
白衣の勇士

一九三八（昭和一三）年四月、臨時東京第三陸軍病院が高座郡大野村に創立されてから、女子青年団、女学校、報国婦人会など各団体が慰問に訪れるようになり新聞にも「白衣の勇士」への奉仕の記事が多くなってきた。当時、戦地で病気や負傷をして内地（国内）へ帰国、病院へ入院していた軍人たちを「白衣の勇士」と呼んでいた。



臨時東京第三陸軍病院（2767床）管理舎
（現在は独立行政法人国立病院機構相模原病院）

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三八(昭和13)	12・5 中津村女子青年学校生徒・女子青年団、東京第三陸軍病院に慰問、勤労奉仕。二〇人参加。妻田村女子青年団も同様に慰問奉仕 ・ 21 藤沢バス、従業員と会社の労使協調を図るため親父会を組織。一九三九年度評議委員の選挙を両者三〇人で投票、女車掌も一票を投ずる ・ 23 厚木町、同役場で各種団体の役員会を開催。町内出征兵士・将士・遺家族を慰問し、餅一臼、醤油一樽を配給する。各種団体は町役場・国防婦人会・報国婦人会・赤心婦人会・女子青年団・在郷軍人分会・消防組・戦友会・青年団・町農会・出動将士後援会・遺家族会など ・ 三田小学校、銃後農村子弟の思想を堅実にし体育向上のため、尋常五年以上にもんぺを着用させる この年 厚木医師会員一六人中、女医は耳鼻咽喉科医師渡辺久子(厚木町) この年 妻田村女子青年団、東京第三陸軍病院に傷病兵を慰問。出征兵士のために千人針を作製。支部長鈴木キヌの発案で揃いの青い団服(上着)を揃える この年 郡の方面委員(現、民生委員)数は厚木町二二人・依知村五人・荻野村五人・小鮎村五人・南毛利村四人・玉川村四人・三田村外五ヶ村組合六人・愛川村八人・中津村五人・高峰村四人・煤ヶ谷村外一ヶ村組合四人	



入堂時の幟と寄せ書き
 (山口弘家旧蔵 現、厚木市郷土資料館蔵)

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九三九(昭和14)	2・27 厚本小学校高等科卒業の男女、日本精神発揚週間につき伊勢神宮で祈願式。出征軍人の武運長久、国威宣揚を祈る。帰路名古屋見学、厚本神社を参拝して解散。五三人参加(3月1日) 3・4 荻野村国防婦人会、同小学校で出征家族の慰安会を開催。朝日新聞社の戦時ニュースなどを上映 ・21 郡連合男女青年団、厚本小学校で春季総会を開催。建国体操、分列行進、「愛国行進曲」合唱、大日本青年団係官の講演「時局と青年団の使命」。丹沢報国寮の映画、武漢攻略の戦時ニュースを上映 ・24 県立厚本高女、第二一回卒業式挙行、卒業後の進路決まる★ ・ 高峰国防婦人会・愛国婦人会、村内出征軍人に慰問袋發送 ・ 荻野小学校女生徒、日本精神発揚週間につき出征家族に麦踏の勤勞奉仕。男生徒は篠竹の採集。収益は出征軍人の慰問品、家族基金とする 4・9 厚本町国防婦人会、厚本町キネマ館で慰安演芸大会開催。 町内出征兵士と戦死者遺家族を招待 ・10 高峰村三増養蚕実行組合婦人部(部長池田アイ)、東京第三陸軍病院へ雑巾二五〇枚を寄贈。六〇人参加。同病院より感謝状が授与される 5・5 玉川村、銃後農村の婦人活動として「婦人座談会」を村内三か所で開催。出席者に家庭用大箱マッチを進呈(7日)	1・25 警防団令公布 2・12 逗子町の中里恒子、女で初めて芥川賞受賞 3・ 和田伝『家長』刊行

県立厚木高等女学校 第一二回卒業式と卒業生の進路

卒業証書と優等生に対し賞状を授与。 本年の卒業生は九七人

進 学 者

神奈川県女子師範学校二部七人・和洋女子学院三人・大妻技芸学校三人・千代田女子専門学校一人・実践女子専門学校五人・日本女子高等商業学校一人・金華学園一人・日本タイプライター四人・家政学院二人・栄養学校二人・平塚実践女学校四人・平塚家政女学校一人。

就職希望者 一〇人

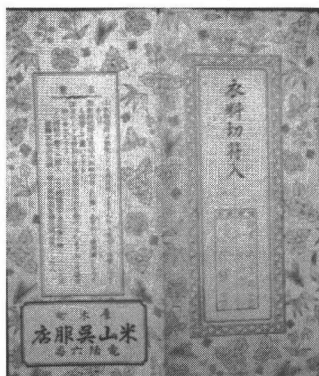
家庭 五三人

(『横浜貿易新報』一九三九年三月二十四日)

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九三九(昭和14)	5・7 郡教育会、厚木小学校で総会を開催。各町村訓導の勤続者・無欠勤者を表彰。女性には三か年無欠勤の木村ミツ(厚木)愛川村工場協会、半原小学校で勤続者を表彰ののち慰安会開催。国歌斉唱・宮城遥拝・戦没将兵の追悼及び皇軍将兵へ感謝黙祷。五か年以上勤続者九一人。余興は漫才・浪曲・教育映画。来会者は男女工約一五〇〇人 8 高峰村養蚕実行組合、銃後農村の振興のため諏訪神社で婦人会発会式。会員約一五〇人 8 県主催で愛甲・津久井・高座・中の各郡婦人団体幹部、県立厚木高女で母と乳幼児の座談会を開催。産婆会・方面委員・衛生組合委員・町村長・町村役場衛生主任など二〇〇人参加 9 宮ヶ瀬村主婦会総会を開催 18 厚木町女子青年団、厚木キネマ館で町内出征将士の家族を招待。社会教育映画「靖国神社の女神」を上映。入場券は三〇銭。純益二〇円は戦没遺族の慰問にあてる(19日) 21 厚木国防婦人会、東京第三陸軍病院で作業労力奉仕と慰問(22日) ・ 愛川村国防婦人会役員の産婆松本静江、銃後施設・出征将士の家族を慰問。「軍国の母」と呼ばれている 6・5 県立厚木高女、郡下農繁期出征家族のため一年生から四年生まで労力奉仕班を作る。5日南毛利村九〇人、6日三田村八〇人、依知村八〇人奉仕	6・15 県、一〇人以上の子女育成の母を表彰

衣料切符

一九三八年の国家総動員法施行以来の経済統制の一環として四二年二月一日衣料品の点数切符制が行なわれた。当初は一人あて一年の点数は都市が一〇〇点、郡部は八〇点で、戦争の進展とともに割当点数は縮小。市民は持ち点の範囲内で衣料品が購入できた。女性外套五〇点、割烹着一〇点、パンツ五点、背広五〇点、学生服三三点、タオル三三点など。持ち点以上の物は闇で入手するはかなかった。



衣料切符

(厚木市松枝町S家旧蔵 現、厚木市郷土資料館蔵)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三九(昭和14)	7・22 全国実業学校講習会、東京高等農林学校で開催。浅岡清子(厚木町・18歳)出席。全国農業学校代表は三〇人、女性一人。県立厚木高女を卒業し、県立愛甲農蚕学校教諭嘱託として、家事実習・農村栄養を男生徒に指導している 8・― 厚木町女子青年団、『横浜貿易新報』を多数購入、慰問文代わりに郷土出身勇士へ発送 9・1 厚木町長・生徒・有志約五〇〇人、興亜奉公日を記念し、早朝厚木神社で黙祷。青年団五〇人は旗を立て音楽隊を先頭にパンフレットを配布。内容は飲食店、カフェなどの営業時間短縮・早起きの励行・節酒と節煙・男子学生長髪と女性のパーマネットウェーブ廃止など ★ 10・1 厚木町、興亜奉公記念式を厚木神社で行う。式後国防婦人会員二〇〇人が明治神宮と靖国神社を参拝。花柳界は休業 ・24 厚木町で防火訓練実施。大手町で家庭防火群を動員し、群別に焼夷弾や爆弾の消火訓練 11・13 県立厚木高女職員・生徒、郡農会・町村農会の依頼で出征軍人家族に勤労奉仕で桑園除草作業。四〇〇人参加。同様に厚木中学校も行う(14日) ・26 郡内青年学校、小鮎村千頭から荻野村地帯で六か分団に分かれて対校野外連合演習を実施。全生徒約一〇〇〇人参加	7・8 国民徴用令公布 9・1 初の興亜奉公日 ・1 第二次世界大戦勃発 11・1 県、私立小学校へ英語教育廃止を通告

厚木町、興亜奉公日を祝う
自肅事項

- 一、料理店、飲食店、カフェ、遊戯場等は営業時間は自肅をより短縮すること
- 二、早起を励行すること
- 三、戦地の辛苦を思ひ、節酒、節煙すること
- 四、男子学生生徒の長髪廃止。婦女子の浮華するパーマネントウェーブ、化粧服装を廃止すること
- 五、其他数項

(『横浜貿易新報』一九三九年九月二日)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九三九(昭和14)	12・2 煤ヶ谷村国防婦人会、総会と防火群結成式を行う ・3 国防婦人会厚木分団、同小学校で定期総会を開催。厚木町長が皇軍勇士北支慰問の状況を詳細報告 この年 看護婦数は、九四人。他府県より転入の看護婦が多い この年 伝染病患者数は、赤痢八五人・死亡三三人。腸チフス三八人・死亡三人、ジフテリア一三人・死亡一人。トラホーム女四七人・男九〇人 愛国婦人会神奈川県支部、各市町村の会員数の歩合を調べる★ ・10 愛甲郡学校衛生協会、39年の郡下各小学校の健康優良児の表彰式を行う。女子の一等は厚木小学校の原田節子 4・1 愛川町田代小学校、紀元二六〇〇年記念事業として法華峯に杉一二〇〇本を植える ★ ・1 愛川町半原に栄養食配給所、開所 5・10 厚木町男女青年団、同小学校で合同定期総会を開催。町内出征軍人遺家族を招待、参加者約一五〇〇人 7・7 厚木町女子青年団、廃品回収の売却金を県連合青年団へ納付。残金を町内出征兵士の慰問品に充当 9・7 厚木保健所、厚木町に開所。郡を管轄 10・8 厚木小学校、第三八回秋季大運動会を同校で開催。同町女子青年団、高齢者七〇人・戦死者遺家族を接待 ・1 厚木小学校、蝗の採集売却金を読売新聞社に寄付。採集には尋常科四年生以上の男女生徒九〇〇人動員	この年 警防団令により町村消防組は警防団に改組される 4・8 国民体力法公布 7・7 七・七禁令施行。「ぜいたくは敵」と排撃運動 8・30 県、ぜいたく全廃運動実施を通達 9・11 内務省、部落会・町内会など整備要綱訓令、隣組設置 ・27 日独伊三国同盟調印
一九四〇(昭和15)		

「お山の杉の子」

作詞 吉田テフ子

補作詞 サトウハチロー

作曲 佐々木すぐる

1

むかしむかしそのむかし
椎の小林のすぐそばに
小さなお山が あったとき
あったとき

まるまる坊主の 禿山は

いつでもみんなの 笑いもの
これこれ杉の子 起きなさい
お日さまニコニコ 声かけた
声かけた

2

一イニウ三イ四オ五イ六ウ七ア
八日九日 十日たち
ニヨッキリ芽が出る 山の上

山の上

小さな杉の子 顔出して

はいはいお日さま 今日
これを眺めた 椎の木は
アツハハのアツハハと 大笑い
大笑い

3

こんなチビ助 何になる
びつくり仰天 杉の子は
おもわずお首を ひっこめた
ひっこめた

ひっこめながらも 考えた

なんの負けるか今に見ろ
大きくなつて 国のため
お役に立つて みせます
みせます

4

ラジオ体操 一二三

子どもは元気で 伸びてゆく

昔々の 禿山は 禿山は

今では立派な 杉山だ

誉れの家の子のように

強く 大きく 逞ましく

椎の木見おろす 大杉だ
大杉だ

5

大きな杉は 何になる
兵隊さんを 運ぶ船
傷痕の勇士の 寝るお家
寝るお家

本箱 お机 下駄 足駄

おいしいお弁当 食べる箸
鉛筆 筆入れ そのほかに
嬉しや まだまだ 役に立つ
役に立つ

6

さあさ 負けるな 杉の木に

勇士の遺児なら なお強い

体を鍛へ頑張つて 頑張つて

今に立派な 兵隊さん

忠義孝行 ひとすじに

お日さま出る国 神の国

この日本を 守りましよう
守りましよう

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九四〇(昭和15)	11・10 郡内町村、紀元二六〇〇年奉祝大会を開催。厚木町仲町クラブ・キネマ館では素人演芸大会、厚木小学校では式典後旗行列、下川入村では提灯行列、男性を先頭に村中を歩く南毛利村国防婦人会、蝗・葉草の売上げ金三〇〇円で兵士に慰問袋を送付 ・ 厚木町男女青年団、厚木神社で令旨奉戴式を行う。出征家族と勇士を招待し、慰安演芸会を開く 12・1 この年 郡内の産婆数は、二三人 1・9 小鮎小学校訓導を退職した中村スミ(三二年勤務)に対する感謝の会を教え子たちが開く 1・ 厚木バプテスト教会、日本基督教団厚木教会となる 3・31 小鮎村養蚕婦人会連合会、同村小学校で結成式。会長は真板村長の妻 4・27 郡青少年団結成式、厚木中学校で挙行。学校国防体育訓練大会を兼ねる。青年団長は県立厚木中学校長永野毅・副団長厚木高等女学校校長金持嘉一・愛甲農学校校長鈴木繁・愛甲郡国民学校校長会長大矢雄次の三人。参加者 千数百人 ・ 郡養蚕婦人会連合会、結成。会長石川要、副会長中村すみ(中津)・曾根やす(荻野) 5・ 厚木町国防婦人会、各戸から軍用梅干を収集。川崎大師に参拝して武運長久を祈願 6・1 愛川町女子青年団、東京第三陸軍病院の慰問と奉仕活動	11・10 大政翼賛会結成 11・2 国民服令公布 ・ 10 紀元二六〇〇年記念式典開始 ・ 一〇人以上の子を持つ一万三三六戸の優良多子家庭を表彰 5・15 県下農村に女学生の農繁期託児所開設(22日) 4・1 (県立拓務訓練所、31日)生活必需物資統制令公布米穀配給通帳制・外食券制実施 3・1 国民学校令公布 ・ 25 第一回女子拓務訓練開講
一九四一(昭和16)		

愛国婦人会会員女子人口百分比表

町村名	会員数(人)	女子人口(人)	百分比(%)	有功章(人)	番附表	女子人口募集希望数
厚木町	二二二	三七三三	六・二	一	前頭	五一
依知村	八四	一八〇一	四・六	二	前頭	二七
中津村	五〇	一七〇七	二・九	一	前頭	二九
高峰村	二五四	一五七五	一六・一	五	前頭	六
愛川村	五五	三一九三	一・七	五	前頭	五八
荻野村	一九七	二二二四	九・二	一	前頭	二二
三田村	一七三	二〇二九	八・五	三	前頭	二三
棚沢村						
下川入村						
妻田村						
及川村	五三五	一八五一	二八・九	六	横綱	一一
林村						
小鮎村						
宮ヶ瀬村						
煤ヶ谷村	二四	一三六二	一・七	二	前頭	二四
玉川村	八〇	一二七四	六・二	三	前頭	一七
南毛利村	六八	二〇六三	三・二		前頭	三四
小計	一七五二	二二七一二	七・七	二九		

(「時局下における愛国婦人会神奈川県支部 活動状況甲号 1940年1月」より作成)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九四二(昭和16)	6・17 郡女子青年団、東京第三陸軍病院で「白衣の勇士」を慰問し勤労奉仕に参加、一〇〇人(18日) ・ 県立厚木高女・厚木中学校生徒、農繁期勤労奉仕。三、四年生は託児所で代用保母。一、二年生は共同炊事。厚木中学校生は遺家族方の除草 7・4 玉川村国防婦人会、「日華事変」四周年を記念した国防献金五円を村役場に寄託 ・ 8 郡農会・郡畜産組合、草刈競技大会を小鮎川堤で開催。女子部の優勝は石川敏子。郡下桑摘み大会でも優勝。翼賛娘と呼ばれた ・ 13 玉川村、豪雨のため玉川が氾濫。小野部落の八人が死亡。県立厚木高女の教師・生徒・県立厚木中学生徒は災害の後片付けを手伝う ・ 15 南毛利村戸室女子青年団、玉川村初め郡内数町の水害に義捐金七円を厚木署へ寄託 ・ 厚生省、優良多子家庭の表彰を行う。県内五一家庭のうち中津村一、三田組合村一、小鮎村一 8・ 県立厚木高女、暑中休暇を利用して生徒の心身練成と勤労奉仕を行う。2〜6日まで玉川村・南毛利村・三田村・小鮎村で勤労奉仕。一年生は1〜7日まで清水小プールで水泳練習。生徒有志は7〜8日まで大山登山。21〜23日まで勤労奉仕	7・1 全国の隣組、一斉に常会開く(以後毎月) 8・30 金属回収令公布

大日本国防婦人会

一九三二（昭和七）年、大阪の主婦たちが自発的に献金活動や出征兵士の見送りを始め、これがきっかけで大日本国防婦人会が同年一〇月二四日に発足。たちまち全国で会員数拡大。四二年に愛国婦人会、大日本連合婦人会と統合して大日本婦人会となる。会員は一〇〇〇万人を越えた。

タスキ、白いかつぽう着姿で「ぜいたくは敵」「パーマネントはやめましょう」「千人針をお願い」などの街頭活動で銃後の戦争協力を担った。



愛川町の大日本国防婦人会 1942年頃
（『目でみる厚木・愛甲の100年』）

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九四一(昭和16)	8・― 南毛利村・小鮎村・高峰村一帯にチフス発生。南毛利村五〇〇人に予防注射実施 9・6 厚木町旭町婦人部、部長宅でスフの洗濯講習会を行う 8・8 厚木町大手町の高橋ゆきえ、代用食として甘酒パンを考案し、郡内各地で教え、謝礼金二〇円を国防献金として厚木署に寄託 13 厚木町、40年4月1日以降生まれの乳幼児検診を厚木国民学校で行う(14日) ― 厚木町芸妓屋神谷シン、厚木警察署に国防献金。報国貯金箱に貯めた四円一四銭 10・― 厚木町銃後奉公会、出征遺家族の生活を援護する授産施設である製麺工場を竣工。うどんの試作会を実施 ― 県連厚木支部、郡内各町村農業組合・厚木地方部会と協力し、郡下少国民に呼びかけ、食用に山野の自生するどんぐりや野路や蝗や山栗、衣類原料用に苧麻を集めさせる 11・8 郡内学校職員報国団、若い女教員の合宿訓練を県拓務訓練所で行う。輪読会・農場作業・紡毛作業・学務課長講話・座談会・映画会・感想文作成、参加者 八人(11日) ★ 9 厚木町天王町の岡部熊太郎、長女の結婚費用を節約し、町の国民学校・青年学校・各種団体へ各一〇〇円ずつ寄付 10 県立厚木高女一〇〇人・県立厚木中学校四〇〇人・県立愛甲農業学校各生徒一〇〇人、出征遺家族農家へ勤労奉仕。女学生は託児所、共同炊事の手伝い(16日)	10・4 愛国婦人会県支部、銃後奉公強化大会挙行 11・22 国民勤労報国協力令公布(未婚の女一四歳―二五歳・男一四歳―二五歳)

女教員合宿訓練

愛甲郡学校職員報国団主催で、郡内一五の国民学校の新進気鋭の若い女教員代表三〇人、林村の拓務訓練所に入所。猛訓練を受ける

訓練内容

- 一、山林実習講話
- 二、輪読会
- 三、農場作業
- 四、紡毛作業
- 五、学務課長講話
- 六、座談会
- 七、映画会
- 八、感想文作成

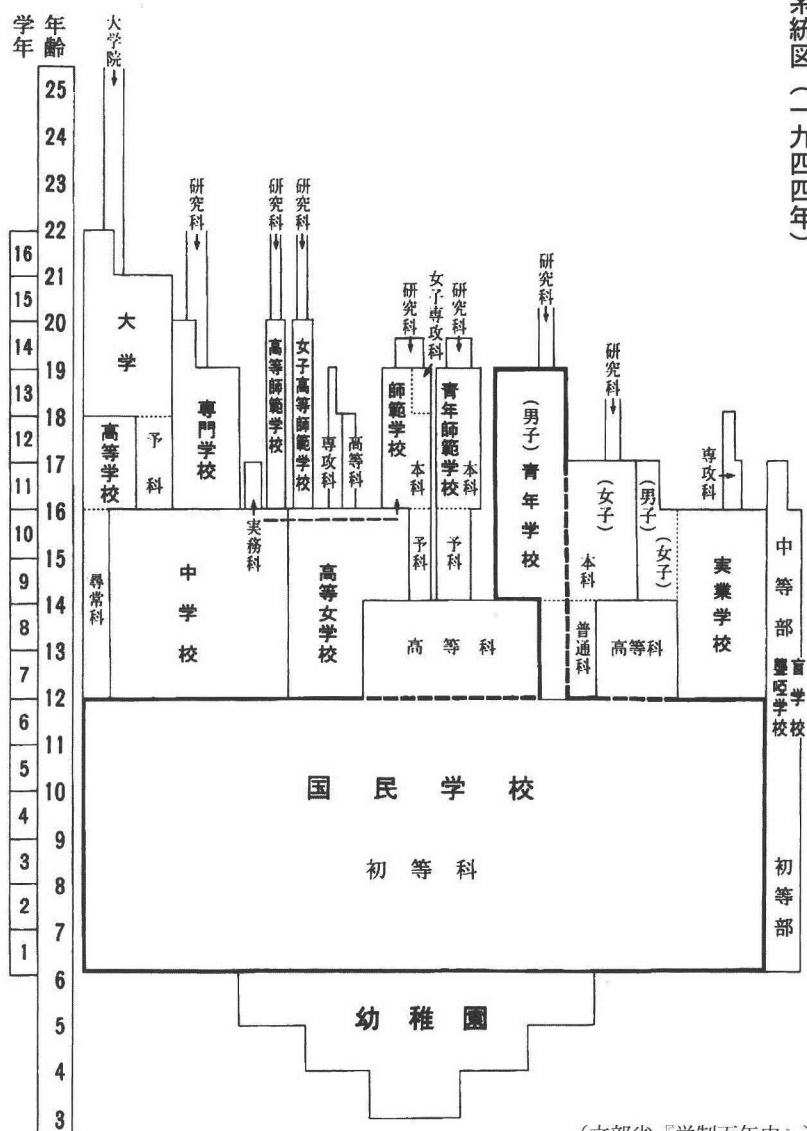
参加校と人数

厚木校・依知校・中津校・高峰校・田代校・半原校・荻野校・清水校・三田校・菁莪校・小鮎校・煤ヶ谷校・宮ヶ瀬校・玉川校・南毛利校より各二人

（『横浜貿易新報』一九四一年一月一〇日）

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九四二(昭和16)	11・18 県農会、食糧増産のために各地で共同炊事や託児所に献身的奉仕をした「お嬢さん部隊」を厚木町蚕業取引所支所に招き慰労会を開催 ・21 郡内の女子青年団員、農繁期共同炊事を行う。玉川村（12月5日）、南毛利村（25日）（12月4日） 12・1 中津村翼賛婦人会・女子青年団、同村国民学校で家庭用砂糖の代用となる水飴製造講習会を開催。原料は甘藷と麦芽（2日） ・23 前厚木町議の妻会田かね死去。故人の遺志により葬儀費を節約し、町青少年団へ五〇円・国防婦人会へ三〇円・町軍人分会へ三〇円、耆老会へ一〇円寄付 ・24 県立厚木高女、戦没者の慰霊祭と遺族の弔問を行う ・ 厚木国防婦人会分会・大日本婦人会厚木支部・報国婦人会など種々の団体が警察署の傘下に入る この年 厚木の花街は営業を停止、銃後の守りとして出征兵士の慰安や慰問袋の発送。若い芸妓は軍需工場へ勤労働員となる（45年） この年 厚木保健所、食料不足のなか栄養講習会・共同炊事指導などを国防婦人会・女子青年団・女生徒などに実施。母親と乳幼児の保健指導も行う 1・ 愛川町半原の田島つね、家計を節約し銃後奉仕会へ三〇円寄付 3・ 宮ヶ瀬村銃後奉公会を結成 ・ 青年学校男子生徒の制服はカーキ色の国民服に陸軍戦闘帽	12・8 太平洋戦争始まる この年 愛甲郡青少年団結成 2・1 衣料点数制実施 ・1 味噌・醬油・塩配給制実施
一九四二(昭和17)		

学校系統図（一九四四年）



(文部省『学制百年史』)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九四三(昭和17)	4・21 神中鉄道、厚木駅に女性案内二人を配置し、小田急電車からの乗換え客の便宜をはかる 5・― 郡農会、農家が増産に邁進できるよう、農業組合単位で共同炊事場と託児所を設置。東京家政専門学校・栄養学校生徒と横浜川崎両市女子青年からなる「お嬢さん部隊」六〇人が各地に分かれ奉仕 6・29 大日本婦人会厚木支部、厚木国民学校で結成式。支部長足立原マサ、副支部長加藤マサ・浅葉スミ・山本トシ 7・― 県立厚木高女、学科目の中で家事特に育児保健・理科などを重視し、外国語は自由選択とする。44年2月臨時措置として外国語の授業廃止 9・17 郡農業組合、中津村で摘桑競技会を行う。女子部の優勝は玉川村石川とし子 11・22 厚木町女子青年団、厚木国民学校でラジオ常会を開催。ラジオによる軍紀高揚が目的 この年 厚木医師会員二人中、女医は荻田あき(中津村) 1・25 中津村蚕種婦人会、中津村下谷養蚕組合長宅で屑繭利用の真綿加工講習会開催。講師は県立養蚕試験場葛原やす子ほか二人。受講者は一四歳から七〇歳の女性一三〇人(29日) ・29 郡青年学校・国民学校主催の女子専科教員研究協議会、下川入村菁我国民学校で開催。半原校の花家小奈美「柑皮洗濯について」など各校代表の研究発表。午後、三田村洗心道場で茶道料理講習会開催。鎌倉建長寺師家安本翠庵の講話	2・2 大日本婦人会結成(愛国・国防・大日本連合の三婦人会は解散) 4・18 東京初空襲 5・1 「相模厚木」駅を「本厚木」駅に改名 ・12 金属回収令による強制譲渡令発令 ・25 大日本婦人会神奈川県支部結成(会員5万人) 7・13 妊産婦手帳制実施 9・― 厚木乾繭所設立
一九四三(昭和18)		

戦争が激しくなつて来た十九年、横須賀市久里浜小学校の五、六年生三十名が、妻田神社境内の公会堂を宿舎にするこ
とになって、付き添いのおばさんと先生が来られました。横須賀は軍港で、本土決戦となれば、まず第一に目標にされる
ところですよ。

食事などは付き添いのおばさんが、近所から野菜などを持ち込まれるので、何とか間に合つたと思いますが、お風呂は
なかったで、部落の中の家々へ二、三人づつでもらいに来ました。家でも男の子が三人で毎晩のように見えました、
何せ当時は栄養も悪く、衛生面も行き届かなかったため「虱」が発生し、子どもたちの脱着物から移されてしまい、困つ
たものでした。

祖父や祖母は、着物を度々取り替えたり、大釜で湯を沸かしてかけたりしてもなかなか死なず、大変困つたのを忘れま
せん。虱や蚤とりも一つの仕事のようなものでした。頭の虱はDDTが良く効くというので、頭からあの白い粉をかけら
れたのでした。これはとても効果があり、さっぱりしたようです。蚤もたくさんいました。その蚤は疎開の子どもたちば
かりでなく、祖父は朝起き抜けに寝巻きをそっくり脱いで、縁側に広げ、私が蚤取りの役目でした。背縫いの折り目や、
脇の折り目などには必ずひそんでいて、二匹や三匹は取れました。見つかると祖父はご機嫌で、いなくても取れたふりし
て爪でピシンとつぶしたりしたこともありました。

疎開の生徒たちも、親元を離れさみしい思いをしたことと思います。妻田とはそう遠くはありませんが、群馬、栃木、
山梨県方面へも東京や横浜から多数の生徒が戦火を逃れて疎開したのです。子どもたちも親たちも、戦争に勝つまではと、
戦地の兵隊さんのことを思つて、歯をくいしばつて我慢したのです。疎開の学童たちは、お行儀もよく家にあるさつま
いもなどをあげると、喜んでくれました。なんにもしてあげることも出来なかったのです。

戦争が終わり、何十年か経つたある年のこと、当時の久里浜の疎开学童が立派な大人になつて訪ねてくださったことが
ありました。公会堂で部落あげての歓迎会を開き、思い出話に耽りながら、辛かつた当時のことや戦争中のことゆえ、た
いしたこともしてあげられなかったことを詫言ながら、苦しかった戦争の話を通して、お互いに元気で今に生きる幸せを
喜び合いました。坊主頭の男の子も、髪を伸ばした立派なお父さんと、お母さんになられて幸せそうでした。妻田での疎
開の経験はお互いに忘れることの出来ない思い出の一つとなつていきます。

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九四三(昭和18)	2・1 県立厚木高女、職員・生徒五〇〇人にツベルクリン注射実施。陰陽半々で陰性者にBCGを予防接種。次代を担う母体の健康保持のため ・1 大日本婦人会厚木支部、役員会開催。花嫁は振袖を着用しないよう申し合わせ 3・3 依知村男女青年団、国民学校で出征将兵遺家族慰安演芸会開催。歌劇その他熱演、見物人多数 ・3 県立厚木高女、全校生徒作製の慰問袋を軍人援護会支部へ發送。寄せ書き帖、慰問文、図画、国旗の寄せ書き、人形、裁縫用具、扇子、洗面用具など ・1 大日本婦人会厚木支部、衣料切符の献納運動実施。総数六六〇〇点中一位は大手町の八〇三点 4・11 湘山会主催で郡青少年団後援、三田村松羅公園で農村文化と娯楽の会開催。戦没勇士遺族、傷痍軍人、県下町有志を招待。音楽・舞踊・素人演芸などで、人出は二〇〇〇人 ・27 厚木町翼賛団、天王町・本町・大手町の街頭鉄器供出に奉仕 ・16 郡旅館組合業者二〇人は慰問袋を發送。中味は配給の菓子県養蚕試験場、蚕糸の中堅女性指導者養成講習会開始。講習科目は蚕糸に関する技術・学科裁縫・手芸・家事・作法などで、講習中の手当て一か年一二〇円を支給。講習生は三〇人 5・10 大日本婦人会厚木支部、厚木国民学校で洋傘修理講習会開催	3・2 高等女学校規程制定、修業年限四年に短縮 4・21 女子勤労動員促進を閣議決定

横須賀市の国民学校 児童の疎開状況 (1944年10月現在)

学校名	疎開児童数	疎開先
船越	二五七	南毛利村Ⅱ浄雲寺・本盛寺・宝積寺・大蔵寺・興教寺・専念寺・妙昌寺
逸見	二二〇	煤ヶ谷村Ⅱ煤ヶ谷校(裁縫室)・正住寺・花蔵院 宮ヶ瀬村Ⅱ宮ヶ瀬校(裁縫室)・落合宅・落合青年クラブ
沢山	一三八	依知村金田Ⅱ建徳寺・妙純寺
田戸	六一一	愛川町田代Ⅱ勝楽寺・開田軒・田代校 愛川町半原Ⅱ宮本社務所・愛川教会・細野集会所・清雲寺・半原校・ 両向事務所・顕妙寺・織物指導所・川北集会所
山崎	三〇二	小鮎村Ⅱ本照寺・龍栖寺・宝増寺・弘徳寺 玉川村Ⅱ三橋宅・七沢温泉中屋旅館
衣笠	三三二	荻野村Ⅱ法界寺・養徳寺・知恩寺・戒善寺・松石寺・寮(上荻野)
大津	三七七	依知村Ⅱ広徳寺・安龍寺・蓮生寺・大信寺・長福寺・宝泉寺・妙伝寺
久里浜	二九四	三田村Ⅱ清源院 及川村Ⅱ西光寺 下川入村Ⅱ源養寺 妻田村Ⅱ妻田公会堂・西福寺 棚沢村Ⅱ洗心道場・常昌院

(『横須賀市史』より作成)

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九四三(昭和18)	愛川町翼賛壮年団・愛川町青年団は平原国民学校で決戦下時局講演会を開催。講師は安藤寛 厚木医師会、寺田(中倉)千鶴子を保険医に指定 厚木医師会、金属製寝台回収に伴う代替品の所要数量の調査を行う。金属製ベッドを国へ供出 玉川村七沢の旅館(福元館・玉川館)抑留者女性などの収容所となる。イギリス・アメリカ・オランダ・ノルウェー・ギリシャ、計二〇世帯二八人。警察官の巡回があつたが、行動は自由(45年5月)★ 厚木女子挺身隊、相模海軍工廠に順次入廠。教育訓練ののち第二火工部に配属され女学校の学校工場などで製作している気球や防空服などの出張検査に従事する。自宅通勤や寮生活で約三〇人が参加 県立厚木高女三・四年生三〇〇人、学業を中断し日本光学川崎製作所で兵器増産の仕事に従事 神奈川県燃焼系統制組合は軍需品の生産に協力し、パラスユート系、航空服地の生産を開始 横須賀市の国民学校生、愛甲・高座郡への第一次集団疎開開始★	10・21 学徒出陣壮行会 1・26 防空法による疎開命令発令 3・5 高級享楽停止令により厚木町三業組合休業 7 学徒動員実施要綱閣議決定 6・15 米軍、サイパン島上陸、19日マリアナ沖海戦 8・30 学童集団疎開閣議決定、閣議、国民総武装を決定。竹槍訓練など始まる 8・4 学徒勤労令・女子挺身勤労令公布
一九四四(昭和19)	8・16 愛川町翼賛壮年団・愛川町青年団は平原国民学校で決戦下時局講演会を開催。講師は安藤寛 厚木医師会、寺田(中倉)千鶴子を保険医に指定 厚木医師会、金属製寝台回収に伴う代替品の所要数量の調査を行う。金属製ベッドを国へ供出 玉川村七沢の旅館(福元館・玉川館)抑留者女性などの収容所となる。イギリス・アメリカ・オランダ・ノルウェー・ギリシャ、計二〇世帯二八人。警察官の巡回があつたが、行動は自由(45年5月)★ 厚木女子挺身隊、相模海軍工廠に順次入廠。教育訓練ののち第二火工部に配属され女学校の学校工場などで製作している気球や防空服などの出張検査に従事する。自宅通勤や寮生活で約三〇人が参加 県立厚木高女三・四年生三〇〇人、学業を中断し日本光学川崎製作所で兵器増産の仕事に従事 神奈川県燃焼系統制組合は軍需品の生産に協力し、パラスユート系、航空服地の生産を開始 横須賀市の国民学校生、愛甲・高座郡への第一次集団疎開開始★	8・16 愛川町翼賛壮年団・愛川町青年団は平原国民学校で決戦下時局講演会を開催。講師は安藤寛 厚木医師会、寺田(中倉)千鶴子を保険医に指定 厚木医師会、金属製寝台回収に伴う代替品の所要数量の調査を行う。金属製ベッドを国へ供出 玉川村七沢の旅館(福元館・玉川館)抑留者女性などの収容所となる。イギリス・アメリカ・オランダ・ノルウェー・ギリシャ、計二〇世帯二八人。警察官の巡回があつたが、行動は自由(45年5月)★ 厚木女子挺身隊、相模海軍工廠に順次入廠。教育訓練ののち第二火工部に配属され女学校の学校工場などで製作している気球や防空服などの出張検査に従事する。自宅通勤や寮生活で約三〇人が参加 県立厚木高女三・四年生三〇〇人、学業を中断し日本光学川崎製作所で兵器増産の仕事に従事 神奈川県燃焼系統制組合は軍需品の生産に協力し、パラスユート系、航空服地の生産を開始 横須賀市の国民学校生、愛甲・高座郡への第一次集団疎開開始★

厚木市七沢の敵国人抑留所抑留者名簿（1943年12月～45年5月）

	国籍	氏 名	前 住 所	性別	年齢	備 考
1	英	リナー・サルター	横話中区山手町120	女	23	
2	英	タマ・ウオーカー	横浜市中区豆口台57	女	60	2～6 同一家族
3	英	タツコ・ウオーカー	同上	女	29	
4	英	ローター・ウオーカー	同上	女	5	
5	英	ロメイ・ウオーカー	同上	女	5	
6	英	ジェームス・ウオーカー	同上	男	6	
7	英	イザベラ・スプリングット	横浜市中区豆口台61	女	44	
8	英	ゼン・ウオーカー	横浜市中区滝ノ上61	女	57	2～6 と同姓
9	英	チャールズ・バーナード	横浜市中区大里町76	男	93	9・10 夫婦
10	英	チョ・バーナード	同上	女	53	
11	英	アリス・ウェドラフ	横浜市中区本牧町26	女	56	11・12 姉妹
12	英	ルーシー・ウェドラフ	同上	女	45	
13	英	ジョージ・ラッセル	横浜市中区本牧町3-731	男	64	13・14 夫婦
14	英	ミヨ・ラッセル	同上	女	54	
15	英	トーマス・ライト	横浜市中区山手町124	男	73	
16	英	アンニーズ・ヤーメン	不明	女	62	
17	英	イザベラ・ホールデン	不明	女	60	
18	米	アリス・キルドイル	横浜市中区本牧荒井23	女	44	
19	米	エル・ニートマン	横浜市中区三ノ谷78	男	71	
20	米	エレノア・ラフィン	横浜市中区山手町120	女	不明	
21	米	ジェニファー・マイヤス	不明	女	25	
22	米	アンナ・マイヤス	不明	女	23	
23	蘭	エリザベス・ドンカーカーチス	不明	女	67	23・24 姉妹
24	蘭	トミコリ・ドンカーカーチス	不明	女	63	
25	蘭	ヨハネ・カースト	不明	男	71	
26	ギリシャ	エカテリナ・ヒトポリス	横浜市中区山手町184	女	28	26・27 母子
27	ギリシャ	グレゴリー・ヒトポリス	同上	男	3	
28	ノルウェー	フレドリック・オールセン	不明	男	77	

（『神奈川の歴史をよむ』）

年 代	郷土の女性の動き	社会一般の動き
一九四四(昭和19)	この年 厚木国防衛生隊が医師・歯科医師・薬剤師・警察官・町村長・産婆・看護婦などで結成される。隊長杉浦善吉医師・副隊長林晁医師・中倉節男歯科医師。ほか医師一三人・歯科医師七人・薬剤師四人・警察官・町村長など。産婆飛鳥井えい・金子マス・柏木清香・杉山操・松本静江・矢島喜美・小島正江・和田茂・佐川タケ・鈴木ぎん・岩沢ふじの・中村シズ・神戸クラ・村井タネ・服部たか・伏見高エ・難波貞子・川上春美。看護婦吉岡波子・加藤すみよ・下島サダ・越智キミ子・平川乃夫子 この年 厚木保健所、疎開児童の環境衛生を指導。防疫班は伝染病防止の指導。母親学級開設により南毛利村と高峰村を愛育村に指定 一九四五(昭和20) 2・11 県、紀元節にあたり戦意高揚のため奉祝物資を特配 4・1 公立青年学校愛川町実践女学校、半原隠川の愛川町立青年学校に併設 ★ 5・1 郡農家・国民学校児童、わら草履六〇〇〇足を横浜、川崎方面の戦災者に贈る 10・5 愛甲郡愛川・荻野・煤ヶ谷国民学校でドングリ食用化伝習会開催(5・7・8日) 12・1 厚木町元町木村綿店の綿工場に、ダンスホール「フジヤマ」、大手町にキャバレー「パレス」開店	12・7 東海地方に大地震、死者九九八人 2・19 米軍、硫黄島上陸(3月17日本軍玉砕) 7・17 ポツダム会談開催。26日、対日ポツダム宣言発表 8・6 広島に原爆投下 長崎に原爆投下 天皇、戦争終結を放送 内務省、占領軍向け性的慰安施設設置を指令 マッカーサー元帥、厚木飛行場におりる

「七沢温泉における外国人収容」

山本 欽二・茂子

昭和一八年の初秋、突然玉川館と福元館へ横浜のアメリカ、イギリス領事館より「横浜在住の老人、女子、子ども（非戦闘員）を疎開させます。明後日午前中に来ます」とのこと。寝耳に水で驚くばかりで、否応なしの上、外国人のことで領事館から指示されるまま、大工さんに一部手を加えてもらい、移動に備えました。一三世帯二三人位、各室を一世帯に割り当てる。食事は夕食を一度こちらで作って出す。別に外国人用配給はあるものの、配給では賄いができず、わたしどももの作ったわずかな野菜も役にたった。中屋には横須賀の山崎小学校児童が疎開していた。外国人はよく農家へ買出しにいき、わたしどもものなかなか手に入らない物も買い、ずっと良い食生活をしていた。不なれな生活にわたしは慢性肋膜炎になり外国人からティーベ（結核）と嫌われてしまいました。それでも外国人と同じ屋根の下で生活していると情も移り、愛情もわき和気あいあいと過ごすようになりました。（中略）

戦況も次第に悪化して毎日何回となく警戒警報や空襲警報が発令され、B29機がいやな響きで頭上を過ぎる。昭和一九年、これも突然、「外国人は明後日ここを引き上げ、他へ移動する。荷物をまとめるように」と。外国人もそれを聞いてびっくり、余分な荷物は玉川館へ預けて領事館が管理することに。身の回りの物だけ持って窓は外が見えないように厚いカーテンがしてある灰色のバスで移動して行きました。外国人は行き先もわからず不安な顔で寂しく悲しそうだった。涙でバスを送った。

（「七沢温泉 五〇年のあゆみ」『私たちの昭和史』）

年 代	郷 土 の 女 性 の 動 き	社 会 一 般 の 動 き
一九四六(昭和21)	1・― 愛川町に愛川青年団結成。女子団長大矢信子、47年は小倉文子 2・23 県立厚木高女は修業年限を四年から五年に延長 3・― 厚木町に麻雀天王町倶楽部開店。進駐軍向け土産店五〇数店も開店	1・1 天皇人間宣言 4・10 戦後第一回総選挙、最初の女性参政権行使、女性三九人当選
4・― 愛川町では食糧配給制度開始以来、初めて遅配。豆粕・フスマ・野草・桑の葉なども食す 10・― 厚木町芸妓、厚木芸妓組合を結成。組合長愛子、副組合長力弥・勝代、会計秀弥、理事小津多・政江 11・1 厚木町、引き揚げ者・戦災者家族救済のため授産場設置 11・3 県立厚木高女、創立四〇周年記念式挙行 この年 郡内の人口、女二万九八五五人・男二万七一一八人	4・1 県立厚木高女に併設新制中学校設置 30 第一回統一地方選挙で浅葉スミ、厚木町会議員に当選 ★	5・1 戦後初のメーデー 19 食糧危機突破国民大会(食糧メーデー) 皇居前広場に二五万人参加 9・9 生活保護法制定 11・3 日本国憲法公布(47年5月3日施行) 12・― 方面委員から民生委員に名称変更、女性委員含む 3・9 戦後初の国際婦人デー 31 教育基本法・学校教育法公布 4・1 六・三制発足、国民学校は小学校に。新制中学校発足 20 第一回参議院選挙女性一〇人当選 12・22 改正民法公布。「家」制度を廃止
一九四七(昭和22)		

浅葉スミ（一八九七—一九六五）

浅葉家は相模の農耕地帯に欠かせない牛・馬の獣医師である。草競馬が年二回開催され、厚木町は賑わった。人の集まるにぎやかな環境で育ったスミは、リーダーシップに長け、一九四二（昭和一七）年大日本婦人会厚木支部の創設に際して地域の先頭に立ち、足立原マサとともに副会長を受け銃後の守り、金属回収、生活改善に取り組んだ。

四七（昭和二二）年、女性が選挙権を得た最初の地方選挙で厚木町会議員に当選する。婦人団体を統一組織した愛甲婦人団体連絡協議会の会長、翌年には神奈川県婦人団体連絡協議会初代会長に就任。人一倍の行動力で女の新しい役割を担い、切り開き、生涯の仕事とした。



浅葉スミ 1963年頃

愛川町実践女学校学則 抜粋（一九四六年）

第一章 総則

第一条

本校ハ青年学校令ニ依リ女子青年ニ対シ其ノ心身ヲ鍛練シ徳性ヲ涵養スルト共ニ職業及実際生活ニ須要ナル知識技能ヲ授ケ以ツテ国民タルノ資質ヲ向上セシムルヲ目的トス

第二条

本校ハ公立青年学校愛川町実践女学校ト称シ愛川町半原六七一番地ニ設置ス

第二章 科並ニ教授及訓練機関

第三条

本科研究科及専修科ヲ置ク

第四条

各科ノ教授及訓練期間左ノ如シ

本科 二年

研究科 一年

専修科 一年

第二十四条 本校ハ本科並ニ研究科ニ対シ月額一円ノ

授業料ヲ徴収ス

（第一章から第八章まであり、条文は第一条から第二十四条まで）

（愛川町スポーツ・文化振興課蔵）

主な参考文献

△新聞△

『横浜貿易新報』一八九〇年—(横浜貿易新聞・横浜新報・貿易新報・横浜貿易新報・神奈川県新聞・神奈川新聞)△雄誌△

△武相の若草△

一九二四年創刊号—三八年第一六六号

神奈川県青年団連合会発行(神奈川県連合青年団)

『神奈川県教育会雑誌』 神奈川県教育会発行

一八八八—一九一七年

『神奈川県教育時報』 神奈川県教育会発行

一九三二—三五年

『武相教育』 神奈川県教育会発行 一九三五—四一年

△一般△

『日本史大事典』 平凡社 一九九三年

『新編明治精神史』 色川大吉 中央公論社

一九七三年

『近代日本総合年表』 岩波書店編集部編 岩波書店

二〇〇一年

『国防婦人会』 藤井忠俊 岩波書店 一九八五年

『武相自由民権史料集 全八巻』 町田市立自由民権資料館

編・発行 二〇〇九年

『大阪事件の研究』 大阪事件研究会編 柏書房

二〇〇一年

『民権ブックス13号 大阪事件—民権と国権のはざままで—』

町田市立自由民権資料館編 町田市教育委員会

二〇〇〇年

『近代日本婦人教育史—体制内婦人団体の形成過程を中心に—』

千野陽一 ドメス出版 一九七九年

『日本婦人問題資料集成』一—一〇巻 丸岡秀子ほか編

ドメス出版 一九七六—八一年

『史料による日本史』 笠原一男ほか 山川出版社

一九九八年

『農村処女会の組織及指導』 天野藤男 洛陽堂

一九一六年

『全国処女会婦人会の概況』 内務省社会局 一九二一年

『明治・大正家庭史年表』 下川耿史 河出書房新社

二〇〇〇年

『戦中用語集』 三国一朗 岩波書店 一九八五年

『戦前・戦中用語ものしり物語』 北村恒信 光人社

一九九一年

『物価の世相一〇〇年』 岩崎爾郎 読売新聞社

一九八二年

『キリスト教女性史研究』 加藤重ほか 日本キリスト教女

性史研究会発行 一九九七年

『昭和・平成家庭史年表』 下川耿史 河出書房新社

二〇〇四年

『千代田区女性史 全三巻』 千代田区・千代田区女性史編

集委員会編 ドメス出版 二〇〇〇年

『透谷の妻—石阪美那子の生涯—』 江刺昭子 日本エディ

タースタール出版部 一九九五年

『自由民権運動と女性』 大木基子 ドメス出版

二〇〇四年

『明治の文化』 色川大吉 岩波書店 一九九七年

『史の会研究誌—大正の響きをきく—』 史の会編

江刺昭子 一九九八年

『史の会研究誌—時代のうねりを見つめて—』 史の会編

江刺昭子 一九九八年

『史の会研究誌—時代の目覚めをよむ—』 史の会編

江刺昭子 一九九六年

『史の会研究誌―女たちの物語を再生する―』 史の会編

江刺昭子 二〇〇一年

『神奈川県史 資料編13 14 近代・現代(3)(4)』

神奈川県企画調査部県史編集室編 神奈川県

一九七六―七七

『神奈川県史 通史編4・5・6 近代・現代(1)(2)(3)』 神奈川県県民部県史編集室編 神奈川県

一九八〇―八二年

『神奈川県史 別編3 年表』 神奈川県県民部県史編集室

編 神奈川県 一九八二年

『神奈川県史 別編1 人物』 神奈川県県民部県史編集室

編 神奈川県 一九八三年

『神奈川県警察史 下巻』 神奈川県警察史編さん委員会編

神奈川県警察本部 一九七四年

『神奈川県統計書』 神奈川県企画調査部

一八八一―一九四一年

『神奈川県教育史 通史編上巻・下巻』 神奈川県立教育

センター編 神奈川県教育委員会 一九七八―七九年

『神奈川県教育史年表昭和編(その1)』 神奈川県立教育

センター発行 一九七一年

『神奈川県教育五十年史年表』 神奈川県教育会発行

一九三六年

『夜明けの航跡―かながわ近代の女たち―』 神奈川県立婦

人総合センター かながわ女性史編集委員会編 ドメス出版

一九八七年

『夜明けの航跡―かながわ近代の女たち―』 編纂カード

かながわ女性センター図書館蔵

『時代を拓いた女たちかながわの一二三人』 江刺昭子・

史の会編 神奈川新聞社 二〇〇五年

『明治・大正・昭和の郷土史 神奈川県』 大畑哲編

昌平社出版 一九八二年

『相州自由民権運動の展開』 大畑哲 有隣堂

二〇〇二年

『神奈川県女子青年会概況』 神奈川県連合女子青年会発

行 一九二八年

『神奈川県労働運動史(戦前編)』 堅山利忠編 神奈川

県労働部労政課 一九六六年

『神奈川県労働運動史年表』 植松藤作ほか編 神奈川県

地方労働組合評議会 一九八二年

『神奈川県社会事業形成史』 芹沢勇 神奈川新聞厚生文

化事業団 一九八六年

『神奈川県気象災害誌』 高下幸男編 神奈川県

一九七一年

『神奈川県震災誌』 神奈川県編 神奈川新聞出版局

一九八三年

『写真と地図と記録で見る 関東大震災誌・神奈川編』

内務省社会局発行 千秋社 一九八八年

『神奈川の気象百年』 横浜地方気象台編 日本気象協会

横浜支部 一九九六年

『図説神奈川県の歴史下』 貫達人 有隣堂

一九八六年

『神奈川の近代学校史の研究』 永野勝康 社会評論社

一九九九年

『神奈川の歴史をよむ』 神奈川県高等学校教科研究会

社会科部会歴史分科会編 山川出版社 二〇〇七年

『神奈川県図書館史』 神奈川県図書館協会・図書館史編

集委員会編 神奈川県立図書館 一九六六年

『神奈川の寺子屋地図』 高田稔 神奈川新聞社

一九九三年

『蚕糸業史―蚕糸王国日本と神奈川の顛末』

小泉勝夫編・発行 二〇〇六年

『神奈川県演劇史』 横浜演劇研究所編 神奈川県立青少年センター 一九九四年

『昭和史にみるかながわの保健婦』 昭和史にみるかながわの保健婦編集委員会編・発行 一九九一年

『横浜疫病史―万治病院の百十年―』 内海孝編 横浜市衛生局 一九八八年

『かながわの婦人創刊号』 神奈川婦人運動史研究会 一九八二年

『保育の社会史―神奈川近代の記録』 白峰学園保育センター編 筑摩書房 一九八七年

『神奈川の保育史資料』 白峰学園保育センター編・発行 一九八九年

『横須賀市史』 横須賀市編・発行 一九八八年

『神奈川県の学徒勤労動員』 神奈川の学徒勤労動員を記録する会編 笹谷幸司 一九九六年

『寒川町史新聞記事目録 第二集』 企画部町史編さん課編・発行 一九九〇年

『画・文で描く祖父母が若かった頃 西相模の明治・大正・昭和』 鷹野良宏 二〇〇七年

『郷土』

『厚木市史料 厚木市史年表』 厚木市史編さん委員会 厚木市役所 一九八二年

『厚木市史近世資料編(3) 文化文芸』 厚木市教育委員会生涯学習部文化財保護課市史編さん係編 厚木市 二〇〇三年

『愛甲郡制誌』 愛甲郡役所編 名著出版 一九七三年

『愛川町郷土誌』 愛川町教育委員会・愛川町郷土誌編集委員会編 愛川町 一九八二年

『写真集/厚木市の昭和史』 厚木市の昭和史編集委員会地

域文化研究学会編 千秋社 一九九三年

『愛川町史年表』 愛川町教育委員会・愛川町郷土誌編さん委員会編 愛川町 一九七七年

『愛甲郡勢要覽』 神奈川県統計協会愛甲支部編・発行 一九五三年

『清川村史 年表編 上・下』 清川村編 清川村教育委員会 一九八五年

『ふるさと宮ヶ瀬―溪谷の村から』 ふるさと宮ヶ瀬を語り継ぐ会編 夢工房 一九九七年

『厚木教育史資料』 杉山金吾編 厚木市教育研究所 一九七〇年

『厚木市文化財調査報告書第19集 厚木の民家(1)』 厚木市古民家調査委員会編 厚木市教育委員会 一九七六年

『厚木市文化財調査報告書第十一集 荻野山中藩の調査』 厚木市教育委員会社会教育課編 厚木市教育委員会 一九六九年

『百年史』 半原燃糸協同組合編・発行 二〇〇二年

『厚木市史料集皇国地誌残稿補遺(1)』 厚木市史編さん委員会編 厚木市役所 一九八二年

『厚木の地名考』 厚木市史編纂委員会編 厚木市役所 一九七四年

『難波家・自由民権関係文書』 神奈川県企画調査部県史編集室編・発行 一九七四年

『大天正夫自徐伝』 色川大吉 大和書房 一九七九年

『神奈川の自由民権―小宮保次郎日誌―』 大畑哲編 勁草書房 一九八四年

『草葉文庫第一集山口左七郎と湘南社』 大畑哲ほか まぼろし書房 一九九八年

『自由民権百二十年記念天野政立の自叙伝「所世録」』

自由民権百二十年建碑実行委員会編・発行 二〇〇五年
『厚木・愛甲の民権家たちの足跡』 内藤佳康編 自由民
権百二十年建碑実行委員会 二〇〇四年
『自由民権一二〇周年建碑 記念誌』 大塚憲二編 自由
民権一二〇周年建碑実行委員会 二〇〇五年
『厚木市戦没者名鑑』 厚木市福祉事務所社会課編 厚木
市 一九七四年
『和田伝相模野に息づく農民たちを見つめて』 厚木市郷
土資料館編 厚木市教育委員会 二〇〇三年
『厚木市史資料叢書4 依知村事務報告書』 厚木市教育
委員会教育総務部文化財課市史編さん係編・発行
二〇〇六年
『厚木市史資料叢書5 南毛利村事務報告書』 厚木市教
育委員会教育総務部文化財課市史編さん係編・発行
二〇〇八年
『厚木市史資料叢書6 小鮎村玉川村事務報告書』 厚木
市教育委員会教育総務部文化財課市史編さん係編・発行
二〇〇八年
『厚木市史資料叢書7 厚木町事務報告書』 厚木市教育委
員会教育総務部文化財課市史編さん係編・発行 二〇〇八年
『厚木保健所の五〇年』 神奈川県厚木保健所編・発行
一九九一年
『厚木市医師会百周年記念誌』 荻田豊編 厚木市医師会
一〇〇周年記念行事委員会 二〇〇一年
『厚木の歴史探訪4 一寺院』 飯田孝ほか編
『厚木市文化財協会 二〇〇六年
『相模人国記 厚木・愛甲の歴史を彩った百人』 飯田孝
市民かわら版社 二〇〇〇年
『厚木の商人』 鈴村茂 神奈川情報社 一九八〇年
『厚木近代史話』 厚木市史編纂委員会編・発行

一九七〇年
『厚木産業史話』 厚木市史編纂委員会編 厚木市役所
一九七六年
『厚木郷土史第一巻・歴史編 第二巻・現代編』 厚木郷
土史料行会発行 一九八三年
『よみがえる群像』 『続よみがえる群像』 神奈川の民権家
列伝一』 大畑哲 神奈川新聞社 一九八八・八九年
『清水登美子家文書』 寒川町史編さん課
『荻青の光』 花家瀬一郎編 荻野村青年団文芸部
一九二八年
『荻青』 花家瀬一郎編 荻野村青年団文芸部・荻野村
農会 一九二九年
『愛甲郡連合青年団々誌「愛青」第一号』 千葉道雄編
愛甲郡連合青年団 一九三二年
『愛甲郡男女連合青年団「愛青」第六年第六号』 伊従博
編 愛甲郡男女連合青年団 一九三七年
『養蚕書と出版文化 養蚕文化はどう伝わったか』 厚木市
郷土資料館編 厚木市教育委員会 二〇〇四年
『女子挺身隊の記録』 いのうえせつこ 新評論
一九九八年
『厚木郷土誌文庫 七集』 鈴村茂 県史史談厚木支部
一九七八年
『厚木の民俗8・9・10』 厚木市文化財協会編 厚木市
教育委員会 一九九四・一九九年
『愛川町文化財調査報告書第20集 故影拾遺―近代の愛川を
しのんで』 愛川町文化財調査会編 愛川町教育委員会
一九九五年
『目で見える厚木・愛甲の一〇〇年』 北村精一 郷土出版
社 一九九一年
『写真集 厚木市の昭和史』 厚木市の昭和史編集委員会地

域文化研究学会編 千秋社 一九九三年

『活動する青年たち―あつぎの青年団資料を中心に―』
厚木市郷土資料館編 厚木市教育委員会 二〇〇一年

『教育一〇〇年のあゆみ』中津・高峰・田代・半原小学校
創立一〇〇年のあゆみ 大矢富雄編 愛川町教育委員会
一九七三年

『創立百周年記念誌』 創立百周年記念誌作成委員会編
清水小学校創立百周年記念事業実行委員会 一九七三年

『百年のあゆみ』 厚木市立三田小学校創立百周年記念実
行委員会編・発行 一九七三年

『開校一〇〇周年記念誌』 創立一〇〇周年記念誌委員会
編 厚木小学校創立一〇〇周年記念事業委員会
一九七三年

『開校百年記念誌』 開校百年記念誌編集委員会編
厚木市立南毛利小学校 一九七四年

『荻野小創立百周年記念誌 百年のあゆみ』 創立百周年
記念誌作成委員会編 荻野小学校創立百周年記念事業実行
委員会 一九八七年

『開校百周年記念誌 小鮎小の教育』 百周年記念誌編集委
員会編 厚木市立小鮎小学校・同PTA 一九八九年

『学校沿革史 (明治・大正・昭和)』 愛甲郡清川村立
緑小学校 一九八九年

『厚木市立玉川小学校 百年のあゆみ』 記念誌委員会編
玉川小学校百周年実行委員会 一九九二年

名取多嘉雄『ウィリアム・ライトの相州伝道 その1』
4『立教女学院短期大学紀要』一七・二〇・二二・二四号

『相州伝道沿革史』飯田亜伯 聖公会東京本部蔵

『クリストファ直江吉沢自叙小伝』 聖公会東京本部蔵

『日本バプテスト厚木教会一〇〇周年記念誌』 日本バプ

テスト厚木教会編・発行 二〇〇三年

『みおつくし』 創立九〇周年記念誌編集委員会編 神奈
川県立厚木東高等学校 一九九六年

『常盤』 中倉マキコほか編 神奈川県立厚木東高等学校
創立七〇周年記念会 一九七六年

『神奈川県立厚木東高等学校創立百周年記念誌 夢はるか』
門倉時子ほか編 神奈川県立厚木東高校 二〇〇七年

『阿夫利嶺にこだまして』 厚木高女青葉会記念誌実行
委員会編 青葉会 二〇〇〇年

『村のくらし 続・村のくらし』 (合本版) 石井ミネ
市民かわら版社 二〇〇〇年

『続々・村のくらし』 石井ミネ 市民かわら版社
一九九五年

『谷戸田のムラ』 厚木市教育委員会社会教育部社会教育
課編 厚木市教育委員会 一九九五年

『明治、大正、昭和のふるさと荻野―ふるさとの語り部』
荻野・鳶尾の古老に聞く会編・発行 一九八二年

『下川入を語る』 矢島忠男編 下川入を語る有志会
一九八六年

『私たちの昭和史 玉川公民館集一』 『続・私たちの昭和史
玉川公民館集二』 玉川地区文化振興会編 厚木市玉川
公民館 一九九三・九五・九五年

飯田孝『今昔あつぎの花街』 『市民かわら版』二〇〇一
〇三年

大畑哲『相州第一の民権家・天野政立』 『有鄰』二二九
号 有隣堂 一九八六年

荻田豊『黄色いチラシ』 一六三号・二〇八号・二二二号・
二二三号・二五一号 編・発行

協力者・協力機関・「さねさし」の仲間たち

協力者

大畑 哲
飯田 孝
内藤 佳康
伊従 保美
荻田 豊
清水三重子

協力機関

厚木市教育委員会教育総務部
文化財保護課
厚木市協働安全部
人権男女参画課
厚木市郷土資料館
愛川町郷土資料館
寒川文書館
相模原市津久井郷土資料室
町田市立自由民権資料館

「さねさし」の仲間たち

飯田 節子
内山 良子
神谷 智子
亀井喜美子
椎名 清代
中倉マキ子
中村 碩子
深沢かをる



—江刺先生を囲んで—

(順不同 敬称略)

監 修

江刺 昭子（えさし・あきこ）

1942年、岡山県生まれ。

1964年、早稲田大学教育学部国語国文科卒業。

主な著書

『草饅—評伝大田洋子』（1971年 第12回田村俊子賞受賞）

『女の一生を書く—評伝の方法と視点』（1994年）

『透谷の妻—石阪美那子の生涯』（1995年）

編集指導・執筆した主な地域女性史

『夜明けの航跡—かながわ近代の女たち』（1987年）

『共生への航路—かながわの女たち '45～ '90』（1992年）

『千代田区女性史』（全三巻）（2000年）

『坂のある町で—区民が綴った目黒の女性史』（全二巻）（2003年）

『中央区女性史—いくつもの橋を渡って』（全二巻）（2007年）

続・あつぎの女性

—民権家子孫の聞き書きと女性史年表—

定価 1,500円

2009年7月1日

編集 さがみ女性史研究会「さねさし」
代表 中村 碩子

監修 江刺昭子

印刷所 有限会社ユニオン印刷

